

平成十年度
長期研修生
研究報告書
山形県教育センター



平成10年度 長期研修生

研究報告書

平成11年3月

山形県教育センター

は し が き

21世紀を展望した教育改革の動向を受け、学習指導要領の告示がありました。これからの教育は、「ゆとり」の中で子どもたちに「生きる力」を育むことを目指して、子どもたちの個性を尊重していくことが強調されております。

本県におきましては、「第4次山形県教育振興計画（平成10年度改訂）」に基づき「感性豊かな教育と文化の創造」の実現を目指して、具体的な施策を展開しております。

いま、今日的教育課題を的確にとらえた、先導的実践的研究が望まれます。山形県教育委員会では、教員の資質能力の向上を図るため、長期研修制度を実施しております。平成10年度は、小学校から10名（3か月2名、6か月5名、12か月3名）、中学校から4名（6か月2名、12か月2名）、高等学校から1名（3か月）、特殊教育諸学校から1名（12か月）、計16名の研修生が当教育センターで研修を積み、指導力の向上に努めてきました。

一定期間学校を離れ、各自が設定した研究主題について、苦しみながら、独創的な教育研究をまとめあげました。研究発表会では、目標を達成した成就感、充実感そして爽快感がひしひしと伝わってきまして、大変うれしく思いました。今後ますます研修生の活躍が期待されます。

ここに収録した研究は、研修生の皆さんの弛みない研鑽による成果であります。研修生自身の今後の指導に役立つことはもちろんのこと、本県の学校教育の充実と発展に寄与するものと確信しております。

終わりに、長期研修生の研修に温かいご配慮と懇切なご指導をいただきました関係各位に対し、心からお礼申し上げます。

平成11年3月

山形県教育センター
所長 小松 紀一

目 次

(前期研修・3ヶ月)

- 1 自然事象に対する子どもの認識を探る
 鮭川村立大豊小学校 教諭 五十嵐 登

(前期研修・6ヶ月)

- 2 選択教科における国語科としての総合的な学習の試み
 東根市立第二中学校 教諭 和泉 一彦
- 3 体験活動をいかした情報活用能力の育成
 山辺町立中中学校 教諭 工藤 浩
- 4 心の交流を深めるための支援の在り方に関する研究
 高島町立和田小学校 教諭 青木 恵美子

(後期研修・3ヶ月)

- 5 話し合い活動を通して、個の力を高める学習活動の工夫
 最上町立月楯小学校 教諭 柏倉 常彦
- 6 商業科目におけるインターネットを活用した授業展開の考察
 県立谷地高等学校 教諭 古城 ゆかり

(後期研修・6ヶ月)

- 7 地域の学習環境を生かした総合的な学習の研究
 藤島町立渡前小学校 教諭 岡部 貞二
- 8 表現力の育成におけるコンピュータの活用に関する研究
 ～多様な表現方法を取り入れた学級新聞作りの取り組みから～
 立川町立狩川小学校 教諭 奥山 徹
- 9 自分の感情をうまくコントロールできない子どもへの関わり方についての研究
 飯豊町立添川小学校 教諭 佐藤 恵子
- 10 小学校における学校教育相談の在り方に関する一考察
 ～一人ひとりの教師の心の中に相談室を～
 中山町立長崎小学校 教諭 佐藤 和

(12ヶ月研修)

- 11 体験的な課題解決学習におけるコンピュータ活用に関する研究
 ～地域に根ざした総合的な学習の試みの中で～
 上市市立中山小学校 教諭 伊藤 保明
- 12 自ら学ぶ子どもの育成のためのコンピュータと周辺機器の活用に関する研究
 山形市立金井小学校 教諭 遠藤 光男
- 13 生徒の自己肯定感を高める指導の在り方に関する研究
 南陽市立漆山中学校 教諭 山村 嘉弘
- 14 病弱養護学校における一人一人のニーズに応じた指導の在り方に関する研究
 ～個別の指導計画の作成と実践を通して～
 県立山形養護学校 教諭 東谷 薫
- 15 学習障害(LD)児等への指導における通常学級担任への支援の在り方に関する研究
 天童市立長岡小学校 教諭 小田中 義勝
- 16 障害のある児童生徒における意思交流の具体的な支援に関する研究
 舟形町立舟形中学校 教諭 義高 互

自然事象に対する子どもの認識を探る

鮭川村立大豊小学校
 教諭 五十嵐 登

目 次

I. 研究主題設定の理由

II. 研究のねらい

III. 研究の内容

1. 子どもの素朴概念と理科授業及び認知構造との関係
2. 子どもの自然事象に対する認識状況とその分析
3. 子どもの素朴概念を生かした指導計画案と実験授業

IV. 研究のまとめ

V. おわりに

【主な参考文献】

・小学校指導書	理科編	文部省	1989年
・学力と知力	波野龍雄・穂積世子	岩波新書	1985年
・学びの構造	佐伯 胖	東洋館出版	1995年
・イメージによる知識と学習	佐伯 胖	東洋館出版	1992年
・子ども達はいかに科学理論を構成するか	R. オズボン P. フライバーグ	東洋館出版	1994年
・子どもの理論と科学の理論を結ぶ理科授業の条件	森本信也	東洋館出版	1994年
・子どもの学びを探る	リチャード・ホワイト/リチャード・ガストン	東洋館出版	1995年
・子どものコミュニケーション活動から生まれる新しい理科授業	森本信也	東洋館出版	1996年
・問題解決能力を育てる理科授業のストラテジー	堀 哲夫	明治図書	1998年

I. 研究主題設定の理由

教育課程審議会の中間まとめ(1997年)では、理科の課題として、「知的好奇心や探究心が十分育っていない」とか「科学的な思考力が十分育っていない」という状況が報告されている。APUの問題を使って児童のプロセススキルを調べた報告によっても、「情報の解釈と結果の導出」が他の3つのスキルよりも劣っていることが指摘されている(福岡・竹村1989年)。このことは、これまでの授業が、実験・観察を行い、その結果をただ覚えることに重点が置かれてきた表れてはいないかと考えられる。また、近年、児童・生徒の「理科離れ・知識離れ」が報告されているが(国立教育研究所1996年)、それによると、小学校から中学校へと学年が進むにつれて理科の嫌いな子の割合が多くなっている傾向にある。この原因の一つに指導内容の難しさがあると思われるが、子どもの見方や考え(素朴概念)よりも指導内容だけにとらわれがちな授業構成にも大きな原因があるのではないだろうか。

以上のことから、子ども達が主体的に追究する理科の授業のあり方を改めて検討する必要があると感じた。そこでまずは、授業の出発点でもある「自然事象に対する子どもの認識」を探ってみようと考え、本主題を設定した。

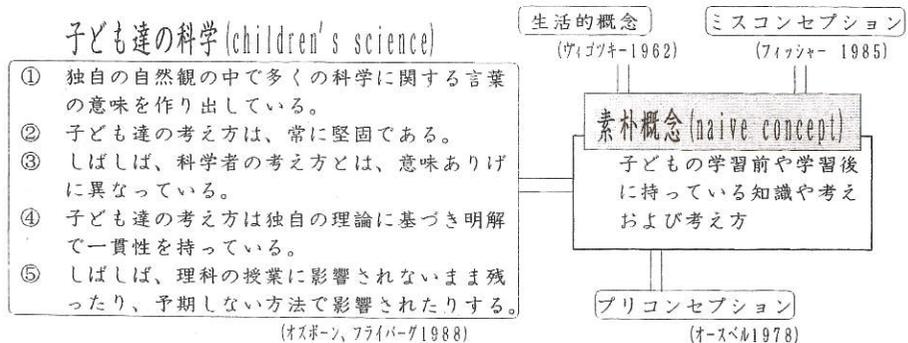
II. 研究のねらい

1. 文献・資料を参考にして、子どもの素朴概念の把握の仕方や理科授業との関係などを明らかにする。
2. 小学生と教職5年経験者を対象にした自然事象認識調査により、子どもの素朴概念の傾向を把握する。
3. 子どもの素朴概念を生かした指導計画案を作成・実行し、認識の変容を探る。

III. 研究の内容

1. 子どもの素朴概念と理科授業および認知構造との関係

最近の理科教育の研究内容を見ると、子ども達は自然事象に対してどのような認識を持ち、どのように考えているのかといった研究が重視されてきている。それによると、子ども達は、「精神白紙」の状態ではなく、「子ども達の科学」と呼ばれるものを持っているとしている。他にも、「生活的概念」や「プリコンセプション」などさまざまな言葉で言い表されているが、ここでは、それらをまとめて素朴概念ととらえていくことにした。



素朴概念が、理科の授業にどう関わってくるのか、またどのようにして新しい知識や考えが子どもに認知されるのかを表すと、左図のようになるかと考えられる。

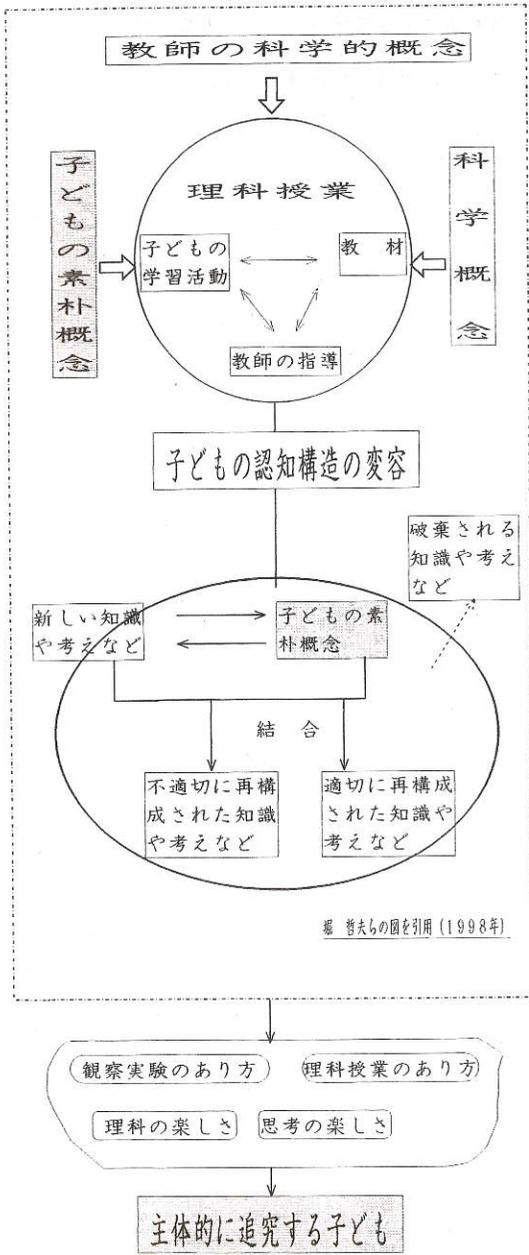
授業や学習は、子どもが既存の知識や経験、考え方など(素朴概念)を総動員させ、新たに提示されたものと困惑や葛藤などを繰り返し、自ら新たな意味を構成していくものと考えられる。端的に言えば、学習者の認知構造が変容する場と捉えることができる。

そのための授業に関する条件として、オズボーンらは、次の三つをあげている。

- (i) ある特定の内容に関して、子ども達が既存の考えを変えたり展開させたり、拡張させたりするのを助ける授業
- (ii) 学習者にとって分かりやすく、もっともらしくかつ役立つように思われるような新しい考え方を示す授業
- (iii) 学習者の直観的で、現在発達しつつある考え方を考慮して、カリキュラムの内容をより良く構成する授業

では、認知構造が変容するとはどういうことだろうか。堀らは、子どもの素朴概念と新しい知識や考えに対する処理の仕方を以下の三つに大別している。

- (i) 両者が適切な結合をして認知構造の再構成が行われる場合
 - ・適切な理解の状態
 - ・科学的に適切な概念が形成された状態
- (ii) 両者が不適切な結合をする場合
 - ・理解できていない状態
 - ・理解できていないことに気づいていない状態
- (iii) 新しい知識や考えが全く無視される場合
 - ・それを受け入れる必然性を感じない状態



以上のように、「子どもの素朴概念」から実験観察や理科授業のあり方を考えてみることは理科の楽しさ・思考することの楽しさにつながり、結果として、主体的に追究する子どもが育つのではないかと思っている。また、理科離れ・理科嫌いといった現象に対しても、その克服に向けて少なからず作用を及ぼしていくのではないかと考えている。

そこで、まず最初に、自然事象に対する子どもの認識状況を調べてみた。

2. 子どもの自然事象に対する認識状況とその分析

(1) 調査の目的

- ①子どもの自然事象に対する認識がどのような状態にあるのか、また、学年の発達段階により認識がどのように変化していくのかを把握する。
- ②教師が予測する子どもの認識状況と実際の子どもの認識状況とは合致しているのかどうかを検討する。

(2) 調査方法

子ども達の自然事象に対する認識状況を調べるために、オズボーンらの作成した問題を用い、質問紙法で認識調査を行った。この問題は事前に子ども達との面接を通して得られた回答を十分に吟味して作成されたものである。(問題への信頼性)

また、小学生を対象にした調査においては、学年の発達を考慮して、言葉だけの提示にならないよう実際に事象提示を行い、問題の意味を正しく理解した上で判断できるようにした。(調査方法への信頼性)

☆調査対象・人数 (1998年5月26日、6月10日、6月16日)

鮭川村内2校	小学3年生	小学4年生	小学5年生	小学6年生
人数	40	67	60	60

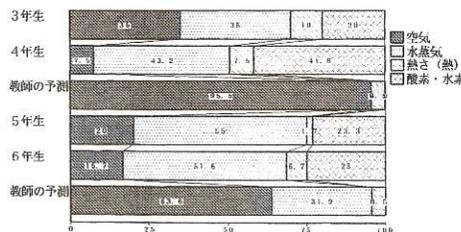
教職5年経験者 (今まで理科を指導した経験がある)	
人数	23

(3) 結果と考察

i 沸騰水中の泡に対する認識状況



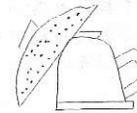
- ①空気
- ②水蒸気
- ③熱さ
- ④酸素、水素



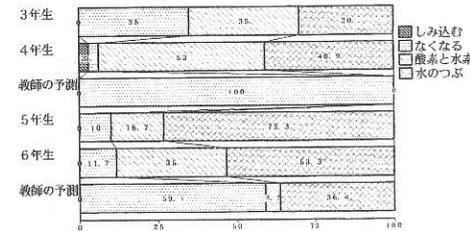
○水蒸気を選択した割合を見ると、5年生で55%と中学年に比べ高い割合になる。これは、4年生での学習成果と考えられるが、既習事項と考えれば、低い正答率である。つまり、約半分の子ども達にとっては、4年生での学習は3年生で持つ認識を変えるほどの効果はなかったと言える。そのため、3年生で持つ認識を6年生まで持ち続けてしまう結果になったと思われる。

○子ども達の認識は、教師が予測する以上に多種類にわたり、また、正答率も高い。

ii 水の蒸発に対する認識状況



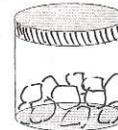
- ①おさらにしみ込む
- ②かわいてなにもなくなる
- ③酸素と水素になって空気中へ
- ④小さい水のつぶになって空気中へ



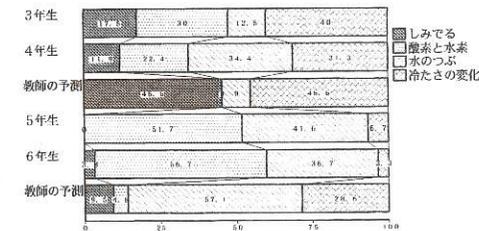
○4年生の学習内容であり、5年生での正答率が73.3%と高くなっていることから、学習の効果がみられる。しかし6年生になると53.3%と正答率が下がる。これは、後戻り現象と考えられる。認識があいまいになった分、新しく学習した酸素や水素という気体に置き換えたのではないかと推察される。

○子ども達の認識は、特に中学年で、教師が予測する以上に多種類にわたっている。

iii 水蒸気の結露に対する認識状況



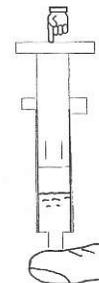
- ①水がとけてしみてきた
- ②水の冷たさで、空気中の酸素と水素が結びついた
- ③空気中の小さな水のつぶが冷たいびんにくっついた
- ④水の冷たさがびんを通り抜けて水に変わった



○中学年の子ども達でもびんから水がしみ出してくるとはあまり考えないが、冷たさが水に変化するという考え方にはけっこう多く賛成している。これは、びんに触ったときの冷たいという感覚が影響していると思われる。一方、高学年になると、冷たさが水に変化するという非科学的な物の見方から状態や質的な変化で考えていこうとしている。しかし、既習事項であるにもかかわらず正答率は、50%以下である。

○高学年では、教師が予測する以上に正しい認識がされていない。

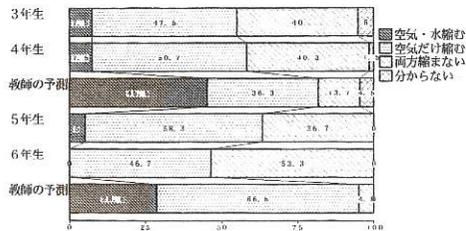
iv 空気と水の圧縮に対する認識状況



- ①空気も水も押し縮めることができる
- ②空気は押し縮めることができるが、水は押し縮められない
- ③空気も水も押し縮められない
- ④分からない

(※福岡らの問題による)

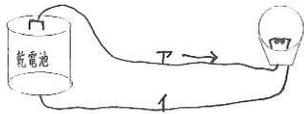
○正答率を見ると、3年生から6年生まで50%前後であり、学年による違いがあまり見られない。空気が圧力により縮むことは3年生で学習するのだが、それ以前に持つ認識がそのまま6年生まで持ち続けられている。つまり、3年生で行われる空気の学習が子ども達の素朴概念を変容させるのに効果を上げていないと思われる。



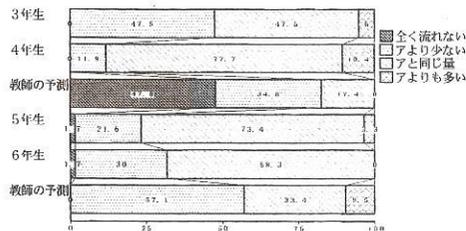
○圧力により空気が収縮するという学習がそれ以後の学年で扱われないことから推測すると、空気の圧縮に対する概念は日常生活では養われない概念であると考えられる。

○水は縮まないという認識を教師が予測する以上に子ども達は持っているが、空気の圧縮については、教師が予測したものよりも高学年で正答率が低かった。

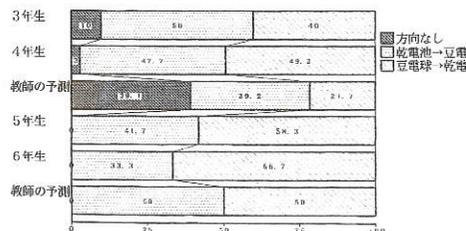
V 電流の強さと向きに対する認識状況



- ①線イには全く電気が流れていない
- ②線イには少しは電気は流れるがアよりも少ない
- ③線イには、線アと同じだけの電気が流れている
- ④線イには、線アよりも多くの電気が流れている



- ①線イの中に電気が全然流れていないので、どちらからも流れていない
- ②線イの中の電気は、乾電池から豆電球の方へ流れている
- ③線イの中の電気は、豆電球から乾電池の方へ流れている



○回路を作ると電気が流れて豆電球が点灯することは3年生で学習するのだが、調査時において未履修であることからすると、学習以前から2本の導線に電気が流れていると考えているようだ。

○3年生と比較すると4年生の正答率が一段と高くなり、学習効果が表れているように見えるが、2校間で認識の仕方は大きく異なっていた。一方は一方向で電流の強さが同じと答える割合が高いのに対し、他方は、双方で電流の強さが同じと答えている割合が高かった。これは、指導者による授業構成の違いが大きく影響したものである。

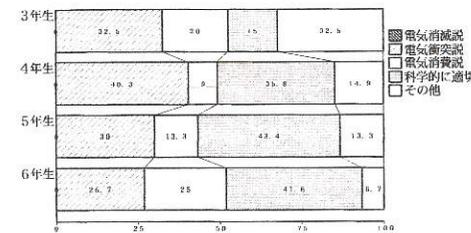
○3年生では、「乾電池から豆電球」と「豆電球から乾電池」へ電気が流れていると考える子どもが半々ぐらいの割合であり、これは2校間でも同じような傾向にあった。高学年では、「豆電球から乾電池」を選ぶ割合が多少高くなるが、依然として、「乾電池から豆電球」に流れていると考える子は30%~40%いる。

以上のように、「水」「空気」「乾電池」という子ども達にとってはけっこう身近な素材を取り上げて認識調査を行ったが、子ども達の自然事象に対する認識は、教職経験者が予測する以上に多様であったり正答率に開きがあったりした。また、学年の発達段階に応じて認識状況の割合は変化していったが、3年生で持つ自然認識があまり影響されることなく6年生まで割と続けられる傾向が多く見られた。このことは、オズボーンらが指摘した子ども達の科学「……しばしば理科の授業に影響されないまま残ったり……」という特徴を裏付けている。では、子どもの持つ素朴概念を授業にどう生かしていけばいいのか。その実践を次に試みることにした。

3. 子どもの素朴概念を生かした指導計画案と実験授業

(1) 電流に対する認識

「乾電池と豆電球を使った”電流の強さと向き”に対する子どもの認識は、前述の通りであったが、この調査をもとに、電流に対する認識を下のように類型してみた。



- 電気消費説：豆電球で全部電気が使われる。
- 電気衝突説：乾電池の両極から電気が流れて豆電球のところでぶつかる。
- 電気消費説：豆電球のところで少し電気が使われてもどってくる。
- 科学的に適切：出ていった分の電気がもどってくる。

科学的に適切な考えをする子どもは高学年で40%程度いるものの、3年生で持つ電気衝突説や電気消費説といった認識がそのまま持ち続けられていることが分かる。

(2) 授業への取り込み

さて、これらの素朴概念をどう授業に取り入れていけばいいのか。4年生の単元「電池のはたらき」で考えてみたい。まず、目標及び指導内容は以下の通りである。(文部省指導書)

学年目標
物の状態の変化を……電気などに関係づけながら調べ、見いだした問題を興味・関心を持って追究する活動を通して、物の変化や働きのみまりについての見方や考え方を養う。

指導内容
乾電池や光電池、豆電球やモーターなどを使い、電気や光の働きを調べることができるようにする。
ア 乾電池の数を変えると、豆電球の明るさやモーターの回り方を変えることができること。
イ 光電池を使ってモーターを回すことなどができること。

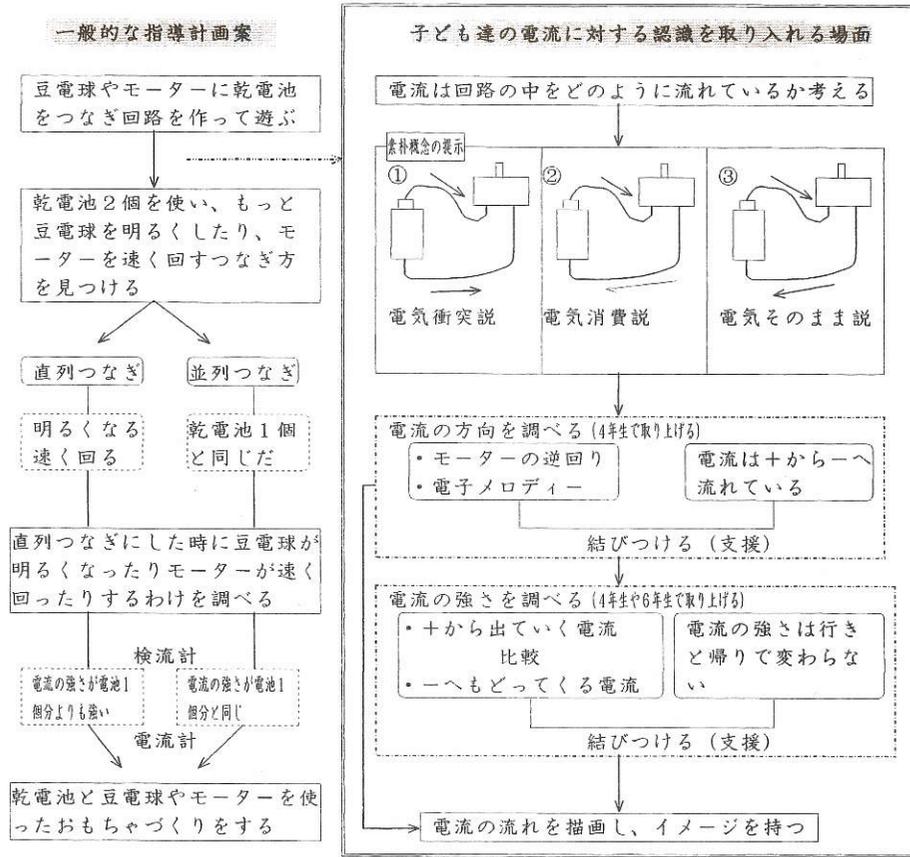
したがって、一般的には次項のような活動計画になっている。子どもの興味関心を大切にす意味で、おもちゃ作りから始める場合もあるが、順番が変更されるだけで、取り上げる内容はほぼ同じであろう。

この指導計画でも、確かに、豆電球が明るく点灯したりモーターが速く回るという現象と電流の強さに関係づけてとらえる見方や考え方を養うことはできる。しかしながら、子ども

達が持つ「乾電池1個・豆電球1個（モーター1個）」というもっとも基本的な回路での電流に対するイメージに触れていないため、素朴概念を発達させたり転換させたりすることができないのではないかと考えられる。結果として、3年生での素朴概念が6年生まで持ち続けられることになっているのではないかと考える。

（イメージとは、言語的要素と映像的要素の複合したもの）

そこで、子ども達の電流に対する認識を授業に取り入れて見ることにした。

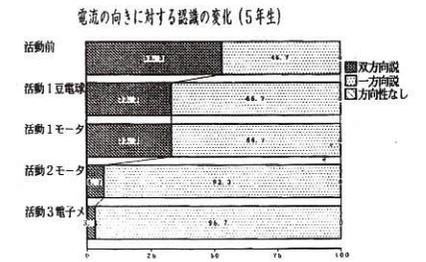
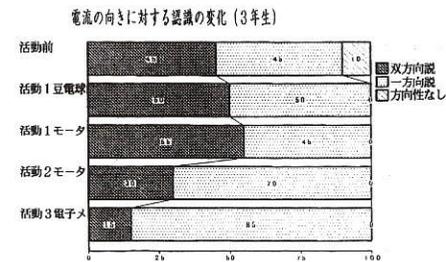
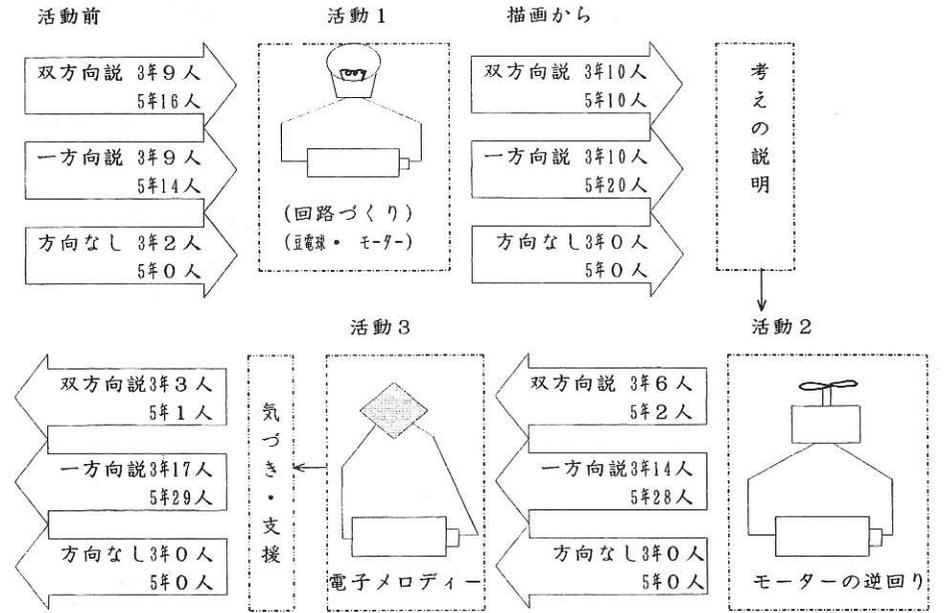


同一回路内での電流の強さや向きについての扱いは各教科書ごとに違っているが、電流の向きについてはどの教科書も取り上げており、「電気は、乾電池の+極から出て、モーターを通り、-極にもどる」と記載されている。また、電流の強さについて扱っているのは一つだけであった。4年生段階で、どこまで扱うべきかは教師の考え方や子ども達の実態に応じて違ってくるだろうが、小学校の学習の中で触れることを通して電流に対するイメージをきちんと持たせ、子ども達の素朴概念を発達、修正、転換させておくことは、中学校の理科につながる上でも必要ではないかと考えている。

次に、これまでのことをふまえて、案として提示した指導計画の一部について、実験的に授業を行った。

(3) 実験授業

4年生の単元であるが、学年の発達段階による差異を検討することから、電気の学習をまだ行っていない3年生（20名）と電気の学習をしてから一年が過ぎた5年生（30名）を対象に、電流の向きについての実践を試みた。活動の流れと向きに対する認識の変化は以下の通りである。



① 認識状況の変容

一方向説で考えた子が、3年生では85%、5年生では96.7%に達し、子どもの素朴概念が活動や話し合いによって、より科学的な概念へと変容していった。子ども達だけの力で、モーターの回り方や電子メロディーの実験結果と電流の向きを関連づけてとらえることには困難が見られたが、気づきの発表や教師の支援により、自分の素朴概念を変えていった子が多かった。つまり、電流の向きを考える内容は、ウィグツキー（1962年）がい

う「発達最近接領域」にあたり、適切な指導や援助によって解決可能な問題水準であると考えられる。

② 学年差による認識の差異

「活動1→活動3と進むにつれて一方
向説に賛成する子が多くなった」・「活
動と電流の流れを子どもの力だけで結び
つけて考えることが難しかった」とい
う点で認識の大きな差異は見られな
かったが、5年生の方が実験と話し
合い活動を結びつけて総合的に考
えることができる傾向にあった。



以上のように、3年生は3年生なりに現象を理解しようとし、電流に対するイメージを持つことができた。このイメージが科学的に間違っていたとしても、科学的に考えようとしたことに意義があると思う。一つの定義や実験結果・現象を覚えさせることや指導内容だけを扱う理科学習から、子どもの持つ素朴概念を発達・修正・転換させながら子ども自身が科学的な概念を構成していけるような理科学習をめざしていきたいと考えている。

IV 研究のまとめ

1. 研究の成果

- (1) 子どもの持つ素朴概念の把握の仕方や理科授業への生かし方などを学んだことで、理科授業を構成する上での私自身の視点が広がった。
- (2) 子どもの自然事象に対する認識には、初めに持つ認識が発達段階や授業に影響されずに残り続けているものがあると分かった。
- (3) 素朴概念をもとにした授業は、話し合い活動や実験観察を活発にし、主体的な学習を促すことにつながるようになった。

2. 今後の課題

- (1) いろいろな調査問題をもとに子どもの素朴概念を探り、指導計画のどの場面で取り入れていけばよいのかを実践を通して研究し、現在の年間指導計画を修正していく。
- (2) 子どもの素朴概念がどのようにすれば科学的概念へと変容可能になるのか、教材教具の開発や指導方法などの点から研究し、事例を収集していく。

選択教科における国語科としての総合的な学習の試み

東根市立第二中学校 教諭 和泉 一彦

目次

I 主題設定の理由とねらい	2
II 研究の仮説と検証の手だて	2
1. 研究の仮説	
2. 検証の手だて	
III 本研究の目指す生徒像	3
IV 研究の内容	3
1. 国語科と総合的な学習	
2. 選択教科の中での総合的な学習	
3. 「選択教科指導計画」に基づく実践	
V 研究のまとめ	9
1. 成果	
(1) 実践事例からの考察	
(2) アンケート結果からの考察	
(3) その他	
2. 課題	

主な参考文献・資料

「地域に根差した選択教科『国際理解、環境、福祉、郷土』を導入し、
生徒に応じた学び方と生き方を身につける教材とカリキュラムの開発」
富山県福野町立福野中学校研究紀要

「新しい学力観を生かす教育課程編成の研究」(平成8年度)

「魅力ある学校づくりの研究」(平成9年度)

大阪府池田町立渋谷中学校研究紀要

「すぐできる中学『総合的学習』プラン集」 熊本大学教育学部附属中学校

「生きる力を育てる総合学習の実践」 滋賀大学教育学部附属中学校

「未来総合科で生きる力を育てる」 鳴門教育大学附属中学校

「総合・探求学習と新カリキュラム」 神戸大学発達科学部附属中学校

I 主題設定の理由とねらい

「[ゆとり]の中で[生きる力]をはぐくむことを重視する」と謳った平成8年7月の中央教育審議会第一次答申を踏まえ、平成14年度の完全学校週5日制実施を伴う指導要領の改定を前提とした教育課程審議会の答申「教育課程の基準の改善について」（平成10年7月29日）が公表された。

中学校における教育課程上の具体的な改定としては、各教科の時間を減少し「総合的な学習の時間」を導入（中学校1・2年で70～100程度、3年で70～130）、そして選択教科の時間が充実強化（1年で0～30、2年で50～85、3年で105～165）されることになっている。国語科でみた場合、必修教科としての時数は中学校で現行指導要領より各学年で35時間ずつの減少となる。さらに領域構成も、現行の『「表現』『理解』の2領域から、『「話すこと・聞くこと』『書くこと』『読むこと』の3領域にかわり、文学的な文章の詳細な読解に偏りがちだった従来の指導の在り方を改め、「自分の考えを持ち、論理的に意見を述べる力」「目的や場面に応じて表現する能力」「目的に応じて的確に読み取る能力」「読書に親しむ態度の育成」等の充実を図るという改善方向が示されている。

新たに導入された「総合的な学習の時間」のねらいについては、「各学校の創意工夫の下で行われる横断的、総合的な学習を通じて、自ら課題を見つけ、よりよく課題を解決する資質や能力の育成を重視、自らの興味・関心に基づき、ゆとりを持って課題解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度の育成を図る ～中略～ 情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などの学び方やものの考え方の習得を重視し、主体的な学習を推進するとともに、各教科、道徳、特別活動それぞれで身に付けられる知識や技能を児童生徒の中で総合化」することとされている。

この3年半で、各学校ではいろいろな取り組みを通しながら次期の学習指導要領のもとでの教育課程の編成を摸索していくことになる。本校でも、平成10年度から従来外国語に充てていた時間を一部外国語以外の選択教科（国語・社会・数学・理科）に充て、充実強化を図りながら「総合的な学習の時間」への橋渡しの実践を行おうとしており、またすでに先進研究校ではいくつかの実践がなされている。

国語科としての[生きる力]がどうとらえられ、教科としてのねらいや目標の設定、学習効果の向上などが、どのような枠組みや内容・指導計画のもとで実践されているのかを明らかにし、さらに今後どのような実践上の可能性があるのかを具体的に検証していきたい。

II 研究の仮説と検証の手だて

従来の国語科（もしくは必修の各教科）の枠の中でも前述の能力（情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などの学び方やものの考え方の習得）は同様に育てることができると思われるが、「総合的な学習の時間」を新設し「選択教科」を充実強化するということは、これらの能力が教科枠だけで取り組むよりもより有効的に育成され

るからではないかと思われる。そこで、次のような仮説を立て検証することにした。

1. 研究の仮説

選択教科として合科的・総合的な学習を設定すれば、国語科の各領域にまたがった総合的な学習活動や多様な目的的な活動が展開でき、教科単独で取り組むよりもより効果的に、音声言語によるコミュニケーション能力・論理的思考力・論理的表現力・情報収集力・情報処理能力などが高まることが期待できる。

2. 検証の手だて

上記仮説に従った実践活動を試み、その事例経過そのものから検証していく。また、活動対象となる生徒から活動後のアンケートをとり客観的な検証のための資料にする。

III 本研究の目指す生徒像

総合的な学習の中で国語科として効果的に付けさせられる[生きる力]を「言葉によるコミュニケーション能力」ととらえ、次のような生徒像を目指すこととした。

言葉によるコミュニケーション能力を身につけ、疑問や問題解決のために進んで発揮しようとする生徒

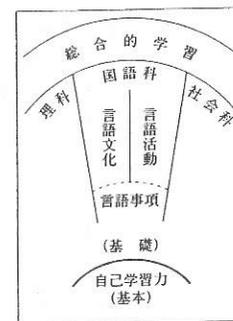
IV 研究の内容

1. 国語科と総合的な学習

国語科教育と総合的な学習の関係については、「国語科には、内容教科的な側面と道具教科的な側面があり、後者が総合的な学習と深く関わる。～中略～ 国語科の道具教科的な側面とは、聞く・話す・読む・書くの言語活動能力を育てる側面である。この4領域の言語活動能力は、それらの言語経験をすることによって育つ。～中略～ これらの道具教科的な側面の能力が、総合的な学習に生かされ、総合的な学習の中でさらに鍛えられていく。」（神戸大学発達科学部 浜本純逸教授）という考え方がある。（上右図参照）。

また、教育課程審議会が打ち出した、国語科としての領域構成の改善の視点からも、『「社会的言語能力』の形成に必要な言語表現・言語理解の方法・技術学習の重点化が求められている」（大阪教育大学 小田迪夫教授）といわれる。

そこで、これらの言語活動が豊富に体験できるような学習活動を意図的に仕組むことによって、目指す生徒像に近づけるのではないかとと思われる。



2. 選択教科の中での総合的な学習

現在まで各地で行われている実践事例は、次の点に大別できる。

<香川大学教育学部附属坂出中学校>

- ・合科型自由学習…学際的選択の学習で、異教科TTの学習で無学年制による教科間テーマ選択学習。2教科以上の内容を統合した「総合的な学習」の性格を教科の視点から問題解決的な学習の方法を具体的に体験し学び方を身につけさせる方法。
- ・教育課程上は、「選択教科等」の時間を充て、第1・3週の土曜日の2時間をとっている。

<大阪府池田市立渋谷中学校>

選択履修幅拡大の実践研究の中で、選択教科を学習することの意義やその具体的な方法を、生徒との対話を通して共に創り上げていこうとする取り組み。各教科ごとの選択学習のほかに、下にあるような教科の枠を越えたテーマからも選択できるようになっている。

2年総合3 「渋中今昔物語」

渋谷中学校の過去50年間に調査して映像化する。

3年総合2 「福祉ふれあい体験」

各種福祉施設の訪問、独居老人とのふれあい、各種福祉体験を行う。ハンディキャップの模擬体験。

<熊本大学教育学部附属中学校>

「豊かな創造性をはぐくむ授業」を研究主題に掲げ、横断的総合的な学習実践の試み。必修教科内での総合的な学習「教科総合」と、第2・3学年を対象にした選択教科としての総合的な学習「未来創造科」を設定し実践している。

- ・「教科総合」は、必修の各教科から計画的に時数を供出してもらい、下記の三つのタイプに分けて学習する。

①接続型

「パネルディスカッションからはじまる環境保全」 (理科3時・国語8時)

- ・様々な環境問題について調査活動を行い(理科)、グループ内でのパズセッションから考えを深めて、最終的にはパネルディスカッションを行う(国語)。

②合科型(一部TT)

「オリジナル楽器でコンサートを楽しもう」 (音楽科・理科 8時)

- ・「私たちの夏」をイメージし、図形楽譜に表現する→モノコードを使って、音の性質を探る→オリジナルの楽器を作る→コンサートを行う

③融合型(全時TT)

「ドラマチックに歌おう!」 (国語科・音楽科 8時)

- ・「赤とんぼ」の歌唱練習をしながら、歌詞の群読ドラマのシナリオを作る。

- ・群読ドラマ・歌唱それぞれを発表する。

3. 「選択教科指導計画」に基づく実践

【無理ない既存の活動を】

合科的な実践を試みようとしたとき、既存の活動を活用できないかと考え、時期的にももっとも無理なく生徒の協力が得られそうな「夏休みの自由研究」(社会科と理科で毎年実施)を実践研究の対象として考えた。ただし、例年「夏休みの自由研究」については生徒の任意の活動となっているため参加希望者がどれほど集まるかは不安であった。

【「社会化」を念頭に置いて】

特に「総合的な学習」において重要となってくるのが、学習活動を行う生徒たちにとってその活動の意義をどこに持たせるかという点である。教育課程審議会答申の、『総合的な学習の時間』のねらいや学習活動等についてに、「～前略～ 自己の生き方についての自覚を深めることも大きなねらいの一つとしてあげられよう」とあるように、生徒にとって活動そのものがいかに興味深いものであっても、その活動が生徒個人の中だけで完結するものであっては、総合的な学習の趣旨が生かされたとはいえない。生徒にとって、この学習活動が自分が生きる社会全体とどのように結びついていくのかを意識させることから、自己の存在感・生き方にまで自覚を高められるのではないかと考えた。

そこで、単に夏休みの自由研究をまとめるのではなく、「るるぶ長瀬」「るるぶ小田島」と銘打った「ミニコミ誌」的なものに編集し直し、地域社会に発信しようと呼びかけた。

【「課題解決型学習」の学習過程を基本に】

課題解決型の学習過程を基本にして、同時に国語科教育の「道具教科的な側面」の能力を有効的に高め、「総合的な学習」のねらいが達成されるように、下記のような指導計画を立案した。

選択教科指導計画

5段階	10のステップ
I 課題認識の場	1 個人の課題の磨き合い
	2 生徒の目の高さにしたテーマの決定
II 手段、方法認識の場	3 必要な資料、人材、施設の話し合い
	4 調査・体験のための準備
III 活動・体験の場	5 (地域での)調査研究と中間発表
	6 (地域における)再調査・再研究による補充
IV 表現の場	7 自己の見方、考え方の表現
	8 他者の見方、考え方をすることで考えの深化
V 地域のよさを再認識する(生活に生かす)場	9 研究による自己決定 再調査、再研究
	10 提案書や意見書の作成 社会化と行動化

【参加希望生徒と各テーマ】

2学年91名中56名23グループの参加となり、次のようなテーマに分かれて調査取材活動を行うこととなった。「るるぶ目次」から抜粋

- 「なぜだろうここにこの地名が存在するのは！」
 「小田島の地名由来『歴史ただよ小田島のなぞ』」
 「ナゾはすべて解けた！！ 小田島&長瀬」 (以上 地名の由来を調査)
 「知ってる！場所からシラナイ？場所まで 二中学区で…ぶらり店サラダ」
 (学区内近隣の有名店舗を取材)
 「二中学区内自販機地図」
 「小田島・長瀬 完全自販機マップ」 (以上 学区内の自動販売機を調査)
 「釣道一本橋」 (学区内近隣の釣り場を調査)
 「みんなの愛する祭りのなぞ～みんなの愛する祭りのなぞが
 今ここに解き明かされる!?～」 (祭礼の縁起を調査)
 「幻の納豆を求めて」 (学区内納豆工場を取材)
 「北村山公立病院観察日記」 (近隣の総合病院を取材)
 「あっ見つけた流行屋さん ～これであなたも流行先取り～」
 (近隣の有名店舗を取材)
 「一度は行ってみたい 東根の喫茶店」 (近隣の喫茶店を取材)
 「KOKOがおいしいたこやき屋さん」
 「みちのく たこ焼 こだわり紀行一。」 (以上 たこやき屋を取材)
 「おいしいケーキやさんめぐりの旅」 (近隣の洋菓子店舗を取材)
 「おいしいパフェ探し」
 「東根のパフェ&アイスのすべて」 (近隣の喫茶店を取材)
 「あつい夏、食欲の秋、さむい冬、
 今、食べた～い!!」 そんな時 これはどうですか」
 「おすすめ品満載！東根ラ～メンの味
 ～実はおいしいラーメンの味にはこんな秘密が…～」
 (近隣のラーメン店舗を取材)
 「みちかな温泉の旅」 (近隣の温泉泉質等を調査)
 「白水川探索隊」 (白水川堆積物の調査)
 「白水川産物めぐり」 (白水川流域の基幹産業を調査)
 「白水川滞在記」 (白水川上流のダムを取材)

実際の活動内容 (左端の番号は10のステップを表す)		標準時数
1	テーマの提案・検討・選択	1
2	指導者との相談・細部の検討による練り直し	1
3	キャッチコピー考案などを通しての記事内容の検討	1
4	インタビューを中心とした取材活動	4
5	写真等の資料を中心とした口頭での発表会	1
6	再調査・再研究	1
7	記事下書き・清書 (レイアウト・意匠・デザインの工夫)	2
8	完成した「るるぶ」の読み合い (相互評価カードの記入)	1
9	アンケートや相互評価カードによる最終的な自己評価	1
10	取材先への礼状送付・感想文 取材先からの実際的评价	1

国語科として評価する能力 (左端の番号は10のステップを表す)	
1	
2	
3	文字言語・音声言語による情報処理能力
4	文字言語・音声言語によるコミュニケーション能力 依頼状の書き方などの知識
5	文字言語による情報処理能力 音声言語による表現能力
6	文字言語・音声言語によるコミュニケーション能力・情報処理能力
7	文字言語による情報処理能力・表現能力
8	文字言語を中心とした理解力
9	
10	文字言語による表現力 お礼状の書き方などの知識

指導・支援上の留意点 (左端の番号は10のステップを表す)

個人の課題の磨き合い <テーマの提案・検討・選択>	
1	・生徒からの発案を待つのが理想的であるが、課題の難易度や学習材としての妥当性などを考慮して、教師からの具体的な例示を行う。 ・Vの段階、10番目のステップを意識させるための工夫をする。
生徒の目の高さにたったテーマの決定	
2	<支援者との相談・細部の検討による練り直し> ・生徒個々 (実際に活動する小集団ごと) に面接し、それぞれの能力やレディネスに合ったテーマ設定になるよう働きかける。 ・複数のグループでのテーマの競合に陥ることも予想されるので、視点を変えさ

	せたり調査対象の範囲を分けたりなどの工夫を行う。
3	<p>必要な資料、人材、施設の話し合い <キャッチコピー提案などを通しての記事内容の検討></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「キャッチコピー」を初めから考えさせるなどして、記事全体を具体的にイメージさせ、その取材のためにどんな調査が必要なのかを話し合わせる。 ・必要に応じて他教科の教員の協力も得る。 ・調査・実験・取材などのフィールドワークにかかわる計画については、統一した様式の計画書に記入させ、支援しやすいようにしておく。
4	<p>調査・体験のための準備 <インタビューを中心とした取材活動></p> <ul style="list-style-type: none"> ・調査の対象となる外部の機関などについては、事前に依頼状が必要か確認する。(公的な依頼が必要な場合には指導者のほうで準備し、事前に持たせるようにする。) ・インタビューの方法などは具体的に示しておく。
5	<p>(地域での) 調査研究と中間発表 <写真等の補助的な資料を使っでの口頭での発表会></p> <ul style="list-style-type: none"> ・調査活動については、授業時間内で行うことは困難なので、休日や土曜日の活用を予定させて計画を立てさせる。 ・聞き取りの調査などを行うグループにはカセットテープレコーダーなどを準備させる。 ・「中間発表」を行うことを前提に資料を整理させる。この時点では、記事としてのレイアウトは決まっていないため写真等の補助的な資料を使っでの口頭による発表とする。 ・「中間発表」は、1グループ対1グループの対話形式で行い、形式的なもので終わってしまわないように配慮した。
6	<p>(地域における) 再調査・再研究による補充 <追加調査・再検討></p> <ul style="list-style-type: none"> ・中間発表時の相互評価に基づいて、調査の不足や表現の不備を補うようにさせる。
7	<p>自己の見方、考え方の表現 <記事下書き・清書(レイアウト・意匠・デザインの工夫)></p> <ul style="list-style-type: none"> ・製本上の最低限の規格は守らせるように指示する。 ・記事として下書きをさせる。全体としての分量をあらかじめ規定することで、レイアウトもしやすくなる。 ・具体的なサンプルを示す。ただし、サンプルにしたがっていかなくとも目的や必然性が明確であれば独創的なものでも積極的に奨励していく。 ・下書きが終了した時点で、教師からの評価を必ず行う。できれば面接方式で行い誤字脱字等の細かな部分まで、訂正箇所等についてはこの段階で確認する。

8	<p>他者の見方、考え方をすることでの考えの深化 <完成した「るるぶ」の読み合い(相互評価カードの記入)></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自由に読み合う中での情報交換と、相互評価カードによる評価双方の活動を準備する。
9	<p>研究による自己決定 再調査 再研究 <アンケート記入や相互評価カードによる最終的な自己評価></p> <ul style="list-style-type: none"> ・アンケートによって活動を振り返らせ、自己評価とする。 ・活動全体を振り返って、次の活動につなげていくための動機付けを図る。
10	<p>提案書や意見書の作成 社会化と行動化 <取材先への礼状送付・感想文 取材先からの実際的评价></p> <ul style="list-style-type: none"> ・取材先に対して、完成した「るるぶ」とともにお礼状および感想を求めるアンケートを送付し、取材先からの「実際的评价」をいただく。 ・今回は、るるぶ完成後に文化祭が予定されているので、原稿を掲示して一般の保護者等からの評価もいただくことにする。

V 研究のまとめ

1. 成果

(1) 実践事例からの考察

<生徒の活動意欲の高さ>

本活動への参加そのものが強制的なものではなく、生徒の主体的な希望によるものであり、活動過程においても調査結果の提出や活動の継続そのものについても強制的な面はまったくなかったにもかかわらず、高い意欲を得られたことは大きな成果である。

要因として第一に挙げられるのは、活動テーマの自主決定にあると思われる。また、第二には、自分たちの活動の成果が、「るるぶ」としてまとめられ、将来的には地域に発信されていくという活動の目的が、生徒にとって有意義なものであったことだろう。

「社会化」されるものを活動の終末に準備することが生徒に対する動機付けを図る上で非常に重要であると思った。

<実際的な評価>

課題解決型の活動を展開した場合の評価として、調査・発表内容に対する実際的な評価が必要になってくるが、最も効果的な評価となるのが取材先からの反応である。完成した「るるぶ」を取材先に配布し、礼状を持参しながら、生徒自らのインタビュー形式で、活動全般について、また取材内容の処理・表現についての実際的な評価をいただけてきた。

<内容の多様性>

今回生徒が選んだテーマは18種類、「合科」的な取り組みにすることで、テーマの設定が多様化され、生徒の多用な興味や関心にできるだけ対応することが可能になる。

また、活動の過程で他のグループの中間発表を聞き合ったりできあがった「るぶ」を相互に読み合ったりすることによって、同じ目的で取り組みながらも異なった調査方法や表現方法に気づいたりして、個々の活動を深めていくことにつながる。

(2) アンケートの結果からの考察

アンケートの項目にしたがって結果をまとめ下記のように考察した。

- ・調査活動に充実感を感じる生徒がもっとも多い。体験学習としての効果大きい。
- ・活動後の向上的変容を問う項目に対して、「大人のひとと、きちんと話せるようになった」「情報誌の書き方がわかった」「人の話を速くメモできるようになった」「インタビューの仕方がわかった」等の回答がみられ、国語科として期待した能力の向上がみられた。
- ・「いろいろな調査の仕方が学べた」とする回答がみられ、学習のスキル習得という観点からのねらいも達成されている。

2. 課題

<合科としての評価>

教育課程上は複数の教科を合科して活動しており、それぞれの教科の視点で評価できる。しかし、融合型の合科として学習活動を組んだとき、総合的な視点での評価の観点を具体化できなかった。

<「社会化」の今後への可能性>

「るぶ」の印刷物としての“できばえ”を見たとき、必ずしも満足のいくものではなかった。たとえば今後、インターネットのブラウザを用いてまとめ、ホームページとして発信するという事も考えられる。

<小集団での活動>

小集団を単位とする活動であったため、集団内での個々のばらつきが出てきた。それぞれの得意分野を生かすという点では役割分担などができて効果的であったが、活動量に偏りがでたケースもあった。また、集団ごとの進度のばらつきも大きかった。夏季休業中や放課後の活動が主であったので対処できたが、授業時間内に行くと仮定すると解決しなければならない問題となる。

計画表は個人ごとに書かせたが、支援者による時間ごとの評価が不徹底であったことにも起因したと思われる。

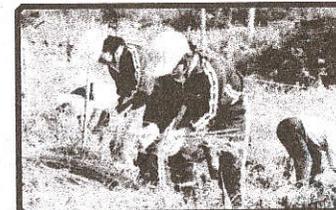
<その他>

国語科として期待した、「昔話の聞き書き」「方言調べ」等の合科によらないテーマを選択した生徒が今回はいなかった。合科によらない「同一選択教科内での総合的な学習」につなげられる内容であると思われるので、今後機会を捉えて実践してみたい。

体験活動をいかした情報活用能力の育成

(平成10年度 情報教育長期研修(前期6カ月) 報告書)

山辺町立中学校
教諭 工藤 浩



10月 稲作体験活動「稲刈り」(学校行事)

目次

I 主題設定の理由	1
II 研究仮説	1
III 研究内容	1
IV 研究の全体構想	1
V 研究実践	
1 各教科・領域等における体験活動と関連した実践内容の把握と、系統的・体系的な情報教育の可能性を検討し、体験活動をいかした情報教育の全体計画や各教科・道徳・特別活動等の年間指導計画の作成	3
2 生徒が体験活動において調査・実践し、まとめたことをもとに、情報機器を活用して自らの考えに基づいて情報を創り出す授業実践を行い、情報活用能力の育成に有効な指導過程の在り方、情報機器の活用方法等についての検証	5
3 インターネット等のネットワークを活用して、生徒が自分達の活動についての情報を主体的に表現・創造し、発信するための活動場面を設定し、地域や他校等との交流学習への発展のさせ方、情報手段を活用する際の留意点等についての検討	8
VI 今後の実践に向けて	9

主な参考文献・資料

- 『インターネットと教育』(黎明書房)
- 『インターネットと教育実践』(黎明書房)
- 『コンピュータと教育』(岩波新書)
- 『教育現場のパソコン活用』(理工学社)
- 『hint No.5・No.6』(社団法人日本教育工学振興会)
- 『学校運営研究'97/12月号臨時増刊 教育課程審議会「中間まとめ」』(明治図書)
- 『学校運営研究'98/9月号臨時増刊 教育課程審議会答申全文と重点事項の解説』(明治図書)
- 『マルチメディア時代における技術家庭科の指導』(明治図書)
- 『英語教育のためのパソコンとインターネット』(洋販出版)
- 『情報教育に関する手引き』(文部省)
- 『コンピュータ・ネットワークとこれからの学校』(一橋出版)
- 『中教審答申から読む21世紀の教育』(ぎょうせい)
- 『パソコン活用大百科』
- 『NHK趣味悠々 ホームページはむずかしくない インターネット徹底攻略法』(日本放送出版協会)
- 『教職研修実践ハンドブック 新学力観に立つ体験学習の工夫と展開』(教育開発研究所)
- 『学習指導要領』(文部省)
- 『指導書』(文部省)

(山辺町立中学校のホームページと電子メール情報)

URL : <http://www.edyamanobe.town.yamagata.jp/junaka/index.html>
E-mail : chokai@edyamanobe.town.yamanobe.yamagata.jp

I 主題設定の理由

現代社会は、あらゆる分野に情報化が進展している。特にインターネット、マルチメディア型パーソナルコンピュータ（以下コンピュータ）等による、高度情報通信社会の進展には目を見張るものがある。この情報化の進展は、子ども達や学校教育に影響を与えている。子ども達が入手する情報量が膨大で、多様になったことや、コンピュータ等の普及によって子ども達の個別的な学習が可能になり、学習の在り方により多くの可能性が出てきたことである。

このような状況の中で中学校において「主体的に情報及び情報手段を選択し活用する能力」、いわゆる「情報活用能力」を生徒に身につけさせることは重要なことである。また、こうした情報教育を進めるにあたっては、各教科や道徳、特別活動等の学校教育活動全体を通じて実践する必要があり、したがって、校内の情報環境や推進体制を整備するとともに、情報教育全体計画や年間指導計画を作成し、その中学校の実態に合った実践を行うことが重要である。

そこで本研究では、山辺町立中学校（以下本校）で毎年全校体制で取り組んでいる体験活動（稲作活動：写真1）との関連の中で、コンピュータ等の情報機器を活用した実践が、どの領域で可能なかを検討するとともに、本校における系統的・体系的な情報教育の在り方について検証したいと考えた。更に、体験活動を通して得た結果を、インターネット等のネットワークを通して発信するような学習の場面を設定することをねらいとして本主題を設定した。

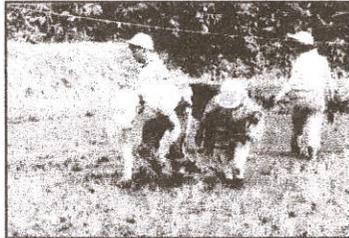


写真1 5月「田植え」（特別活動）

II 研究仮説

- 1 各教科・領域等において、体験活動をもとにした情報活用能力を育成するための授業実践の在り方について検討すれば、系統的・体系的な情報教育の教育課程が作成できるのではないか。
- 2 生徒が体験活動において調査・実践し、まとめたことをもとに、情報機器等を活用した授業を設定し実践すれば、情報活用能力を育成することができるのではないか。
- 3 インターネット等のネットワークを活用して、生徒が自分達の活動についての情報を主体的に表現・創造し、発信するための学習場面を設定すれば、情報活用の実践力を育成することができるのではないか。

III 研究内容

- 1 各教科・領域等における体験活動と関連した実践内容の把握と、系統的・体系的な情報教育の可能性を検討し、体験活動をいかした情報教育の全体計画や年間指導計画等を作成する。
- 2 生徒が体験活動において調査・実践し、まとめたことをもとに、情報機器を活用して自らの考えに基づいて情報を創り出す授業実践を行い、情報活用能力の育成に有効な指導過程の在り方、情報機器の活用等について検証する。
- 3 インターネット等のネットワークを活用して、生徒が自分達の活動についての情報を主体的に表現・創造し、発信するための活動場面を設定し、地域や他校等との交流学習への発展のさせ方、情報手段を活用する際の留意点等について検討する。

IV 研究の全体構想

情報教育に関する文部省の各答申を踏まえ、本校の学校教育目標、学校や生徒の実態に基づいて、図1のように研究を構想した。

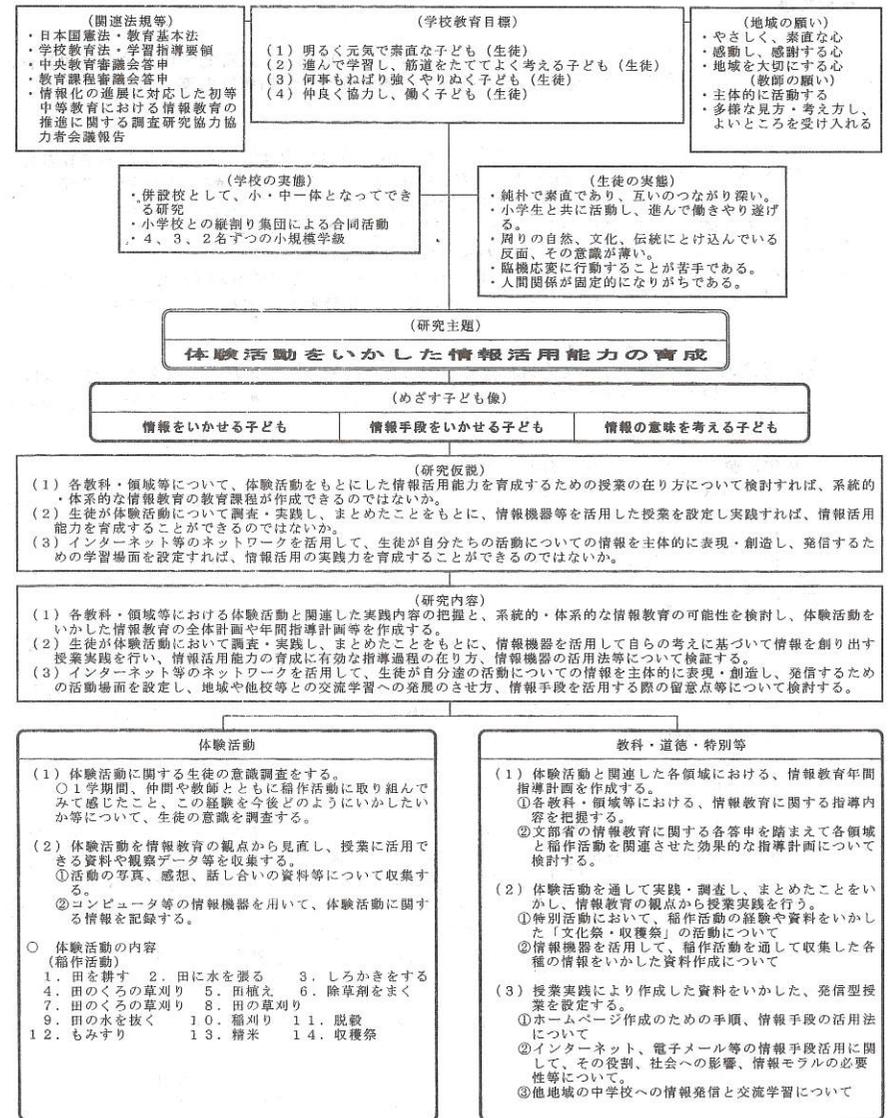


図1 研究の全体構想図

V 研究実践

1 各教科・領域等における体験活動と関連した実践内容の把握と、系統的・体系的な情報教育の可能性を検討し、体験活動をいかした情報教育の全体計画や年間指導計画等を作成することについて

平成8年10月に発足した、文部省の調査協力者会議「情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の進展等に関する調査研究協力者会議（以下、協力者会議）」の報告（平成9年10月3日）において、情報教育の目標（情報活用能力）が以下の三つに焦点化されている。
 ○情報活用の実践力 ○情報の科学的理解 ○情報社会に参画する態度
 その中で、この三つを相互に関連づけた実践の必要性が提言されている。
 そこで、本研究においても、この三つの目標の達成をねらう形で全体計画（図2参照）を作成し、各教科・領域等において体験活動とどのように関連させた情報教育が実践できるかを検討した。

(1) めざす子ども像（図1参照）

協力者会議により提言された情報教育の三つの目標に沿って、本校の学校教育目標、本校の生徒の現状、情報教育の在り方から、本校の情報教育において「めざす子ども像」を三つに焦点化した。

(2) 体験活動と関連した実践内容の把握

各教科・領域等における体験活動と関連させた実践が、情報教育の三つの目標のどれを主にねらえるものかを検討した。

① 情報教育の全体計画（図2参照）

本校における、体験活動と各教科・領域等を関連させて、情報教育を実践していくための全体計画を構想した。

② 稲作活動と関連させた情報教育年間指導計画（図3参照）

協力者会議の報告において、「情報教育の実践力」の育成については「各教科等の学習内容と関連したものを扱うことが望ましい」とされ、「情報の科学的理解」及び「情報社会に参画する態度」は、「主に情報教育に特化した教科・道徳・領域において扱うことが考えられる」とされている。そこで、現行の学習指導要領の範囲で、どのような指導内容が可能なかを年間指導計画にまとめた。

(3) 成果と課題

① 成果

- 各教科で実践可能な情報教育のポイントが明確になり、特別活動や特定の教科に偏らない、体系的な情報教育の全体計画、指導計画の構想を作成することができた。また、各教科等における体験活動と関連させた実践内容の系統性を把握することができた。
- 各実践が、情報教育のどの目標を意図したもののかを考えることで、情報教育の観点から見て、各教科等がどのような位置づけにあるかが明確になった。
- 各教科等の実践内容に合わせた、体験活動の在り方（活動内容や収集する情報の内容等）について考える機会を持つことができた。

② 課題

- 各教科の目標の達成に沿って、体験活動を関連させた実践が効果的に位置づけられた計画を作成する必要がある。
- 各実践にどの程度の時数が必要かについて、今後検討していく必要がある。
- 生徒の発達段階や、情報活用能力の向上に合わせて、適切な指導計画につくり直していく必要がある。

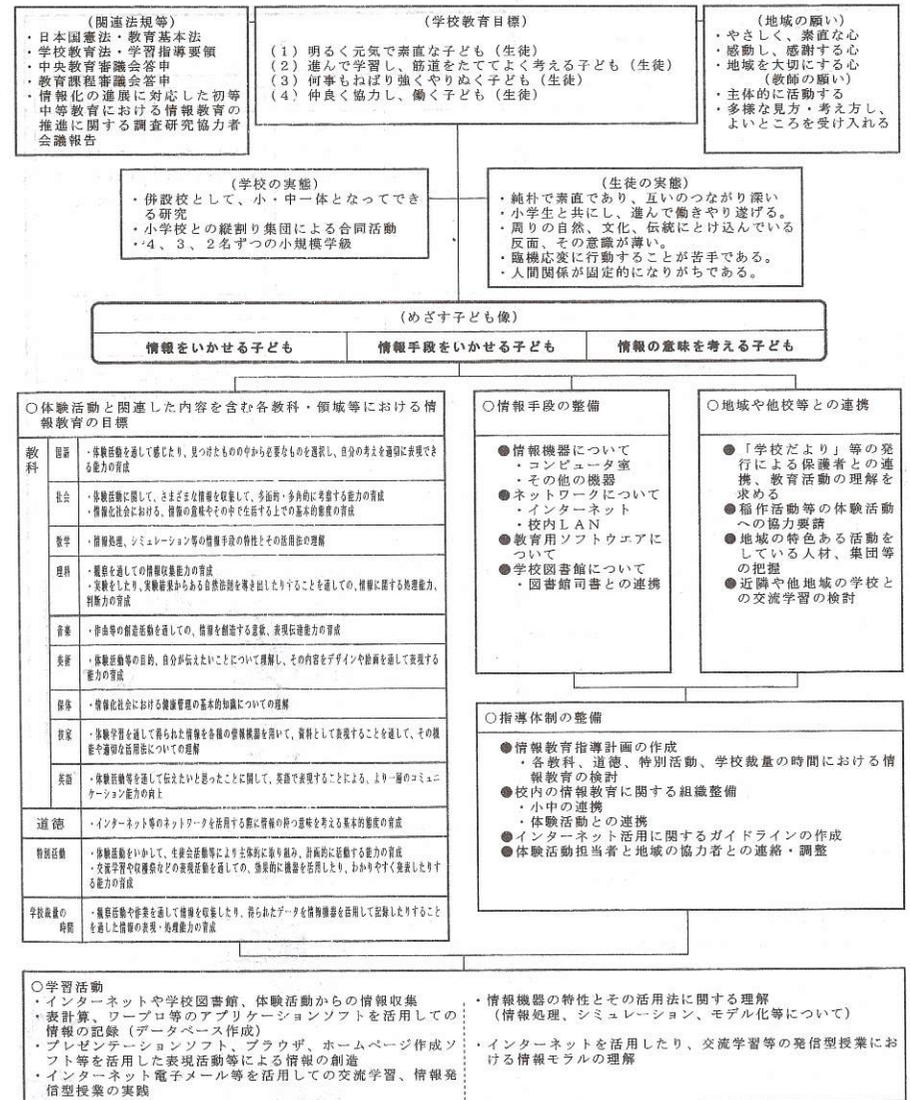


図2 情報教育の全体計画

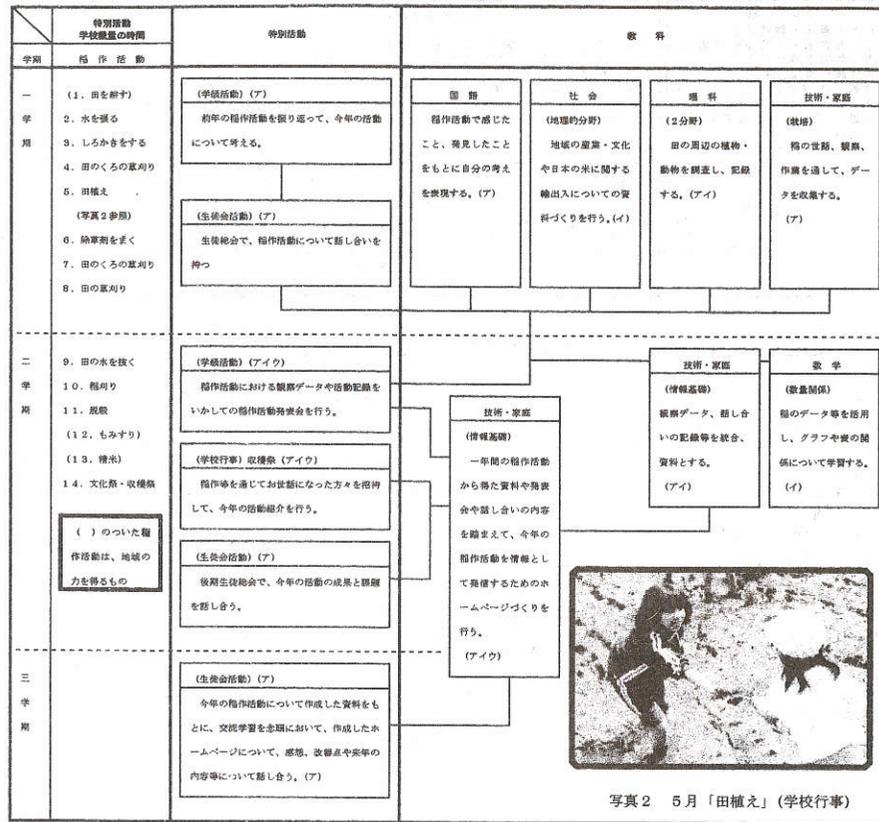


写真2 5月「田植え」(学校行事)

ア:「情報活用」の活動力、イ:「情報の科学的理解」、ク:「情報社会に参画する態度」に関すると考えられるもの、アイ:稲作活動に関連すると考えられる指導内容、アイク:指導内容の関連

図3 体験活動と関連させた情報教育年間指導計画

2 生徒が体験活動において調査・実践し、まとめたことをもとに、情報機器を活用して自らの考えに基づいて情報を創り出す授業実践を行い、情報活用能力の育成に有効な指導過程の在り方、情報機器の活用法等について検証することについて

体験活動における話し合いの資料、観察した稲のデータ、活動を終えての感想、活動風景の写真等を活用して、自分たちの体験活動を地域の人に紹介するための資料画面を作成する授業を設定した。毎年行われる収穫祭において、お世話になった方々に発表することをねらった授業実践である。

(1) 授業実践の概要

① 生徒の意識調査

授業実践の前後に、中心となって稲作活動に取り組んできた生徒達の意識調査を行った。今年の稲作活動についての印象、稲作活動を発展させ他の活動へいかそうとする意識がある

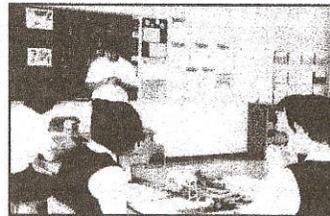


写真3 7月「授業風景」(特別活動)

のかどうかなどを把握し、今後の授業実践にいかすことを意図したものである。
〔意識調査の質問項目と生徒の主な反応〕参照)

○意識調査の質問項目と生徒の主な反応

(実践前)

1 1学期間、稲作活動をやったことを書いて下さい。

○ 班長として、企画運営にあたって

- ・ 自分が中心として稲作活動をやっていると、とてもたいへんだなと思った。
- ・ 今年から先生にたよらず水の調整、草刈りなどをするので、みんなが田の様子を気にし始めたり、早く育てほしいという思いができた。

○ 仲間たち(班の下級生も含めて)と一緒に活動してみても

- ・ 今週は10cmのびたとか言っていてここにしています。観察記録を、「私が書く」と言う人が出てきました。下級生もだんだん稲作に興味をもちはじめたようでした。
- ・ 小学生低学年が自分達の班の稲を観察せず、他の班の稲に気をとられていた。2学期からはきちんと活動できるようにしたい。

○ 地域の方や学校の先生と協力してみても

- ・ 先生方と意見交換し、意見をはっきり言ったりしています。地域の方もやさしくおしてくれます。もっと先生や地域の人に積極的にきいていかないとなあと思います。
- ・ 草刈りなどを先生方と協力してやってみて、このようなことをやってもらっていたのだからよかった。

2 稲作活動の記録を今後どのようにいかしていきたいと思いませんか。

- ・ さわらび(学校裁量の時間)か、文化祭などでつかってほしいです。何年もつづけてほしいと思います。自分の班の稲の高さを文化祭の収穫祭のときに、みんなに発表していきたいと考えています。また、その観察をパソコンでグラフ化してみたいです。メモも残しておきたいです。後輩につたえていきたいです。
- ・ 観察を記録すると、去年もこんなことをしていたんだなという参考になると思います。

3 今年(まだ1学期が終わったばかりですが)稲作活動に取り組んでみて、よかったなあと感じたことは何ですか。

- ・ 自分の班で植えた稲が大きくなっていくのうれしくなります。また、小学生にも何かできる仕事をつくってあげようかな。そうして、小学生の小さい子にも稲作活動を教えることが一番の目標になっています。
- ・ 稲作活動は、やってみると意外と楽しく情報交換などができてとても楽しいです。

(実践後)

1 ホームページの作成に取り組んでみての感想を書きましょう。

① 全学年で活動に取り組んでみて

- ・ ホームページ資料の完成をみんなで喜べた。いろいろなアイディアが出てよかった。
- ・ 学年ごとの考え、感じていること、難しかったことが違っているとわかった。

② 稲作活動の情報(文章、写真、観察等)を活用してみても

- ・ 情報(写真等)量をもっと増やすと、もっとよいホームページになったと思う。
- ・ 日常の観察データの項目をもっと増やす必要がある。

③ コンピュータ、OHP等の機器を利用して

- ・ 文章の校正は、移動や訂正が簡単にできて便利だと感じた。
- ・ グラフ等に表現することが簡単にできて役立った。

2 ホームページを作成してみて、稲作活動の進め方について気がついたことを書きましょう。

- ・ 1年間の記録を振り返ってみると、作業の流れについてよくわかってくる。
- ・ 班員一人一人に意見や感想を聞いたり、観察ノートの項目増やししたりするなどの工夫をしたい。見る人にとってわかりやすい画面づくりに役立てたい。

3 今後、稲作活動やホームページをいかして、どのようなことをやりたいですか。

- ・ 自分達の活動について、多くの人にみてもらいたいと思った。
- ・ 電子メール等の交流などを行い、他校の活動や地域の農業について知るために利用したい。外国の米やその育て方について調べ、実際に育ててみたい。

② 授業実践の概要

生徒の意識調査の結果を踏まえ、次のような内容で、授業実践を行った。

題材「『文化祭・収穫祭』で、稲作活動について発表しよう」の指導計画の概要を表に示す。

表 指導計画（20時間）

	時数・日程	主な指導内容
特別活動	7/17（金） 1・2時間目	・「文化祭・収穫祭」に向けて、どんな資料をつくるかを話し合わせる。 ・活動日程について話し合わせる。
	7/22（水） 3・4時間目 (写真3参照)	・「稲作活動」の様子を撮影した写真をもとに、活動の紹介資料を作成させる。 ・写真の紹介文をワープロに入力させる。
夏休み中		・各自、発表資料について考えさせる。 ・資料を考えさせ、作成するための機会を設定する。 (生徒の希望に沿って日時を設定した。およそ2時間×3日＝6時間程度) (生徒が最初に作成した資料画面参照)
特別活動	8/28（金） 5・6時間目	・体中に作成した資料を確認し、教師の例示を参考に、画面に表示させる。 ・資料画面を活用して、どのような発表をするか考えさせる。
	9/11（金） 7・8時間目 (本時) (写真4参照)	・作成した資料画面と発表原稿を機器を用いて1年生を相手に発表し、地域の一般参観者を相手にした発表の在り方について、考えさせる。(3校時目) ・資料画面をどのように構成すれば、よりわかりやすい画面になるかを考えさせる。(4校時目)
授業家庭	11月	・発表会で用いた資料画面をよりわかりやすいものに改善させる。 ・情報を文字の大きさや画像を工夫し、他のファイルへのリンク等を用いて、より効果的に活用させる。
	12月	・ホームページとしてインターネットに発信することを通して、ネットワークの効果的な活用法について考え、今後の交流学習について考えさせる。
特別活動	2月生徒総会	・今後の稲作活動の進め方、交流学習の内容等について具体的に考えさせる。



写真3 8月「活動風景」(学校教員の時間)

(2) 成果と課題

① 成果

ア 意識調査から

- ・生徒の意識調査を行い、稲作活動をどのようにとらえているのかについて把握したことをその後の授業実践の活動内容等にかすことができた。
生徒の意欲を引き出し、今後の指導内容の検討に役立った。
- ・パソコンや表計算ソフト等の活用について、何人かの生徒が考えており、情報機器を使うことに前向きであることがわかった。体験活動を情報教育にかすことは、情報手段の理解にも意欲的に取り組ませることができるとわかった。

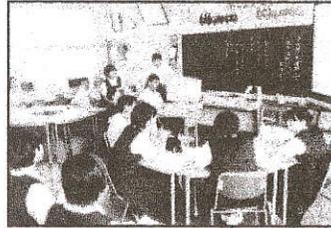


写真4 9月「授業風景」(特別活動)

イ 授業実践から

- ・体験活動から得られた資料や観察データ等を題材として、グラフ化したり、話し合いの資料をワープロで作成したりした。その結果、活動の中で情報をいかそうとする意識を継続させ、班同士の情報交換をし、アイディアや意見を明確にしながら取り組ませることができた。
また、次回の活動への意欲を持たせることができた。特に、他の学校との交流を希望する生徒が現れたことで、生徒に情報活用の実践力を育成するために本実践が効果的であったと考える。
- ・情報機器を用いて作成した資料で発表会を行った。その結果、生徒は適切な表現の仕方を意識したり、資料画面をいかして自分たちの発表を改善することを考えたりするなど、発表の仕方について改めて考え、工夫して自らの意見を効果的に伝えようとするようになった。
また、今後の活動において収集・記録すべき情報について考えさせることができたことは、情報手段の効果的活用についての意欲づけになったと考える。

② 課題

ア 意識調査から

- ・生徒によって体験活動そのものに対する意欲によって、活動に対する姿勢に違いがみられた。より生徒一人一人を考えた指導を大切にしていきたい。

イ 授業実践から

- ・次回の活動に向けての目標は持っていますが、なかなか予定通りに進まない生徒がいた。情報機器を操作する時間を確保してやることで、意欲を継続させることが大切と感じた。

- ・画面を有効に活用しきれていない生徒がいた。資料に盛り込む情報の内容は、初歩段階においては教師が設定してやる必要があった。また、情報機器の操作において、意欲はあっても、慣れていないため苦労している生徒がいた。コンピュータの基本構造、ソフトウェアの操作法等についての指導も大切であると感じた。
- ・図書館やインターネットを活用しての情報収集ができなかった部分が多かった。今後図書資料やインターネットの活用等についても条件整備を進める必要があると実感した。

- 3 インターネット等のネットワークを活用して、生徒が自分達の活動についての情報を主体的に表現・創造し、発信するための活動場面を設定し、地域や他校等との交流学習への発展のさせ方、情報手段を活用する際の留意点等についての検討について

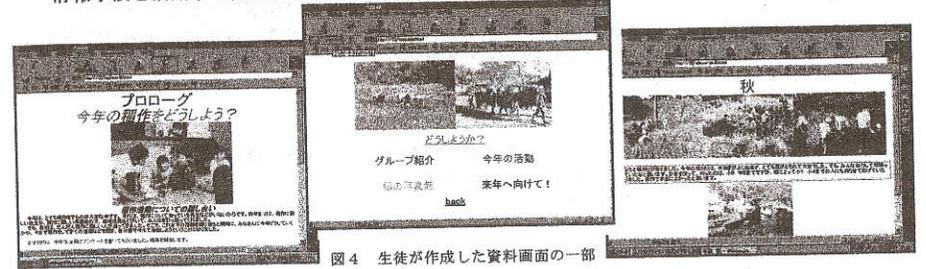


図4 生徒が作成した資料画面の一部

体験活動について生徒が作成した資料画面等をいかして、インターネットを活用したり、地域や他校等と交流したりすることを構想して研修を進めてきた。実際にそのような場面を設定することができなかったが、以下に、資料作成の際のソフトウェアの活用法、インターネットの教育利用やその構想等について述べる。

- (1) 生徒が主体的に情報を表現・創造するためのソフトウェアの活用法について
生徒が情報を収集し、自分の考えで情報を創造する際に活用するソフトウェアには、どのような機能が必要かについて検討した。
マルチメディア型パーソナルコンピュータや特色あるアプリケーションソフト、ホームページ作成用のソフトウェア等が格段に進歩している現代において、新しいハードウェア、ソフトウェアの機能を求めていくことは重要である。
反面、新しいものが登場するごとに、新しい使い方を身につけなければならないという状況に陥る。
そこで、今回はホームページ作成を想定しての、コンピュータを用いた情報収集、表現、処理等を、なるべくアプリケーションソフトに頼らず、手軽に行える方法について考えた。

① 情報の表現、収集において

ア 文章を作成し、記録する場合

● 「メモ帳」の活用

Windowsに搭載された最もシンプルなワープロである。保存形式は「テキスト形式」であり、文字情報を保存するための最もシンプルで、世界共通の形式である。また、ほとんどのワープロにこの形式での保存機能は備わっているため、応用範囲も広い。

・ HTML形式での保存

メモ帳で作成した文章をホームページに活用する場合は、HTML形式(Hyper Text Markup Language: インターネット上における世界共通のホームページ画面記述形式)で保存する必要がある。これは、保存時にファイル名の後に「.htm」という拡張子をつけるだけでホームページに使えるものになるので、大変手軽に扱えるものである。

イ 画像を記録する場合

● 画像形式の変換ソフト(「Paint Shop」等)の活用

ホームページに活用する場合は、GIF形式またはJPEG形式でなければならない。このために画像変換ソフトが必要である。雑誌等の付録にもついており、簡単に入手できる。Windows 98の作画ソフト「ペイント」には標準で、この機能が搭載されている。

② 情報の統合

・ ブラウザの活用 (「Internet Explorer」や「Netscape Navigator」)
最近のものは、ホームページの編集機能がついており、文章、画像等を手軽に同じ画面に表現できるだけでなく、あるページから別のページへをクリック一つで飛ぶ機能「ハイパーリンク」も簡単に設定できる。データベース作成にも活用できると考える。
また、ワープロで同じ画面を構成した場合に比べ、ブラウザを用いた場合は、ファイルの大きさが格段に小さくなるので、コンピュータでの処理も速くなり扱いやすい。生徒が操作するのに適していると考えられる。

(2) インターネット等のネットワークを活用した、情報発信の学習場面の設定について。
ネットワーク等の活用の利点の一つは、生徒が手軽に情報の発信者になれることである。コンピュータを活用した実践の場合、この点が欠かせないと考えた。以下に、インターネットの教育利用についてと、今回の研修内容を発展させて実践構想について述べる。

① インターネットの教育利用について

ア 利用内容

- ・ 電子メール、メーリングリストの利用
- ・ ホームページ等を利用した生徒の調べ学習や教師の教材研究
- ・ 自らのホームページ作成による情報発信への利用
- ・ 地域や他校等との交流学習への利用

イ 利用の際のポイント

・ 情報収集の道具
インターネットからは、世界中のさまざまな情報を収集することができる。その中には、生きた教材、新しい教材、本物の教材が含まれている。有効に活用すれば、生徒の関心、意欲、態度を高めるのに有効である。

・ 情報発信の手段

ホームページとして、手軽に自分達の情報を発信することができる。これは、全国、世界から参照されることになり、発信した内容に対する多様な意見が期待できる。更に、それを契機に時間や距離を超えた交流学習を行う可能性も生まれてくる。

・ コミュニケーション能力育成への利用

電子メールやテレビ会議システムを活用すると、これまでの方法では難しかった、リアルタイムで、しかも広い範囲の地域や学校とのコミュニケーションが可能になる。

これまでなかなかできなかった、他人とのコミュニケーションのルールやモラルの育成を実際体験させることで身につけさせることができる。

② 今後の授業の構想について

ア ホームページ作成

作成してきた資料画面をホームページ用に構成 (図4 生徒が作成した資料画面の一部参照) し、インターネット上に発信する授業を設定したい。

イ インターネットを活用した授業

町内の学校はすべてインターネットに接続している。また、実際に沖縄や埼玉等の他地域の中学校が電子メールでの交流を呼びかけてきている。生徒の興味を大切にしながら、そのような機会を大切にしていきたい。

VI 今後の実践に向けて

- 1 生徒の実態や意識、体験活動の内容、情報社会の情勢、情報手段や情報機器の発展等に常に目を配り、実践内容について検討を続け、情報活用能力の内容を絶えず見直していきたい。
- 2 情報教育を推進する際には、中核となるテーマや活動等の設定が有効であると感じた。
- 3 本研修を通して、「総合的な学習の時間」が導入されたとき、全教育活動を通して情報教育が可能であるという手応えを感じる事ができた。
- 4 体験活動をもとにした情報発信の実践を行う上で、その素地となる表現力、コミュニケーション能力、情報機器リテラシー等の育成が重要であることがわかった。
特に本校においては、体験活動をいかした各教科等と連携した情報教育は大変有効である。
- 5 生徒が主体性に自分の手で創り上げる資料やホームページにこそ、生徒の本当の姿が現れ、生徒の変容を促すことになると考え、今後の実践を積み重ねていきたい。

心の交流を深めるための支援の在り方に関する研究

高島町立和田小学校
教諭 青木恵美子

目次

I 主題設定の理由	1
II 研究のねらい	1
III 研究の進め方	1
IV 研究の内容	1

1 児童期の友人関係	1
(1)児童期の発達課題 (人との関わり)	
(2)マズローの欲求階層説	
(3)社会的変化による問題点	
2 「人との関わり」に関する意識調査	2
(1)意識調査の方法	
(2)学級の仲間と友だちに関する適応感の比較	
(3)適応感の高い児童と適応感の低い児童との比較	
(4)自己主張と受容の関係	
(5)求める友だち像	
(6)意識調査の考察	
3 心の交流を深めるための開発的教育相談	5
(1)社会的スキルトレーニング	
(2)支え合う学級集団	
(3)教師の在り方	
4 開発的教育相談の実際	7
V 研究のまとめ	9

参考文献・引用文献・資料

生徒指導資料集・登校拒否問題への取り組みについて	文部省	1997
シリーズ 育てる学校カウンセリング1集~5集	手塚郁恵他著	学事出版 1997
教師の使えるカウンセリング	國分康孝著	金子書房 1997
誰もが身につけたい生徒指導 学校教育相談の技法	教 研 編	ぎょうせい 1992
新・児童心理学 対人関係と社会性の発達	木下芳子編	金子書房 1992
社会的スキルと対人関係	相川充 津村俊編	誠信書房 1996
人間関係の発達心理学 児童の人間関係	小石寛文編	培風館 1995
乳幼児・学童の心理学	寺田晃 宮川知章編	松村出版 1975
アサーショントレーニング さわやかな自己表現のために	平木典子著	日新心理臨床 1993
ネズミと怪獣とわたし	バット バルテ著	原生林 1994
エカガで学級が変わる・続 小学編	國分康孝監修	図書文化 1996
グループワークトレーニング・続	板野公信監修	遊技社 1996
構成的グループエカガ	國分康孝編	誠信書房 1992
きらきらゲーム	手塚郁恵著	善文社 1997

*月刊 学校教育相談 (ほんの森出版)

I 主題設定の理由

今、子ども達は、友だちになりたいのにうまく声を掛けられず一人でいたり、いつも一緒に遊んでいる仲間なのに自分の気持ちを伝えられず、誤解が生じてその修復ができずにいたりなど、いろいろな不安を持ったまま過ごしている。また、相手に思いやりのない言葉を発して喧嘩になり、仲間外れになる子どももいる。

そのような子ども達は、自分の居場所を見つけられずに、学級の中で不適応感を持ちながら生活している。これは、今までに人との関わり方を学ぶ機会が少なく、友だちにどう関わったらいいかわからないために、不適応感を持ってしまったと考えられる。

従って、教師が日々の活動の中で人との関わり方を学ぶ機会を意図的に設定する必要がある。そして、子ども同士が、本音で話し合い、認めあったり、助け合ったりする関係を持てれば、心開いた交流が図られ、仲間集団に適応し、自分の居場所を見つける事ができるであろう。

本研究では、教育相談の考え方を生かし、子ども同士が心の交流を深めるための支援の在り方を探っていく。

II 研究のねらい

- 1 子ども同士の人との関わりについて意識調査を実施し、人との関わり方に関する実態を把握する。
- 2 児童期における人との関わり方における発達課題と意識調査の結果をもとに不適応感を感じさせる問題点を明らかにし、心の交流を深めるための具体的な支援の内容と場の設定を探る。

III 研究の進め方

1 基礎・理論研究

- (1) 児童期の人との関わり方に関する文献収集
- (2) 児童期の人との関わり方に関する発達課題の整理

2 実践研究

- (1) 人との関わり方に関する意識調査の分析
- (2) 構成的グループエンカウンター等の効果的な活用法
- (3) 心の交流を深めるための授業構想と年間計画の作成

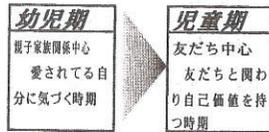
IV 研究内容

1 児童期の友人関係

(1) 児童期の発達課題 (人との関わり)

母子関係が中心であった幼児期に比べると、児童期は、対人関係が最も拡大する時期であり社会的スキルを身につける時期でもある。

(新・児童心理学講座対人関係と社会性: Sullivan, H.S. の発達課題)



低学年：遊び相手を求める時期

求める友だち：男子は課題志向型を好む
女子は気の合う人
葛藤を感じながら関係を築く関わり方を学習

中学年：人から受け入れられる経験をする時期

仲間から受け入れられたい仲間集団に安定していたい
独自のルールを作り連帯感を強め仲間意識を持つ
仲間からの受容が高い児童は、自己価値を高める。
受容的されない児童は、自己否定的になる。
人と関わる楽しさや受け入れられるうれしさを知る時期

高学年：親密な友だち関係を求め 情緒的行動的自律をする時期

互いに理解し合える相手を求める
仲間集団と友だちを区別し行動
友だちと関わりながら自分の存在や自尊感情を高める
親密さを求めつつ、自分自身を見つめる時期

児童期は友人関係を築く事によって
人格を形成し、人との関わりの中で
社会的スキルを身につける時期

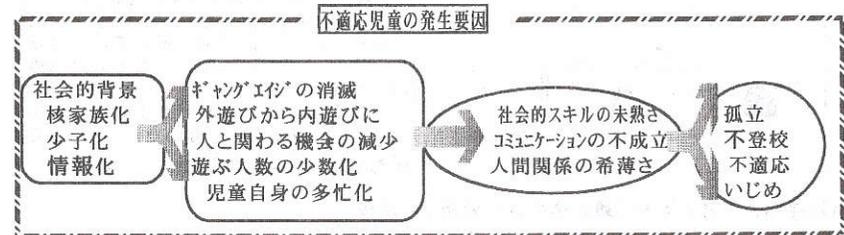
(2) マズローの欲求階層説

マズローは、『5段階の欲求を順次満していくことによって、人格の成長と自己実現が達成される。』と提唱している。児童期においても、自己実現に向かうためには愛情・所属欲求を満たすことが必要である。愛情・所属の欲求が満たされて始めて、承認・尊重の欲求が生まれる。児童一人ひとりが他者から尊重され、適応感を高めるためには、集団の一員としての所属感を持つことが基盤である。

従って、発達課題でもある集団への所属意識を高める関係づくりが児童期には欠かせない。



(3) 社会的変化による問題点



急速な社会の変化は、児童の社会的体験の不足や仲間集団でのルール作りを学ぶ機会を減少させ、子ども達の社会性の発達を阻害してきた。本来子ども達は遊びを通して自然的に友だちを作り、関わり合いながら社会的スキルを身につけるものである。その点で児童の発達段階から見ても、この時期の人との関わりが重要視される。しかし、時間・空間・仲間の3つの間が保障されていない今、子どもは自らの発達課題を解決できずに成長してきている。

2 「人との関わり」に関する意識調査

(1) 意識調査の方法

[調査の目的]：児童期は、人との関わり方を学び人と関わることで社会的スキルを身につける時期である。関わり方を学ぶ学級の仲間や友人との関係を調査し、どこに原因があるか、どの点が問題になっているかなど不適応発生の原因を明らかにする。

[調査の時期]：7月中旬

[調査の対象]：高島町立和田小学校 児童133名 (4~6年生)

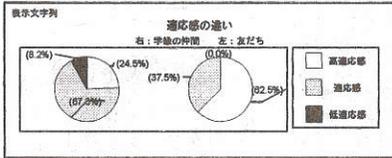
[調査の内容]：アンケートの種類・視点並びに調査項目

種類	調査項目		評価
	学級の仲間との関係 (アンケート1)	友だちとの関係 (アンケート2)	
ア 視点			4段階評価
自己主張	①から⑦	①から⑦	4 とても
受容	⑧から⑫	⑧から⑫	3 まあまあ
共感的理解	⑬⑭	⑬⑭	2 あまり
イ 友だちについて (アンケート3)	児童が求める友だち関係自由記述式		1 ぜんぜん

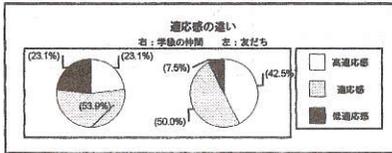
*友だちとはよく遊んだりよく話したりする相手のこと。

(2) 学級の仲間と友だちに関する適応感の比較

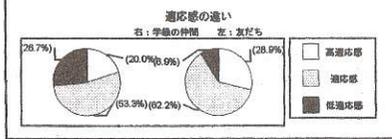
4年



5年



6年



適応感をどの程度持っているか。学年毎の違いはどうか
 適応感とは集団内の居心地の良さ 肯定的な答えの割合で把握
 *高適応感：自己主張ができ、相手からも良く受容されている
 *低適応感：自己主張できず相手からもあまり受容されていない

(ア) 4年生について

24.5%の児童が学級の仲間間で高適応感を抱いている。友だちとの関係では62.5%である。半数以上の児童が友だち関係で高い適応をしている。一方、友だちとの関係に中では低適応感を感じている児童は、一人もいない。

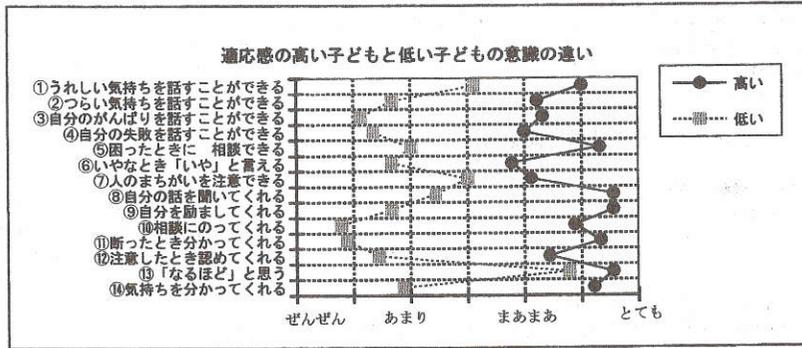
(イ) 5年と6年生について

学級の仲間との関係では、両学年共差は見られず同じ傾向を示している。友だち関係では、高適応感を感じている児童は6年生が15%程少ない。また低適応感5年生より少し多い。

(ウ) 友だちについて4年生には低適応感を感じている児童がいなかったが、5・6年では約8%いることが分かる。

(3) 適応感の高い児童と適応感の低い児童との比較

それぞれの学級から適応感の高い児童と低い児童を3名ずつ抽出し、意識の違いを把握した
 *高適応感を持っている児童：自己主張と受容の得点が高い児童。 *低適応感を持っている児童：自己主張と受容の得点が低い児童。



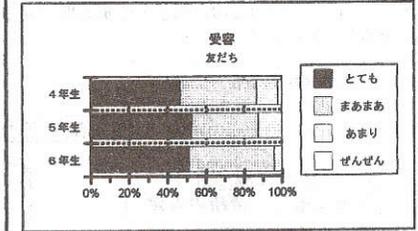
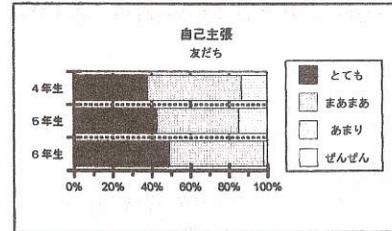
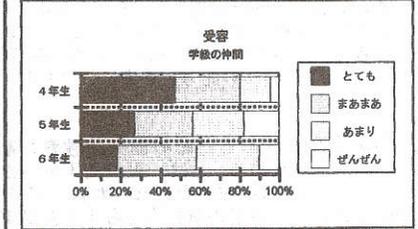
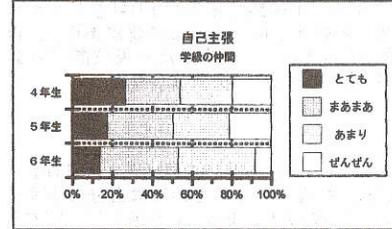
(ア) 適応感の高い児童は、低い児童に比べて「自己主張」「受容」「共感的理解」の3観点とも高い値である。高い児童と低い児童の差の大きい項目は、⑩「断ったとき分かってくれる」⑨「相談ののってくれる」⑨「自分を励ましてくれる」であり受容の項目である。

(イ) 自己主張の項目と受容の項目の比較では、高い児童は自己主張の項目より受容の項目が高く、低い児童は逆に自己主張の項目が高い。高い児童と低い児童は意識が逆転していることが分かる。

(ウ) 適応感の低い児童は共感的項目⑨「なるほどと思う」が非常に高い。共感性が高いということは、自分と比較して他者の良さに気づいていると言える一方、自分を否定的に見ている面がある。

(エ) 以上の結果から、適応感を持っている児童と持っていない児童の違いは、自己主張ができるかできないかであること、自分は他者から受け入れられているかどうかであること、高い適応感を持つためには、自分の考えを素直に言えること、受け入れられる関係であることが分かる。

(4) 自己主張と受容の関係



自己主張について
 学年が進むにつれて学級の仲間にとても児童が減ってきている。どの学年でも、「あまり」と感じている児童は40%で「ぜんぜん」の児童を含めると約半数である。友だち関係の中では、学年が進むにつれて自己主張性が高くなっている。児童が適応感を持つためには友だちの存在がある。

受容について
 自己主張と同様学年が進むにつれて、学級の仲間から受容されていないと感じている。しかも、4年生では「あまり」「ぜんぜん」の受容は20%であるが、5・6年生は40%を越えている。友だち関係では、自己主張と違い学年差は見られず50%の児童が自分を受け入れられていると感じている。

(5) 求める友だち像 《あなたは、どんな友だちがほしいですか》

【行動面の要求】

相談ののてくれる	18
気持ちを分かってくれる	10
失敗した時 話を聞いてくれる	10
困っているとき励ましてくれる	6
優しくしてくれる	5
悩みをうち明けられる	3
悩んだとき助けてくれる	2
心許せる	1
話が合う、気が合う	1
(計)	109

【性格面の要求】

楽しい	13
明るい	14
悪口を言わない	5
性格がよい	5
頭がよい	1
(計)	38

多くの児童は、相手の性格に対する要求より友だちの行動面（私に〇〇をしてくれる人）の要求が性格面の要求の3倍多くなっている。行動面の要求の中で多かったのは「話を聞いて～」「気持ちを～」「相談に～」であり自分の悩みを聞いてくれる人を特に要求している。性格面の要求では「明るい」「楽しい」が多い。

(6) 意識調査の考察

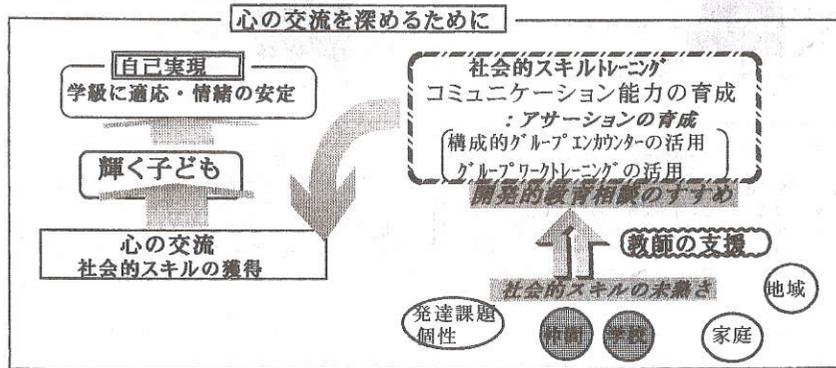
- (1) 学年が進むにつれて、自己主張できないと感じ、不適応感をもっている。
- (2) 低適応感の児童は、自己主張できず相手からも受容されていないと感じている。
- (3) 「つらい」「自分のがんばり」「失敗」「いや」など伝えられない。児童同士の関係を見ると、自分の考えや気持ちをうまく伝えられないで生活しているようだ。
- (4) 求める友だち像としては、自分を受け入れてくれる人、自分の言いたいことを聞いてくれる人などである。

意識調査の結果からも言えるように、児童は、思春期にさしかかり、自我が芽生え始め、他者を意識し、自己表現をためらっていることが分かる。実体験の不足により社会的スキルを身につける機会がなかったためである。まず直接体験する場を設ける必要がある。自分の考えや気持ちを素直に伝え、しかも相手を傷つけないように配慮した表現技能（社会的スキル：コミュニケーション能力）を身につければ、適応感を高められると考えられる。

3 心の交流を深めるための開発的教育相談

『心の交流を深める』とは、児童同士の心が通じ合い、互いの存在を認めることである。お互いが心を開いて語り合えば心の交流は図られない。そのためには自分の考えを素直に表現し、相手の気持ちを考えて表現することから始まる。語ることを通して、関わり方を体験し心を開き合うものである。児童の発達課題に応じて、性格・友人関係・学業などについて、よりよい方向に支援する開発的教育相談は、社会的スキルを高め、心の交流を図ると考えられる。

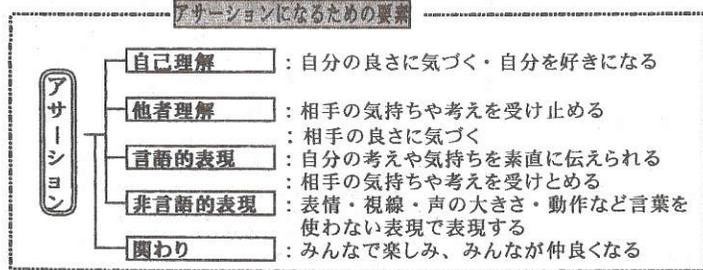
(1) 社会的スキルトレーニング



① コミュニケーション能力の育成：アサーションの育成

心の交流を図るには、児童同士が、自己表現に自信を持ちその方法を身につける確に表現できることである。つまりアサーションになることである。

アサーションとは、「自分の気持ちや考えなどが正直に、率直に、その場にふさわしい方法で表現し、相手も同じように発言することを奨励する表現」である（平木典子「アサーション・トレーニング」より）。つまり、自分も相手も大切にしたい表現方法である。従って、アサーションは人間関係を円滑にする。アサーションになるには、自己理解・他者理解・表現技能（言語的理解・非言語的理解）を身につけなければならない。



コミュニケーションとして、実際の生活場面で自分の考えや気持ちを相手に伝えるための表現方法として「言語的表現」「非言語的表現」の2種類があげられる。児童期においては以下の4種類の要素を的確に使うことで高められる。

言語的表現内容

種類	内容	言い方
要素①	考えを伝える	「こう思う」「～しよう」「してあげるね」
要素②	してほしいことを頼む	「仲間に入れて」「貸して」「教えて」
要素③	気持ちを伝える	「うれしい」「良かった」「つらい」「ごめんね」
要素④	意に反することを断る	「いやだ」「困る」「やりたくない」

② 構成的グループエンカウンター (SGE)・グループワークトレーニング (GWT) の活用

『SGE』とは、 *Encounter* と呼ばれる演習を体験することで、自己理解や他者理解などを促進し、相互の関係を深め、自分の在り方を振り返ることができる開発的教育相談の手法の一つである。『GWT』とは、グループ毎の共通体験から、今までの自分の姿に気づき、自分の行動や態度を変容させることをねらったトレーニングであり、与えられた課題を通して、グループの一員として役割を果たしていく中で、自己存在感や所属感をも得ることができる。

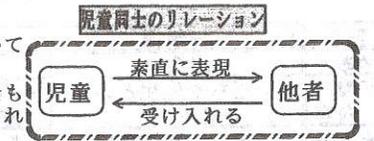
この方法を学校生活の中で活用することによって、自己理解や他者理解を促進し、適切な自己表現ができるようになる。

(2) 支え合う学級集団

『集団体験が個を育てる』 A.S.ニル

児童一人ひとり、互いに関わり合って初めて自分を知り相手を知り成長できる。

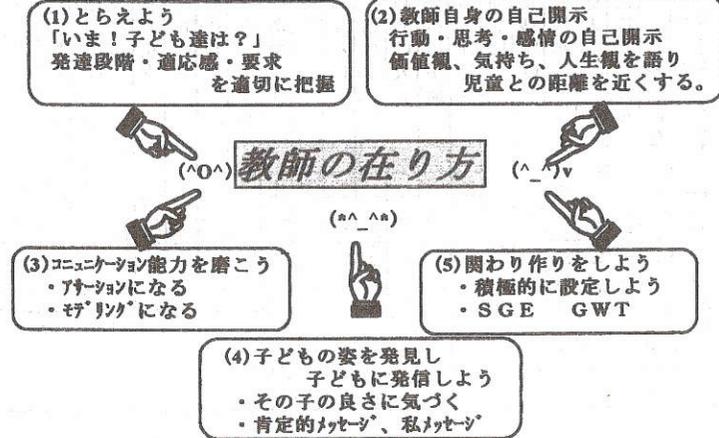
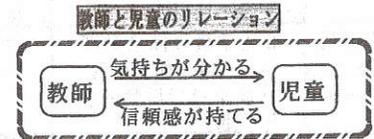
「脱：交流」「無：交流」と言われる現在、最も身近な学級集団の役割は大きい。互いに受容される仲間関係になったとき一人ひとりが輝く。



(3) 教師の在り方

児童一人ひとりが、学校生活の中できらきらと輝き心の交流を深めるには、児童同士はもちろん児童と教師のリレーションを深く信頼関係を築くことである。

信頼関係を築くためには【教師自身の磨き】が必要である。



4 開発的教育相談の実態

アサーションになるためには、「SGE」と「GWT」が効果的である。この2つの体験を学級活動や日常の教育活動に意図的・計画的に入れることによって心の交流が深まり自分らしく生活できるようになると考えられる。

【心の交流を深める自己表現年間計画】

「SGE」と「GWT」を活用するときに、どの「エッセイ」を選定するかが重要である。そこで、年間計画作成に関して、学期毎のねらい・学校行事・児童の発達段階を踏まえて作成した。適応感を高める「エッセイ」としては、『アサーション』になることを意図し、自己表現を高めゲーム性のある内容のものを選定し配列した。さらに学期のねらいを考慮し「出会い」「認め合い」「尊重し合い」の段階を踏まえて「エッセイ」を用いている。基本的には学級活動の時間やゆとりの時間を使用するが、各教科との関連も考え教科に時間に使用できるように計画した。学期を追って以下の「エッセイ」を実施すれば、児童の自己表現能力は高まり、心の交流が深まると考えられる。

★輝きタイム★年間計画(5・6年用)

期間	一学期	二学期	三学期
めあて	出会い	認め合い	尊重し合い
支援内容	・友だちや先生とのレーションを作る	・めあてにむかひ達成感を味わせる	・出会いと別れの意味を理解させる
子ども像	・自分の良い所に気づく ・相手のことを知る ・自分の居場所づくり	・考えや気持ちの表現 ・コミュニケーションの活性化 ・友だちを受け止める	・自分を好きになる ・アサーティブな子ども ・集団に適応(所属感)
手だて「エッセイ」の内容	・個と学級集団活動関係 ・自己理解、他者理解 ・学級全員で活動でき、体を使う	・個と小集団活動関係 ・コミュニケーション能力を高める	・個と学級集団活動関係 ・信頼感が持てる ・感謝の気持ちになる
主なエクササイズ	私は○です いいとこみつけた 質問じゃけん	聖徳太子 共同絵画 無人島SOS	人間コビー 氷鬼・団結崩し 自分への手紙 ほめあげ大会 他己紹介 表情まわし どっち・こっち 人間あやとり 新・なぞの宝島 頑張り賞あげよつと 十年後の私 別れの花束 私は私 ドラえもんになろう フューマンチエアー
教科内	国	図	体
自己理解	○	○	○
他者理解	○	○	○
言語的	○	○	○
非言語	○	○	○
関わり	○	○	○
ミニ「エッセイ」	・私の好きな○○ ・お誕生日はいつ? ・何でもバスケット ・検校ゲーム	・鉛筆インタビュー ・どっちがいい? ・目かくしジョギング ・一番好きな○○	・サイコロトーキング ・ブラインドウォーク

【5年生の自己表現年間計画】きらきら5年

エッセイ 難	ねらい	活動内容	振り返りの観点
1 いいところ 見つけた (自己理解) 氷鬼 (関わり)	○友だちの良い所に気づく。 ○友だちが見つけた自分の良さを知り、受け入れられる事の喜びを知る。 ・思い切って友だちと活動する。	○友だちの良い所を探しカード(絵)書き、友だちの背中にはる。 ○背中にはったカードを見て合う。	○友だちの良い所・自分の良い所を見て、感想を言う。
2 聖徳太子 (他者理解) (言語的) 要素①	○一人ではできないことも何人かで協力すればできる事を知る。	○一つのグループが前に出て、一つの単語の音を一人数分担し一斉に大きな声で言う。 ○それぞれの音を合わせた言葉を発表する	○みんなに分かるように発表できた。(要素①) ○グループの話し合い方。 ○グループでどう協力をしたか、その時の気持ちを話す。
3 なぞの宝島 (言語的) 要素②	○自分が持っている情報を正確に伝える。 ○正しく聴く事の重要性に気づく。 ○情報のまとめる時協力の大切さを知る。	○「白地図」とグループへの「指示書」を配り、内容を読み上げる	○分かり易く読み上げる。(要素②) ○友だちの情報の聞き方 ○グループで活動した気持ちを話す。
4 表情まわしまねっこまわし (非言語的) 人間あやとり (関わり)	○言葉を使わないでのコミュニケーションを体験する。 ○表情や動作豊かに表現し合う楽しさを知り、親近感を得る。 ○集団内(小グループ)で声を掛け合う大切さを知る	○円に並び、リーダーの表情や動作を真似する。 ○真似した表情や動作を隣の人に伝える。 ○目を閉じて違う人同士握手し、ほめていく。	○色々な表情や動作を表現(要素③) ○表情や動作を一緒にした事について、今の気持ちを話す。 ○輪がほどけた時の感動を話す。
5 ドラえもん になろう (言語的) 要素④	○自分の考えをはっきり言うとともに、相手の気持ちを考えた断り方をする。	○「断る」場面で3種類の表現方法を知る。 <場面1> 横入れする役と断る役 水道の所に並んでいる所に横入れする <場面2> 石を投げようと誘う役と断る役 <場面3> 頼む役と断る役 中間タイムにサッカーをしよう頼む	○相手に嫌な思いをさせないで、はっきりと断ったり頼んだりする。(要素④) ○断ったり頼んだりした表現を振り返る。 ○のびた、ジャパン、しずかちゃんのそれぞれの役の性格を通して、適切な表現方法を知る。
6 言葉の贈り物 (言語的) (関わり) フューマンチエアー (関わり)	○友だちと助け合い、信頼し合って、友情を深めていこうとする心情を育てる。 ○自分は一人の人を支え、自分は他の人に支えられている。	○道徳資料「言葉のおくりもの」を読んで、主人公の気持ちを話し合う。 ○友だちの良い所好きな所をカードに書く。	○感じたことを出しながらかの友だち関係についての意欲づけする。 ○感じたままを話す。

V 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 本来社会は、人との関わり方に関する様々なスキルを身につける所であった。不適応児童の発生は、社会の変化によって解決するはずの発達課題を解決せずに成長してきたために起こったものである。学校は、様々なスキルを学習できる可能性を持つ所であり、その機会を設定できる唯一条件の整っている場である。そんな意味で、今、学校に求められている役割は大きい。
- (2) 成人として社会に適応し、生き生きと生活できるようになるには、児童期の期間をどう過ごしてきたかが大きな問題となる。児童期は、社会に適応するために必要な人との関わり方を身につける時期である。教師は、児童期の発達課題を適切にとらえて、児童一人ひとりの発達を促す。
- (3) 意識調査を作成したことによって、高学年の仲間関係の実態と問題点を明らかにできた。高学年では他者を意識し自己表現できなくなる。適切な自己表現をできるかできないかによって、友だちになれる・仲間関係を結べるかにつながってくる。
- (4) 心の交流を図るためには、心を開き合うことが求められる。子ども達は、コミュニケーションを成立させることで、仲間関係を築く。適切な自己表現によって互いに心を開き合うものである。児童が、アサーションになるためのスキルの訓練と、心と心のふれあいを体験し温かい人間関係を築く構成的グループエンカウンター並びにグループワークトレーニングの活動を多く体験することによって、適切な自己表現ができ交流が深まると思われる。
- (5) 教師は、仲間関係づくりの技術を身につけ、児童同士の接着剤役になることが大切である。そのためには、学級集団が心温まれるように教師自身の人間性を磨き続ける必要がある。それが、不適応発生の予防につながると言える。

2 今後の課題

- (1) 作成した自己表現年間計画を実施しながら検討し、有効な活用法を模索していく。
- (2) 小学校高学年を対象とした自己表現年間計画を開発したが、低学年や中学年児童向けのプログラムの開発し、系統立てた支援を探っていく。
- (3) 今の児童にとって、様々なスキル学習の体験は意図的に仕組むことは必要不可欠である。今後も児童の問題点を明らかにしながら、欠けている社会的スキルを把握し、他領域・他の教科など教育活動全般での取り組みの中で児童の発達を促していく。

話し合い活動を通して、 個の力を高める学習活動の工夫

最上町立月楯小学校
教諭 柏倉 常彦

目次

I 主題設定の理由	
II 研究主題のとらえ方	1
III 研究のねらい	1
IV 研究の内容	1
1 「話し合い」の学習を行うことの意義	1
2 「話し合い」活動の在り方	2
(1) 「話すこと・聞くこと」指導内容の系統化	
(2) 話し合い活動における四段階設定	
(3) 音声言語の取り立て指導	
3 個の力を高める学習活動の展開	3
(1) 学習材を読むことの必要性を高めさせる	
(2) 一人ひとりに確かな考えを持たせる	
(3) 一人ひとりの読みを深めるための話し合い活動	
4 「話し合い活動」を中核に据えた学習の展開計画	4
V 授業の実態と考察	8
1 第一次の学習活動	8
2 第二次の学習活動	8
(1) 一人学びの場の設定	
(2) 読みを深めるための話し合い活動	
VI 研究のまとめ	9
1 成果	9
2 課題	9

主な参考文献・資料

個を生かす国語科授業論の開発 上・下	小森 茂著	明治図書	1997
子どものよさを生かす国語科授業の展開	小森 茂著	東洋館出版社	1996
国語科の実践動向 音声言語の学習指導と評価	小森 茂編著	国土社	1995
言語技術としての国語科	市毛勝雄著	明治図書	1998
新学力観に立つ話し言葉の授業作り	瀬川榮志著	明治図書	1994
コミュニケーション能力の育成を目指した話し言葉の指導	植松雅美 藤田慶三編著	東洋館出版	1996
話し合うことの指導	高橋俊三編著	明治図書	1994
国語教育別冊 コミュニケーション能力を育てるための具体的提案		明治図書	1998
小学校学習指導要領 (現行・新)		文部省	

I 主題設定の理由

子どもたち一人ひとりが、自分の興味関心あることにじっくりと取り組んでいきながら、学習内容の深まりや広がり求めていくことは、これからの教育に必要な資質である。

しかし、ある物事について様々な視点から比較検討したり、新たな考えを生み出したりするという視点で考えると、個人の活動だけでは十分な「学び」は成立しがたいと考える。学級集団の中で友達のいろいろな考えに触れ、新たな視点を持ちながら課題を再生しつつ取り組んでいく中でこそ、個の考えの深まりや広がりが期待できる。

つまり、一人ひとりが様々な考えを発信・受信しながら自己の考えを確固たるものにしていく場として、「話し合い活動」を仕組んでいくことが有効であると考え、本主題を設定した。

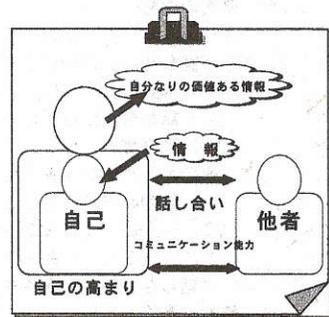
II 研究主題のとらえ方

「話し合い活動」が行われれば、価値観の違い、友達の考えに触れて自分の意見と比較したり、友達同士の話し合いの内容を客観的に受け止め、自分の考えに生かしたりすることもできる。

つまり、様々な価値観の中で自分の考えを深めたり広げたり、時には、新たな気づき・発見をしたりすることができる。

学習前の「個」が、話し合い活動を通して変容する。変容した「個」は、学習前よりもより考えの深まりや広がりを身につけている。

そこに「個の高まり」を見取ることができるであろう。



III 研究のねらい

- (1) 国語科（理解領域）の学習において、話し合い活動を行うことの意義を明らかにするとともに、話し合い活動の在り方について探る。
- (2) 個の力を高める学習活動の展開と教師の支援について明らかにする。
- (3) 子どもの感想や思いを生かし、話し合い活動を中核に据えた授業作りをする。

IV 研究の内容

1 「話し合い」の学習指導を行うことの意義

社会の変化に主体的に対応できる人間の育成を図る教育の必要性が叫ばれ、国語科の学習指導においては、生きて働く言葉の学習が一層重視されるようになった。

相手意識・目的意識・論理的思考力・音声言語による表現力などの国語の力を必要とし、それらの力を実の場面で高めていこうとする話し合いの学習は、この学力観に込められるものであると言える。

また、教育課程審議会答申においては、これまで以上に「コミュニケーション能力」の育成が重要視されている。言葉を活用することによって、正確な意思の伝達を行い、お互いの考え方や感じ方の違いを交換し合ったり、認め合ったりすることができる能力を今後ますます身につけさせ、高めさせていかなければならない。

そのような能力育成の中心的活動場面として機能するのが「話し合いの場」である。

2 話し合い活動の在り方

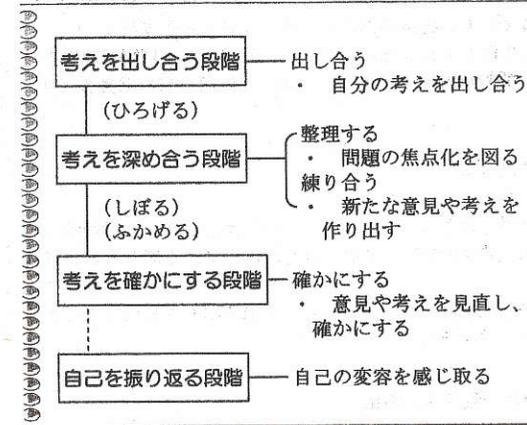
(1) 「話すこと・聞くこと」指導内容の系統化を図る

話し合い活動を通して、児童が他の児童と学び合うためには、「相手の話を受け入れ（聞く力）、自分の考えを深めながら（思考力）、話題に沿って話す（話す力）ことができる力」を育てていかなければならない。

「話す・聞く」は、表裏一体の関係である。聞き合い、話し合いをしながら、話すときに自分が気をつけなければならない内容は、相手の話を聞き取る時の内容でもあることを児童に常に意識させて指導していくことが「話す・聞く」の関連を図る指導の在り方となる。

また、平成14年度より実施される次期学習指導要領においては、各学年の目標及び内容に「話し合う」ことの指導内容が示されており、今後系統立てて指導していくことがより必要なこととなる。

(2) 話し合い活動における四段階設定



話し合い活動において、左の図のように段階をふんでいくことにより、児童がお互いのよさに気づき、認め合う中で、みんなで新たな考えを作り出せるようになる。

それぞれの時間で話し合ったことをもとにして、何が分かったのか、何が分からないのか、発言した児童の意見と比べて、自分の考えがどのように変わったのか等を振り返らせる（自己評価の場）ことも大切である。

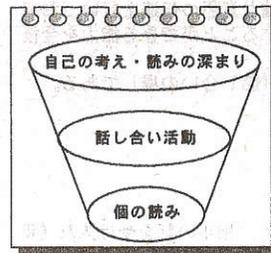
他の児童の意見や考えを聞き、自分の考えがどのように深まったのか、感じ取れるようにしていきたい。

(3) 音声言語の取り立て指導

主に、スピーチや話し合いの技能面を取り立てて指導し、児童一人ひとりの音声言語表現による技能育成を図る。

他教科、他領域においても、話し合い活動は盛んに行われるが、表現の仕方や話し合いの仕方を学ぶのは国語科の果たす役目である。指導にあたっては、技能を教え込むということではなく、楽しみながら学習できるような内容を取り入れて学習内容を構成していくことを心がけたい。

また、国語科の学習の中で身につけた音声言語表現力を生活の中で生かしていくために、音声言語による表現活動の場を設定していくことも効果的と思われる。



3 個の力を高める学習活動の展開

学習者が主体的に学習に取り組むプランを次のように考えた。

- ・ 個人で課題解決学習を行う。
- ・ 個人が読み取ったことをもとに全体で読みを分かち合う。
- ・ 自己の読みの変容や深化を振り返り、個の作品世界を創り上げる。

一人ひとりが読み取ったことをもとにして、話し合い活動を行うことにより、個々の読みが高まり、広がり、深まって変容していく。

(1) 学習材を読むことの必要性を高めさせる

学習材を読むことの必要性を高めるために、初発の感想をもとに学習課題を設定する。初めて学習材にふれたとき、一読者でもある児童の内には、様々な読みが生まれる。

「なぜ?」といった疑問や「もっと詳しく知りたい」といった意識をもとに学習課題を作り、児童の意欲を引き起こす。この活動を通して、児童は、再び学習材を読む必要性(目的意識)を持つことになる。

(2) 一人ひとりに確かな考えを持たせる

話し合い活動を行う上では、自分の考えを持っていることが最低条件となる。学習課程において、「一人学び」の場を設定し、各自の考えを確かなものにしてから話し合いに進むようにする。

一人ひとりが自分の考え(個の読み)を持つことができるように支援し、自信と意欲を持って「話し合い」に参加できるようにさせる。

(3) 一人ひとりの読みを深めるための話し合い活動

児童一人の個性的な読みを集団の中で話し合わせることによって、より深まりや高まりのある読みが形成されていく。

児童の読みの中には、同じ教材文、同じ叙述を拠点としていても、そこから感じ取る思いや考えには違った受け取り方が出てくる。「どこがどう違うのか」「なぜそう感じた(考えた)のか」「その考えがうかんだ根拠はどこか」等を、自分の考えと友達のを比べて、叙述にたち戻って再考させたりすることが大切である。

一人の考えでは一面的でしかなかったものが、他の児童と話し合うことによって、多面的なものとなる。話し合い活動を通して感じたこと、学び得たことは、以後の学習において生きて働く力となるであろう。

4 「話し合い活動」を中核に据えた学習の展開計画

(1) 対象 最上町立月橋小学校第3学年 男子2名、女子7名 計9名

(2) 単元名 感想を大切に 「モチモチの木」

(3) 単元目標

- ① 登場人物の気持ちを表す表現などに着目して読み、課題を解決するために意欲的に発表したり、話し合ったりしようとする。
- ② 登場人物の心情について、読み取ったり想像したりしたことをもとに、他の人の考えと比べながら、自分の考えを持って話し合うことができる。
- ③ 物語の展開に即して、登場人物の言動とそれに対する心情の動きを読み味わい、主題をとらえることができる。
- ④ 優れた表現や心に残った言葉を視写したりして、いろいろな表現の仕方があることを理解する。

(4) 研究主題との関連

① 単元の位置づけ

本単元は、理解を深める上での音声言語による活動の効果を重視する立場から、一人ひとりが読み取ったことを話し、つきあわせることによって、初めの個の読みが追究され、高まることをねらいとしている。

本単元の学習を通して、「自分の読みと友達の読みとの相違点・共通点を見つけて、聞き・話す」ことができる力を育てていく。そうした活動を繰り返すことによって、物語を読み取る能力の伸張を図ることができると思う。

② 単元の構想

「話し合い」とは、児童と児童の意見交換であり、単なる教師との一問一答からの脱却が必要である。では、どうすれば児童と児童が向き合うか。それは、未熟な部分を持ちながらも人に伝えたい「考え」があり、それを伝え合っていく課程で、自分一人では発見できなかった気づきが生まれてくるのではないかと。

児童一人ひとりの個性や体験の違いから、一人ひとりの読みは、それぞれ違うものとなる。個々の読みを互いに交流させることによって、物語の世界がさらに豊かな、奥行きのあるものになると思われる。

そのために、まず、対話活動やグループ活動を中心として、相手意識・目的意識を持って話し、聞く態度を身につけさせていくことが大切である。その中で、自分の考えの根拠となる言葉や文を明らかにしながら主張したり、友達の考えを聞き合ったりしながら、交流させていきたい。

(5) 指導にあたって

① 児童観

物語を好む児童が多く、これまでも「つり橋わたれ」や「三年とうげ」「ちいちゃんのかげおくり」の学習において、視写・書き込み・音読を通して、登場人物の心の動きや場面の情景を想像しながら内容を読み取る学習に意欲的に取り組んできた。

「話し合い活動」については、これまでも、国語科の学習に限らず、その機会を持

つようにし、「話す」という行為が、授業に主体的に関わるきっかけになると説いてきた。しかし、少人数であるが故、人間関係が序列化・固定化しやすく、どうしても単なる発表のし合いで終わってしまったり、発言や挙手が一部の児童にだけ偏ってしまったりという現状で、豊かで広がりのある思考がなかなか生まれにくい。

みんなが参加できるという生徒指導的な面も考慮しながら、児童一人ひとりが発表し、聞き合い、自分が読み取ったことを確かめ、修正し、補充していきけるような話し合い活動を展開していきたい。また、そのような活動を通して、コミュニケーション能力の基礎も増っていく。

② 教材観

「モチモチの木」は、一人では小便にも行くことができないほど億病な少年豆太が、「勇気のある子ども」だけが見ることでできるという、モチモチの木に灯がともっている光景を見ることができたという物語である。

腹痛で苦しむじさまを救うために、豆太は、一人で夜道を走り、医者様を呼びに行く。普段の豆太からは、考えられない行動へと駆り立てたものは、じさまを思う「やさしさ」であり、本教材の主題も、「人間、やさしささえあれば、やらなきやねえことは、きっとやるものだ。」というじさまの言葉に象徴されている。

三年生の児童にとって、自分にも似たような経験のある豆太の心の動きに共感したり、自分と比べてたりしながら読み深めていくことができるものと思われる。豆太の言動から、時には思いがけない勇気ある行動を引き起こす人間の優しさ・思いやりについて考えることは、これからの生き方にもつながるであろう。

自分の考えをまとめたり、友達と話し合ったりする活動を通して、それらの価値に迫っていききたい。

(6) 教師の関わり

学習の中では、話し合いを効果的に取り入れ、登場人物の言動に対する自分の考えを深めることが出来るようにしたい。そのための手だてとして、以下の点を考慮する。

① 一人ひとりの読みを深めさせる工夫をする。

話し合いに参加するためには、自分の読み、自分の考えを持たなければならず、内容の読み取りが十分に行われることが前提となる。「一人学び」の場では、叙述に即して読みを深めることができるよう、個に応じた指導支援を心がけていく。

② 話す・聞く活動の場を工夫する。

話し合い活動で大切なことは、相手意識・目的意識を持って話したり聞いたりすることである。しかし、本学級の児童の実態からも、多人数での話し合い活動では、一人ひとりがその意識を持って参加することが難しい。そこで、一対一の対話形式での話し合いや三人組によるグループでの話し合い活動を多く取り入れていく。

自分の考えを相手に伝え、相手の考えを聞き意見を述べるといふ、相手意識を持った話し合い活動の場を保障し、全体での話し合いへの参加へと意欲を高めていく。

③ 考えを振り返る場、まとめる場を設ける。

自分の読み取ったこと、友達の読み取ったことなどを出し合い、話し合った結果は、一人ひとりの学習の成果として位置づけられる。

話し合い活動を行ったことによって、何が分かったのか、友達の考えや意見と対比して、自分の考えがどのように変わった(深まった)のかを必ずまとめさせていく。自己評価なども取り入れながら、自分自身の変容を感じ取れるようにしていくことが大切である。

(7) 単元指導計画 総時数 11 時間

時	子どもたちの思いや問い	学習活動(□)	教師の働きかけ(◇) 評価(☆)
初発の感想をもとにして、学習の見通しを持つ			
1	<ul style="list-style-type: none"> どんなお話かな？ 読んだことがあるよ。 	<input type="checkbox"/> 全文を読み、心に残ったことを中心に感想を持つ。	◇ 心に残った場面や豆太、じさまについて思ったこと、不思議だ、勉強してみたいことなどを書くように促す。 ☆ 物語の大筋をつかみ、初発の感想を持つことができたか。
2	<ul style="list-style-type: none"> みんなはどんな感想を持ったのかな。知りたいな。比べてみたいな。 	<input type="checkbox"/> 初発の感想を交流し合い、感想をもとに学習計画をたてる。	◇ 感想や課題の集中している場面を確認しながら、読みの計画を立てさせる。 ☆ 読みの多様さに気づき、学習課題を持つことができたか。
「モチモチの木」の内容を読み深める どうしてモチモチの木に灯がついたのか(単元課題)			
3	<ul style="list-style-type: none"> 豆太ってどんな子どもなんだろう。 勇気のある子？ 弱虫な子？ やさしい子？ 	<input type="checkbox"/> 「豆太」について書かれた叙述をおさえ、人物像をイメージする。	◇ 叙述からイメージできることを導く。 ☆ 文中の言葉や表現を手がかりにしながら、豆太に対するイメージ像を持つことができたか。
	<ul style="list-style-type: none"> 一人でせつちんにも行けないなんて・・・ 昼間はいばっているくせに、夜になるとおくびようになるんだな。 山の神様のお祭りを本当は見たいんだよ。 豆太の気持ちが何となく分かるよ。 	 	◇ 比喩表現、擬態語、内心語等の表現と人物の気持ちや様子とを結び付けて考えさせていく。
4		<input type="checkbox"/> 課題解決につながる叙述をおさえ、自分の考えを持つ。	◇ 読みの視点、話し合いの視点を明確にし、深まり・広がりのある読みができるように個に応じた指導支援を行う。
5	<ul style="list-style-type: none"> じさまは、豆太のことをどう思っているのかな？ 	<input type="checkbox"/> 課題について自分の考えや思いを話し合う。	◇ 話し合いに慣れさせるために、ペア学習やグループ交流なども考慮しながら、友達のよさの発見と相互交流を図る。
6	<ul style="list-style-type: none"> 泣き泣き医者様をよびに行った豆太は、どんな気持ちだったのかな？ 	<input type="checkbox"/> 話し合いをもとに想像を広げたり、考えを見直したりする。	

・ 勇気を出して、夜一人で医者様をよびに行くことができたのに、またしよんべんのときじさまを起こしたのかな？



- まとめの方法を自己選択し、自分の思いや考えを広げる。
- 自己評価する。

◇ 考えをまとめる場面では、まとめ方の多様化を図り、自己選択させていく。(吹き出し・手紙・日記・感想文・音読等)

◇ 評価カードの工夫をする。

☆ 友達の発表、発言から、自分が気づけなかった根拠を見つけたりしながら、自分の考えを深めることができたか。

☆ 課題解決につながる叙述をおさえることができたか。また、叙述相互の関連から、人物の気持ちや様子を読み深めることができたか。



7
・ どうしてモチモチの木に灯がついたのかな？

- 豆太が、灯のついたモチモチの木を見ることができたわけについて話し合い、感想をまとめる。



◇ 前時までの学習をもとにしながら、単元全体の課題について話し合わせ、主題に迫らせていく。

◇ 「やさしさ」が、豆太の勇気の源であることを捉えさせたい。

☆ 話し合いを通して読み深め、主題に迫ることができたか。

「モチモチの木」で身につけた学び方を生かして、斎藤隆介の他の作品を読む。

8
9
・ 他の本も読んでみたい。
・ 図書館に斎藤隆介さんの本があるよ。

- 斎藤隆介の他の作品を読み、読み取ったことを様々な方法で表現する。

◇ 中央公民館の図書室とも連絡を取りながら、できるだけ多くの作品を用意する。

☆ 意欲的に読書に取り組んでいるか。

10
・ 自分のことよりも他の人のことを考えて行動しているよ。

- 斎藤隆介の作品を読み比べ、人間の持っているやさしさ、思いやりについて話し合う。

◇ 「優しい心」「人のためにつくす心」「がまんする心」などを感じ取らせた上で、斎藤隆介さんが読み手に伝えたいことについて考えさせる。

☆ 感想を持つことができたか。

11

- 新出漢字の練習をする。

V 授業の実際と考察

1 第一次の学習活動

教材文と出会い、感想や疑問をもとに教材文への関心を持つ段階である。「どうしてモチモチの木に灯がついたのか」「医者様をよびに行くとき、豆太はどんな気持ちだったのかなあ」「真夜中に一人で医者様をよびに走ったのですごい」などの疑問や感想が多かった。

学習者の抱いた疑問や課題を場面や観点ごとに分類整理したものを配布し、その表を活用しながら学習課題の設定、課題解決方法の明確化を図った。

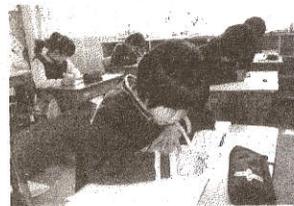
また、想像豊かに感想をふくらませることができるよう、ブレインストーミングを行った。自由な雰囲気や友達の発表を聞くことにより、自分の感想をふくらませながら発表することができた。

この交流活動を行ったことにより、感想の量的、質的な高まりが見られた。



2 第二次の学習活動

(1) 一人学びの場の設定



学習課題に基づいて読み深めていく過程(一人学び)においては、学習者は、自分なりの読みを形成していく。この活動は、学習者である子どもたち一人ひとりの主体性が発揮される反面、恣意的な読みに終わる可能性もある。

そこで、語句や文から想像豊かに読み取ることができるよう、書き込みを自由に行える学習プリントを活用した。一人ひとりの子どもが、言葉を大切にしながら姿勢で学習に取り組めるよう、個々に応じた指導支援を行うことが大切である。

(2) 読みを深めるための話し合い活動

初読の段階では不確かであった個々の読みが、「より確かな広がりを持った読み」へと変容するためには、再度自分の考えを見つめ直す必要がある。他の読みと出会い、話し合う中で、個々の読みは「より豊かな、より深い、より意義深い読み」へと発展していった。

また、自他の読みのずれや重なりは、話し合いの必要性を学習者自身に感じ取らせることにもつながった。「相互確認・相互補足・相互誘発・相互葛藤」という話し合いの機能が作用し、集団としての読みが高まり、同時に個々の読みを高めることができた。

A児； 豆太は、おくびょうな子だと思っていたけど、じさまが死んでしまうと思ったときに、とうげをたった一人で医者様をよびに行ったのですごいと思いました。本当は、勇気のある子どもだと思います。

B児； もし、何でもなかったら行けなかったと思います。「大好きなじさまの死んでしまう方がもったいなかった」とあるので、そのときは、じさまを助けたくて必死だったから、真夜中でも一人で走って行けたんだと思います。

C児； 好きなじさまのためだから勇気を出せたんだと思うけど、その時の豆太は何にも考えられなかったと思う。

D児； 「人間、やさしささえあれば・・・」とじさまが言っているの、豆太にはそういういいところがあるので、じさまはとってもよるこんでいます。好きなじさまのために勇気を出せるやさしさがあるので、モチモチの木に灯がついてるところを見ることができたと思います。

E児； わたしは、Dさんの発表を聞いて、豆太にはやさしい気持ちがあるから勇気のある行動ができたんだなあと思いました。じさまは、やさしければ、勇気も気持ちいい出てくると言いたかったと思いました。(学習後のまとめより)



VI 研究のまとめ

1 成果

- (1) 話し合い活動の主を成すものは、当然、音声言語によるものである。しかし、話し合う媒体に文字言語を効果的に使うことも大切である。今回の実践において、音声言語による話し合い活動の後、友達への意見や感想を書くという活動も組み入れた。そこには、友達の考えに対する意見や賞賛の声があり、友達の読みのよさを自分の読みに生かすことができていた。
- (2) ペア学習やグループ学習を随時取り入れて自由な雰囲気では話し合わせたことにより、全体での話し合いに活力が見られた。また、子どもたちはいろんな見方・考え方があることに気づき、それらを受け入れた上で自分なりの思考を高めようとする意識が見受けられた。
- (3) 相手意識や目的意識、論理的思考力、音声言語による表現力などの総合的な国語の力を必要とする話し合いの学習を仕組むことで、生きて働く国語の力を子どもたち一人ひとりにつけさせていくことが可能である。今後も実践を重ねていきたい。

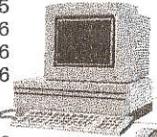
2 課題

- (1) 人物の気持ちや場面の様子を想像豊かに表現できない子ども、発言するときの声が小さくて聞き取りにくい子ども等、子どもは様々である。「個に応じた指導支援」とは言っても、一人ひとりの力をより高めていくための方策を今後も探っていく必要がある。
- (2) 理解があつて、それが表現へと発展する。表現することによって理解が高まる。理解と表現は相互に関連し合っている。話す内容がさらに確かで豊かになるように基礎的な力をつけていくためには、両者をどう関連づけていくことがより有効なのか追究していく。

商業科目におけるインターネットを活用した授業展開の考察

山形県立谷地高等学校
教諭 古城 ゆかり

目次	
I 主題設定の理由	1
II 研究の仮説	1
III 研究の経過	1
IV 研究の内容	
1 アンケートによる調査分析の結果から	
(1) 環境と整備	1
(2) インターネットの必要性和有効性	2
(3) インターネットと授業との関連性	2
(4) インターネットの利用上のマナー	3
(5) 情報検索の方法	3
2 インターネットを利用しての実践研究	
(1) 利用方法と教材・素材の収集	4
(2) インターネットと授業との関係	5
(3) インターネットを利用した学習の手順	5
(4) インターネットを利用するための「流通経済」の年間指導計画	6
(5) インターネットを利用した学習指導案	6
(6) インターネットを利用した授業における具体的作業	6
V 研究のまとめ	
1 研究の成果	6
2 今後の課題	6
VI 資料	7 8 9



主な参考文献・資料等

高等学校学習指導要領解説 商業編	文部省	1989年
情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて	文部省	1996年
NEW教育とコンピュータ	学研	1997-98年
産業教育	文部省職業教育課編	1998年
新しいメディアに対応した教科書・教材に関する調査研究	財団法人教科書研究センター	1998年
hint 実践事例アイデア集 No.5	財団法人日本教育工学会	1997年
インターネットで融合する次世代ネットワーク	共立出版	1998年
学校教育におけるコンピュータの活用	明治図書	1997年
山形県情報教育推進計画	山形県教育委員会	1998年
教育と情報	文部省大臣官房調査統計企画課編集	1998年
学習情報研究	(財)学習ソフトウェア情報研究センター	1998年
コンピュータ活用実践読本	教育開発研究所	1998年
教育情報ネットワークの効果的な活用と運用について	宮城県教育研修センター	1997年
学校教育におけるコンピュータの活用	佐藤 隆博著	1997年
図解で知るパソコンLANのしくみ	技術評論社	1995年
図解で知るインターネットのしくみ	技術評論社	1995年

I 主題設定の理由

近年の産業構造や就業構造などの変化もさることながら、情報化が急速に進み社会は大きな変化を見せはじめている。そこで、これらの変化に柔軟に対応できる生徒を育てるために、専門性の基礎的・基本的内容に重点を置き指導していかなければならないと考える。また、商業科に入学してくる生徒の能力や適性、興味・関心、進路希望等の多様な実態を十分に把握し、生徒が自ら学び、考え、創意工夫することができる学習内容と授業内容の方法を探る必要があると考える。

以上のことを踏まえ、生徒が主体的に学習に取り組むことができ、理解しやすい授業を展開するため、分かりやすく、使いやすく、時代に即した教材や、新しい情報収集の手段の一つとしてインターネットの活用方法から考察することにする。

II 研究の仮説

インターネットを利用することにより、生徒は多くの情報特に商業関連情報の中から、自分の必要な情報を探し出す能力や判断力、その情報を活用する力を付けることができる。また、その情報を効果的に活用することによって、学習活動の中から、商業事象をより具体的に身近なものとして理解する能力を高め、企業の活動や消費者へのコミュニケーションの重要性を理解する態度を育てることができる。商業関連情報及び情報機器を活用できる力と合わせて、インターネットを活用することが、生徒に情報を積極的に発信できるようになるための基本的な資質や能力の向上に結び付くと考える。

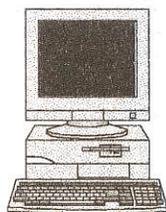
III 研究の経過

1 インターネットを利用するためのアンケートによる調査・分析

- (1) 県内の専門高校、商業関連学科を持つ11校の学校・商業科関連教員を対象に、「情報教育における機器の設備状況・意識調査のアンケート」を実施する
- (2) 谷地高校（商業科）・天童高校（商業科）・南陽高校（情報経済科）の1～3年の在校生合計604名を対象に、「インターネットに関するアンケート」を実施する

2 インターネットを利用した実践研究

- (1) 利用方法と教材・素材の収集
- (2) インターネットと学習との関係
- (3) インターネットを利用した学習の手順
- (4) インターネットを利用するための「流通経済」年間指導計画案
- (5) インターネットを利用した学習指導案
- (6) インターネットを利用した授業における生徒の具体的作業



IV 研究の内容

1 アンケートによる調査・分析の結果から

(1) 環境と整備

インターネットの利用については、いろいろな課題があり、インターネットを使用できる状況なのだが、十分使用なされていなかったり、環境が十分整っていなかったりという状況が考えられる。そこで、県内の商業関連学科を持つ専門高校11校の各学校における情報機器の設備状況のアンケートを実施し、それを分析した結果、インターネットを利用して、クラス単位で授業できる環境が整っている学校は、僅か3校であった。また、クラス単位でインターネットを利用すると、次のような、課題や不安を抱えていることがうかがえる。

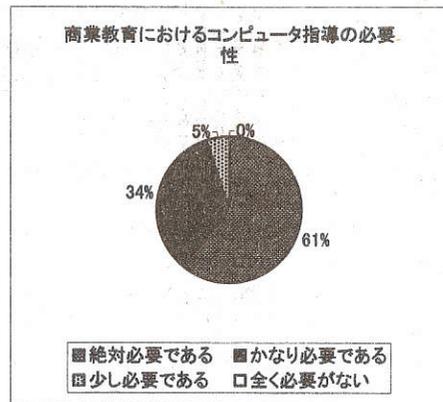
- ・ ハードやソフトの故障などでシステムが動かなくならないか
- ・ 利用者が増えると回線などの能力が大丈夫か
- ・ 予算措置

また、実際上の問題として、機器管理の教員不足、機器とソフトウェアの不足、回線の不足も同時にあげることができ、これらの整備や教員の研修等の充実がインターネット利用には不可欠である。

(2) インターネットの必要性和有効性

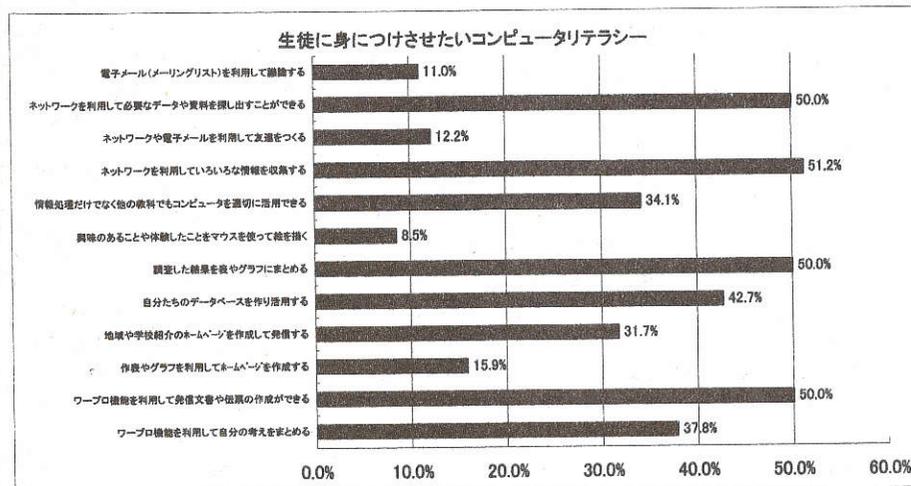
商業科関連教員を対象に「教育における意識調査のアンケート」を実施した結果、商業教育におけるコンピュータ指導の必要性については、「絶対必要（61.0%）」「かなり必要（34.1%）」「少し必要（4.9%）」「全く必要ない（0%）」という結果であった。この結果からも分かるように、商業科教員の情報教育に対する必要性の意識の高さがあらわれている。

有効性については、インターネットを経験した人数が83名中42名と全体の半数を越えており、その利用法を見てみると、「教材研究」と「授業（教科）の中で」利用している人が12名と授業との関連性が高いことも同時に見ることができる。



(3) インターネットと授業との関連性

教諭用のアンケートにおいて、コンピュータとインターネットを利用している場面を聞いたところ、上述のインターネットの経験を有する利用法と合わせて、主に、インターネットを利用している科目は、「プログラミング」「情報管理」「課題研究」「総合実践」「商業法規」等の偏った教科でのみの利用であった。インターネットの利用場面としては、「表現・創作」「内容理解」において利用していることが多く、その時の生徒の様子は、「楽しい」という回答が多かった。



また、生徒に身につけさせたいコンピュータリテラシーについての設問には、「ネットワークを利用して必要なデータや資料を探し出すことができる(50.0%)」「ネットワークを利用していろいろな情報を収集する(51.2%)」「調査した結果を表やグラフにまとめる(50.0%)」「ワープロ機能を利用して発信文書や伝票の作成ができる(50.0%)」となっており、これに加えて「自分たちのデータベースを作り活用する(42.7%)」という結果であった。この結果を見てもコンピュータ指導の必要性・有効性の高さを知ることができる。そして、既存の学習内容の中でも、情報活用能力やそれに伴う判断力、加工する力も付けさせていく必要があると考える。

(4) インターネットの利用上のマナー

インターネットを利用するにあたって、いろいろなマナーやエチケットが存在している。インターネットを利用する場合には、電子メール・データ送受信・ホームページの内容・著作権・個人情報・・・等、それぞれの場面で様々な状況を把握し、ネットワークを利用することが、大切になっていく。

当然、インターネットを授業に取り入れていく場合にも、パソコン上で使用するための操作や設定能力、インターネットの持つ意味や学校教育において利用する意義を私たち教師が十分把握する必要がある。生徒とは言え、インターネット上で交信したとたん、世界という広大なエリアの中で私たち利用者は、お互い対等な立場となっていることを理解しなければならない。生徒だからと言ってはおれず、大人と同等に近い責任感や社会性、そして何よりも適切な判断力が必要になってくることを同時に指導していかなければならない。

また、ネットワークによる社会も実社会と同様、当然わきまえていなければならないマナーやエチケットというものがたくさんあり、このルールは「**ネチケット**」と呼ばれ、きわめて大切なものになってくる。「ネチケット」と呼ばれるものは、下記のようなごく当たり前のことが多く、特に電子メールやデータ送受信、著作権や個人情報・・・等、その時の状況や場面で色々なケースをしっかりと踏まえてネットワークを利用していく必要があると思われる。

【ネチケットの基本】

- 他人の人格を尊重して人の嫌がることはしない
 - 相手を思いやる気持ちを持つ
 - ネットワークにつながった自分のコンピュータはしっかりと管理する
 - 自分の発信には責任を持つ
- など

(5) 情報検索の方法

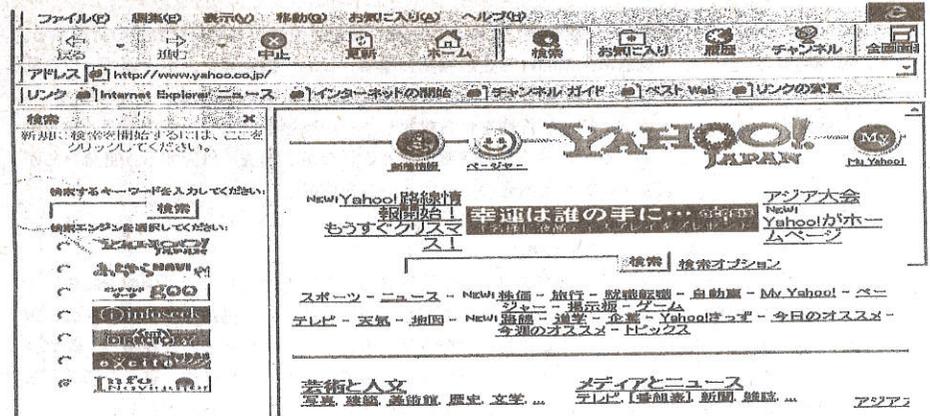
インターネットの利用法の多くは、電子メールと、次いで利用度の高いwwwいわゆるホームページがあげられる。このホームページは、これまでのパソコン通信と違い、画像や写真を使って自分できれいな情報を発信することができ、また、オープンなネットワークを使って、簡単に世界中へ情報を発信することができる。

この自分の知りたいホームページを探す手段として、「**検索エンジン**」(図1)の利用が一般的である。自由に、リンクをつたって情報を探し回ることもできるが、見たい情報が決まっている場合は時間を節約できるので、「検索エンジン」を使いこなすのが一番になる。

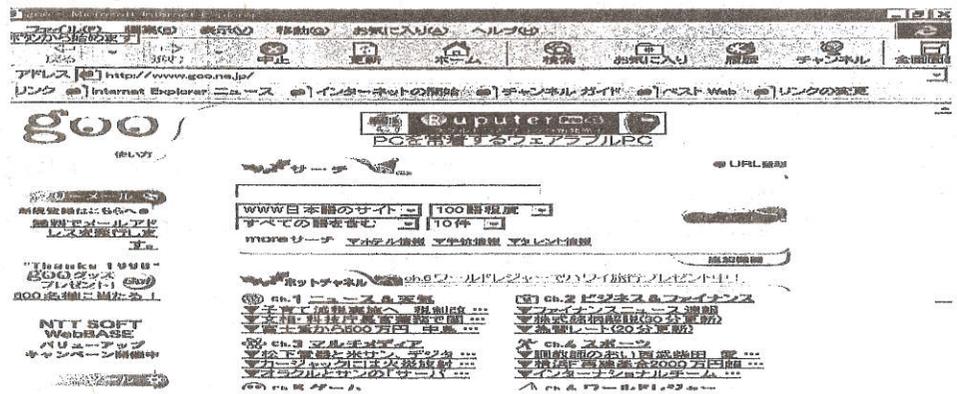
「検索エンジン」には、「YAHOO!」(図1)などの登録型のエンジンによってホームページがカテゴリごと分類されていて、リンクをたどって情報を絞ることができるものと、「goo」(図2)などのロボット型のエンジンによって、キーワードを入力して必要な情報を絞り込むことができるものがある。「検索エンジン」は目的に応じて使い分けることが必要

になる。

◇代表的な検索エンジンの表示と登録型検索エンジン「YAHOO!」(図1)

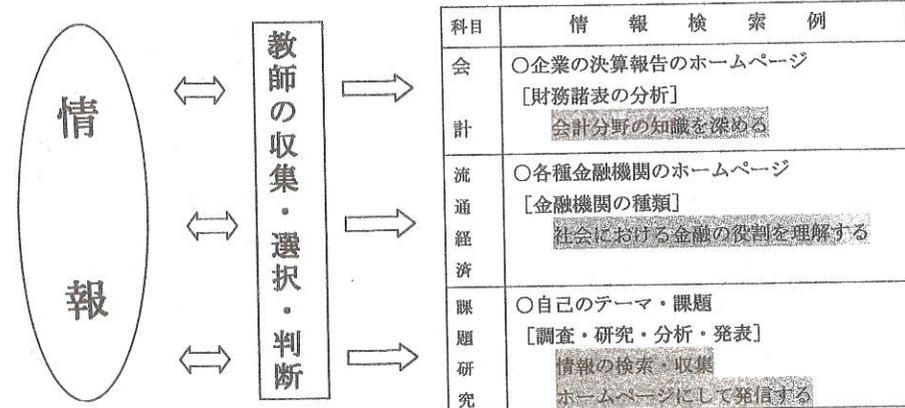


◇ロボット型検索エンジン「goo」(図2)



2 インターネットを利用しての実践研究

(1) 利用方法と教材・素材の収集



関連のページを探し、損益計算書や貸借対照表から財務諸表の分析をする。
 「流通経済」…………… 流通機関における金融機関の種類・目的・機能等を、ホームページを利用して、調べ学習をする。日本銀行や信用金庫等。
 「課題研究」…………… 商業に関する課題を自ら設定し、その課題やテーマの解決を図る学習の中で、ホームページの情報を取り入れながら調査・研究する。自分たちが調査・研究した内容のホームページを作成し、発信する。

(2) インターネットと学習との関係

授業においてインターネットを活用する学習場面の一つの方法として、「情報を収集」する場面を挙げることができる。印刷メディアとしての教科書には、掲載されたデータ群が陳腐化するという「情報の持つ時間的制約」を排除することができないという課題が、印刷メディアの特性から生じてきており、そこで、私たち教師は、副教材や自作の資料を活用するなど、指導法を工夫することによってこの課題の解決を図ってきている現状がある。

インターネットは、「現実社会の動きをリアルタイムで覗くことができる窓」といわれるように、最新の情報を収集するための強力なツールとして機能していくのではないだろうか。このようなインターネットの機能は、「情報の時間的制約」という教科書の持つ課題の解決策の一つとして期待することができると思われる。

(3) インターネットを利用した学習手順

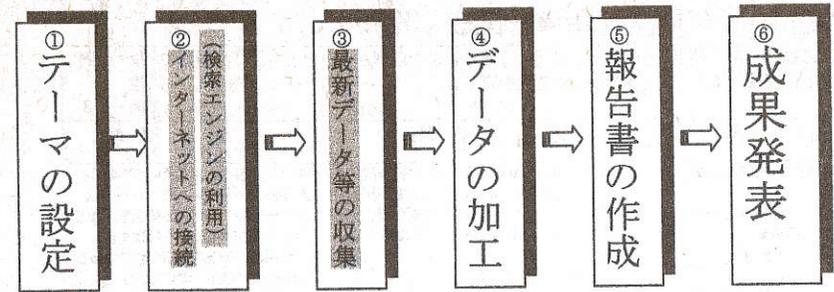
インターネットの急速な普及により、学習活動の中には様々な視点からの不正確さも含む多くの情報が入ってくるようになった。これまでの授業の多くは、教師がすでに選定した情報を、生徒に対してうまく伝え、生徒はそれを受容するという「情報の一方通行」であった。インターネットの利用によって、生徒にとっては教師以外の情報チャンネルが得られたことになり、多様な興味に応じた学習情報が入手できるようになったと考えられる。

ここで、インターネットによる最新情報の収集手段によって、「情報の時間的制約」を克服することができるとともに、収集した最新データに基づき新たな資料や報告書を作成させたり、成果発表の機会を与えることができる。また、資料や報告書の作成及び成果発表を通して生徒の学習意欲を喚起し、感性を高める学習をも目指していくことができる。学習活動の手順は次頁 [図5] のように考えてみた。具体的にインターネットを活用する場面は②及び③の学習場面で利用することになる。収集したデータ群は、表計算ソフトを使ったグラフ処理やワープロソフトによる画像の取り込みなどによるデータの加工 (④) を行い、報告書に仕上げ (⑤)、成果発表 (⑥) という一連の流れになる。④及び⑤については、プレゼンテーションソフトを用いて、より動的・視覚的な発表資料を作成し、報告することも一つの方法としてあげることができる。

教科書の内容をよりいっそう深く理解するために、教科書に掲載されている資料に基づいてインターネットを活用して更新・分析するとともに、テーマに沿った報告書を作成するという学習の一場面を考えてみる。このような課題は、教科書に掲載されたデータ群をインターネットの利用により更新し、関連する資料の収集・分析を行うことによって、学習内容の現代化・最新化を図り、学習への興味・関心を引き出すことをねらいの一つとすることができる。同時に、生徒自身が設定したテーマに沿って、学習成果を報告書の形にまとめ上げることによって、学習要素を相互に関連づけることのできる能力や、プレゼンテーションの基礎的な技法の育成を目指していくようになる。このようなことによって、学習意欲の喚起や感性の涵養をも図ることができると思われる。

インターネットを利用した学習手順

[図5]



- (4) インターネットを利用するための「流通経済」年間指導計画案 [資料1]
- (5) インターネットを利用した「流通経済」学習指導案 [資料2]
- (6) インターネットを利用した授業における生徒の具体的な作業 [資料3]



V 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) インターネットに関する仕組み・知識・操作技術・利用のマナーや方法について習得し、インターネットを授業に活用する上での危険性・著作権など、コンピュータの利便性に伴う影の部分を理解することができた。
- (2) 学校・教師・生徒のアンケートにより、インターネットを活用するための環境・先生方の情報教育に関する意識・生徒自身のインターネットに対する興味・関心等の実態を把握するとともに、商業教育における情報機器の活用の必要性を実感した。
- (3) 商業科目におけるコンピュータ機器の実習の在り方や、既存の科目におけるインターネットの利用方法・活用方法について探ることができた。

2 今後の課題

- (1) 教科書の内容を補う学習活動の手段として、更に、マルチメディア機器の知識や技術を深める。
- (2) 現在コンピュータ機器を使用して授業している以外の科目においても、コンピュータ特にこれから導入されるインターネットの最も有効な利用のあり方を探り続ける。
- (3) アンケート調査から見えてきた課題や問題点を学校に持ち帰るとともに、商業教育上の課題としてとらえ、改善策を考える。
- (4) 今後インターネットを利用した授業実践を通して、その効果と評価についての検討を加える。
- (5) 小学校・中学校の長期研修生との交流から、これからの情報教育について考えることができ、私案の「情報教育のねらい」に検討を加える。

「流通経済」年間学習指導計画表 (案)

科目	単元名	時間	単元の目標	主な学習活動	単位数	例		
教科の目標	流通に関する知識と技術を習得させ、流通の意義や役割を理解させるとともに、流通を中心とした商業活動に適切に対応する能力と態度を育てる。					3		
学期	月	単元名	時間	単元の目標	主な学習活動	単位数	例	
I	4	流通経済の仕組みと商業活動 (1) 経済生活と商業の役割	16	○経済が生産から消費に至る多くの経済活動によって支えられていること、商業が流通を担っていること、商業の歴史や身近な生活から例を取り上げて理解させる。 ○流通の機能が円滑な移動にあること、各種の流通活動の概念を通して理解させる。 ○それぞれの経営活動が有機的に動いて流通の機能を高めていることを理解させる。 ○商品の経路を、基本的な流通経路の形態や特徴を示して理解させる。	◇商業が生産者から消費者に至る多くの諸活動によって支えられていること、商業が流通を担っている概念を、身近な生活や商業の歴史から学習する。 ◇流通の機能が商品の円滑な移動にあることを各種の流通活動の概念をととして学習する。 ◆経営活動が流通の機能を高めていることを学習する。 ◇商品の流通経路を基本的な形態や特徴を学習する。	3		
	5	(2) 流通の機能とその担当者						
	6	(3) 流通活動と企業経営						
	46	7	流通活動と売買 (1) 商品と流通経路	30	○小売業と卸売業の主要な形態と特性および今後の方向について、消費者の多様なニーズと関連させて理解させる。 ○売買取引における仕入と販売の関連、売買契約とその履行、さらに代金の決済など売買取引に関する基礎的な内容を理解させる。 ○「e」経済化の進展に対応するマーケティングの在り方について理解させる。	◇小売商と卸売商の形態と今後の方向について学習する。 ◆売買業務から、契約の締結から履行までの取引に関する内容を学習する。 ◇売買に伴う支払用具として通貨・小切手など方法について理解し、小切手や手形を作成して体験的に学習する。 ◆流通活動におけるマーケティングの内容と在り方について学習する。 ◆今日の経済社会において、金融や証券及び日本銀行が果たしている役割や機能について学習する。	3	
		8	(2) 小売業と卸売業					
		7	(3) 売買取引と代金決済					
		8	(4) 流通活動とマーケティング					
	II	9	流通活動と関連機関 (1) 金融の機能と金融機関	19	○金融の機能が企業の資金調達や運用などの観点から理解させる。 ○商品流通における物的流通の重要性を理解させるとともに、その主要な機能と機能である運送、保管、保険について理解させる。 ○情報と通信を流通活動の面からとらえ、その機能について理解させる。	◇流通活動におけるマーケティングの内容と在り方について学習する。 ◆今日の経済社会において、金融や証券及び日本銀行が果たしている役割や機能について学習する。 ◇商品流通における物的流通の重要性を理解し、保険の機能や機関・運送と保管について学習する。 ◇流通活動から情報と通信をとらえ、その機能について学習する。 ◇経営活動におけるコミュニケーションの役割と形態について理解する。 ◆経営活動における上司や部下、同僚とのよりよい人間関係をつくるためのコミュニケーションの在り方とコミュニケーション能力を高める。 ◆コミュニケーションの役割を主に直接的なコミュニケーションの観点から理解させる。	3	
10		(2) 運送・保管・保険						
11		(3) 情報と通信						
11		企業の活動とコミュニケーション (1) 流通活動とコミュニケーション						
11		(2) コミュニケーションの役割と形態						
47	12	地域経済と流通活動 (1) 地域経済の特色	10	○顧客とよりよい人間関係をつくるためのコミュニケーションの在り方を指導するとともに、コミュニケーション能力の育成を図る。 ○コミュニケーションにおいて機器を利用することの意義及び文書の作成、管理、意志の伝達などの基本的な内容を理解させる。	◇販売活動における顧客の接遇の手順について理解させる。 ◆特定の地域経済圏における経済事象や流通活動の例を通して、役割を理解し、国民経済との関連について学習する。 ◆国際化の進展にもなる経済問題や、我が国の経済政策及びこれに関する流通機関の概要について学習する。 ◆これまで学習した流通政策の時代的背景や、小売商・卸売商などに関する法令を理解し、今後の経済社会の進展とその動向について学習する。	3		
	12	(2) 地域の経済活動と流通機関						
	1	経済社会の進展と流通経済 (1) 流通のシステム化						
	2	(2) 国際化の進展						
	3	(3) 流通政策						

計(105)

◇知識・理解 ◆興味・関心

「流通経済」学習指導案

科目名	流通経済	単元名	金融の種類	単位数(例)	3																				
単元の目標	1 今日の世界経済において金融は、重要な役割を果たしていることを理解させる。 2 資金の融通される経路・期間や使途などによって、金融もいろいろに分類されることを理解させる。																								
本時の目標	1 各種の金融機関がそれぞれの目的をもって設立されていることを理解させる。 2 金融の種類と金融機関の種類・目的を理解させる。																								
前時の学習内容																									
学習活動の内容			指導上の留意点																						
オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> 教科書で金融機関の種類について分類する 金融機関の中で自分が調べたい機関・調べたい内容を明確にする。 身近にある金融機関の名前をあげさせる(自分の家で取引している金融機関・自分の家の近くにある金融機関・通学途中の金融機関など)その金融機関がどの種類に属しているかを学習する。 コンピュータを使用し、インターネットからの様々な情報の取り出し方を体験的に学習する。 検索の仕方について、特に「検索エンジン」の利用の仕方について確認する。 インターネットを利用する上でのルールやネチケットについて学習する。 			<ul style="list-style-type: none"> 次回調べる金融機関が偏らないよう配慮する。 実習を伴う学習なので、説明のときには、実習を止めてしっかり話を聞くよう指導する。 身近にある金融機関(信用金庫・銀行・郵便局)の果たしている役割を理解させる。 「検索エンジン」の利用の仕方について、「yahoo!」「LYNCOS」等の画面を見せながら指導していく。 																					
本時の展開																									
学習活動の内容			学習支援		指導上の留意点																				
導入	5	<ul style="list-style-type: none"> 前回の内容の自分がどの金融機関を調べたかを再確認する。 インターネットの使用方法について、確認し、再度マナーやネチケットについて理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各自が調べる金融機関についてしっかり確認させる。 		<ul style="list-style-type: none"> インターネットを使うことにより、自らの課題やテーマから外れないよう注意して見ていく。 																				
展開	40	<ul style="list-style-type: none"> 【調べ学習】金融機関のそれぞれの性格・目的・機能を調べまとめる。 <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td>日本銀行</td> <td>生命保険会社</td> </tr> <tr> <td>損害保険会社</td> <td>都市銀行</td> </tr> <tr> <td>証券会社</td> <td>地方銀行</td> </tr> <tr> <td>労働金庫</td> <td>日本輸出銀行</td> </tr> <tr> <td>信託銀行</td> <td>日本開発銀行</td> </tr> <tr> <td>外国為替銀行</td> <td>中小企業金融公庫</td> </tr> <tr> <td>商工組合中央金庫</td> <td>国民金融公庫</td> </tr> <tr> <td>信用金庫</td> <td>農林漁業金融公庫</td> </tr> <tr> <td>信用協同組合</td> <td>郵便局</td> </tr> <tr> <td>農林中央金庫</td> <td></td> </tr> </table>	日本銀行	生命保険会社	損害保険会社	都市銀行	証券会社	地方銀行	労働金庫	日本輸出銀行	信託銀行	日本開発銀行	外国為替銀行	中小企業金融公庫	商工組合中央金庫	国民金融公庫	信用金庫	農林漁業金融公庫	信用協同組合	郵便局	農林中央金庫		<ul style="list-style-type: none"> 金融機関が提供しているホームページだけでなく、その金融機関に関連するホームページも数あることを教えながら調べさせる。 レポートにまとめやすいよう各自の金融機関に関連するホームページも見てみるよう指導する。 画面を書き写すと時間がかかるので、プリントアウトさせながら、まずは情報を集めさせる。 		<ul style="list-style-type: none"> コンピュータ機器を使用するため、機器のトラブルに的確に対処し、スムーズに学習できるようにする。 インターネットを利用して新しい情報・関連資料をもとにテーマに沿ったレポートが作れるよう、集めた情報を分析させながら指導していく。 実習中指示を出す時には作業を止めて聞くよう指導する
日本銀行	生命保険会社																								
損害保険会社	都市銀行																								
証券会社	地方銀行																								
労働金庫	日本輸出銀行																								
信託銀行	日本開発銀行																								
外国為替銀行	中小企業金融公庫																								
商工組合中央金庫	国民金融公庫																								
信用金庫	農林漁業金融公庫																								
信用協同組合	郵便局																								
農林中央金庫																									
まとめ	5	<ul style="list-style-type: none"> 自分の調べた金融機関をレポートの形にまとめ、提出する。 次回の予告をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の内容について簡単に復唱する。 レポートの提出を指示する。 		<ul style="list-style-type: none"> レポートのまとめ方やレイアウト等を各自工夫するよう指導する。 																				

【資料3】

インターネットを利用した授業における生徒の具体的な作業 [例 日本銀行]

1. インターネットの接続と検索エンジンの利用

①ブラウザを立ち上げ、パスワードを入力し、ブラウザのホームページを開く。

②検索エンジンを使って「日本銀行」のホームページを開く。

検索するにあたり、ホームページのアドレスが不明だったので、「日本銀行」を検索キーとして使用した。

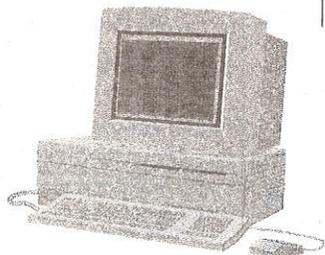
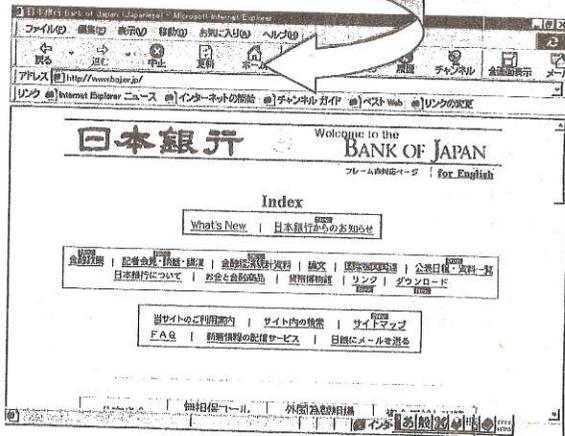
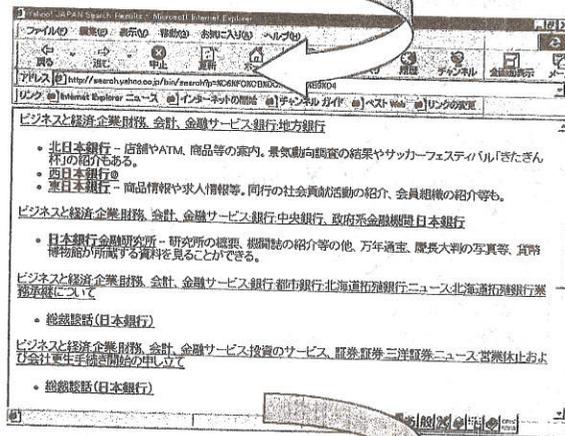
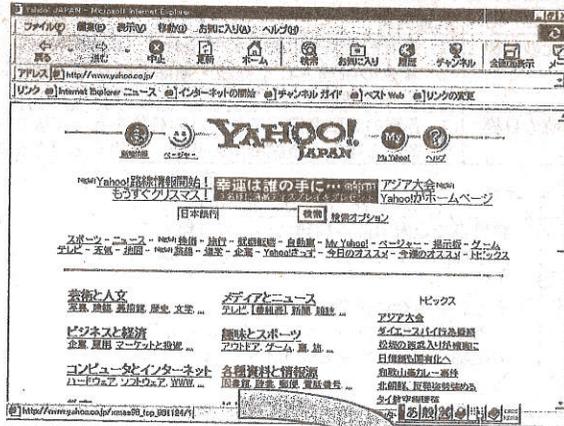
2. 日本銀行のホームページとデータの収集

①検索の結果、「日本銀行」という検索キーで17件のデータベースが存在していた。

②日本銀行のうち、政府系金融機関の「日本銀行」を選ぶ。

③日本銀行のメニューの中から、「日本銀行について」をクリックした。

④金融機関としての日本銀行の性格・目的・機能を基礎データとして報告書をまとめる。



地域の学習環境を生かした総合的な学習の研究

藤島町立渡前小学校
教諭 岡部 貞二

目次

I 主題設定の理由	1
1. 教育の動向との関連から	
2. 学校・地域の特色との関連から	
II 研究のねらい	1
III 研究の内容	2
1. 「総合的な学習の時間」の考え方とポイント	2
(1) 学校の仕組みの見直し	2
(2) 「総合的な学習の時間」のねらいと考え方	3
(3) 教育課程の弾力化	4
2. 「総合的な学習の時間」の具体的なプラン	5
(1) 教育課程のモデルプラン	5
(2) 活動計画のモデルプラン	6
(3) 完全実施までの3年計画のプラン	8
IV 研究のまとめ	9
(1) 研究の成果	9
(2) 今後の課題	9

主な参考文献・資料

『総合学習の実践』	加藤幸次	黎明書房	1997
『総合学習の思想と技術』	加藤幸次	明治図書	1997
『「総合的な学習」の実践と新しい評価法』	佐藤 真	学事出版	1998
『学校改善新戦略』	下村哲夫	ぎょうせい	1996
『子どもが求め、追求する総合学習』	平野朝久	学芸図書	1995
『教育課程審議会答申 全文と重点事項の解説』		明治図書	1998
『初等教育資料』(98/12、99/1)		東洋館出版社	1998
『学校運営研究』(99/2)		明治図書	1999
『生活科と共に 総合的な学習を創る』(98/10、99/2)		明治図書	1998
『総合教育技術』(98/9、10)		学 研	1998

I 主題設定の理由

1. 教育の動向との関連から

子どもが「ゆとり」の中で「生きて働く力」を身に付け、自己実現に向けた教育の充実を図ることが、今日の教育に課せられた命題である。そのためにも学校は、子どもたちにとって伸び伸びと過ごせる楽しい場、自分の興味・関心のあることにじっくりと取り組める場、安心して自分の力を発揮できる場でなければならない。

指導要領の改訂により2002年から「総合的な学習の時間」が創設される。総合的な学習では、主体的に学ぼうとする力を育成することが求められており、そのためにも学習活動に体験的活動や問題解決の学習を取り入れることがこれまで以上に必要とされる。豊富な体験や自分の思いをもとに展開する総合的な学習の時間の導入は、学校生活の中に「ゆとり」を生み、「生きて働く力」を育む上で大きな役割を果たすものと考えられる。

2. 学校・地域の特色との関連から

本校のある藤島町渡前地区は、庄内平野のほぼ中央に位置する米作りの盛んな地域で、児童の大半の家で今も米作りが行われている。米作りに関連して、わら細作りや獅子踊りといった伝統工芸・行事なども受け継がれており、年々その活動も盛んになってきている。

ところが、こうした豊富な学習環境が身近にありながら、児童には、意外とわかっていない・知らないことが多く、直接体験も決して多いとはいえない。また我々教職員も地域に対する理解が不足しており、地域の学習素材を十分に生かしていない。児童の課題は、裏を返せば我々教師側の課題とも言える。

そこで、体験活動や地域の人たちとの交流を通して地域を素材としたふろさと学習を展開し、地域と主体的に関わらせることで、児童一人ひとりに主体的に学ぼうとする力が育つのではないかと考え、本主題を設定した。

また、地域の人材や施設や様々な活動との連携を図ることにより、学校が活性化していくことも期待できる。

II 研究のねらい

1. 「総合的な学習の時間」のねらいや考え方を学び、総合的学習の全体像のイメージ化を図る。
2. 体験的・問題解決的な学習を重視するために必要な、弾力的な教育課程のモデルプランを作成する。
3. 地域の学習環境を生かした、「総合的な学習の時間」の活動モデルプランを作成する。

III 研究の内容

1. 「総合的な学習の時間」の考え方とポイント

(1) 学校の仕組みの見直し

学校は様々な面で行き詰まりを感じており、従来の学校の在り方を根本から見直す必要に迫られている。

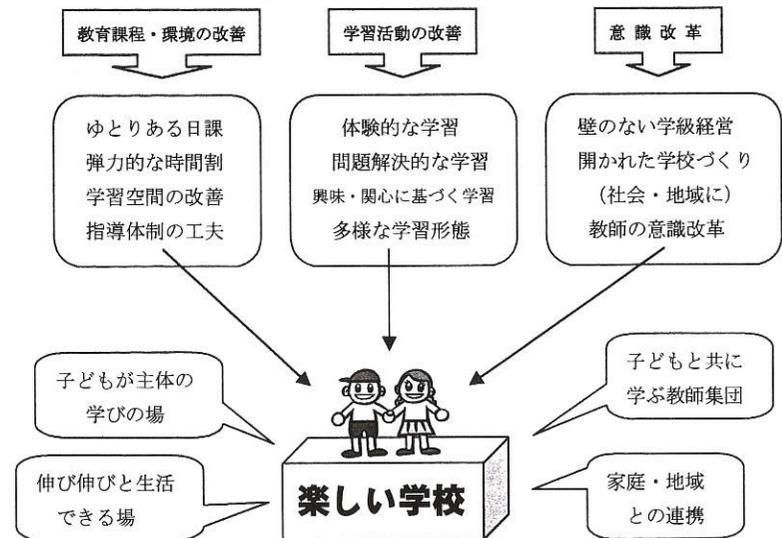
学校を、子どもたちにとって「伸び伸びと楽しく過ごすことのできる場」へと改善するためにも、学校の仕組みを見直していくことが必要である。

見直さなければならない点

- ▼ 知識偏重の学力観
- ▼ 知識注入型の学習スタイル
- ▼ 一斉指導の比重が大きい指導形態
- ▼ 子どもが選択できる場（自己決定の場）の設定
- ▼ 画一的な時間割とカリキュラム
- ▼ 時間的・空間的な「ゆとり」づくり

改善の方向性

- ① ゆとりある教育活動を展開する中での、基礎・基本の確実な定着
- ② 個性を生かす教育の充実と、自ら学び、自ら考える力の育成
- ③ 創意工夫を生かした、特色ある学校づくり



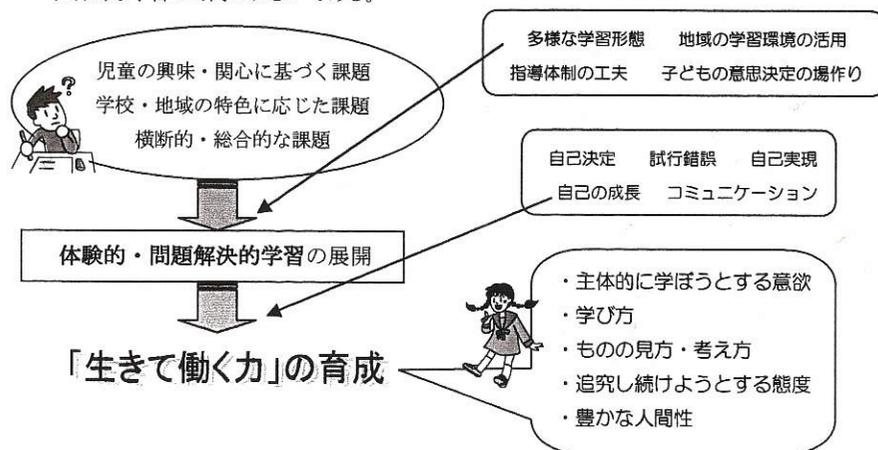
(2)「総合的な学習の時間」のねらいと考え方

①「総合的な学習の時間」のねらい

次期指導要領には、総合的な学習の時間のねらいについて以下のように記されている。

- (1) 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

総合的な学習では、子どもの自発的な学びの意欲や、問題解決の力を十分に伸ばしていくことが求められている。体験的・問題解決的な学習や児童の興味・関心に基づく学習を、学習形態・指導体制・学習環境を工夫しながら展開することで、「主体的に学ぼうとする意欲」や「学び方」、「ものの見方・考え方」などを育てていくことが、総合的な学習の時間のねらいである。



②「総合的な学習の時間」の考え方

～ 教師の関わり方 ～

総合的な学習では、体験的・問題解決的な学習を重視するため、これまでのような学級担任中心の指導形態では活動が限定されてしまう。そこで、T・Tのように複数の教師が担当したり、地域の人材を活用したりしながら、多様な学習形態に対応できるように工夫と協力体制が必要となる。

また、子どもの柔軟な発想や創造性を生かすためにも、教師は、「指導」というより「共に学ぶ」「共に活動を創る」というスタンスに立つことが求められる。

総合的な学習の時間における教師の役割としては、以下のようなことが考えられる。

- 活動の場の設定 ○活動の見通しを立てる ○安全面への配慮
- 指導者との連絡・調整 ○子どものよさを引き出す

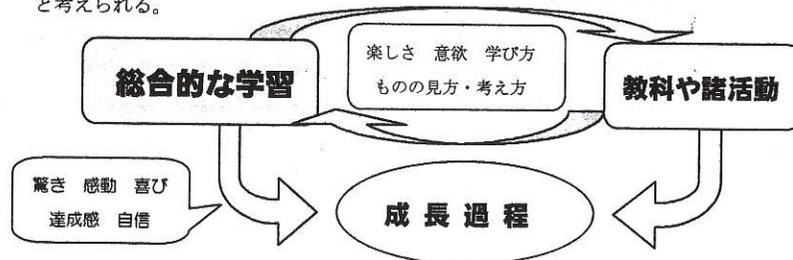


～ 教科等との関連性 ～

総合的な学習の時間は、子どもの柔軟な発想や創造力を生かしながら、一人ひとりの願いや思い、生活に基づいた、「楽しい学びの場」でなければならない。

自分の興味・関心に基づいた課題を、ゆとりある時間・空間の中で、体験や人との関わりや新しいものとの接触を通して解決していくことによって、子どもが「学ぶことの楽しさ」「学んでいこうとする意欲」「学び方」「ものの見方・考え方」などを身に付けていくことが期待できる。

直接体験したり触れることによって得た感動や驚き、自分の課題を解決できたという達成感や自信、楽しく学べたという喜びは、次の活動への大きなエネルギーとなって、教科や諸活動、さらには成長していく過程の中にも生かされ、発展していくものと考えられる。



(3) 教育課程の弾力化

総合的な学習の時間を楽しく伸び伸びと学べる場にしていくためには、これまでのような1単位45分の授業枠や、固定化・画一化された週時程や時間割の見直しをしていかなければならない。また、学校生活にゆとりを生む上でも、教育課程を弾力的に扱うことが必要となる。

次期指導要領では、教育課程の弾力化について以下のように示している。(抜粋)

- ◆ 各教科等や学習活動の特質に応じ効果的な場合には、これらの授業を特定の期間に行うことができる。
- ◆ 各教科等のそれぞれの授業の1単位時間は、各学校において、各教科等の年間授業時数を確保しつつ、児童の発達段階及び学習活動の特質を考慮して適切に定めるものとする。
- ◆ 各学校においては、地域や学校及び児童の実態、各教科等や学習活動の特質などに応じて、創意工夫を生かし時間割を弾力的に編成することに配慮するものとする。

1単位時間の設定や週時程、時間割等の教育課程を弾力的に扱うことで、以下のようなことが期待できると考えられる。

- 学校生活の中に「ゆとり」が生まれ、子どもが伸び伸びと活動することができる。
- 児童の実態や学習内容の特質に応じた週時程表や時間割表を作成することができ、学習活動をより効果的に展開することができる。
- 基礎・基本を定着させ、かつ体験的・問題解決的な学習を展開するために必要な授業時数の確保ができる。

2. 「総合的な学習の時間」の具体的なプラン

(1) 教育課程のモデルプラン

ゆとりある学校生活の中で、総合的な学習を含めた様々な学習活動を伸び伸びと展開していくためにも、現行のカリキュラムを見直し、弾力的に扱っていくことが必要である。

① 学習活動の特質に応じた期間設定

総合的な学習の時間は、年間3・4年生で105時間、5・6年生で110時間と設定されている。週当たりで計算すると、単純計算で約3時間という扱いになる。この時間の扱い方として、年間を通じて行う場合と学習活動の特質に応じて特定の期間に集中的にまとめて行う場合とが考えられる。

本研究では、地域の学習環境を生かした総合的な学習のプラン作りを進めているが、米作りや野菜などの栽培、観察など屋外での体験的活動が多くなると予想されるため、4月から11月までの前半に集中して行うプランを考えた。伴って週時程や時間割を2期制にし、4月から11月を前期、12月から3月を後期というように想定した。

前期 (4月～11月) → 「総合的な学習の時間」を集中的にまとめて実施する

② 弾力的な週時程・時間割のプラン

体験的・問題解決的な学習を展開し、かつ、教科内容の基礎基本の定着を図るためには、現行の週時程のように全校が同じ時間枠という画一的なカリキュラムの見直しが必要である。

学年の子どもの発達段階や学習活動の特質に応じて、弾力的に扱えるようなカリキュラムの開発が望まれる。

資料1の週時程表の案は、学年の発達段階や学習内容の特質に応じた活動を仕組みやすくするために、時間設定の枠を広げて考えたものである。

週時程を弾力化することで、必要とする学習活動を毎日短時間繰り返したり、一つの活動に長時間集中して取り組んだり、それぞれの学年の実態に応じた時間割編成が可能になると考える。

また、子どもの実態に即した週時程や時間割の編成は、学校生活の中にゆとりを生むことも期待できる。

資料1 ～前期の週時程表(案)～

藤島町立渡前小学校
新教育課程 週時程表 (C案-前期)

時 刻	月	火	水	木	金
8:20	チャレンジタイム	朝自習	チャレンジタイム	集会	
8:30	朝自習	(読書)	朝自習		
8:40	朝の会・健康観察				
8:50					
10:25					
10:25	中間休み				
10:45					
12:20	給食				
12:20	給食				
13:00	給食				
13:05	昼休み				
13:05	昼休み				
13:35	清掃				
13:35	清掃				
13:55	清掃				
14:00	朝の会	朝の会	朝の会	朝の会	朝の会
14:45	朝の会 (14:15付)	朝の会 (14:15付)	朝の会 (14:15付)	朝の会 (14:15付)	朝の会 (15:00付)
わたすえタイム	ゆとりタイム	総合的な学習の時間	職員会議 研修	総合的な学習の時間	16:00からクラブ活動 第2・4週目 委員会活動 第1・3週目
16:00		18:45まで	18:30まで		18:00まで

8:30から10:25まで
10:45から12:20まで → ノーチャームにする
14:00から18:00まで

③ 1単位時間の取り扱いについて

教科の授業時数を確保し、基礎基本の定着を図るため、また、総合的な学習の時間に体験的・問題解決的な学習をゆとりをもって展開するためには、現行の1単位時間45分の授業枠にしばられた考え方には限界がある。

学習活動をゆとりある時間の中で効果的に進めるためには、1単位時間を弾力的に扱っていくことも必要である。

プランを例に考えを述べてみたい。

まず、午前中の学習時間を「午前I」「午前II」というように大きな枠として想定した。(資料1参照)

次に、「午前I」「午前II」それぞれの細かな時間設定を行う。それぞれ95分の授業時間が設定してあるが、以下のような組み合わせ方が考えられる。

- a) 30分+30分+30分 b) 30分+60分 c) 45分+45分 d) 90分のロング

※ 残りの5分間は、休憩に当てるなど弾力的に扱う。

授業時間の組み合わせ方は、学年の子どもの発達段階や、学習活動の特質などに応じて弾力的に扱うものとした。このような弾力化によって、子どもの実態に応じた学習活動、体験的・問題解決的な学習活動をゆとりをもって展開することや、教科の授業時数の確保などの効果が期待できる。資料2は、この考えをもとに想定した例である。

もちろん、時間割を作成する際には、文部省が示す年間の標準授業時数が確保できるように留意しなければならない。年間を見通した計画のもとに時間割作成の作業を進めることが大切である。

(2) 活動計画のモデルプラン

① テーマの設定について

「総合的な学習の時間」は、子どもの柔軟な発想や創造力、一人ひとりの願いや思いが生かされた、伸び伸びと楽しく学べる場でなければならぬと考える。

そのためにも教師は、「子どもと共に新しく活動を創っていく」という発想に立ち、楽しく学んでいくための活動テーマを考えていくことがまず必要となる。

テーマを考える際に大切にしたいこととして、次のようなことがあげられる。

- ・楽しい活動
- ・豊かな体験
- ・多様な活動

「何をすると楽しいか」「子どもが体験できることがあるか」「多様な活動になり得るか」ということを、ゆとりをもちながら考え、テーマを設定したい。

資料2 ～3年生の前期時間割の例～

藤島町立渡前小学校
新教育課程 3年生時間割 (C案-前期)

時 刻	月	火	水	木	金
8:20	チャレンジタイム	朝自習	チャレンジタイム	集会	
8:30	朝自習	(読書)	朝自習		
8:40	朝の会・健康観察				
8:50	国語	算数	算数	国語	国語
9:20					
9:25	算数	社会	体育	音楽	理科
10:25	中間休み				
10:25	中間休み				
10:45		体育	理科	国語	国語
11:30	図工	国語	国語	算数	社会
11:35					
12:20	給食				
12:20	給食				
13:00	給食				
13:05	昼休み				
13:05	昼休み				
13:35	清掃				
13:35	清掃				
13:55	清掃				
14:00	道徳	朝の会	朝の会	朝の会	朝の会
14:45	道徳 (14:15付)	朝の会 (14:15付)	朝の会 (14:15付)	朝の会 (14:15付)	朝の会 (15:00付)
わたすえタイム	ゆとりタイム	総合的な学習の時間	職員会議 研修	総合的な学習の時間	ゆとりタイム
16:00		18:45まで	18:30まで		18:00まで

「ふるさと」 → 地域の学習環境を生かした活動を展開する。

このテーマを想定したのには、以下のような理由がある。

- ◆ 米・野菜作り、わら細工作り、獅子踊りの伝承、サケの放流など、直接体験できる素材が地域には豊富にあり、多様な活動の展開が考えられる。
- ◆ 地域の素材と共に、それらに関わっている地域の人材も多く、指導者として迎え入れることが可能である。
- ◆ 地域を学ぶことを通して、子どもが自分の住む地域のよさに気づき、地域と主体的に関わろうとする態度の育ちが期待できる。
- ◆ 地域の素材を題材にし、地域の人材を活用した活動を展開することで、これまで以上に地域との連携が深まることが予想される。また、地域の教育力を積極的に導入することで、学校が活性化していくことも期待できる。

② 活動計画のモデルプラン

活動の大まかなテーマが決まったら、次に活動内容について吟味し、「総合的な学習の時間」の活動計画の作成をしていくことが必要となる。

まず、どのような活動が可能であるかを考え合い、そこで出された活動内容について、価値ある学習活動になり得るかを吟味する。その際、テーマを設定するときと同様に、「楽しい活動」「豊かな体験」「多様な活動」ということを視野に入れておくことと、子どもの生活や経験に根ざし、子どもの興味・関心に基づくような内容であるか、ということを中心にしながら考えるようにしたい。

個々の活動について、どの学年で、どの時期に、どのような体制で展開すると効果的になるのかを検討しながら、特色ある「総合的な学習の時間」の活動計画へと練り上げていくことを、全職員で協力しながら進めていきたいと考える。

ここでは、「ふるさと」というテーマの想定をもとにしながら考えを進めていく。

本校の先生方の協力を得ながら、「総合的な学習の時間」に活動できそうな学習題材をピックアップした。(資料3を参照)

資料4は、この題材一覧を参考にしながら考えた活動計画の大まかなプランである。

それぞれの学年の計画に基づきながら活動を進め、その学習の成果を、11月ごろに予定している「ふるさとフェスティバル」の場で広げていくような見通しを立てている。地域の方々を学校に迎え、学習成果を発表したり、いっしょに収穫の喜びを味わったりするような活動にしたいと考えている。

学んだことを外に向けて発信することで、活動がさらに広がり、深まるものと期待できる。

資料3 ～活動題材プラン～

藤島町立渡前小学校 総合学習題材一覧(案) No.1

学年	3年	4年	5年	6年	備考
米作り		○	○		6年生を中心に学校田で稲作体験。収穫した米を4年生に引き継いで、秋に収穫感謝祭を行う。
わら細工		○	○		石巻市で稲刈り体験を兼ねて、わら細工づくりを体験。わらのオブジェを学習発表会で展示。
獅子踊り	○				4年生を軸に3年生が踊りを伝承し、学習発表会で発表を体験する。その体験活動に記録させる。
渡前ガイドブック作り				○	渡前ガイドブックについて資料を調べ、写真やイラストなどを用いて「渡前」の魅力を伝え、紹介する。
がんばるお父さん			○	○	賞状のお父さん方に感謝状を書いてもらい、仕事や生活について語ってもらい、感謝状も作成してもらう。
野菜づくり体験	○	○	○	○	地域で栽培されている野菜を、ハウスで作って収穫し、収穫したものを販売する。(全校で活動)
海浜学校			○	○	計画の段階に子どもも参加し、児童主体のプログラムを作り、渡前町の案内冊子に載せていく。
渡前ふるさと讃歌	○	○			獅子踊りとタイアップさせた活動にしている。
黒瀬川の自然環境調べ					川の水質調査や身近な生き物などについて調べる。
ようこそ先輩				○	藤島中、高校、社会人の先輩を招いて、それぞれの様子について話を聞いた。交流を図る。
里帰り保育				○	1年生と5年生で交流。渡前町産物に付く、いっしょに遊んだり活動したりし、交流を図る。
学習発表会	○	○	○	○	総合的な学習の時間であり、学んだことを発表する場。それぞれの学年の特色が出るよう配慮に。
生活習慣科の学習会	○	○	○	○	食生活と健康について、保健師を招き、T・T形式で学習する。(2022年から3年以上は必修)

資料4 ～「総合的な学習の時間」の活動計画プラン～

藤島町立渡前小学校 「総合的な学習の時間」活動計画プラン

学年	4		5		6		7		8		9		10		11	
	総合時間	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕ or ㉖	
1年																
2年	それぞれのテーマにおける学習成果															まとめ・ふりかえり
3年	テーマの決定	野菜作り体験 (ハウス栽培と収穫、販売を体験)				地域の施設訪問・1日体験活動				渡前子ども獅子踊り				まとめ・ふりかえり		
4年	テーマの決定	地域の川で遊ぶよ!				野菜作り体験 (ハウス栽培と収穫、販売を体験)				渡前ふるさと讃歌				まとめ・ふりかえり		
5年	テーマの決定	稲作体験 (苗つくり、田植え、草取り、稲刈り、乾燥、わらの処理など)				地域の施設訪問・1日体験				わら細工作り体験				まとめ・ふりかえり		
6年	テーマの決定	交流活動 (幼稚園、先輩など)				海浜学校				「渡前ガイドブック」作り				まとめ・ふりかえり		
		野菜作り体験 (ハウス栽培と収穫、販売を体験)														

(3) 完全実施までの3年計画のプラン

「総合的な学習の時間」の完全実施に向けた様々な準備を、全職員の協働体制のもと、今から計画的に進めていくことが必要となる。

これまでの学校の仕組みを見直し、何が課題となっているのかを明らかにして、発想の転換を図りながら「子どもが伸び伸びと楽しく活動できる学校」「特色ある学校」づくりをめざしていきたい。

そのためにも、全職員が共通理解を図り、協働体制で準備を進めていけるような移行期間の年次計画を立てることも必要となる。

年次計画のプランについては、以下のように考えている。

◆ 3年前(平成11年度)

- 「総合的な学習の時間」のねらいや考え方のイメージ化を図る。
- 研究組織の構成をする。 ○ 職員の意識改革と研究体制固めを行う。
- 研究戦略を構築し、仮説や計画を設定する。(モデル単元・展開計画の試作)
- 地域の人材名簿、教育資源一覧を作成する。

◆ 2年前(平成12年度)

- 教材や活動になりそうな問題、題材を探す。
- 展開計画を作成し、活動を具体化する。(評価計画も)
- 授業実践をして仮説検証を行う。必要箇所を修正して正式な単元にする。
- 研修、問題発掘、資料収集、環境・教材整備などを行う。

◆ 1年前（平成13年度）

- カリキュラムの完成と移行措置の総仕上げを図る。
- ・ 各学年ごとの内容の見直しと年間活動計画の作成を行う。
- ・ 週時程、時間割などの教育課程の仕上げをする。
- ・ 地域の協力要請活動を行う。
- ・ 教科、道徳、学級活動などの年間計画の作成を図る。

参考資料 『総合教育技術』(98/9)

IV 研究のまとめ

(1) 研究の成果

- ◇ 「総合的な学習の時間」のねらいや考え方について学ぶことができ、全体的なイメージをとらえることができた。また、「総合的な学習の時間」の研究を通して、学校改善と教師の意識改革の必要性を感じるようになり、改善の方向性やポイントについて学ぶこともできた。
- ◇ 教育課程のモデルプラン作りを通して、教育課程の弾力化についての考え方や具体的な作業の方法について学ぶことができた。子どもが重力の中心にいる「楽しい学校」作りのためにも、教育課程を弾力的に扱っていく必要があると、強く感じている。
- ◇ 「ふるさと」という、地域の学習環境を生かした学習テーマを想定して研究を進めたが、地域の教育力を見直し、連携を深めることによって、学習活動の幅が一層広がり、より体験的で、より主体的な活動が可能になるように感じた。

(2) 今後の課題

- ◆ 「総合的な学習の時間」の考え方について、さらに理解を深め、より具体的なイメージを持つことができるようにする。
- ◆ 教育課程の弾力的なプランを、職員全員で話し合いながら検討し、「ゆとり」が生まれ、より効果的に学習活動が行えるようなものに仕上げていく。
- ◆ 学校や地域の特色を生かした「総合的な学習の時間」の具体的な活動計画について考え合い、オリジナリティあふれる活動を生み出していきたい。
- ◆ 地域に眠っている学習素材を掘り起こすために、地域の人材リストを作成し、地域に協力を要請していく。
- ◆ 全職員が共通理解し、協働体制のもとで「総合的な学習の時間」の完全実施に向けた準備を進めることができるように研修を図る。

表現力の育成における コンピュータの活用に関する研究 ～多様な表現方法を取り入れた学級新聞作りの取り組みから～

立川町立狩川小学校
教諭 奥山 徹

目 次

I	主題設定の理由とねらい	1
II	研究の仮説	1
III	研究の内容	1
1	情報活用能力と新聞活動	1
	(1) 情報活用能力について	
	(2) 情報活用の実践力と新聞活動	
2	新聞活動におけるコンピュータの位置付け	2
3	表現力とコンピュータ	3
4	授業実践について	4～6
	(1) 授業実践の概要	
	(2) 児童の実態	
	(3) コンピュータ機器の環境	
	(4) 授業の実際	
5	児童の意識の変容	7～8
	(1) 質問紙法によるイメージの測定	
	(2) セマンティック・プロフィールによる考察	
	(3) 活動を終えての児童の声	
IV	研究のまとめ	9
	1 研究の成果	
	2 今後の課題	

＜参考文献＞

- ・「情報教育に関する手引き」 文部省
- ・「情報化の進展に対応した 報化の進展に対応した初等中等
教育環境の実現に向けて 教育における情報教育の推進等に
-最終報告-」 に関する調査研究協力者会議
- ・「コンピュータ活用実践読本」 教育開発研究所
- ・「学校におけるコンピュータの教育利用」 日本教育新聞社
- ・「学校教育におけるコンピュータの活用」 佐藤隆博著 明治図書
- ・「コンピュータで子どものやる気を育てる」 子安増生編 ゆうひかく選書
- ・「コンピュータを教育に活かす」 市川伸一著

I 主題設定の理由とねらい

情報がさらに氾濫する高度情報化社会では、情報活用能力を身に付けるということが当然必要不可欠なものになる。また、その中でただ情報を受け止めるのではなく、自らの考えを主体的に表現し、発信していく能力も同時に求められる。このことを生涯学習の視点から見ると、小学校段階では「児童が様々な利用法を体験することにより、コンピュータに慣れ親しむ」という過程が必要になる。これまで学校で実践を積み重ねてきた学級新聞作りの中に、コンピュータの活用を位置付けると、以下のように考察できる。

学級新聞を作成する過程の情報収集、加工、表現、発信・伝達の諸活動の中に、近年のマルチメディア型コンピュータやインターネットを有効に活用していくことが可能である。情報の加工・表現の活動では、「文字」「絵」「レタリング」「罫線」「グラフ」をかく作業において、その特性（活字、音声、画像、動画）を活かすことができる。また、情報収集活動ではインターネットを活用することで、広範囲の情報を効率よく得ることができる。同様に発信、伝達もネットワークを通じることで、他地域の人たちとの情報交換も可能になり、交流の輪を広げることできる。このように、今求められている情報活用能力（情報の収集、判断、表現、処理、創造、発信、伝達等の実践力）は、学級新聞作成の過程に網羅されており、そこにコンピュータを活用することで情報活用能力の芽を育むことができる。

そこで、本研究では情報活用能力の育成の第一歩として、表現活動の実践を柱として研究を進めていく。今まで手書きで行ってきた作業の中からでてきた「絵は苦手だ」「字が上手にかけない」等のマイナス意識をいかに克服し、「もっとわかりやすくみんなに伝えたい」「読む人がもっと楽しんでくれる新聞を作りたい」等の向上意欲をいかに伸ばせるか、さらに児童がどんな新しい価値に気づき、表現力の育成につながるかを検証したいと考え、本主題を設定した。

II 研究の仮説

学級新聞作りにコンピュータの持つマルチメディア機能を有効に活用し、児童により幅広い表現活動を体験させ、新しい表現の楽しさを発見させることで、意欲的に表現しようとする資質や能力を育てることができるであろう。

III 研究の内容

1 情報活用能力と新聞活動

(1) 情報活用能力について

情報活用能力とは・・・

情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議から出された「情報化の進展に対応した教育環境の実現にむけて」の最終報告（平成10年8月5日）では、情報活用の力を3つに要約している。

① 情報活用の実践力

課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信、伝達できる能力

② 情報の科学的な理解

情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価。改善するための基礎的な理論や方法の理解

③ 情報社会に参画する態度

社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度

※小学校段階では情報活用の実践力の育成を柱として情報教育を進めていき、その中で科学的な理解、情報社会に参画する態度の育成も取り込んでいく。

(2) 情報活用の実践力と新聞活動

情報活用の実践力は前述したように、「情報収集」→「判断」→「表現・処理・創造」→「発信・伝達」という一連の活動の流れになっている。この流れは新聞活動はの流れそのものである。つまり、新聞活動を効果的に展開することで情報活用の実践力を育むことができるものと考えられる。

2 新聞活動におけるコンピュータの位置付け

情報活用能力を大きくサポートするコンピュータを、新聞活動に導入すると次の図1のような活動の広がりが考えられる。

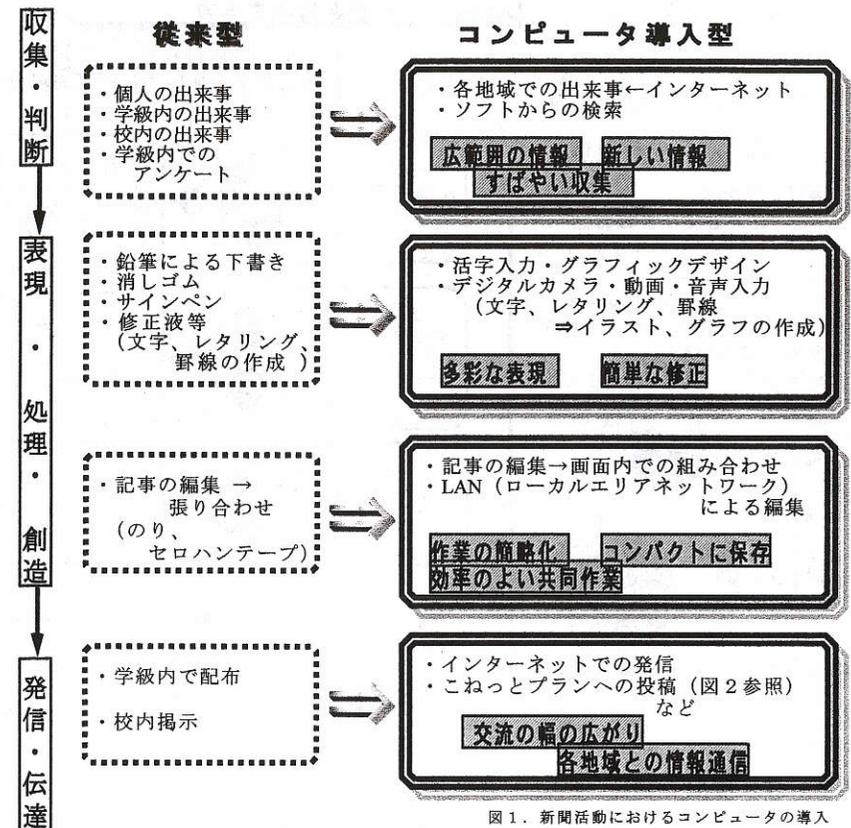


図1. 新聞活動におけるコンピュータの導入



図2. こねっと学校電子新聞

このように、情報収集においては、インターネット等を活用することで、広範囲からの新情報を瞬時に得ることができる。

表現・創造の活動では、見やすく、よりきれいな新聞作成が可能となる。さらに、音声や動画等を取り込めば受け手に伝えたいことをより明確に楽しく伝えることができる。

処理の段階では、LANを利用することで、教台のパソコンから記事や紙面の編集を行うことが可能となり効率よく作業ができる。

発信・伝達の活動では、ネットワークを利用することで、各地域の人々と新聞による情報通信を展開することも可能であり、交流活動に幅が広がる。このことについては図2の例のように、すでに電子新聞による学校新聞発信を行っている学校も多数あるのが現状である。

3 表現力とコンピュータ

学級新聞作りには、文字作成、レタリング、飾り付け、罫線、イラスト、グラフ作成等の表現活動がある。その表現活動において、どのような表現力が求められるかは次の通りである。

- ・収集した情報を元に、正確な記事を作成する力
- ・読み手にとって見やすく、楽しい新聞を作成する力
- ・自分のイメージした通り、紙面を構成する力

この表現力の育成には、コンピュータの持つ特性が大きな役割を果たすと思われる。図3にあるコンピュータの特性を活かした表現活動を展開すれば「表現方法の多様化」及び「作成意欲の向上」の二つの効果が期待される。

(1) 表現方法の多様化

表現に関わるコンピュータの特性

- ・多種のフォントによる活字化
- ・バリエーション豊かな飾り付け
- ・簡単な数値入力によるグラフ化
- ・幾何学模様等のペイント作業
- ・多種多様の枠飾り
- ・簡単な取り消し、変換、修正等

図3. 表現に関わるコンピュータの特性

この記事にはどんな形の文字が合うのかな。コンピュータで作って見よう。

これもいまひとつ、これも・・・あっ！こんな感じの字がピッタリだぞ。

このイラストの空は何色にしたらいいかな。コンピュータに取り込んでペイントしてみよう。

この色もだめ、これも・・・おっ！これは合うぞ。

この表は何グラフに表せば見やすいだろう。コンピュータでいろいろ変えてみよう。

比べてみるとやっぱり円グラフが一番見やすいぞ。

図4. コンピュータによる試行錯誤

図3のコンピュータの特性により、多種多様の表現方法を新聞に盛り込むことが可能となる。また図4に示したように、コンピュータの修正機能を活用し、何度も試行錯誤を繰り返すことで、自分が納得のいくまで見やすくきれいな楽しい作品を仕上げることもできる。さらに試行錯誤の過程で初めて目にする表現方法に出会い、発見の喜びも味わうこともあるだろう。

(2) 作成意欲の向上

字を書くのが苦手だな。

僕の字がこんなにきれいに印刷されたぞ！

よし、いっぱい作文を書くぞ！

飾り付けは結構得意だよ。

うわー、こんなにすごい飾り付けが簡単にできるぞ。

よし、もっともっというんな飾り付けを考えてみるぞ！

図5. 児童の作成意欲の向上

より満足いく新聞を作ることは、より多くの人に見てもらいたいという欲求につながる。そしてできた新聞をネットワークを通し発信することで、より広範囲の受け手からの評価も期待できることから、一層の意欲向上につながると思われる。

4 授業実践について

(1) 授業実践の概要

- ①単元名 「コンピュータで新聞を作ろう」
- ②目標
- ・学級新聞作りにコンピュータを活用することで、新しい表現方法を知り、コンピュータの楽しさや便利さを味わうことができる。
 - ・電子新聞によるネットワーク上で情報交換のしくみを知ることによって新聞活動へ対する新たな意欲を生み出すことができる。
- ③実践時期 平成11年1月下旬～2月上旬
- ④実践時間 6時間
- ⑤実践場所 立川町立狩川小学校
- ⑥対象児童 第5学年25名(男14名 女11名)

(2) 児童の実態

授業実践にあたり、児童の実態を把握するため事前調査を実施した。

表1. コンピュータの体験度

	家にパソコンありますか		週に何回使っていますか				5年生になって学校のパソコンを何回使いましたか				学校のパソコンをどう使いましたか			
	ある	ない	0	1	2	3	4	0	1	2	3	4	6	10以上
合計(人)	9	16	1	3	2	2	1	12	1	2	4	1	1	4
													6	8

表1はコンピュータ体験度についての結果である。表からもわかるように、5年生になってから1度もパソコンに触れていない児童が半数近くもおり、基本操作の段階からの指導が必要と考えられた。

表2. 新聞作成でのコンピュータ利用の希望

	活字作文	レタリング 飾りつけ	活字レタ リング	イラスト	罫線	グラフ
合計(人)	15	23	9	7	5	18

表2は学級新聞を作成する際、どんな場面でコンピュータを利用してみたいか、その希望を集計した結果(複数回答)についてである。まず、活字による作文を希望した児童が15名であり、その内の11名は作文の字を書くことを苦手と答えた児童であった。レタリングの飾り付けにおいては、最もコンピュータ利用の希望が多く(23名)その内レタリングが得意と答えた子は14名であった。

作文とレタリングにおいては「苦手だから活用したい」という克服意識と「得意だからコンピュータを利用してもっとすごいものを作りたい」という向上意識が相反する形で表れた。

(3) コンピュータ機器の環境

- ◆児童用コンピュータ
ハードウェア PC-9801 (OS: Windows 3.1搭載) 9台
- ◆主な使用ソフトウェア
一太郎 Ver 6 FMV Biblo (指示用プロジェクターに接続)
- ◆教師用コンピュータ

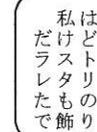
(4) 授業の実践

①コンピュータの活用の仕方

児童の実態から、いきなりコンピュータで新聞を作るのはかなり大変な作業になると判断し、あらかじめもとなる手書き新聞を各班毎(5人構成)1枚作成させた。その手書き新聞の中で各自がそれぞれ希望する箇所にコンピュータを活用し、新聞を作成した。



ぼくは、レタリングが不得意だからレタリングを選ばう。枠飾りは手書きの作品にコンピュータで色をつけよう。



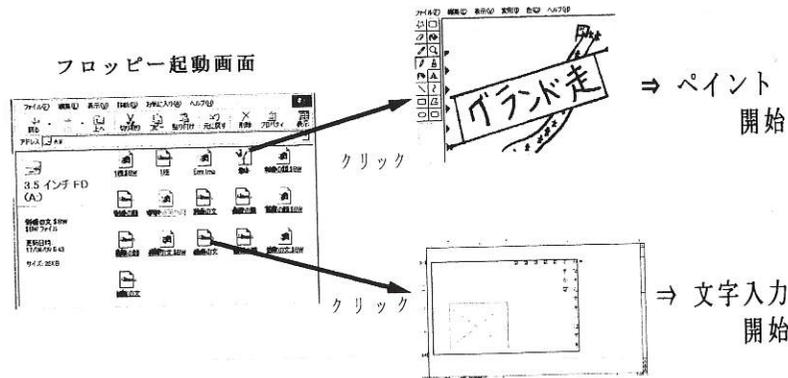
私は、イラストが得意だけどコンピュータのイナ。イラストもやってみたいな。レタリングは自分で作ったものに、コンピュータで飾りをつけよう。

②指導計画

時数	学習内容	教師の支援
1	◆手書きによる学級新聞を作成する。 ・各班1枚(5班で計5枚)	・従来通りに活動させる。
1	◆自分の記事にどのようにコンピュータを活用するか、形態を決める。 ◆パソコンの基本操作を覚える。 ・スイッチの入れ方 ・マウスの使い方 など	・コンピュータ導入のイメージがわからない子には一例を紹介する。 ・低位の児童に合った基本的な操作を教える。
3, 5	◆自分の担当記事に合ったソフトで手書き新聞にパソコンを活用する。 <学習活動の流れ> 作文の活字化→レタリングかざりつけ→活字レタリング→イラスト色塗り→罫線→グラフ	・あらかじめ、児童一人一人の新聞スタイルを把握しておく。 ・自分の新聞スタイルと関係のない場面の説明も聞かせ、教え合えるようにする。
0, 5	◆インターネットの擬似体験をする。 ◆ネットワーク上でできる新聞活動について知る。	・あらかじめダウンロードしたインターネットの一場面を児童に体験させる。 ・こねっとプランの企画による電子新聞を紹介する。

③新聞作成の過程

あらかじめ各個人用の新聞作成用フォームを教師側で準備しておき、それぞれのディスクに保存しておく。児童がデスクを呼び出すと「○○○の文」「△△△の題」と自分の名前の書いてあるファイルが数個でてくる。目的のファイルを選択すると、自分の手書きの新聞に書式が合った画面が現れる。題字やイラストは、手書きのものに書き込みたいと希望した児童には、スキャナで取り込んでおいた画面が現れる



完成した作品はそのまま各自のディスクに上書き保存する。各記事の貼り付け作業(編集作業)は、時間的な問題、コンピュータ機器の性能の問題などから、今回は教師が行った。

④インターネット体験

狩川小学校はまだインターネットが接続されていないため、今回はダウンロードしたインターネットの一場面を教師用パソコンのハードデスクに取り込み、擬似的に体験させた。時間の関係上、全員に操作をさせることができなかったが、プロジェクターで映し出された画面を全員が興味深く見入っていた。

また、こねっと学校新聞の一部も紹介し、完成するまでの過程、発信のしぐみを説明した。児童はその出来映えの素晴らしさに感銘を受けていた。

⑤活動中の児童の様子



13:00 新聞作り開始

渡されたフロッピーを画面に起動し、自分の名前のついたファイルを見て喜びを表していた。

13:05 作文の文字入力開始

あちらこちらで「変な字がでてきた」「あれ消えちゃった」などの声が飛び交う。

14:00 文字の飾り付け開始

文字数が少ないので文字入力は早く終わられた。飾り付けは気に入ったものになるまで何度もやり直していた。

14:30 枠の作成開始

教師の指示を集中して聞いており、上手くクリックしていた。

14:50 イラストの作成開始

幾何学模様との組み合わせで丁寧にマウスを操作していた。色つけで失敗して真っ黒になっても、笑いが飛び交っていた

15:30 グラフ作成

人数が少なかったため、教師用のパソコンで作成させる。本やCDの形で出来るのに驚いていた。

16:00 インターネット体験

クリックして場面が移り変わると、「おー！」という歓声が上がっている

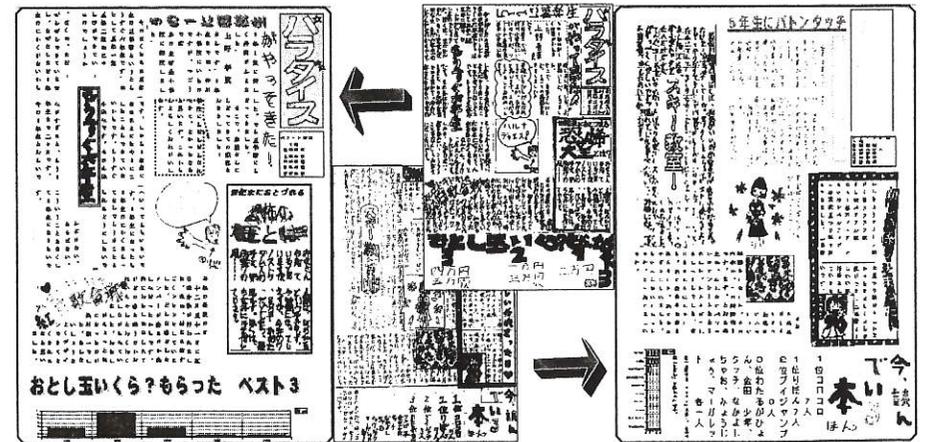


図. 完成したパソコン活用新聞①

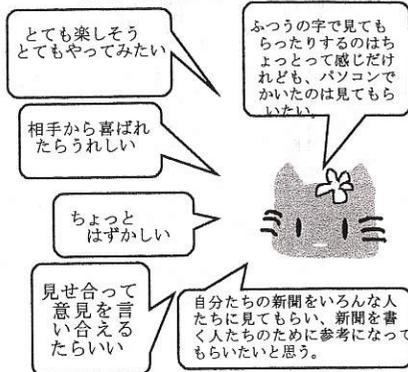
図. 完成したパソコン活用新聞②

質問：手書きの新聞とパソコン新聞を見比べてどう思いましたか。



※イラストはパソコンで児童が作成した作品

質問：あなたの新聞がインターネットで世界の人たちに見てもらえるとしたらどう思いますか



IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) コンピュータを活用しての授業実践では、終始笑いが飛び交う雰囲気の中で、児童達は興味を持って楽しく活動することができた。コンピュータを利用した活動は、長時間にわたっても、活動を飽きさせないものであることがわかった。
- (2) 授業実践が終了しても、「まだやりたい」とパソコン室に数名の児童が残って文字入力やペイントを楽しんでいた。授業で児童が作り上げた文字やイラスト、飾り付け等は、子どもたちに強い印象を与え、コンピュータの持つ独自の表現方法で学級新聞を作成したことで、確実に児童の表現活動における意欲を向上させることを実感することができた。
- (3) 新聞活動は、読み手に評価してもらう前に、自分が満足いく作品が作成されなければならない。作成者の子ども達が、今回の活動で完成した新聞を見て感じた「きれい」「びっくり」「すごい」「ふしぎ」という気持ちは、コンピュータの持つ特性が児童を満足させる表現方法であることを明らかにした。そして、児童達がコンピュータの操作の経験をつめば、読み手も喜んでくれる作品が作れると実感できた。
- (4) コンピュータを活用した多様な表現方法を体験していく中、今までになかった表現方法を発見することで、子ども達の発想力、想像力を引き出したり高めたりすることが可能であるとわかった。
- (5) 情報教育と新聞作りを照らし合わせながら研究を進めていく中で、新聞活動は情報活用能力の育成に深く関わる活動であることが明らかになった。そして、ネットワークを利用すれば、よりグローバルな新聞活動の展開の可能性があることがわかった。

2 今後の課題

- (1) 児童が困難を感じたコンピュータの文字入力の原因は、「経験不足」が最大の原因として上げられる。コンピュータを活用する際の最も基本となる「コンピュータの活用能力」の育成は、系統性を持って低学年から実施していくことが望ましい。そのために、その学校の実態に合ったコンピュータ活用における指導過程の構築が必要である。
- (2) 児童の表現力の育成を考えた場合、当然手書きの活動も疎かにしてはいけない。読み手がより見やすく楽しんでもくれる新聞を完成させるために、コンピュータ活用新聞のよさと手書き新聞のよさをどのように融合させるかを構想し、さらにその構想力をも、児童達に付けさせていきたい。
- (3) コンピュータ活用新聞は、ネットワークの出現により幅の広い交流も可能となる。こういったメリットを最大限に発揮してこそ本当に「パソコンで作った新聞はすばらしい」と言えるのだと思う。子ども達がより操作しやすい指導のあり方を細部にまで構想し、環境の整備を充実させて、世界を舞台とした新聞作りに向かっていきたい。

自分の感情をうまくコントロールできない子どもへの

関わり方についての研究

飯豊町立添川小学校

教諭 佐藤恵子

目次

I. 主題設定の理由とねらい	1
II. 研究の進め方	1
III. 研究の内容	1
1 感情をうまくコントロールできない子どものとらえ方	1
2 アンケート調査の分析	2
(1) アンケート調査について	
(2) アンケートから明らかになった気になる子どもの姿	
(3) 指導に困難を感じた経験	
(4) 効果的な関わり方	
3 事例研究	5
(1) 事例研究を進めるにあたって	
(2) 関わり方の記録	
(3) 事例研究から明らかになったこと	
IV. 研究のまとめ	9
1 研究の成果	
2 今後の課題	

主な参考文献・引用文献

「人間関係の発達心理学3 児童期の人間関係」	小石寛文編	培風館	1995
「カウンセリングの理論」	国分康孝著	誠信書房	1997
「だれもが身につけたい生徒指導・学校教育相談の技法」	全国教育研究所連盟編	ぎょうせい	1992
「学校における教育相談の進め方・考え方」	小学校編	文部省大蔵省印刷局	1992
平成10年度版「青少年白書」		総務庁青少年対策本部	1999
月刊「学校教育相談」(ほんの森出版)		月刊「総合教育技術」(小学館)	
月刊「心を育てる学級経営」		月刊「楽しい学級経営」(明治図書)	

I. 主題設定の理由とねらい

子ども達は、本来誰もがよりよく生きたいと願っている。しかし、最近、自分の感情を押しさえきれずに、すぐかっとなって自分を見失い粗暴な言動に走ってしまう子どもや、自分の感情を適切に表すことができずに、わざと目立つ行動をとったり自分の気持ちを押し殺してしまう子どもなど、以前には見られなかった気になる子どもが増えてきている。子ども達を取り巻く社会の変化に伴い、子ども達の内面は多様化、複雑化してきているように思われる。そのために、いわゆる問題行動ととらえられる行動の背景にある子どもの内面が理解できずに、戸惑いや不安を抱いている教師が増えてきている。

そこで、学級担任として、自分の感情のコントロールが苦手な子どもにどのように関わっていったらよいかを明らかにするために、本主題を設定した。

II. 研究の進め方

1 基礎・理論研究

- (1) 学校教育相談の理論と方法
- (2) 「子どもの荒れ」に関わる文献研究

2 実践研究

- (1) 児童の実態把握と教師の指導に関わるアンケート調査の実施
- (2) 自分の感情をうまくコントロールできない子どもへの関わり方を模索するための事例研究

III. 研究の内容

1 感情をうまくコントロールできない子どものとらえ方

出会ってきた子ども達の様子や基礎・理論研究に基づいて、自分の感情をうまくコントロールできない子ども達の特性を自分なりに4つの観点(A~D)でとらえてみた。そして、実態をより明らかにするためにそれぞれの観点毎に具体的な子どもの姿を示し、アンケート調査を実施した。

A 耐性に欠ける

我慢することが苦手で、じっとしていられなかったり、集中して取り組むことができない。

アンケートに提示した具体的な姿

授業中、勝手に席を立て、自分の席に座ってられない。
 授業中、勝手に席を立て、教室から抜け出す。
 すぐに途中で投げ出してしまい、長続きしない。
 好きな授業には意欲的だが、興味のないことには取り組もうとしない。

B 自己中心的である

常に自分のことばかり考えた言動をとる。

アンケートに提示した具体的な姿

自分の役割以外の事には無関心で、頼まれてもやろうとしない。
 自分の過ちを素直に認めることができず、人のせいにしてしまう。
 見つからなければ何をしてもいいという感覚がある。
 自分のことは言いたがるが、人の話は聞こうとしない。
 すぐ言葉じりをとらえて、あげ足をとる。

C 自分の感情を押しさえきれない

自分の感情をむきだしにした言動をとる。

アンケートに提示した具体的な姿

すぐかっとなって、暴力を振るったり、物に当たったりする。
 すぐかっとなって、相手に暴言をはいたり、なじったりする。
 自分の思い通りにならないと、泣き喚く。
 気に入らないことがあったりすると、反抗的な目つきをする。
 わざと目立つ行動をとって、気を引こうとする。

D 自分の感情を出そうとしない

周囲を気にして自分の感情を押し殺した言動をとる。

アンケートに提示した具体的な姿

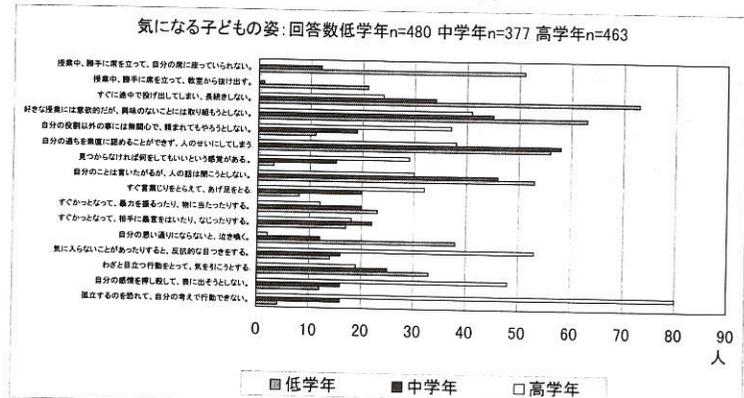
自分の感情を押し殺して、表に出そうとしない。
 孤立するのを恐れて、自分の考えで行動できない。

2 アンケート調査の分析

(1) アンケート調査について

- ① 調査目的 教師が、今の子ども達についてどのような意識を持ち、また、どのように関わっているのかを明らかにする。
- ② 調査対象 西置賜教育事務所管内の小学校教員 302名 (養護教諭を含む)
- ③ 調査時期 12月中旬
- ④ 調査方法 質問紙法 (A3判1枚) によるアンケート (無記名)
- ⑤ 回収率 学校 25校 (100%)
 教員 234名 (77.5%)
- ⑥ 調査内容
 - * 属性 性別・年代・学級担任か担任外
 - * 近頃特に気になる子どもの姿 低学年・中学年・高学年 (選択肢より各5個以内)
 - * これらの子どもに対する指導について困難を感じた経験があるか そのときのことを具体的に (自由記述)
 - * これらの子どもの指導に関し効果的な関わり方 (自由記述)

(2) アンケートから明らかになった気になる子どもの姿



16項目中、上位5項目を挙げると以下ようになる。

<低学年>

- * すぐに途中で投げ出してしまい、長続きしない。 **A**
- * 好きな授業には、意欲的だが、興味のないことには取り組もうとしない。 **A**
- * 自分の過ちを素直に認めることができず、人のせいにしてしまう。 **B**
- * 自分のことは言いたがるが、人の話は聞こうとしない。 **B**
- * 授業中、勝手に席を立て、自分の席に座ってられない。 **A**

回答総数486の内、上記5項目が296(61%)を占め、低学年の気になる子どもの姿であるといえる。 **A** 耐性のなさ、 **B** 自己中心性が特徴と言える。

<中学年>

- * 自分の過ちを素直に認めることができず、人のせいにしてしまう。 **B**
- * 自分のことは言いたがるが、人の話は聞こうとしない。 **B**
- * 好きな授業には、意欲的だが、興味のないことには取り組もうとしない。 **A**
- * すぐに途中で投げ出してしまい、長続きしない。 **A**
- * わざと目立つ行動をとって、気を引こうとする。 **C**

全回答数377の内の上記5項目が208(55%)を占める。 **B** 自己中心性が上位2項目を占め、続いて **A** 耐性のなさが浮き彫りになってきている。また、わざと目立つ行動をとる **C** という項目は、特徴的な姿と言える。

<高学年>

- * 孤立するのを恐れて、自分の考えで行動できない。 **D**
- * 気に入らないことがあったりすると、反抗的な目つきをする。 **C**
- * 自分の感情を押し殺して、表に出そうとしない。 **D**
- * 好きな授業には、意欲的だが、興味のないことには取り組もうとしない。 **A**
- * 自分の過ちを素直に認めることができず、人のせいにしてしまう。 **B**

全回答数463の内、上記5項目で260(56%)を占めている。何と言っても **D** 感情を出そうとしない面が高学年の特筆すべき特徴で、 **C** 自分の感情を押しさえきれず反抗的な目つきとなって表れることも高学年の姿として明らかになった。

全学年部において共通して上位を占めた項目は、以下のようであった。

- 好きな授業には、意欲的だが、興味のないことには取り組もうとしない。 **A**
- 自分の過ちを素直に認めることができず、人のせいにしてしまう。 **B**

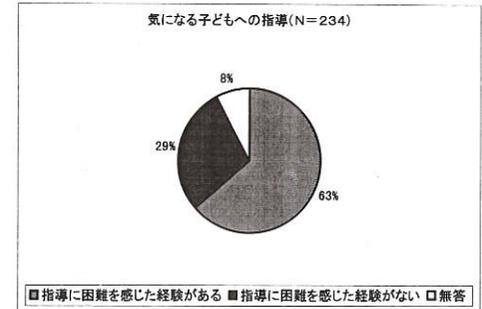
発達段階からして相当の差があると考えられる小学校において、この2項目が共通しているという点に注目したいし、指導者としても心すべき点であると思う。

各学年部毎、上位を占めた特徴的な項目から、具体的な子ども像としてとらえた教師の意識を把握することができた。

(3) 指導に困難を感じた経験

全体の63%に当たる149人が指導に困難を感じた経験があると回答している点に注目したい。その後の自由記述欄には、気になる子ども達の実態や指導者としての悩みが面々と綴られており、「新しい荒れ」と言われる現場の生の姿を垣間見る思いであった。

※(補助資料1)



(4) 効果的な関わり方

自分の感情をうまくコントロールできない子どもへの効果的な関わり方について自由記述で問うたところ、143人(61%)から貴重な意見を頂くことができた。これらの意見を以下のように分類してみた。

子どもとの信頼関係を大切にする

- * じっくり話を聴く * 教師の思い(考えを)を話す * 一緒に遊ぶ、活動する
- * 心に寄り添い、共感的態度で接する * スキンシップを大切にする
- * カードやノート、時には文面でコミュニケーションを図る * 時間をかける

子どもの良さを認めて誉め、全体に広げる

家庭との連携を図る

教師間の共通理解と連携を図る

学級経営を充実させる

- * 周りを関わらせての話し合い * しっかりしたルール作り
- * 意見を言い合える人間関係作り(構成的グループ・エンカウンターを含む)

指導法を改善する

- * 個別指導の充実 * T T の導入 * 集中させ意欲や関心を高めるための工夫
- 譲れないものは譲れないという毅然とした態度で臨む

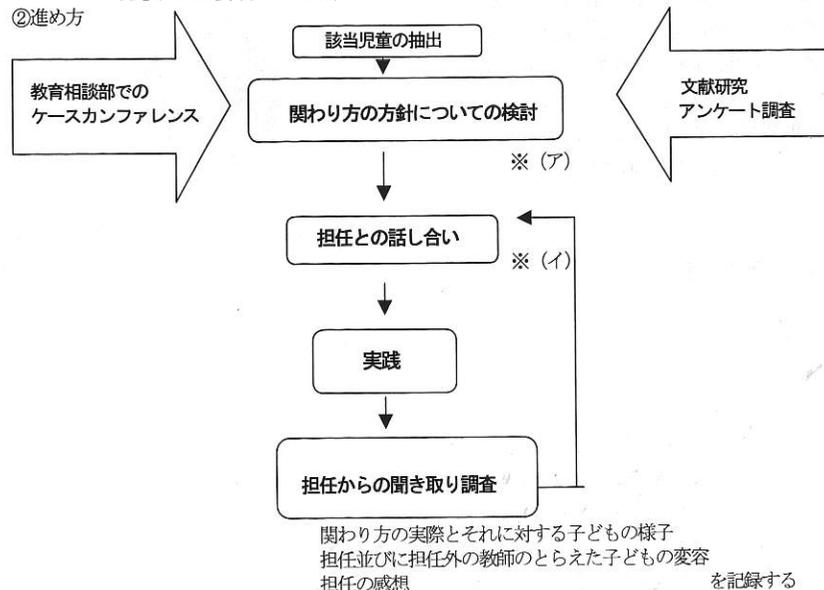
具体的事例に即し、子どもの変容まで綴られたものも多くあり、先生方の日ごろの熱心なご指導に敬服するものであった。※(補助資料2)

3 事例研究

(1) 事例研究を進めるにあたって

①目的 自分の感情をうまくコントロールできない子どもに対して、教師がどのように関わっていったらよいかを明らかにする。

②進め方



※(ア) 関わり方の方針を立てるにあたって

基本的な考え方

- ・問題と思われる行動はその子にとって必要なことととらえる。
- ・行動そのものよりも行動の背景にある気持ちを大切に。
- ・原因探しではなく、その子にとって今できること、できそうなことを考える。

※(イ) 担任との話し合いを進めるにあたって

留意点

- ・これまでの担任の取り組みの中でよかったと思われる対応を伝える。
- ・あくまでも担任の意向を大切に、担任ができること、できそうなことから始めていく。
- ・管理職、その他の教員からの協力を得る。

③期間 平成10年度 3学期

(2) 関わり方の記録

1年A児(男)

A児の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・自己中心的で自分のことは言いたがるが人の話は聞こうとしない。周囲の状況を受け入れないで、ひたすら自分の世界に入っておしゃべりをしたり、授業中でも歌を口ずさんだりしている。 ・自分の思い通りにならないと泣き喚くことがある。例えば、遊びの中でもオニになると声をあげて泣き、オニはいやだと周りに訴える。また、授業中わからないことがあると、“わからないわからない”とパニック状態に陥る。
-------	---

関わり方の方針	<ul style="list-style-type: none"> ・激しい感情表現をプラス面での自己主張ととらえる。 ・今までの役割でない役割を引き出していく。 ・困ったときに泣いたり喚いたりパニックを起こすことで解決するのではなく、別の解決方法を選び、泣き喚かなくてもいい方法を考えていく。
---------	---

担任との話し合いから	<ul style="list-style-type: none"> ・入学以来A児のダメなところにはばかり目が行き、いいところをなかなか見てやれなかったように思う。 ・常にしゃべり続けるA児についての担任の見方: 家庭でも学校でも話をじっくり、ゆったり聞いてもらった経験がないのではないかと聞いてもらえないことが満たされない心につながっていたのでは。 →担任自身のA児に対する見方の変容 ・今まで注意をするために話しかけることはあっても、本人の立場に立って話しかけていたことはほとんどなかったのではないかと。 ・A児は、体格もパワーもありエネルギーをもてあましているところがある。そのエネルギーを何かに向けさせていきたい。
------------	--

担任の関わりと児童の様子	<ul style="list-style-type: none"> ○意欲的な挙手を認めてやり、意図的に指名してやることで満足感を持たせるようにする。 →発表の後、少しの時間は満足して授業に取り組める。 ○勉強中、自分がわからないとパニック状態(わからないわからないと大声で泣き喚く)になるのでその前こわらないうちの自分なりの解決方法(先生を呼ぶ)を習得させるようにする。 →先生を呼ぶがパニック状態にさほど変わりはない→“泣いてもいいんだよ”と一声かけることによりパニックの時間が短くなった。 →担任が話している間は聞ける。 →喜んで仕事に取り組む。 ○A児が喋り出す前に教師から話しかけるようにする。 ○意図的に仕事を頼み、やり遂げることによって満足感を持たせるようにする。 ○リラクゼーションプログラムの導入。
--------------	--

A児の変容	<ul style="list-style-type: none"> ・担任が話す間、自分は話すのを待てるようになった。 ・仕事熱心で、担任から言われた仕事は最後までやり遂げるようになった。 ・徐々に周囲の状況を受け入れながら行動できる様子がうかがえる。
-------	--

事例研究に取り組んでみての担任の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・この事例研究を試みたことで、A児の悪いところには気がつかなかった自分に気づき、A児に対する見方が変わった。 ・事例研究をしているということで、自分一人ではなくみんなに見てもらっているという安心感があり、気分的にも楽であった。 ・事例を検討し、アドバイスを受けることで指導を見直すきっかけとなり、今までの指導に迷いを感じていた自分自身の吐き口となった。
--------------------	--

3年B児(男)

B児の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・わざと目立つ行動をとり、気を引こうとする。 ・自分でできそうなことも人に頼ってやらないことがある。 ・姿勢の乱れ、手はずなどが頻繁で、ひとつの事に集中できる時間が少ない。 ・自分の都合のいいように事実ではないことを述べることもある。 ・周りを気遣い、素直に言動に表せないことがある。 		
関わり方の方針	<ul style="list-style-type: none"> * 人に頼らないで、自分でできることを増やしていく。 * 1対1の関わりを意図的に設定し、話すことにより気持ちを落ち着かせるようにする。 * 集団の中で認められる存在となれるよう援助していく。 		
担任との話し合いから	<ul style="list-style-type: none"> ・1月下旬落書事件発生：階段の手すり下壁面に鉛筆で線の落書 →朝、自分が悪くないのに親に怒られて登校、友達にキスをするなど不可解な行動。事件が発覚し大騒ぎになっても自分は知らん顔で傍観。担任に言われて自分の行動を認める。 まだまだ幼い面があり、考えて行動できないところがある。 ・笑われてもいいから目立つ行動をとる。スキー教室でも叱られるような目立つ行動をわざととっている。 →スキップを心掛け、じっくり話を聴いてあげる場がやはり必要 		
担任の関わりと児童の様子	<table border="1"> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> ○集団の中で認められるきっかけをつかませるようにする。 愛称での呼び名をやめて“〇〇君”と呼ぶ。 良いことをして、他に認められる場をつくる。 行事の取り組みで一人ボツンとしていた時、他の子に声がけさせる。 ○面談で家族に誉めることを依頼する。 ○担任がわざとべたべたして話すよう心掛ける。 ○連絡帳の字を丁寧に書いた日に大いに誉めて全体に広めた。 ○良いことをどんどん知らせていく中で、学校での気になる出来事も知らせるようにする。 </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> →自分も対等な立場で接するきっかけをつかんだ。 →良いことをしたり、一生懸命活動したりして、友達に認められた。 →母に誉められたことをとても喜び担任に教えた。 →友達にべたべたするようなことは減った。いやがる素振りを見せながらも担任に近づくようとする。 →継続して丁寧に書きつけ、毎日担任からはなまるをもらうのが日課となる。また、励まし点検してくれる友達も見られるようになった。 </td> </tr> </table>	<ul style="list-style-type: none"> ○集団の中で認められるきっかけをつかませるようにする。 愛称での呼び名をやめて“〇〇君”と呼ぶ。 良いことをして、他に認められる場をつくる。 行事の取り組みで一人ボツンとしていた時、他の子に声がけさせる。 ○面談で家族に誉めることを依頼する。 ○担任がわざとべたべたして話すよう心掛ける。 ○連絡帳の字を丁寧に書いた日に大いに誉めて全体に広めた。 ○良いことをどんどん知らせていく中で、学校での気になる出来事も知らせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> →自分も対等な立場で接するきっかけをつかんだ。 →良いことをしたり、一生懸命活動したりして、友達に認められた。 →母に誉められたことをとても喜び担任に教えた。 →友達にべたべたするようなことは減った。いやがる素振りを見せながらも担任に近づくようとする。 →継続して丁寧に書きつけ、毎日担任からはなまるをもらうのが日課となる。また、励まし点検してくれる友達も見られるようになった。
<ul style="list-style-type: none"> ○集団の中で認められるきっかけをつかませるようにする。 愛称での呼び名をやめて“〇〇君”と呼ぶ。 良いことをして、他に認められる場をつくる。 行事の取り組みで一人ボツンとしていた時、他の子に声がけさせる。 ○面談で家族に誉めることを依頼する。 ○担任がわざとべたべたして話すよう心掛ける。 ○連絡帳の字を丁寧に書いた日に大いに誉めて全体に広めた。 ○良いことをどんどん知らせていく中で、学校での気になる出来事も知らせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> →自分も対等な立場で接するきっかけをつかんだ。 →良いことをしたり、一生懸命活動したりして、友達に認められた。 →母に誉められたことをとても喜び担任に教えた。 →友達にべたべたするようなことは減った。いやがる素振りを見せながらも担任に近づくようとする。 →継続して丁寧に書きつけ、毎日担任からはなまるをもらうのが日課となる。また、励まし点検してくれる友達も見られるようになった。 		
B児の変容	<ul style="list-style-type: none"> * 集団の中で認められたという充実感から生活全般に落ちつきが見られるようになり、注意される回数も減った。 * 担任が事ある毎に学級の中でB児のよさを取り上げたり、個別に話し合う機会を増やしたことで学級内にB児の居場所ができたようだ。そのためか身体症状を訴えて保健室に行くことが少なくなった。 		

事例研究に取り組んでみての担任の感想

- ・これまでの自分の取り組みについて振り返る機会となり、有意義であったと思う。
- ・関わり方についてアドバイスされたことにより、やってみようという気持ちになって、意欲的に取り組むことができた。

6年C児(男)

C児の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの整理ができなかったり、別のことをしているなど、友達と歩調が合わない時が多い。 ・思いこみが強く、些細なことで喧嘩をしたり、泣いたりすることが多少ある。 ・落ち着いて話すと、聞き入れることができる。 		
関わり方の方針	<ul style="list-style-type: none"> * 自分で自分のことがわかる年齢であること考慮して、かっとなる前と後の自分自身の気持ちの違いを自覚させ、感情トレーニングしていくを試みる。 * 集団の中で周りに受け入れてもらえないことへの不満の解消を図る。 		
担任との話し合いから	<ul style="list-style-type: none"> ・関わり方の上でのアドバイスとして できた時に焦点をあて、カッとなりそうだったがパニックを起こさなかった時の事など、できた時のことを思い出させて語らせてみては？ (どうしたら気持ちが落ち着いたか・そのときどんな気持ちだったか) →とりあえずやってみようという担任の意欲 		
担任の関わりと児童の様子	<table border="1"> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> ○カッとなりそうだったがパニックを起こさなかったことが近頃なかったことで、“近頃、がんばってるな。良くなってきたな。”と話しかけるようにした。 ○パニックを起こさなかった時のことを思い出させようと話し掛けるようにした。 ○体育の時間、帽子をががないのでふてくされかけたが、友達の声かけに応じ、楽しそうに学習に参加できたので、直後、その時の気持ちを聞いてみた。 ○音楽の時間、自分の席だと思いこんでいたところに友達が座っていたので、一旦ふくれたが、長引くことなく後の学習に参加した後、その時の気持ちを聞いてみた。 ○嬉しかった気持ち、きちんとできた時の心地よさを忘れさせることなく、タイミングよく誉めていくようにする。 </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> →言われても思い当たる節がなく、ピンと来ない。 →今のこととこれからの事のみが大切で、以前のことは意識になく思い出せない。 →友達に声をかけられて嬉しかったし、学習に参加できてよかったという気持ちを担任に話した。 →翌日、自分がふくれた理由を担任にきちんと話した。 </td> </tr> </table>	<ul style="list-style-type: none"> ○カッとなりそうだったがパニックを起こさなかったことが近頃なかったことで、“近頃、がんばってるな。良くなってきたな。”と話しかけるようにした。 ○パニックを起こさなかった時のことを思い出させようと話し掛けるようにした。 ○体育の時間、帽子をががないのでふてくされかけたが、友達の声かけに応じ、楽しそうに学習に参加できたので、直後、その時の気持ちを聞いてみた。 ○音楽の時間、自分の席だと思いこんでいたところに友達が座っていたので、一旦ふくれたが、長引くことなく後の学習に参加した後、その時の気持ちを聞いてみた。 ○嬉しかった気持ち、きちんとできた時の心地よさを忘れさせることなく、タイミングよく誉めていくようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> →言われても思い当たる節がなく、ピンと来ない。 →今のこととこれからの事のみが大切で、以前のことは意識になく思い出せない。 →友達に声をかけられて嬉しかったし、学習に参加できてよかったという気持ちを担任に話した。 →翌日、自分がふくれた理由を担任にきちんと話した。
<ul style="list-style-type: none"> ○カッとなりそうだったがパニックを起こさなかったことが近頃なかったことで、“近頃、がんばってるな。良くなってきたな。”と話しかけるようにした。 ○パニックを起こさなかった時のことを思い出させようと話し掛けるようにした。 ○体育の時間、帽子をががないのでふてくされかけたが、友達の声かけに応じ、楽しそうに学習に参加できたので、直後、その時の気持ちを聞いてみた。 ○音楽の時間、自分の席だと思いこんでいたところに友達が座っていたので、一旦ふくれたが、長引くことなく後の学習に参加した後、その時の気持ちを聞いてみた。 ○嬉しかった気持ち、きちんとできた時の心地よさを忘れさせることなく、タイミングよく誉めていくようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> →言われても思い当たる節がなく、ピンと来ない。 →今のこととこれからの事のみが大切で、以前のことは意識になく思い出せない。 →友達に声をかけられて嬉しかったし、学習に参加できてよかったという気持ちを担任に話した。 →翌日、自分がふくれた理由を担任にきちんと話した。 		
C児の変容	<ul style="list-style-type: none"> * 喧嘩をしたり泣いたりすることが徐々に減ってきた。 * 自分のことについて、今の気持ちを相手にわかるように説明できるようになってきている。 * 泣いたりふてくされたりしたときの立ち直りがはやくなってきた。 		

事例研究に取り組んでみての担任の感想

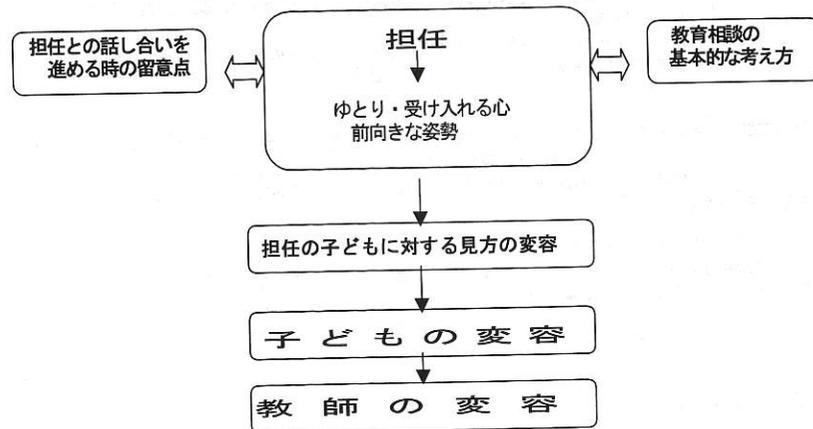
- ・C児について、「できた時の気持ちを語らせていく」という関わり方もあるということを教えられたとき、自分にとってなるほどという関わり方だったので、すっと受け入れられたように思う。
- ・今まで、どうしてもその場その時の指導であったが、事例研究に取り組むということで、長期的な見方でC児に関わられたと思う。

(3) 事例研究から明らかになったこと

私達教師は、問題を抱えた子が目の前にいると、問題の解決を急ぎ、できない原因を探ったり、それを取り除くことに目をとられがちになる。また、アンケートからもわかるように教師自身懸命に取り組んでいるにも関わらず、具体策が見つからなかったり、一人で抱え込んでいることもある。

そこで今回の事例研究では、教育相談の考え方を基本に、担任のよさをできるだけ生かし、担任ができることから具体的な話し合いを進めるようにした。そのことが担任自身に精神的なゆとりを生み、見通しを持って、取り組むことにつながったものと思われる。

また、学校全体の協力を得ることができたことも事例研究を進める上で有効であった。



IV. 研究のまとめ

1 研究の成果

教師へのアンケート調査から明らかになったこと

自分の感情をうまくコントロールできないという視点で、今現在の子どもの姿に対する教師の意識が把握できた。同時にこれらの子ども達への指導に困難を感じながらも、効果的な関わり方で日々指導、援助に当たっている教師の実態を知ることができた。

事例研究から明らかになったこと

今まで自分の感情をうまくコントロールできなにとらえていた子どもに対して、各々の実態を十分把握した上で、**教育相談の基本的な考え方** (p. 6※ア) を以って関わっていくことが、担任の子どもに対する見方を変容させ、更に子どもを変容させる上で大切である。

また、担任と**話し合いを進めるにあたっての留意点** (p. 6※イ) を念頭に関わっていくことが、担任の精神的な負担を軽減し、意欲的に子ども達に指導、援助を進めていく手助けとなった。

2 今後の課題

今回は、教育相談部におけるケースカンファレンスを得、時間的にもある程度ゆとりを持って関わることが可能であった。今後、学校現場に戻っても、成果を確かなものにするため、実践を積み重ねていきたい。時間的に追われる日々の学校生活の中で、多様な子ども達の実態の的確な把握や職場の人間関係づくり等にも心を砕いていきたいと思う。

自分の感情をうまくコントロールできない子どもに対する時、学校だけの関わりではどうにもならない面が多い。家庭との連携のあり方も残された課題である。基本的には、教育相談の考え方で臨むことが大切であると考えているが、今回の研究では明らかにできない部分であった。また、教育相談部での研修を通して、他機関との連携を考えていくことの必要性を感じた。

小学校における学校教育相談の在り方に関する一考察

一人ひとりの教師の心の中に相談室を

中山町立長崎小学校

教諭 佐藤 和

目次

I 主題設定の理由	1
II 研究のねらい	1
III 研究の方法	1
IV 研究の内容	
1 学校教育相談とは何か	
(1) 学校教育相談の捉え方	1
(2) 学校教育相談の担い手	2
2 教育相談担当は何をすべきか	
(1) 教育相談担当の役割	3
(2) 学校教育相談の活動内容	3
(3) 研修会の企画・運営	4
(4) プロジェクトチームの校内の調整	4
(5) 専門機関との連携	5
3 学級担任の行う教育相談	
(1) 学級担任の姿勢	5
(2) 学級担任の行う教育相談の形態	5
(3) 学級担任の教育相談の活動計画	7
4 教育相談を生かした学習指導	7
V 研究のまとめ	9
1 研究の成果	
2 今後の課題	
3 おわりに	

主な参考文献・資料

カウンセリングの理論	國分康孝著	誠信書房	1997
学校教育相談理論化の試み・具体化の試み	大野精一著	ほんの森出版	1997
カウンセリングを生かした授業作り	松原達哉編著	学事出版	1998
授業に生きるカウンセリング・マインド	尾崎勝・西君子共著	教育出版	1996
遊戯療法の世界	東山紘久著	創元社	1989
月刊「学校教育相談」		ほんの森出版	1998
学校教育相談・初級講座	小泉英二著	学事出版	1990
子どもの心を育てるカウンセリング	国分康孝編著	学事出版	1998
授業研究入門	稲垣忠彦・佐藤学著	岩波書店	1996
臨床教育学入門	河合隼雄著	岩波書店	1995
学ぶ・教える・かかわる 自己教育力をはぐくむ教育行動の心理学	倉戸ツギオ・鈴木直人・三根浩共著	北大路書房	1995
グループ・プレイングの実践(小学校編)	島根県立浜田教育センター		1998

I 主題設定の理由

現在の小学校においては、児童のとりまく様々な環境の変化から、低学年のうちから問題を抱える児童が少しずつ増えているように感じられる。特に、集団生活を苦手とする児童が増えており、それとともに学校生活への不適応状態に陥る児童も増えているようである。また、普段は、学校生活に適応しているかのように見えても、人との関わり方において自信を持っていないまま過ごしていたり、無理して(自分を抑えて)周りの友だちに合わせて行動していたりする児童も多いと思われる。

このような現状を改善していくためには、次のようなことが必要だと考えられる。

*全ての児童に学校の教育活動全体で自己実現を可能にしたり、人間的なふれあいを通して存在感を味わうことを支援すること
「**開発的教育相談**」

*児童一人ひとりの問題の兆候となる様子をいち早くとらえ、問題を未然に防ぐための指導や援助を行うこと
「**予防的教育相談**」

*問題を持つ児童を把握し、学校職員が共通理解のもとで問題を解決するための適切に援助を行うこと
「**治療的教育相談**」

上記の教育相談活動が具体的にどのような理論のもとに行われるか、また、それぞれが日常的に円滑に行われるためには、教育相談担当として、また学級担任としてどうあればよいかを探りたいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

- 1 学校教育相談の考え方、理論をまとめる。
- 2 校内の教育相談を活性化させるための教育相談担当の役割を探る。
- 3 学級担任として学級経営に教育相談をどのように生かすかを探る。
- 4 学習指導に教育相談的考えを生かす方法を探る。

III 研究の方法

- 1 基礎・理論研究
 - (1) 学校教育相談の理論と方法の文献研究
 - (2) カウンセリングの理論と技法
- 2 実技研修
 - (1) カウンセリング研修会への参加により、技法を学ぶ。
 - (2) 所内の研修会での実技研修により、学校教育相談に活用できるようにする。
(ロールプレイ、児童理解のための各種心理テスト、描画法、構成的グループ・エンカウンター、グループワークトレーニング、催眠療法など)
 - (3) 電話相談・来所相談などの具体的な相談場面でスーパーヴァイズを受けながら対応について研修する。
- 3 実践研究
 - (1) 小学校における機能的な学校教育相談の活動計画の作成
・教育相談係の役割の明確化 ・年間活動計画の作成
 - (2) 学級担任の行う教育相談
・教育相談活動計画の作成
 - (3) 教育相談を生かした学習指導
・授業を組み立てる上での留意点 ・学習の個性化に留意した授業の分析

IV 研究内容

1 学校教育相談とは何か

(1) 学校教育相談の捉え方

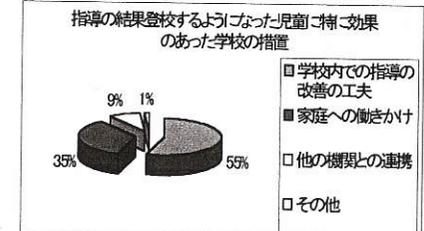
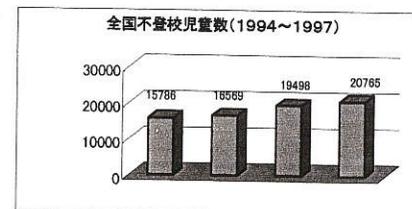
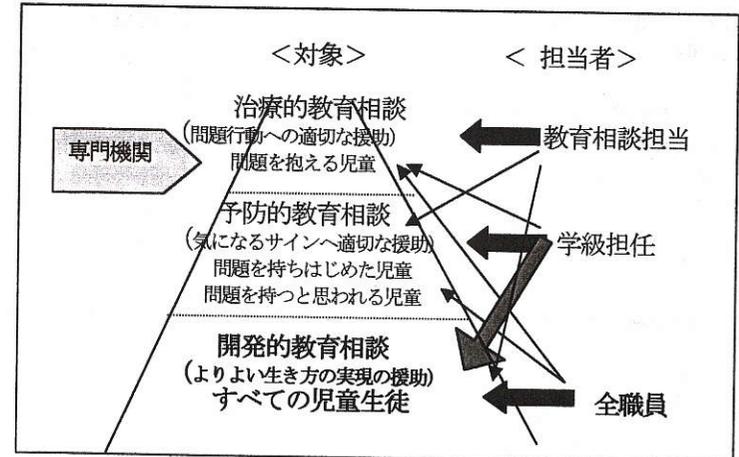
学校教育相談とは、すべての児童が自分および自分の問題について理解し、どのようにすればその問題を解決できるかについて考え、自らの持つ力によって解決することを援助する活動であると捉え

た。それは、すべての教師がすべての児童を対象に行うものである。つまり、児童一人ひとりが生き生きと活動し、自分らしさを発揮できるような自己実現を援助する活動である。これまで学校における教育相談は、いじめや不登校などの問題に対処的、治療的な形で行われてきた。その結果、一部の教師が問題を抱える児童に対して行う活動というイメージが強かった。しかし、問題が発生してからでは、根本的な解決にならないばかりか、今後ますます問題を抱える子の増加に対処していくには限界があると考えられる。したがってこれからは、問題行動の発生を未然に防ぎ、すべての児童の人格的成長を指導・援助するような予防的、開発的な教育相談、つまり心を育てる教育相談を積極的に進めていく必要がある。(図1参照)

専門機関の相談とは異なり、学校教育相談は、教師が授業中や休み時間、掃除、給食など「いつでも、どこでも、だれにでも」行うことができる。また、個別だけでなく集団を対象にできる特長がある。特に小学校においては、学級担任制であるため、児童の実態を早期に把握し、早期指導ができる。平日頃からの学校生活における教師と児童との既存の人間関係を生かすことができる。

さらに文部省生徒指導資料集には「児童の自己実現を援助することは、学校教育の目的に合致するものである。この意味から、教育相談は、教育の原点に迫るための基本姿勢として大切であると言うことを共通理解する必要がある。」とある。教育相談活動は学校教育を根底から支えるものであり、全職員が教育相談の重要性を認識し、共通理解に基づいて行われるべきである。

< 図1 >



< 図2 >

(2) 学校教育相談の担い手

文部省の97年度「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」によると、小学校においては不登校が増加し、また原因も多様化していることがわかる。しかし、校内での指導や援助が効

< 図3 >

果をあげているのを見逃せない。年度内に再登校できるようになった児童に対し、特に効果のあった学校の措置として「学校内での指導の改善工夫」が半数以上占めている。中でも、「研修会や事例研究会をすることにより、全教師の共通理解を図った」ということが特に効果があがった学校の措置と感じているのが分かる。(図2、3補助資料参照)以上のことから、問題を持つ子どもに対して、担任一人が抱え込まず、学校全体であきらめず取り組むことが大切であるといえる。

すべての学校に相談室が必要だと言われているが、一人ひとりの教師の心の中に相談室が必要なのではないか。かならずしも学校に相談室とか、カウンセリング理論、技法の専門家が必要なわけではない。教師は、カウンセラーにはなれないし、サイコセラピストになれないのも事実である。学校の中で一人ひとりの教師が教育相談の重要性を認識し、一人ひとりの児童の持つ力を信じ、その力が最大限に発揮されるように日々の教育活動を実践することが大事なのである。そうすることが、問題を抱えている子、持つと思われる子、また元気である子に対して人格的成長への援助になると思われる。

<図4>

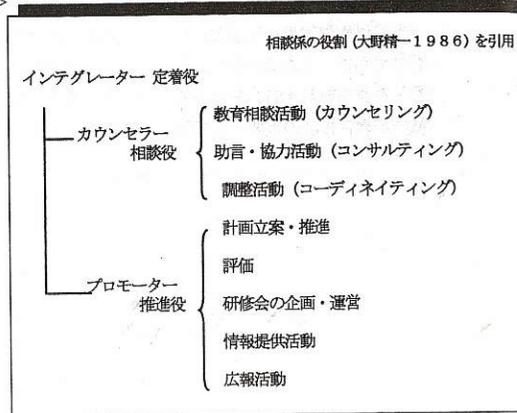
2 教育相談係は何をすべきか

(1) 教育相談係の役割

教育相談係の大きな役割としては、右記のように校内の相談役と推進役に分けられる。また、開発的、予防的な教育相談を学校に定着するように働きかけるのも重要な役割である。(図4)

(2) 学校教育相談の活動内容

教育相談活動がねらいをもって計画的に行われるために下記のような教育相談活動案を作成した。



小学校教育相談活動案

対象	ねらい	具体的活動内容
全職員	<ul style="list-style-type: none"> 職員の教育相談に対する共通理解 いじめ、不登校の発生予防のための学級作り 問題を抱える児童の早期発見 問題を持つ児童への対応の仕方 児童理解のための方法 	全体研修 <ul style="list-style-type: none"> 構成的グループ・エンカウンター ロールプレイ 事例研修会(インシデントプロセス法) ブレインストーミング グループワークトレーニング
		希望研修 <ul style="list-style-type: none"> 児童理解のための各種心理テスト(交流分析、描画法、バウムテスト、風景構成法、スグイグル、エゴグラム、エニアグラム、箱庭療法など)
		資料配布 <ul style="list-style-type: none"> 開発的・教育的相談の実施プラン 過去の事例や不登校、いじめに関する資料などを配布
		教育相談便りの発行 <ul style="list-style-type: none"> 教師向け(随時発行)
学級担任	<ul style="list-style-type: none"> 問題を抱える児童のいる学級担任の負担をできるだけ軽減し、よりよき方向にむかうよう、援助する。 児童理解の手だて 問題行動への対応の仕方 保護者との連携の仕方 	助言・協力 <ul style="list-style-type: none"> 学級担任の相談に応じる。
		面接・家庭訪問 <ul style="list-style-type: none"> 担任の依頼に基づき、面接や家庭訪問を行う。
		各種検査調査 <ul style="list-style-type: none"> 各種検査を用意し、計画的に実施、または担任の要望に基づき実施。
		情報の管理、提供 <ul style="list-style-type: none"> 児童の諸資料を管理し、必要に応じて提供する。
		関係機関との連携 <ul style="list-style-type: none"> 様々な問題に対応できるように関係機関を把握しておく。

教育相談係員	校内の教育相談を実際に組織的に展開させる。 ・校内の教育相談活動の活性化 ・プロジェクトチームの調整	教育相談部会(定期的、随時)	<ul style="list-style-type: none"> 情報をできるだけ早くキャッチできるように定期的な教育相談部会を開く。また、問題が生じた場合、随時開く。 問題に応じて必要なメンバーを編成する。
		プロジェクトチーム	・教職員にアンケート調査を行い、必要だと思われる研修会を企画し運営する。
		校内の研修企画・運営	・教育相談部員が教育相談に関する各種の研修会などに参加し、研修内容を全職員に報告する。 ・必要だと思われる研修会の情報を提供し、参加するよう促す。
教室へ行けない児童	<ul style="list-style-type: none"> 児童と担任とのつながりを図る 安心していられる場所の確保 担当者の調整 	教室以外の相談活動の開設の準備 <ul style="list-style-type: none"> 保健室 会議室 図書室など 	・校内で治療的な教育相談活動が必要な児童の心の居場所となる場を確保する。
		外部研修会	・担当できる職員と常に連携し、不適応状態の児童が学校生活を安心して送れるように援助・指導していく。
		運営	

(3) 研修会の企画・運営

教育相談の共通理解を図るためには、校内の研修会が必要である。これまでの教育相談の研修会は、どちらかという受け身で、重苦しい雰囲気になりがちであった。これからの研修会は、その場で確かめ創造することを重視する研修会にしたい。そのために「元気の出る・ためになる・おもしろい」研修会を企画したい。そのための配慮として下記のことが考えられる。

- *校内の状況把握・研修ニーズの見定め・実施のタイミング
- *出席者全員の成長を図ることができる内容
- *理解だけでなく、実践力を養う内容
- *守秘義務の徹底 以上のことを考え、校内研修会として、3つの試案を作成した。

A 第一回校内研修会(構成的グループ・エンカウンターにブレインストーミングを取り入れて)

目的「児童理解」「支え合う職員の間関係作り」

方法 1 構成的グループ・エンカウンター「探偵物語」

2 ブレインストーミング 「感情と行動のブレインストーミング」

- ・「うそをつく子どもの背景にある気持ちを考えてみる」
- ・「不登校の児童を学校に連れてこようとする教師の背景にある気持ちを考えてみる」

B 子どもを語る会

目的「子どものよさを見つける教師の見方」

方法 子どもの困ったところを出し合う会ではなく、良さを出し合う会にする。担任が問題と感じている子どもをピックアップし、事前に提案して全職員から良さを見つけてもらう。教師の見方が変われば子どもが変わる。

C 事例研修会(全体研修会または学年会)

目的 事例に関し、組織としての具体的で実践的な指導援助を考える。

方法 短時間事例法

具体的な進め方は補助資料参照

(4) プロジェクトチームの校内の調整

学級担任が、問題解決のための指導、援助に困難を感じている児童に関しては、プロジェクトチームを編成して対応する。プロジェクトチームでは、問題を抱える児童に対して具体的な対応の仕方を

検討し、相談の窓口となる担当者が実際に役に立つ内容を話し合う。親との面談、家庭訪問、電話での対応の仕方、誘い掛けの仕方、学校に来たときの対応などを具体的に話し合い、適切な指導、援助ができるようにする。

(5) 専門機関との連携

教育相談係の重要な役割として専門機関との連携がある。連携とは、学校で何をすべきか、専門機関では、何ができるのかを互いに協力して、見出すことである。専門機関に関しては、常日頃から情報を得ておくことが必要である。いざというとき、学校だけで抱え込まず、専門機関と十分な協議、連携が治療的カウンセリングを促進する例が多い。

専門機関との連携における留意事項

- * 日ごろから専門機関の情報を得たり、直接訪問したりして各機関の専門性を把握しておくこと。
- * 学校の方針を理解し、安心して相談できるような専門機関を選ぶようにすること。
- * 必要と感じたときには、専門機関に積極的に協力や援助を求める姿勢、行動が大切。

3 学級担任の行う教育相談

(1) 学級担任の姿勢

学級担任は、あらゆる場をとらえて教育相談活動を日常的に行うことができる。その際、以下のよな姿勢で児童に接することが必要である。

人間観	人間の自己成長力を信頼する。児童は、本来、自ら学ぼうとする意欲をもち、自ら、成長しようとする力をもつ存在である。
態度	児童の心を聴く耳と心をみる目をもち、自らも、心を開き積極的に率直に児童と関わる。受容・共感的態度を大切にするとともに、自己を率直にありのまま語る。
児童理解	日常の主観的・客観的・共感的理解を通して、児童の一人ひとりの個性を大切に、限りなく伸長するための支援をする。特に学業、進路等について自己理解を深めるようにする。
学級経営	教育相談を深めるためには、学級経営を基盤としなければならない。一人ひとりの児童の個性を伸張するとともに、集団の意識を高めることに努める。親和的、許容的雰囲気のもとで教師と児童、児童相互の温かい信頼感のある人間関係を育成する。
教育活動	各教科、道徳、特別活動、その他の教育活動においても教育相談の考えを生かすようにする。

近藤馨一「学校における教育相談」1993を参考にして作成

学級担任は、心身の状態を整え、落ち着いた態度で接し、また、子どもの立場で理解し、教師の立場で指導援助する。誤った行動は、見逃さず、毅然とした臨むこと。許せないことは、児童に伝えていくことを躊躇してはならない。

(2) 学級担任の行う教育相談の形態

① チャンス相談

児童との接触の機会を捉えて、教師のほうから、ある程度意図的に相談への導入を図るもの。自主来談のきっかけになる場合もある。また、児童との親和的関係を築くにも有効である。

- ・ 提出物を届けにきたときや廊下ですれ違うときなどを捉えて行う。
- ・ 給食時に各班毎担任が回り、一緒に食べながら行う。

② 呼び出し相談

調査や作文などの資料をもとにして意図的に教師が主導的に始める相談。相談の関わりが、教師からの詰問型にならないようにする。進め方によっては、問題の予防的効果も期待でき、児童の相談への動機づけを高めることができる。

・ 問題を抱える子や気になる子に対して、放課後、休み時間長期休業中などを利用して相談を行う。

③ 定期教育相談

学校や学年、学級計画としての学級全員の個別相談である。話題をできるだけ広く取って児童理解に役立てるようにする。さらに自主来談のステップにもなるように配慮して関わる必要がある。

・ ゆとりの時間、放課後を利用して行う。(教育相談週間・月間など)個別に行ってもかまわないが時間がかかるので日直当番、生活班、地区毎などのグループカウンセリングなどもできる。

④ 自主来談による教育相談

児童から自発的に相談に訪れるものである。すでに信頼関係があるという一方的な思い込みをしないように配慮する。

・ 小学校では少ないと思われるが、子どもが困ったときには、「いつでも」相談に来れるような関係を常日頃から作っておくのが望ましい。

⑤ 遊びを通しての教育相談 (プレイセラピー)

小学校においては、発達段階から考えて、遊びを介しての教育相談はとても重要なものである。遊びには、下記のような働きがある。

* 遊び自体に治療的な機能が備わっている

遊びが子どもの自己表現のための媒体であり、感情表出や感情表現の手段である。遊びによってカタルシスが得られる。

* 遊びは、子どもと教師との信頼関係を促進する

ごく自然に教師と子どもとの間にコミュニケーションや信頼関係が生まれてくる。

学校現場で行うプレイセラピーを生かした教育相談としては、グループ・ブレイングが考えられる。グループ・ブレイングは、不安感、緊張感、抑うつ感など、子どもの内面にある感情を遊びの中で発散し、解消することにより、精神的に健康になっていくことをねらいとしているグループ活動である。下記のような実施プランを考えた。

* グループ・ブレイング「わくわくタイム」の実施計画

時間	月1回 1単位時間(40分) 年間10回
場所	子どもたちが自由に遊べる場所 校庭・体育館・プレイルーム・教室
グループ	男女混合で教師が子どもを把握できるくらい的人数

年間のうち前半は、学級単位で遊ぶ時間を設定し、担任が児童理解できるようにする。後半は、異学年のグループ単位を編成し、担任だけでなく、多方面から児童理解するために、いろんな先生とのプレイセラピーの場とする。

* グループ・ブレイングを実施する際の留意点として下記のことがあげられる。

- ・ 遊び場、時間、グループの維持に関する制限及び禁止事項の他は児童の自由に任せる。
- ・ 遊びの指導をするのではない。
- ・ 指示、命令、批判、注意、叱責、是認、賞揚等の言葉がけをできるだけ少なくする。
- ・ 単純な受容、内容の繰り返し、感情の明確化等の方法をできるだけ多く取り入れる。
- ・ 観察者でなく児童と一緒に遊ぶ。

(3) 学級担任の教育相談の活動計画

学級担任が計画的に教育相談を行うためには、具体的な年間計画を持って活動し、評価していくことが望ましい。

学級担任の教育相談活動計画案

目標	学期	活動のポイント	具体的な活動
出会いを大切にしたい学級作り	一学期	<ul style="list-style-type: none"> 年間相談活動の計画立案 児童の実態把握 学級の目標設定 個票作成 (一人ひとりの子どもへのねがいや教師の関わり方を簡単に記入) 気になる子への指導援助 学年会での事例研究会 子どもを語る会での共通理解 長期休業中の相談活動 一学期の相談活動の反省 二学期の活動計画立案 	<ul style="list-style-type: none"> * 出会いを大切にしたい人間関係作り (構成的グループ・エンカウンター之活用) * 小集団作りの工夫、仲間作り (学習・係活動・当番活動・生活班) * 保護者との連携 * 養護教諭との情報交換 * グループ面接による学級全員対象の教育相談 * 子どもの不安や悩みの調査の実施 (日記、風景構成画、エゴグラム・バウムテストなど) * 気になる子や問題を持つ子の指導方針を確認して相談活動にあたる。 * 気になる子や問題を持つ子への休み中の家庭訪問 * 個票に各々の記録記入
支え合う仲間作り	二学期	<ul style="list-style-type: none"> 学級の人間関係の見直しや新たな人間関係作り 問題のある子への対応について学年会や職員会でその都度話題として、共通理解を得ていく。 二学期の活動反省 三学期の活動計画立案 	<ul style="list-style-type: none"> * 学級内での存在感や所属感を味わえる場の工夫 (構成的グループ・エンカウンターを計画的に取り入れていく) * 個別の教育相談を全員対象に計画的に行っていく (日直当番の子ども二人ずつなど) * 問題を持つ子や気になる子への相談活動 * 学習へのつまずきのある子へ指導・援助 * 個票の記入
認め合う仲間作り	三学期	<ul style="list-style-type: none"> 学級の教育相談の活動を評価する。 来年度の相談計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> * 学校経営、学年経営、学級経営に照らし合わせて、指導の実践を反省し、評価する。 * 個票の記入

4 教育相談を生かす学習指導

児童にとって学校生活の大半が授業を受けている時間である。その授業の中で、自分で決めたことを実行し、自分の力を十分発揮する、また、教師や友達から認められる経験などが、成就感や所属感を高め、学校生活をより楽しく送ることにつながる。つまり、学習指導に教育相談の姿勢を生かすことが重要である。次の事例に配慮して授業を組み立て実践したい。

教えるという立場ではなく
ともに学ぶという立場で

(1) 学習指導を支える教育相談の考え方

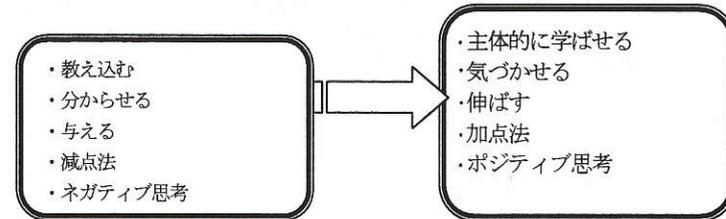
授業における教師の姿勢

児童をかけがえのない存在として尊重し、大切にしようとする姿勢
児童をあるがままに理解しようとする姿勢
児童の心情を思いやり、児童の立場に立って理解しようとする姿勢

教師の支援とは

こうあるべきだという断定的な決めつけ方は、児童の問題を解決する力を育てない。学習における児童の把握の状況を容認する中で、児童が自ら問題を捉え、解決の糸口を見出す手助けをすることである。

「自ら考え、解決できる児童を目指して」枠組みの転換



(2) 国語の実践を教育相談的視点で振り返って…個の理解と支援のあり方

研修直前に行った国語の授業の実践を振り返り、題材のねらいを達成するために取り上げた指導方法に関する分析・考察は割愛して、ここでは、児童の捉え方を取り上げ、これまでの児童の評価と教育相談的視点での評価を比較してみたい。

4年単元名「方言PR大作戦」自分らしさの発揮というテーマで行った授業

授業の流れ・児童の感想は資料参照

これまでの児童に対する評価

・普段から自己表現することが苦手なS男が、グループ学習時に自分でやりたい役を選んだが、恥ずかしさのあまりプレゼン発表会で失敗してしまったと感じた。
→やはり自己表現が苦手な子
→もっと支援が必要だった子

教育相談的視点で行った評価

・グループ学習で自分の役を決めることができた。(自己決定をすることができた。結果だけでなく学習の過程での評価)
・自分がやりたい役を自分で選んだのに、うまくできなくてみんなに迷惑をかけていると感じた。(国語日記に書くという手段での自己表現)
・自分のためにグループの人が真剣に考えてくれたことにより学習に意欲的になった。(集団での高まり)
・プレゼン発表会では、練習の成果が発揮できず失敗してしまったという悔しさを感じたが、自分が恥ずかしがりやだということを自覚できた。(自己理解)
・他のグループは、上手だなと感じた。(友人の発表内容に共感できた)

・学習のあと、共通語のよさに着目し、方言の不便さやかつこ悪さに抵抗を感じ、方言を好んで使いたくないと感想を言ったM子
→指導のねらいから外れた子

・教師や友達に迎合することなく、自分の思いを素直に表現できた。(自己表現できた)

反省を踏まえた支援のあり方

- ・個の多様な受け取り方を肯定的にみていく。教師の指導のねらいに無理に引き上げようとするしない。
- ・結果は、うまくいかなかったとしても学習の過程での評価を常に行っていきたい。いっしょに残念さや嬉しさを共有し、進めていく。
- ・常に受容的態度で児童に接する。自由でのびのびできる温かい雰囲気心がける。

一人ひとりの児童が自分を見つめ、自分の可能性を発揮できるような、そんな授業をめざすためには教師の深い児童理解が必要である。それは、年数回の教育相談の研修会だけでは、なかなか深まらない。校内の授業研究会を利用して、教育相談の視点で日々の授業実践を積み上げていくことが児童理解、児童の人格的成長への援助につながるのではないだろうか。

V 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 学校教育相談の重要性を再認識できた。また、教育相談担当の役割、学級担任の姿勢も自分なりに明らかにできた。
- (2) ケースカンファレンスや実際の電話や来所相談に携って、私自身、これまで児童に対して、教師とはこうあらねばならないという枠組みで対応してきたということがよく分かった。深い児童理解をするためには、自分のこれまでの枠組みをいったん取り払って、多面的な見方をする必要がある。いろんな見方をしていくと、これまでどうしても認められないことや、こう指導していかなければならないという観念から解放され、もっと子どもを中心に楽しく接することができるような気がする。また、教育相談というと受容・共感だけというイメージが強かった。それが根底にあるもの、人間として、受け入れがたいものは毅然として伝えていく必要があることも学んだ。

2 今後の課題

- (1) この半年間教育相談の理論研究に重きをおいて、自分なりの学校教育相談を考えてきた。学校教育相談をいかに捉えるかが、これから学校で実践していくための大きな原動力になると考える。これから、所属する学校で実践していくことによって、より機能的な学校教育相談を求めていきたいと考える。

- (2) 研修で学んだ理論や技法を、児童や保護者、教職員の支援に役立てたい。

3 おわりに

教育相談係として気になる子どもを持った担任が本音で話せるように、学級担任の話に傾聴し、共に問題を考える姿勢をもちたい。また、職員間に、一人ひとりが自分の思いや考えを率直に本音で語れる雰囲気が必要である。同じ学校の子どもに関わる職員としてそれぞれの悩みや思いを本音で語り、それを傾聴し、真剣に受けとめる関係が必要である。そのためにも、学級の子どものために人間関係作りの研修会は、実は、教師自身のために必要なのだと思う。それは、教師が、自己を理解し、信頼体験を味わい、他者を理解し、自己主張する経験をするることにつながるからである。職員同士が支え合う人間関係になれば、より学校教育相談が機能していくだろうと考える。

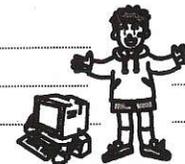
体験的な課題解決学習におけるコンピュータ活用に関する研究

～ 地域に根ざした総合的な学習の試みの中で ～

上山市立中山小学校
教諭 伊藤保明

【目次】

I 主題設定の理由とねらい	1
II 研究の仮説	1
III 研究の内容	
1 学校教育における総合的な学習と情報教育	1
2 めざす子供像	3
3 地域教材とコンピュータ	4
4 子供が自ら創り出す学習の構想	5
5 授業実践に基づく検証	6
6 小学校の発達段階に応じた情報教育のあり方	8
IV 研究のまとめ	
1 研究の成果	9
2 今後の課題	9
3 おわりに	9



主な参考文献・資料

- ・ 小学校学習指導要領 文部省 1998 12
- ・ 教育課程審議会答申 文部省 1998 6
- ・ 情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて—第1次報告—
情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 1997 10
- ・ 情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて—最終報告—
情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 1998 8
- ・ 個を生かすコンピュータの教育利用 実践事例集 千葉市教育センター 1995
- ・ 教師である私の発見 藤沢市教育文化センター 1997
- ・ 小・中学校における情報教育推進のための実践研究 相模原市教育研究所 1998
- ・ マルチメディアを活用した学習指導に関する研究 大阪市教育センター 1998
- ・ 研究紀要89号 鹿児島県総合教育センター 1998
- ・ 地域を生かした特色ある学校づくり事例集 愛知県 1998
- ・ 「総合的な学習のアプローチ」 無藤 隆・奈須正裕編著 東京書籍 1998
- ・ 教課審「中間まとめ」と生活科&総合的学習実践研究の要点 明治図書 1998
- ・ 教職研修「情報教育の考え方・進め方」 山極 隆編集 教育開発研究所 1997
- ・ 教職研修「総合的な学習の展開と技術」 高階玲治編集 教育開発研究所 1998

I 主題設定の理由とねらい

現代社会を主体的にたくましく生きるために、自ら学び自ら考える力、つまり自ら課題を発見し解決する力が必要である。それに伴い、情報を収集、加工、表現・発信できる情報活用能力が強く求められるようになる。本校の子供たちにも、自分で課題を解決するために「必要な情報を集め、まとめ、表現・発信する」資質や能力を身につけさせていきたい。

そこで、本校を取り巻く、豊かな自然や歴史・文化、専門的な知識を持った人材を教材とし、その中から価値ある課題を見つけ追求する体験的な学習活動を取り入れる。子供たちに、改めて地域のすばらしさを気づかせることによって新たな課題意識が生まれ、意欲的に追求・解決することができると思ったからである。

そのため、こうした総合的な学習の試みの中で、一人一人が、必要な情報を文章や絵、写真、録音・録画として収集、加工、表現・発信することのできるコンピュータの特性を有効に活用する。そして、将来、調べまとめたことを記録・保存し、他の教科や学年、次年度の学習に生かしていく。

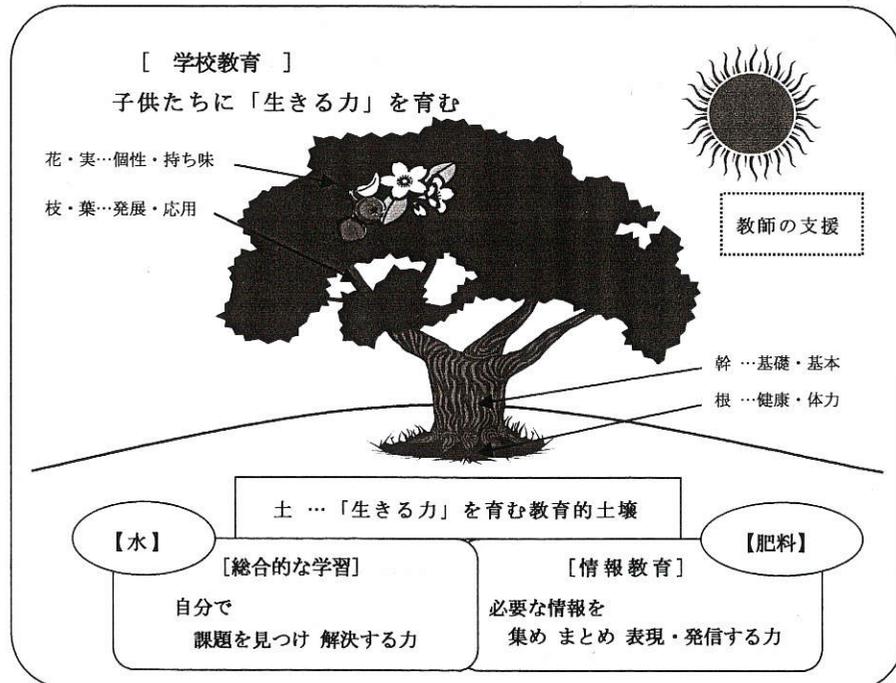
このように、地域を教材とする体験的な課題解決学習においてコンピュータを活用することで、求める子供たちの資質や能力を育むことができると考え、本研究主題を設定した。

II 研究の仮説

主体的な個別学習活動を促進し、地域の探究活動を支援する道具としてのコンピュータを使うことで、課題意識を持って意欲的に、「必要な情報を集め、まとめ、表現・発信する力」を育てることができる。

III 研究の内容

1 学校教育における総合的な学習と情報教育



(学校教育における総合的な学習と情報教育のイメージ図)

(1) 学校教育

◎ ねらい

各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。

(新学習指導要領の総則・教育課程編成の一般方針1より)
子供一人一人が生涯にわたって豊かな自己実現を図り、幸せな人生を歩んでいくために、学校教育においては、生涯教育の基礎として学ぶ楽しさを知り、学び方を身につけさせることが大切である。知識や情報をどのように獲得し、創造・発信するかという学習の方法を身につけることにより、必要ときに、自分で知識や情報をたぐり寄せることができるからである。そのため、教師の視点に立った教育から、子供の視点に立った教育への転換を図らなければならない。

(2) 総合的な学習

◎ ねらい

・自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
・学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

(新学習指導要領の総則・総合的な学習の時間の取扱い2より)
子供たちが生きた体験活動を行うことによって、単なる知識でない生活の知恵を獲得することが求められている。総合的な学習は、身近な生活と関連の深いテーマのもとに、多様な体験や活動を総合的に構成し、主体的に解決する過程を通して「生きる力」を育てるための学習である。子供たちに釣った魚を与えるのではなく、釣り方を子供自身に学ばせ、釣り上げたときの喜びや感動を味わわせたい。

これまでの教科学習	総合的な学習
<ul style="list-style-type: none"> ・学問の成果を子供たちに伝達する学習 ・教師の側にねらいや願いがあり、そのねらいや願いを達成するために、子供たちに指導する 	<ul style="list-style-type: none"> ・子供たちの生活や経験に根ざした学習 ・子供たちの興味や関心あるいは発想が重要な要素となる ・学習の主体者は子供たち自身であり、教師は支援者である



(3) 情報教育

◎ ねらい

初等中等教育段階で育成すべき「情報活用能力」を以下のように整理し、情報教育の目標として位置づけることを提案した。

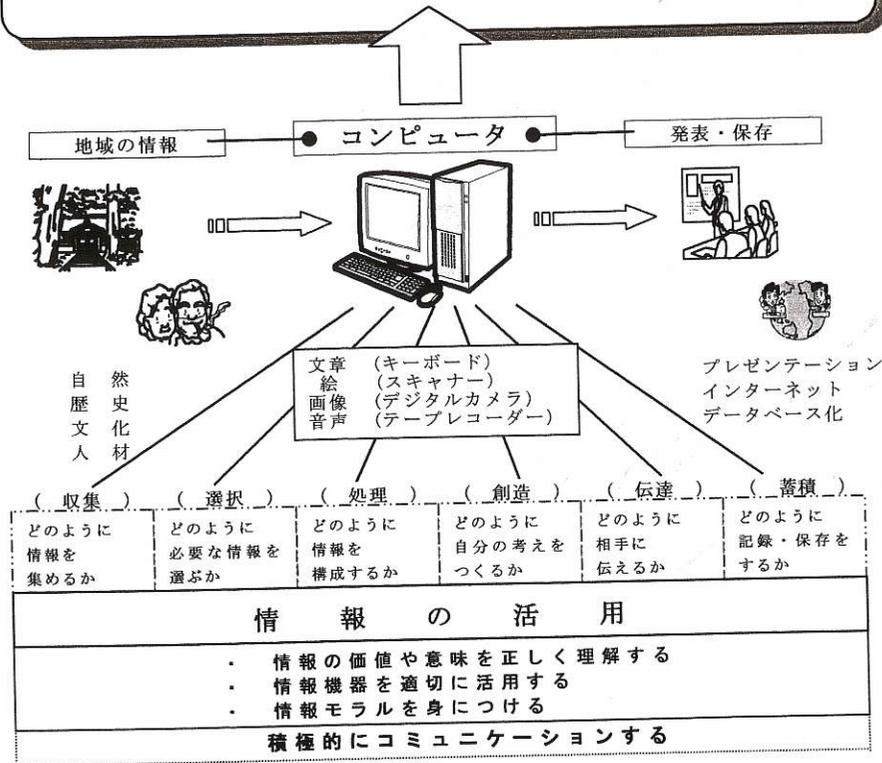
- ・課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力 (情報活用の実践力)
- ・情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解 (情報の科学的な理解)
- ・社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度 (情報社会に参画する態度)

(情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて—最終報告—情報化に対応した教育について1より)
今日の情報化社会において、より豊かに生きるためには、あふれる情報の中から必要な情報を選択し、主体的に自らの考えを築き上げ、新たに送り出す力が必要となる。そこで、子供たちに、情報および情報手段を主体的に選択し、活用していくための基礎的な資質としての「情報活用能力」を育成しなければならない。上記のねらいでは、情報活用能力を3つに分類しているが、この3つは相互に関連している。情報手段を適切に活用するためには、その機能や特性、効果などを正しく理解することが必要であり、情報化社会の影響を知るためには、情報手段の原理や仕組みを理解し、どのように活用して情報を判断・処理したらよいかを身につけることが重要になってくるからである。

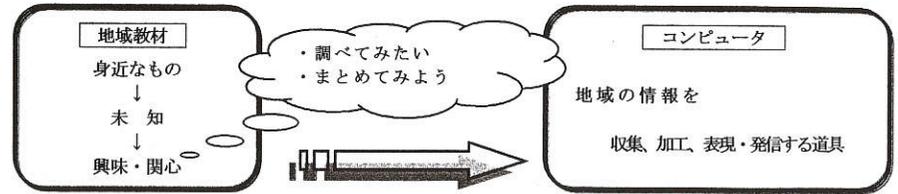
情報教育は、社会の情報化に対応した教育、情報化社会で生きていくために必要な能力を育成する教育である。

2 めざす子供像

「必要な情報を集め、まとめ、表現・発信することができる子供」



3 地域教材とコンピュータ



(1) 地域教材

◎ ねらい

ふるさととのすばらしさを再発見する学習を通して、自分たちの地域の自然や歴史・文化、人材についての理解を深め、身近にあるものを直接見たり触れたりしながら、課題を見つけ、調べ、まとめる力を育む。

[地域教材の総合的な学習]

- ・日常生活を学習の源とし、身近な価値ある課題を追求する。
- ・体験的な課題解決活動を通して、生きる力を育成する。
- ・自分の生き方についての自覚を深める。

[地域教材への期待]

- ・子供の生活や体験に即しているため、子供の実態を踏まえた学習を展開することができる。
- ・子供の興味や関心と事実に基づく体験的な学習であるため、主体的な学習を活発にすることができる。
- ・自然や文化施設、一芸に秀でた専門家、伝承文化の保持者など多様な学習の場や素材があるため、地域に対する理解と郷土に対する愛着心、地域の人たちとの信頼関係を育むことができる。
- ・自然や社会的現象を具体的に理解したり、地域の人々の生活、苦労や工夫に直接接したりするため、観察・表現力、思考・判断力、情報活用能力を育成することができる。

(2) コンピュータ

◎ ねらい

コンピュータを使うことで、情報を集める受け手、情報をまとめる作り手、情報を表現・発信する使い手としての能力を生かして主体的に取り組み、必要な情報を効果的に処理し、活用していく力を育む。

[コンピュータの特性]

私たちは、さまざまな情報を目や耳などから取り入れ、脳で記憶しながら判断を行い、言葉や身振りなどによって他の人に伝えている。コンピュータも私たちと同じように、データやプログラムを受け入れ、記憶し、計算や判断をして結果を伝える働きをしている。

しかし、コンピュータは私たちと比べものにならないほど、優れた特性(汎用性:さまざまな処理に対応する、高速性:驚異的な速さで動作する、記憶性:膨大な記憶容量と記憶を保持する、正確性:きわめて正確に記憶・処理する)を持っている。

[コンピュータを使う利点]

- ・文字や絵、画像、音声などの多様な情報を総合的に扱うマルチメディアの機能により、個々の子供の実態や能力に応じた学習を展開することができる。
- ・興味や関心、課題意識に沿った探究的な活動を行い、思いや感動を深め表現する学習を支援することができる。
- ・コンピュータの活用と自然や社会の現実、人間に触れる体験を通して、情報モラルや情報に対する責任について対応する能力と態度を育てることができる。

[コンピュータの活用法]

- ・どこで 子供の主体的課題解決学習の場面で、
- ・何のために 個々の課題について調べまとめたり、発表したりするために、
- ・どのように いきゅう(考える)、くる(表現する)、なぐ(交流する)道具として活用する。

4 子供が自ら創り出す学習の構想

本研究における子供が主役となる魅力的な学習は、メディア機器を持って地域に取材に出かける体験的な学習とコンピュータの教育利用による個々の主体的な表現・発信活動にある。

そこで、学習意欲を喚起し維持するために子供の意識とARCSモデル*を関連づけ、自分の課題を設定し、自分なりの方法で追求、解決していく学習活動を考えてみた。

[学 習 活 動]

【過程】 ARCS 【子供の心の動き】

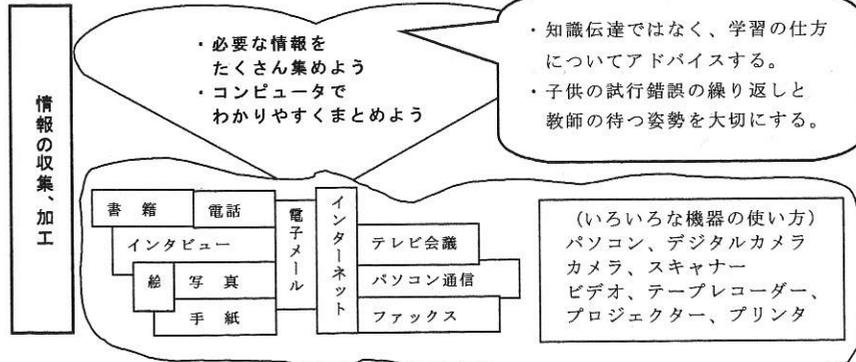


【支援のポイント】

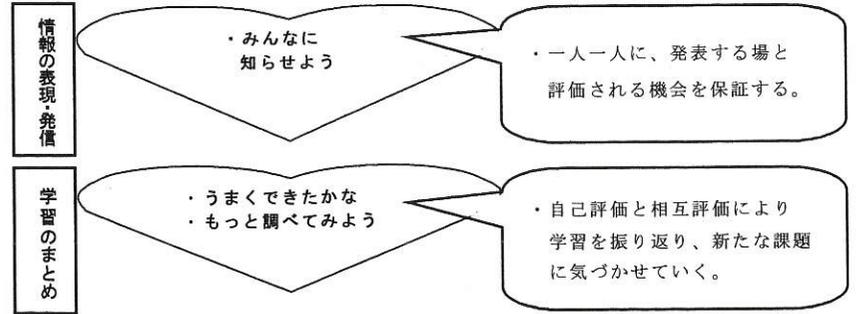
【導入】 A (注意:おもしろそうだ)



【展開】 C (自信:やればできそうだ)



【まとめ】 S (満足:やってよかった)



* ARCSモデル (J.M ケラー フロリダ州立大学教授の提唱)

学習意欲をA (Attention) R (Relevance) C (Confidence) S (Satisfaction) の四つの側面とらえ、授業を魅力あるものにするためのモデル。

5 授業実践に基づく検証

(1) 授業の概要

- ・単元名
- ・目標

「ふるさと再発見」

地域の探究活動を通して、主体的に必要な情報を集め、まとめ、表現・発信することができる

- ・実践時期 平成10年10月下旬～11月下旬
- ・実践時数 4時間(十ゆりの時間、休み時間)
- ・実践場所 中山小学校、中山地区(上町地区周辺)
- ・対象児童 第5学年13名(男6名・女7名)
- ・班編成 4班(課題別グループ)
- ・各班のテーマ

- A 班…「中山の便利な建物」
- B 班…「奥羽本線と国道13号」
- C 班…「山あり 野生の動物あり 自然ありの中山」
- D 班…「危険個所をさがそう」

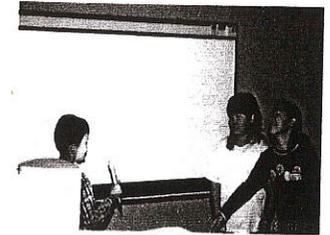
- ・コンピュータシステムの構成

ハードウェア PC9821 (NEC) 8台

ソフトウェア スーパーYUKI

周辺機器 デジタルカメラ カメラ テープレコーダー

ビデオ スキャナー プリンタ プロジェクター



(写真1 授業風景1)

(2) 学習計画

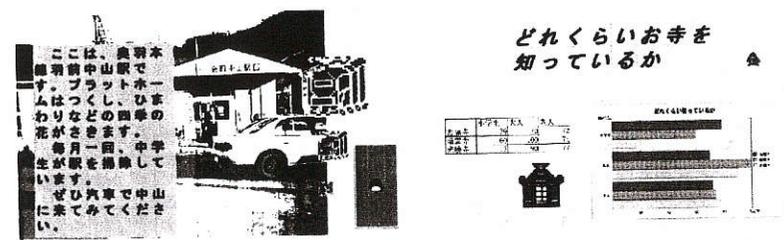
過程	時	学習活動	具体的な姿	教師の支援	使用機器
導入	1	<ul style="list-style-type: none"> ○課題を見つける。 ・教材との出会い ・課題ごとのグループ編成 ○学習の計画を立てる。 ・課題解決のための話し合い 	<ul style="list-style-type: none"> ・切実な疑問や願いが生じ、学習に知的好奇心を持つ。 ・自分の課題として明確化し、解決の方法について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域にあるものと子供たちの関わりについて、生活を振り返りながら気づかせる。 ・コンピュータの活用例を紹介し、そのよさと便利さを感じ取らせていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆パソコン ☆プロジェクター ☆デジタルカメラ ・カメラ ・テープレコーダー ・ビデオ ・スキャナー ・プリンタ
	2	<ul style="list-style-type: none"> ○情報を集める。 ・課題の追求 	<ul style="list-style-type: none"> ・パソコンと周辺機器を活用して、自分なりに情報の集め方や調べ方を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子供たちの思いを引き出すために、適切な機器の選択・活用の仕方をアドバイスする。 ・発見した時の喜びや驚きを大切に記録するように、声がけする。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆パソコン ☆デジタルカメラ ☆テープレコーダー ・ビデオ ・カメラ ・スキャナー
展開	3	<ul style="list-style-type: none"> ○情報をまとめる。 ・課題の解決 	<ul style="list-style-type: none"> ・マルチメディアの機能を生かして、修正を加えながら、自分なりにまとめ方を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて、個別にコンピュータの操作の仕方を教えていく。 ・試行錯誤しながら、わかりやすくまとめようとしている気持ちを大切にしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆パソコン ☆デジタルカメラ ☆テープレコーダー ・ビデオ ・カメラ ・スキャナー ・プリンタ
	4	<ul style="list-style-type: none"> ○情報を表現・発信する。 ・学習成果の発表 ○学習の反省をする。 ・自己評価と相互評価 ・新たな課題の発見 	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーションにより、自分のまとめたことをわかりやすく伝える。 ・学習を振り返り、新たな課題意識を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子供たち一人一人が、発表し活躍できる場を設ける。 ・お互いのよい点を認め合い、自信を持たせていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆パソコン ☆プロジェクター ・デジカメ ・テープレコーダー ・ビデオ

(3) 子供たちの声 (アンケートや感想より多かったものを集約)

「学習前」
 ・コンピュータって何でもできてすごい、はやく、コンピュータを使ってみよう。
 ・コンピュータの勉強は楽しみだけど、使い方はむずかしそうだ。
 ・中山地区のことで、まだ、知らないことがいっぱいあるみたいなのがする。
 ・自分たちの地区は自然がいっぱいあって好きだけど、スーパーがない。
 「学習中」
 ・コンピュータを使うと、きれいにまとめられるし、楽しく勉強できる。
 ・自分たちで調べたことを、みんなにわかるように、うまく発表できるといい。
 ・実際に調べるまでは、こんな所に、こんな物があるなんて知らなかった。
 ・とにかく、もっと、まとめるための時間がほしい。
 「学習後」
 ・コンピュータを使うと、上手にまとめられたし、気持ちよく発表できた。
 ・みんなで走り回って調べたり、中山の人とふれあえて、とてもよかった。
 ・自分たちも知らなかった地域のことを、たくさんの人に知ってもらいたい。
 ・まだまだ、知らないことがあると思うので、今度は別なことも調べたい。



作品の一例



(写真2 子供の作品)

(4) 先生方の声 (アンケートや事後の話し合いをもとに集約)



・コンピュータを使うことで、求める力を育むことができると思う。
 ・コンピュータを用いることで、容易に修正することができ、楽しく学習し、きれいな仕上がりに子供たちは満足していた。
 ・直接体験と仮想体験、個人とグループの両極の楽しさを突感しながら、一人一人が、地域のことについて再発見し、自分の思いを表現する場を与えられ、評価される機会を得ることができた。
 ・文字の入力やグラフの作成などに、戸惑っている子供たちのためにも、基本的なコンピュータの使い方について、少しずつ、指導していきたい。
 ・地域の文化祭、公民館掲示やイベントにより、広報活動を展開したり、小学生が参加可能な公民館の活動等へ、学習を発展させたりしてはどうか。

(5) 考察 (◎ よかった点 Δ 改善点)

- ◎子供たちの学習活動の様子、子供たちの声や先生方の声をまとめてみると、自分たちで、「地域の情報を集め、まとめ、表現・発信する」ことができたように思う。今後、地域の人たちや外部へ発信し、発展させていきたい。
- ◎コンピュータは、容易に手直ししたり付け加えたりできること、語彙が少なくスケッチすることも苦手な子供にも支援できることから、思考・表現の有効な道具となる。そのため、自分の作品を見てよりよいものにしようとする繰り返しの学習により、表現活動を深めることができる。
- ◎地域を再発見する中で、コンピュータを用いての楽しい調査、表現・発表活動は、自ら学び自ら考える学習として適切である。そして、自分の作品が認められ評価されたり、伝えたい情報をみんなで共有できたりした、喜びが感じられる。
- Δコンピュータの目新しさが先行して、学習の目標に迫りきれなかったり、操作に戸惑い、学習を中断して他のことをしたりする子供への声かけ、支援の仕方を工夫していきたい。
- Δ今回の学習は数値的に評価することは難しく、アンケートや作品による評価は、主観的なものになりやすい。測定と評価を分離してとらえ、活動の状況や活動への参加の意欲を評価する方法について考えたい。

6 小学校の発達段階に応じた情報教育のあり方

授業実践を振り返り、意図的、計画的な情報教育の指導の大切さを実感した。小学校では、特に「総合的な学習の時間」において、発達段階に応じた「情報活用の実践力」を育成することが必要とされている。

- そこで、学校現場での実践に役立つ指導のポイントについて、調べ、まとめてみた。
- 【低学年】
 - ・ 集団生活や仲間との遊びを通して、集団の一員として行動できるようになる。
 - ・ 空想的な世界に興味を持っている。
 - ◇ 直接体験や経験を重視し、擬似体験と実体験の違いに気づかせて本物感覚を育成する。
 - 情報機器には、遊び的な活動を通して触れ、慣れ親しませる。
 - 【中学年】
 - ・ 学校生活にも慣れ、集団の規則や遊びのきまりの意義を理解して、集団目標の達成のために主体的に学習活動に関わったり、共同作業ができる。
 - ◇ グループによる具体的な課題解決、表現活動を設定するのに適している。
 - 情報手段を道具として使う第1段階ととらえる。
 - 【高学年】
 - ・ 自分の行為を自分の判断で決定しようとするようになり、それに伴い責任感や批判力が出てくる。
 - ・ 抽象的、論理的思考がめばえ、行為の結果だけでなく行為の動機や過程も考えられる。
 - ◇ 課題解決学習等を設定するのに適しており、そのような活動における情報手段の活用を体験させる。
 - 与える情報や情報手段の数を複数にし、その中から選択させる活動を取り入れる。

また、「情報活用の実践力」を育成するためには、コンピュータの基本的な操作の習得に配慮しなければならない。そこで、子供たちが、実際に習得するための学習時期のめやすについて、自分なりに表にまとめてみた。この表は、ひとつの原案として学校現場において改良され、活用されるためのものである。

コンピュータ活用のための学習時期一覧表(案)

能力	内容	学年					
		1	2	3	4	5	6
基本操作	電源を入れたり切ったりすることができる	■	■				
	マウスやカーソルを動かすことができる	■	■				
	必要なアイコンやファイルを選ぶことができる	■	■				
	ソフトを起動したり終了したりすることができる	■	■				
	ファイル名を付けて保存することができる			■	■		
	文書スタイルを設定することができる			■	■		
文字	フロッピーやCD-ROMを正しく取り扱うことができる			■	■		
	かな文字や漢字を入力することができる			■	■		
文字	文字を消したり移動したりすることができる			■	■		
	簡単な絵をかくことができる			■	■		
絵や図形	目的の場所に直線を引くことができる			■	■		
	円や四角をかくことができる			■	■		
	絵や図形を切り貼り、拡大・縮小することができる			■	■		
グラフ	数値データを入力することができる			■	■		
	グラフを表示することができる			■	■		
表計算	表を作成することができる			■	■		
	データを入力し、計算することができる			■	■		
周辺機器	音声を入力することができる			■	■		
	画像を取り込むことができる			■	■		
	印刷をすることができる			■	■		
データベース	データを入力することができる			■	■		
	調べたい項目を選ぶことができる			■	■		
通信	ホームページを見ることができる			■	■		
	インターネット上で受信や発信をすることができる			■	■		
その他	情報および情報手段を正しく理解し、活用することができる			■	■		

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 学校教育における総合的な学習、情報教育のあり方を深く認識し、自分なりに広い視野でのめざす教育、子供像が明らかになってきた。また、学習の主体者である、子供たちが創り出す授業を支援するために子供とともに学ぶ場、そして、地域の人たちとともに学ぶ場としてのこれからの学校像について、イメージ化することができた。
これらは、基本となる根幹のとらえ方として、実践に生かせるものと思っている。
- (2) 地域を再発見し探究する学習を設定することにより、コンピュータを身近で便利な道具として使う必然性が生まれ、子供たちに、課題意識と意欲を持って「必要な情報を集め、まとめ、表現・発信する力」を育ていけることがわかった。また、コンピュータを使うことの有用性に気づき、どの場面でどんな機器が適切か選択・判断し活用する力が自然に身につけていくこともわかった。
- (3) 授業実践を参考にしながら、小学校の発達段階に応じた情報教育について調べ、まとめることができた。このことにより、情報活用の実践力を育成するための方向性を見出し、学校現場における実践のための指針を得ることができた。

2 今後の課題

- (1) 体験的な課題解決学習における、コンピュータ活用の基本的な理論と方法を学ぶことはできたが、スタートラインに立ったに過ぎない。本校教職員の共通理解を図りながら、記録・保存と活用の仕方を含め、継続して授業を実践し検証・評価していきたい。また、コンピュータ活用のみならず、情報そのものの重要性や情報化社会の特質、情報文化と生活の関わり等についても取り上げ、指導していきたい。
- (2) 学習内容の習得にとらわれ、子供の変容を見失うことがあった。学習活動に対する評価と子供たち自身の自己評価の方法について探るとともに、学習状況や活動状況を的確にとらえ、個々のよさと改善点を見出す確かな観察眼を養っていきたい。
- (3) 地域の人的、組織的なつながりを大切にし、生涯学習の場としての開かれた学校の役割を担うためにも、将来、地域全体のネットワークづくりを構築していければと思っている。



(写真3 授業風景2)

3 おわりに

これまで、子供たちの生活そのものを学習として取り上げ、日常生活の中から「自分で課題を見つけ解決する力を身につけさせたい」と思い続けてきた。そして、今まさに『読み・書き・コンピュータ』と言われる「高度情報化社会に対応した情報活用能力を育てていければ」と思っていた。この二つが、頭に描いた私の求める授業であった。

このたび、幸いにもこうした研究に携わる機会を与えていただいた。子供たちが「自分たちのやりたいことを思い切り追求する学習」にあこがれるのと同じように、これからも、私自身、地域社会で言われる「ナンバーワンからオンリーワン」のキャッチフレーズを掲げ、授業を深く追求し、楽しく学び続けていきたい。

自ら学ぶ子どもの育成のための コンピュータと周辺機器の活用に関する研究

山形市立金井小学校
教諭 遠藤光男

目次

I. 主題設定の理由	1
II. 研究仮説	1
III. 研究の内容	1
1. 「生きる力」と「情報活用能力」について	1
「生きる力」とコンピュータの有用性	1
小学校における情報活用能力の系統的、体系的指導	2
(1) 情報活用の実践力と系統性	2
(2) 情報の科学的理解と系統性	2
(3) 情報社会に参画する態度と系統性	3
2. 自ら学ぶ子ども像と情報機器の活用	3
3. 授業実践から	4
(1) 授業の概要	4
(2) 具体的場面での考察	5
VI. 研究のまとめ	9
1. 成果	9
2. 今後の課題	9
3. 終わりに	9



主な参考文献と資料

「高度情報社会の中の学校～最先端の学校づくりを目指す～」	赤堀侃司編著	ぎょうせい	1997年
「放送利用からの授業デザイナー入門～若い先生へのメッセージ～」	鈴木克明著	日本放送協会	1995年
「自己学習能力を育てる～学校の新しい役割～」	波多野諒余夫編	東京大学出版会	1980年
「コンピュータ活用実践授業のための研修カリキュラムの在り方に関する調査研究報告書～校内研修を中心として～」	財団法人コンピュータ教育開発センター		1998年
「情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて」	情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議		1998年
「放送教育」	財団法人日本放送教育協会	1997年4月号～	1999年3月
「コンピュータで授業が変わる」	上越教育大学学校教育学部附属中学校	図書文化社	1991年
「新しいメディアに対応した教科書・教材に関する調査研究」	財団法人教科書研究センター		1998年
「教室にやってきた未来」	佐伯胖・佐藤学・苅宿俊文	NHK取材班	NHK出版 1993年
「山形県情報教育推進計画」	山形県教育委員会		1998年

I. 主題設定の理由

現代のような情報化の時代では、主体的に情報を集め、活用して課題を解決していく情報活用能力が重要である。

そこで子どもたちの情報活用能力を高めるための、自ら学ぶ子ども像と授業の中での情報機器の有効な活用場面を考えていく。

具体的には、身近な事柄から課題を見つけ、課題解決のために子どもたちが調べたり集めたりした情報を、コンピュータと周辺機器を使って自分なりにまとめたり、マルチメディア機能を使った多様な表現方法により発信したりすることによって、主体的に情報を活用できる子どもが育成できると考え本主題を設定した。

II. 研究仮説

身近な教材を学習する中で、発達段階に沿った情報活用能力（情報活用の実践力・情報の科学的な理解・情報社会に参画する態度）の系統性を明らかにし、それをもとにした学習を設定すれば主体的に学ぶ子どもが育成されるであろう。

学習の中でコンピュータを始めとする情報機器の有用性が表れる場面を設定すれば情報を活用し主体的に学ぶ子どもの育成に結びつくであろう。

III. 研究の内容

1. 「生きる力」と「情報活用能力」について

「生きる力」とコンピュータの有用性

主体的に情報を活用できる子どもの育成という観点から「生きる力」とコンピュータの有用性について考えてみた。

平成10年12月14日新しい小学校指導要領が告示された（以下新指導要領）。今回の改訂では、特に「生きる力」の育成が基本的なねらいとされている。

これから着目していかなければならない「生きる力」を育成していくためには、「情報活用能力」つまり、「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」が重要な要素となっており、初等中等教育段階で育成すべき「情報活用能力」としては、次の3点があげられている。

・情報活用の実践力

課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力。

・情報の科学的な理解

情報活用の基礎となる情報の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解。

・情報社会に参画する態度

社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度。

「情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて」（情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 1998年）

小学校における情報活用能力は、新指導要領で打ち出される「総合的な学習の時間」をはじめ、様々な教科や領域の特性と子どもの発達段階を大切にしながら培っていかなければならない。小学校段階では、子どもたちが適切な体験等を通して、課題の追求や解決の方法が習得できるように教師側が授業や学習活動を設計することが重要である。そのとき、次のような機能を持つコンピュータを「学びの道具」として活用していくことによって、人間の知的、技能的な能力が補われる。その結果、主体的に情報や情報手段に働きかけることができるようになり、情報活用能力が育成される。その際は、子どもたちの興味・関心の広がりに応じた指導が特に重要である。

コンピュータの持つ機能

- ・文字、画像、音声、動画などを統括的に扱い、表現を支援するプレゼンテーション機能
- ・多量のデータを蓄積し、素早く検索、利用することを支援するデータベース機能
- ・情報交換や会話、交流を支援するコミュニケーション機能
- ・実際に実現困難なことを擬似的に再現し、思考を支援するシミュレーション機能

2. 小学校における情報活用能力の系統的、体系的指導

「生きる力」とコンピュータの有用性を踏まえ、小学校における系統的、体系的に指導すべき「情報活用の実践力」・「情報の科学的理解」・「情報社会に参画する態度」について、子どもの生活範囲や学習内容を考慮したコンピュータ活用を中心として考えてみた。

(1) 情報活用の実践力と系統性

小学校における「情報活用の実践力」は、子どもの興味・関心による活動を中心として、教科の枠を越えた学習課題を題材とした、適切な体験を通して育成されることが望まれる。

授業の学習活動と子どもの発達段階の観点から表1のように情報活用の実践力と系統性を考えた。

表1 情報活用の実践力と系統性

学習活動	発達段階	低学年	中学年	高学年
収集・判断 何のためのどんな情報をどこから		自分が活動するため ・フロッピーディスクから ・ハードディスクから ・ビデオテープから ・CD-ROMやデジタルカメラ、スキャナーなどの周辺機器で情報を呼び出し、閲覧する。	身近な事象から選んで ・CD-ROMやデジタルカメラ、スキャナーなどの周辺機器で情報を収集する。 ・どの情報が必要か判断する。	より広い事象から目的に応じて ・インターネットなどからの情報収集。 ・目的に対して適切な情報が判断する。
表現・処理・創造 何をどのように		自分なりに楽しみながら ・自由な文字、音、色、大きさ、組み合わせで創作できる。	考えをまとめて見やすく ・キーボードによる文字入力。 ・色、大きさ、組み合わせで創作できる。（絵、文章、絵と音声など）	目的や意図を入れて分かりやすく ・グラフや自分たちの資料を入れることができる。（データと関連づけて）
発信・伝達 誰に何をどのように		身近な人へ ・友だちと印刷したものを交換したりできる。	自分の学校の人へ ・タブレットディスプレイ電子掲示板への記入したりできる。	地域・他の学校へ ・ホームページ形式などでの発信ができる。 ・インターネット、電子メールでの交流ができる。
活動形態		一者を中心。情報機器には遊び的な活動を通して慣れ親しむことができる。	グループによる具体的な問題解決、表現活動ができる。	個人の課題解決学習。学習の手段や情報を自分で選択ができる。

(2) 情報の科学的理解と系統性

「情報活用の実践力」を体験のレベルから、真の実践力、知恵のレベルに高めていくためには、目的や条件に応じて適切に情報を活用する「情報の科学的な理解」が不可欠になる。

例えば、自己課題解決にはどのようなソフトを使い、どのような操作をすればよいかを知っておく必要がある。

小学校の段階では、システムの詳しい知識は必要ないが、みんなで使う機器あるいはネットワークシステムを壊さない程度の「情報の科学的理解」を体験的に知っておく必要があると考える。

そこで、各発達段階において身につけておきたい「情報の科学的理解」を表2のように考えた。

表2 情報の科学的理解と系統性

低学年	中学年	高学年
情報機器操作の基本 ・コンピュータなどの情報機器の各部分の名称を知る ・電源の入切 ・ソフトの起動と終了 ・マウスの操作 ・印刷の方法	問題解決の方法や考え方 ・目的にあったソフトの選択 ・ファイルの保存、削除の方法 ・ホームポジションを心がけたキーボード入力 情報手段の特性 ・スキャナーなどの周辺機器からコンピュータへの情報の取り込み ・先生から教えてもらって ・先生と一緒に	簡単な統計的な見方 ・グラフの作成や読みとり 簡単な情報技術の仕組み ・ネットワークへの接続の仕方、切り方 ・なるべく子どもたちだけで

(3) 情報社会に参画する態度と系統性

情報機器は、数多くの人々とコミュニケーションがはかられたり、様々な情報がリアルタイムで得られたりできる反面、悪意の第三者の存在・コンピュータウイルス・有害情報・反社会的情報・嘘の情報や差別的情報など、他者との関わりの中で様々な有害なものが出てくる。これらをなくし、より活用しやすいものとするために、小学校段階から「情報社会に参画する態度」を育

成する必要がある。そこで、身につけておきたい情報社会に参画する態度を表3のように考えた。

表3 情報社会に参画する態度と系統性

	低学年	中学年	高学年
著作権	自分や友だちの作品のよさを見つける。	勝手に友だちや周りの人の作品をまねせず、自分らしい作品を創る。	著作権の意味を知り、著作権を守ることができる。
モラルマナー	友だちと仲良くコンピューターを使う。	人が嫌がるような使い方をしない。	ネットワーク上のエチケットや約束を守って使う。
責任	個人情報やむやみに流さない。	いくつかの情報を比較して真偽を確かめる。	情報に責任を持って発信や受信する。
その他	・よくないと思ったり、嫌な感じの情報出会ったら先生や家の人に知らせる。 ・不確かな情報はむやみに信用しない。		

これら「情報活用の実践力」・「情報の科学的理解」・「情報社会に参画する態度」の三つの柱の関連性やバランスに配慮しながら、各教科・領域等の学習と連携させて指導していく。このことによって情報活用能力と各教科・領域等がお互いに影響し合い、高め合って、子どもの「生きる力」が育成されることとなる。小学校段階では、子どもの課題解決のために必要が生じた場合は、それに応じた指導も必要であるが、「情報活用能力」の系統的な指導が大切であるとする。

3. 自ら学ぶ子ども像と情報機器の活用

系統的・体系的指導のもとに、課題解決学習の過程における自ら学ぶ子ども像と情報機器の活用によって期待できる効果を、表4のように考えた。特に、「課題把握」「課題解決」「表現・伝達」の場面では情報機器の特性が生かされ、より子どもが情報や情報活用手段を主体的に選択し、活用していくことができると考える。

表4 学習過程の子ども像と機器の活用ならびに期待できる効果

	自ら学ぶ子ども像	情報機器の活用	期待できる効果
課題把握	①「自ら課題を見つける子ども」 身近な事象や題材の中から「何を学習するのか」自分に合った課題を見つけ出す。	・インターネット ・電話 ・ファクシミリ ・CD-ROM ・データベース ・カセットテープ ・ビデオ ・デジタルカメラやスキャナー	広範な事象からの情報によって自分の興味・関心に合った課題を設定できる。 自分に合った課題を設定できるので学習意欲の高まりと持続が期待できる。
計画立案	②「課題解決の見通しを持つ子ども」 課題解決のために活用できる既習事項と新たな情報を結びつけ、自分の学習の到達点の把控を決める。	・情報機器の特性を念頭にいた計画立案。	多様な発想力が培われる。 個別学習への活用。
課題解決	③「よりよい方法に気づき課題を解決する子ども」 自分の課題解決の道筋を振り返り、どこまで到達したかを確かめ、必要ときは計画を修正していく。	・デジタルカメラやスキャナーからの文字データや画像データ入力と画像処理 ・インターネットでの情報交換 ・音楽ソフトによる作曲 ・音声処理 ・表計算・シミュレーション	試行錯誤や検索、情報交換を繰り返すことによって、思考力や判断力、創造力が培われる。
表現・伝達	④「自分なりの方法で表現、伝達する子ども」 様々な表現手段を用いて伝達相手を意識した情報発信ができる。	・ワープロによるまとめ ・音楽ソフトでの演奏 ・画像ソフトによる表現 ・プレゼンテーションソフトによる発表 ・インターネット形式の表現 ・プリンターによる印刷 ・データベースソフトへの蓄積	自分の伝えたいことをどのように表現したらよいか試行錯誤することによって、表現力が高まる。 双方向的な機能を使うことによってコミュニケーション能力が高まる。
転移	⑤「学習方法を次の課題解決に生かしていく子ども」 自分や友だちの解決方法を他の課題解決に応用していく。	・今までの学習で習得した方法や知識、技能を生かしていく。	次に生かすことによって応用力が高まる。

自ら学ぶ子どもを育成するには、図書館・視聴覚機器・各種メディアなどを利用することも情報機器やネットワークを利用するのと同様に重要である。図書館などと情報機器はそれぞれ有用な面があり、お互いを否定するものではない。教師は、子どもたちが課題解決をする上で、興味・関心に合った解決法を、多くの選択肢から選んで学習できるように学習環境を整える必要がある。

4. 授業実践から

(1) 授業の概要

山形市立金井小学校5年生社会科「わたしたちの生活と情報」の単元において、放送局についての課題解決学習を中心に考えた。

実施時期 1998年12月中旬～1999年1月下旬

実施時数 12時間（そのうち研修生が直接授業したのは3時間（★の時間））

実施場所 山形市立金井小学校・山形テレビYTS

対象児童 第5学年2組34名（男17名・女17名）

班編成 6班（生活班）

使用コンピュータ NEC-PC9821v166（6台）

基本OS Windows95

目標

1. 自分たちの身の回りには、どのような情報があり、どのように役立っているか 関心をもち調べることができる。
2. 自分たちに届く情報はどのようにして伝えられるかを知る。
3. 調べたことをもとに、身近な事柄を相手に考えて発信することができる。

指導計画（12時間扱い）

時数	学習内容	使用ソフト・機器	期待できる効果
1 ★	ホームページを見て自分の課題を把握する。 ・機器の使い方を聞く。 ・県内の放送局のホームページを楽しむ。 ・ホームページを見ての感想や疑問を話し合い、調べたいことを探す。	液晶プロジェクター ホームページビルダー	山形の放送局という身近な事象から学習を始めるので、より具体的にイメージして課題を設定することができる。 最終的なまとめ方の意欲の喚起。
1	学習の課題を解決するための見通しを持つ。 ・自分たちで話し合い、いくつかの課題を決める。 ・自分たちの興味関心に合った課題を選ぶ。 ・自分たちの課題解決の方法を考える。		グループで活動することによって、自信のない子どもも助け合いにより、安心して情報機器を活用した計画を立てることができる。
4 ★ 1 — 4	資料を調べたり、見学したりして課題解決していく。 ・自分の課題を資料を使って調べる。 ・山形テレビを見学して調べる。 ・調べたことをまとめる。	デジタルカメラ 一太郎8 ペイント サウンドレコーダ スキャナー	自分の伝えたいことをどのように表現したらよいか工夫することによって、表現力が高まる。 他の人から評価されることによって、良さに気づき、次の学習でより高い目標に挑戦できる。
★1	調べたことを発表する。	液晶プロジェクター	
3	調べたことを利用して情報発信してみる。 ・学校の友だちや地域の人を意識して金井小の紹介をしてみる。	デジタルカメラ スキャナー 一太郎 CUBE for Windws	自分たちが身につけた学び方を別の課題解決に生かすことができる。
1	全体で意見の交換をする。		自分たちの良さを知る。

(2) 具体的場面での考察

実践の中から、情報機器の活用が有効だったと思われる「課題把握の場面」「課題解決の場面」「表現」「発信・伝達の場面」の4つの場面について考察していく。

①課題把握の場面

ア. 情報機器の活用事例

山形で放送されている局のホームページから情報を集め、教科書や図書室の資料と比較することによって、

- ・それぞれの放送局の共通点や相違点に気づく。
- ・実際に調べていくときの視点がはつきりし、学習が深まる。

と考えた。

教師の支援として、子どもが必要な情報に素早くたどりつけるように図1のような放送局へのリンク表を作った。

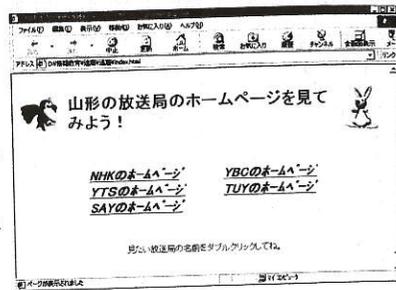


図1 放送局へのリンク表

イ. 子どもの姿

子どもたちはテレビ局のホームページを休み時間中も興味・関心をもって閲覧した。普段見慣れている山形の局だったので、親近感を持ったようである。自由に閲覧するうちに、各局とも番組紹介に力を入れていることに気付いた。そして、次のような課題を設定することができた。

子どもたちの設定した課題

- ・どうやって番組を作っているか。(番組制作に関わっている人々の役割。)
- ・放送局にはどんな機械があるのか。(どんな機械をどんなときに使うか。)
- ・番組にはどんなものがあるのか。(番組の種類。)
- ・他の県の放送局や番組にはどんなものがあるか。(地域によって違いはあるか。)
- ・何時頃どんな番組が放送されているか。(どうして時間帯によって違いがあるか。)
- ・放送局には何人ぐらいの人が働いているか。

あらかじめ作っておいたリンク表によって、目的のホームページへ検索することなく接続でき、課題設定や表現に使う時間が多かった。授業後「これからの学習でどんなことをしてみたいですか。」という質問に対して、「自分の学校のホームページを作りたい。」という者が12名もおり、ホームページを見る活動が表現への意欲にもつながった。

ウ. 問題点

ホームページは大人向けに作られた部分が多く、子どもたちが読めない漢字や理解できない言葉があった。

ホームページの中には、数多くの情報があり、子どもにとって課題把握への焦点化が難しい面もある。

②課題解決の場面

ア. 情報機器の活用事例

自分たちのまとめに必要な画像をスキャナーで取り込む活動とワープロソフトで友だちに知らせたいことをまとめる活動を中心に行った。

情報の共有を図るために、保存した画像データの内容がわかるように一覧表にして張り出し、必要があれば他の班の取り込んだ画像でも断って使用してよいことにした(図2、3)

自分の学習を振り返る中で、課題解決のためにホームページで調べたいことがあったら、何度でも繰り返し見てよいことにした。

イ. こどもの姿

画像を見ながら説明の文章を書くことによって細かな点まで説明が可能になったようである。また、1つの画像を複数の班で使用した例があり、共通の課題を解決していく楽しさを感じたグループがあった。

写真を文章に取り込むというコンピュータのマルチメディアの機能によって「こんな風に表現したい。」という表現への意欲が高まった。

ホームページを繰り返し見ることによって、課題解決の方向性が定まった。

実際にテレビ局に行ったときに、ホームページや画像から分かるようなことは質問しないで、スタジオの広さや照明の数など、現場に行かないとできない質問をすることができた。

ウ. 問題点

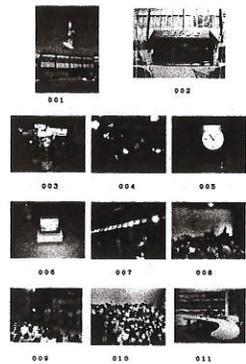
デジタルカメラやスキャナーが1台ずつしかなく、画像入力に時間がかかってしまい、待つ間に学習意欲が低下してしまうというところが見られた。

また、複数の画像を取り込んだものを別のコンピュータに移動させる場合に、媒体がフロッピーディスクしかないために、そのままの形では移動できず、子どもたちだけでは操作できなかった。自由に交換できればもっと活動が活発にできたと考えられる。



図2 自分のまとめに必要な画像を選ぶ子ども

A班のフロッピーの写真



使うときはA班にことわってね!

図3 画像一覧表の参考例

③表現の場面

ア. 情報機器の活用事例

ワープロ機能を使って友だちに自分たちが調べて分かったことを知らせるため、文章と画像を組み合わせて表現する活動を通して、収集した情報を再構成することができるようにした。

作成した文章はあとで学校のホームページに載せ、学校の友だちに見せることを予告し、表現の意欲を高めた。

イ. 子どもの姿

まとめの中で、「カラー画像を入れたので見やすくなった。」とか「文字の大きさや色が何度でも変えられるので楽しい。」という声が聞かれた。

画像の大きさや場所を変えて配置できる機能を使う場面では、自分の気に入った画面構成になるまで何度も繰り返し画像の大きさや場所を変える姿が見られた。何度でも試行錯誤ができる安心感が表現への意欲を高めることにつながったと考えられる。

ホームページに掲載することにより、子どもたちの表現できるスペースが限定され、伝えたい内容を取捨選択し、整理する必要があるが出てきた。この活動を通して情報の再構成ということが意識しないうちに行われていた。

内容を推敲する際に、「鉛筆で書くのより直すのが疲れない、楽だ。」という子どもがおり、ワープロ機能の文章校正の手軽さも体感していた。

④よりよい表現へ

自分たちの課題をまとめていく中で、ワープロの中には文章と画像だけしか貼ることができないと考えていた子どもがほとんどであった。そこで、表計算ソフトと組み合わせた表現も可能なことを知らせ、子どもにも活用させたところ、作る方の子からは「簡単にグラフができ、伝えたいことがより、はつきりした。」という声が、見るほうの子からは「見やすく分かりやすくなった。」という声が聞かれ、データを視覚的に表現するよさと、数字を入力するだけでグラフができることの便利さに気付いていたようであった。(図4)

変更前
数字のみの表現



変更後
グラフによる表現

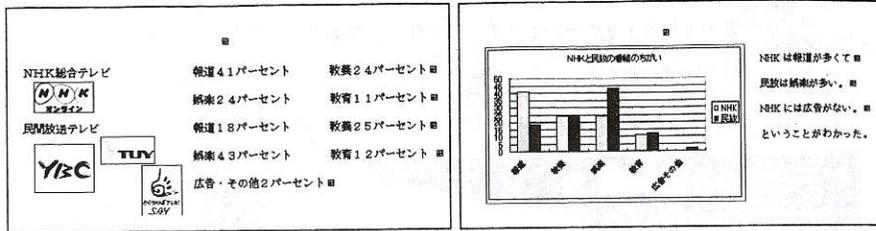


図4 子どもの表現方法の変化の例

文字入力の場合で普段の授業では目立たなかった子どもが活躍し、まわりの子どもたちに認められている姿が見られた。これは、普段の鉛筆と紙などによる授業形態では何らかの問題を持っていたのが、コンピュータを使うことによってその問題が解消され、生き生きとした活動ができるようになったと考えられる。このようにコンピュータは、人間の知的あるいは技能的な能力の足りない部分を補い、より人間らしい活動を支援するツールのひとつであるということに改めて気付かされた。

集中力が高まり、表現活動に熱中する姿が多く見られた。授業終了を知らせると、「もっとやりたい。」「もう少しだけ。」という声が聞かれ、どの子どもも満足な表情だった。

ウ. 問題点

学習を進めていく中での問題点として、文字入力をあげる者が一番多かった。子どもたちが難しいと感じた理由として、
 「キーボードでの文字の位置が分からない。」
 「ローマ字とひらがなの切り替えの仕方が分からない。」
 「ひらがなを漢字変換したときに同音異義語のどれを使ったらよいか分からない。」
 などがあげられた。

授業で楽しかったこと	
文字の拡大・縮小	9
文字の色つけ	16
文字入力	9
漢字変換	8
困ったこと	
キーボード入力	19
コンピュータ操作	6
漢字変換	7

表5 授業後の感想で多かった項目

楽しかったことにも困ったことにも文字入力があがっているということは文字入力の困難さが解消されれば、子どもたちが課題解決にもっとコンピュータを活用できると思われる。
 単元終了後感想を聞いたところ、「コンピュータを使って勉強するのはむずかしい。」と答えた子どもが34名中15名だった。そのうちの12名が「キーボードの入力が難しい。」と感じていた子と重複しており、キーボード入力が障害となると「コンピュータは難しい。」という印象を持たせてしまうと言える。

文字入力以外の問題点として、子どもたちにとって、どの機器も初めて扱うものばかりだったので、操作説明と練習で半分の時間が過ぎてしまったことや、「エラーメッセージ」が出てきた場合、どのように対処したらよいかわからず、キーをたたかううちに文章が消えてしまったなどという機器操作があげられる。

グループにコンピュータ操作が得意な子どもが存在した場合は、的確な対処が行われ、その後の学習活動にも支障がなかった。

機器操作などで同時にトラブルが生じた場合、一人の教師だけではすべての子どもに対処することができない。そこで、教師ばかりが指導するのではなく、子どもの中でコンピュータ操作や機器操作が得意な者を活躍させたり、T. T. による指導形態や地域の協力者による支援なども考慮していくことが必要だと感じた。

新指導要領になると、高学年での課題選択学習の機会が今まで以上に多くなる。個別学習にコンピュータを「課題解決の道具」として活用していくためには、課題解決に合った指導と低学年の段階からの機器操作の系統的指導があればよいと思った。

④情報発信・伝達の場合

ア. 情報機器の活用事例

自分たちの再構築した情報を多くの人に見てもらい、評価してもらうことによって自分たちの活動を振り返ることができる。

廊下をコーナーを設け、ホームページ形式で「5年生の学習」を紹介した。(図5)

見た感想を用紙に記入してもらい、どのような感想を持ったかを調べた。

また、コンピュータには、身近な音声や動画も入力できることがわかるように、校歌のメロディーと子どもたちがテレビ局を見学したときに制作された「スポット」が出るように、設定しておいた。

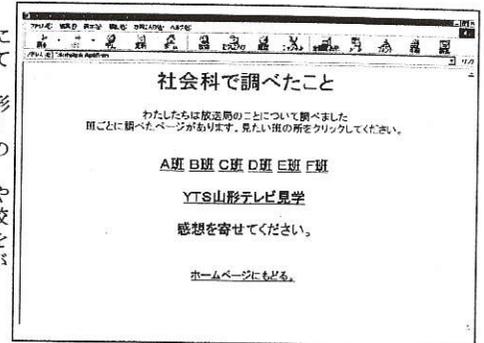


図5 学習のページへつながる画面

イ. 子どもの姿

見るのは、同学年の他の学級の子どもたちが多かった。感想は、ほとんど好意的なものだった。工夫すればよい点として、作成した子どもたちは、見やすい画面構成ということを考えていたが、見た子どもの感想の中には

「まとめの中に音声が入るといい。」

「画面をプリントできるといい。」

など制作者とは別の発想の意見も見られた。

自分たちの作品を見られることについて感想を聞いたところ、34名中17名が「うれしい。」と感じていた。また、3名が「はずかしい。」と答えていたが、内容は「うれしい」ということだった。

担任によると作品を見られ、「すごい」「きれい」という声が廊下から聞こえてくることによって子どもたちは自分たちに自信を持てるように変化してきたということであった。

音声や動画を入れられることを知って、「次のまとめでは、音や動画も入れてみたい。」という声も聞かれた。

ウ. 問題点

見る子どもたちの中には、表現方法にばかり目が向けられている子どもが見られた。情報を受け取る側に、情報の内容に対する批判力を育成する必要も感じた。

⑤新しい課題解決への意欲

学習後子どもたちに、「これからコンピュータを学習のどんなことに利用したいですか。」という質問をしたところ、

- ・詩を書いて画像と組み合わせたい。
- ・図工で設計図を書いてみたい。
- ・インターネットで調べ学習をしたい。
- ・インターネットや電子メールでいろいろな人と話してみたい。
- ・体育の器械運動などで体の動きを見てみたい。
- ・地区や学校のことなど自分たちが調べたことをインターネットで発信したい。
- ・作文を書く。
- ・お便り作り。
- ・作曲してみたい。

など、実際に情報機器を使う学習を体験したことによって、情報収集や課題解決、表現、伝達の場面での情報機器の活用法が具体的に意識できるようになっていた。活用方法の発想が豊かであり、すでに情報機器を「学びの道具」として見ているようである。

また、この学級では、この単元を学習したあと、コンピュータによる算数の図形学習を行ったが、操作がスムーズにでき、意欲的に学習に取り組むことができたということであった。

IV. 研究のまとめ

1. 成果

(1) 不易の部分大切に

時代を超えても変わらない大切な力がある。それは、「生きる力」であり、それを支える情報活用能力である。その力を備えた「自ら学ぶ子ども」を育成するための、発達段階に応じた系統的・体系的指導について考察することができた。

(2) 流行の部分を生かして

コンピュータと周辺機器は時代とともに性能が高まる。性能にばかり目を向けては限りがない。今できることを、どのような学習のどの場面で活用できるかを考えることが大切であるということが分かった。

(3) 「共に」学習することを大切に

全ての人が全ての面で素晴らしい力を持っているわけではない。自分に足りない部分は社会の人たちと交流を図って解決していくことが大切。逆に自分の素晴らしい面にも気づき、それを他の人に分けることも大切。

2. 今後の課題

(1) カリキュラム

新指導要領では、子どもの選択学習が重視されている。情報活用能力を育成していくことによって自らの課題を選択していくことが可能となるであろうが、具体的にどの学年のどのような学習の中で情報機器を活用させればより効果的なのかということはまだまだこれからである。一人ばかりでは分からないことも多いので、仲間を作り、ともに学習していきたい。

(2) 情報の影の部分の指導

通信などを通して外部と交渉が始まれば、フィリタリングなど不適切な情報への対処やハッカー、クラッカーなど悪意の第三者への対応、個人情報の保護も必要になってくるであろう。また、視力低下や外遊びの減少など健康面への悪影響なども考えられる。これらの情報の影部分を教師側がきちんと押さえ、指導していかなければならないと考える。

(3) 地域の人材の掘り起こし

「開かれた学校」ということが言われているが、コンピュータの講師やメンテナンスの協力者が地域にいたとしたらこれほど心強いことはない。コンピュータに限らないと思うが、協力者を地域に求めることはこれから大切になってくると考える。

3. 終わりに

コンピュータの日常化

今回の研究を通して、コンピュータの特性を子どもたちが必要なときに、どこでも、ごく自然な形で活用できる日常化を図ることが大切であると感じた。

これからのコンピュータ活用の形態として

現時点での、コンピュータ活用は学校の中、しかも設置場所や利用する学習内容が限定されていることが多いように思われる。「子どもが自ら学ぶ」ということや「開かれた学校」、「コンピュータの日常化」という観点から、次のような活動形態を増やしていくことも必要だと感じた。

① コンピュータを教室に持ち込む

コンピュータの設置場所をコンピュータ室や図書室、資料室などに限定せず、教室に持ち込み、ネットワークを張ることによって以下のような能動的な学習が可能となる。

- ・ 個別学習の支援
- ・ 必要な情報を必要などに取り出す。
- ・ 壁を越えた交流
- ・ 統合的な表現
- ・ 臨場感ある疑似体験

② 学校の外でのコンピュータ活用

現在でも、映像や音声を取り込めるノート型、モバイル型のコンピュータがある。これらを情報収集の道具として学校の外へ持ち出し活用する。その結果情報を現場で取り込むことやインターネットのとき、相手への学習内容の提示などコミュニケーションの道具として活用されることが期待される。

生徒の自己肯定感を高める 指導の在り方に関する研究

南陽市立漆山中学校
教諭 山村 嘉弘

目次

I 主題設定の理由	1
II 研究のねらい	1
III 研究の方法	1
IV 研究の内容	
1 自己肯定感とは	1
2 自己肯定感を高めるための教師の生徒へのかかわり方	
(1) 人間のとらえ方と教師としての基本姿勢	2
(2) 生徒への接し方の姿勢	2
(3) 教師が技法として身につけたいもの	5
(4) 授業場面ででの在り方	5
(5) 構成的グループ・エンカウンターを活用して自己肯定感を高める	6
V 研究のまとめ	
1 研究の成果	9
2 今後の課題	9

主な参考文献・資料

「エンカウンターで学級が変わる」	國分康孝編	図書文化	1997
「カウンセリングの理論」	國分康孝著	誠信書房	1997
「カウンセリングの技法」	國分康孝著	誠信書房	1998
「エンカウンター」	國分康孝著	誠信書房	1997
「ブリーフセラピー入門」	宮田敬一編	金剛出版	1997
「学校におけるブリーフセラピー」	宮田敬一編	金剛出版	1998
「カウンセリングを生かした授業づくり」	松原達哉編著	学事出版	1998
「授業に生きるカウンセリング・マインド」	鷹鷲・醍子著	教育出版	1996
「育てるカウンセリングが学級を変える」	國分康孝編集	図書文化	1998
「カウンセリング」	伊東博著	誠信書房	1997
「遊戯療法の世界」	東山敏久	創元社	1989
子どもの自律と共生を促す教師の役割	菊地喜弘	小中学校指導員研究資料	1998
月刊「教育相談」		ほんの森出版	1999
「望ましい人間関係を育てる学級づくりの研究」	福岡県教育センター		1998
「共感性を高める人間関係づくりでいじめを無く開発的教育相談」	八巻寛治	宮城県長期研修員研究報告書	1997
「カウンセリング・マインドを生かした積極的な生徒指導」	松澤 哲	山形大学長期研修報告	1992
「今、学校に求められる生徒指導、教育相談」	原田 寧	山形大学長期研修報告	1996

I 主題設定の理由

最近の生徒の間には、友人どうしていざこざや仲間外れがあったり、互いにけなしあったり、あるいは感情的になって他人に攻撃的になったりする場面がしばしばみられる。これは、友人どうしの信頼関係が浅く、人間関係をうまくつくれぬことの現れであり、人間関係がうまくできない生徒ほど、自分を否定的にみる事が多く、なかなか肯定的感情が持てないようにみられる。

他人をけなしたり、傷つけたりすることなく、生徒どうしの信頼関係が深まるような人間関係をつくるには、どのように指導すればよいのか。また、自分を肯定的に感じられる生徒にするには、どのように指導すればよいのか。さらに、教師が生徒に受け入れられる人間関係をつくるには、生徒をどのようにみて、どう関わっていけばいいか。そのための視点や技法を身につけるとともに、それが学校教育にどのように生かされるのかを探るためにこの主題を設定した。

II 研究のねらい

- 1 教師と生徒の信頼関係が高められるような、教師の生徒への関わり方を研究する。
- 2 「構成的グループ・エンカウンター」を通して、自己肯定感が高められ、人間関係が豊かになるような指導の在り方を研究する。

III 研究の方法

- 1 理論研究
 - (1) 学校における教育相談の在り方
 - (2) カウンセリング理論と技法
 - (3) 「構成的グループ・エンカウンター」の理論と方法
 - (4) 教師の姿勢や生徒への関わり方についての文献研究及び講義・講演の受講による研究。
- 2 実技研修
 - (1) カウンセリング、構成的グループエンカウンター、ロールプレイング等の実技体験と技法の演習
 - (2) 遊戯療法、内観療法等の実技体験
 - (3) 事例研究会(ケース・カンファレンス)への参加
- 3 実践研修
 - (1) 授業案の作成と実践授業及びそのまとめ
 - (2) 相談者への電話対応や面接相談

IV 研究の内容

- 1 自己肯定感とは、
『自己をどの程度価値あるものと見ているかを示すもの』であるが、「自分を嫌いでない」「自分はだめな人間だと思わない」こと、「自分がそのまま存在している、居場所がある」と思うこと、「自分をプラスに、積極的にとらえられる」こと、「自分が好きである」こと、「だめな所や弱い所も含めて、今の自分でいい」と思えること、とすることができる。

それゆえ、自己肯定感の高い人は「自信をもてる」「いきいきと生きられる」
「他者を受け入れることができる」
「信頼関係を持ちやすく、対人関係も良好になる」
ことにつながる。

2 自己肯定感を高めるための教師の生徒へのかかわり方

(1) 人間のとらえ方と教師としての基本姿勢

- ① 人には育つ力があることを信じる
人(生徒)は誰も「もっと向上したい」「より良く生きたい」という欲求を持っている。教師はその力を信じ、一人ひとりの可能性を引きだし伸ばせるように援助していく。
- ② 人間はしばしば、知的な動機よりも、感情的・内面的な動機によって行動が左右されるものであることを認識する
「人は理屈では動かず、感情で動く動物である」とも言われる。知的な活動だけでなく、「やる気になる」意欲とか、「できた」「認めてもらえた」という成就感や存在感、「うれしい」「つらい」等の感情的・内面的な営みにも焦点をあてていく。
- ③ 常に学ぶ向上心を持ち、明るく前向きに、そしてゆったりと待っている姿勢を持つ
教師は、うまく行かなくなった時でも、自分を責め過ぎず、また、卑下することなく、つとめて明るく行動したい。特に、失敗したときでも、起きてしまったことを悔やむより、これからできることを考えていくように心掛ける。こういう姿勢の方が、生徒に良い影響を与える。

(2) 生徒への接し方の姿勢

① 生徒の立場で理解し、教師の立場で指導援助する

<視点 i>優しい目と厳しい目の両方で生徒をみるように心掛ける。
優しい目とは共感的な目であり、相手の立場に立って、相手の気持ちを理解しようとする事である。
厳しい目とは評価的な目であり、人間としての大事な力を身につけているかを判断しようとする事である。

<視点 ii>生徒の間違った行動、行為は否定しても、存在、人格は肯定する。
人は何かできるからすばらしいのではなく、存在そのものがすばらしい、という気持ちで生徒に接し、生徒をばかにしたり、問題を持つ生徒を拒否したり、差別をしたりしないように心掛ける。
できるだけ出来事を、前向き、肯定的にとらえるようにする。

(例) 家出、失踪した生徒を探しまわったあげく、ようやく見つけた。教師は、家出という行為を否定はしながらも、第一声は、「見つかってよかった。ここに居てくれてよかった。」という言葉で存在を肯定的に表した。

<視点iii> 過去(原因)を責めるより、将来を励ますように心掛ける。
問題を持つ生徒や困っている生徒には、なぜそうなったかよりも、今をどう変えたいかに焦点をあてていく。また、なぜそうしたかというよりもなぜそうせざるを得なかったのか、に思いを寄せながら、今からのことを励ましていく。

② 治そうとするのではなく、わかろうとする

<視点i> まずよく聴き、それを受容し、共感的理解をする。
わかってもらえることが人の心を癒す。相手の話をよく聞かずに、こちらの考えを押し付けたり、相手の気持ちを勝手に決めつけたりしない。生徒は、「わかってもらえた、受け入れてもらえた」ことがわかれば、それだけで癒される。説得しようせず、自分で成長していこうとする力を信じて、待つことも必要である。

<視点ii> こうあらねばならないという、生徒及び教師の枠組みにとらわれず人間として、生徒の心に重ね合わせようとしていく。
教師が説得しようしたり、先回りして解決してやろうとせずに、生徒の成長しようとする力を信じ、自分で気づき、自分で決めるように援助する。

<視点iii> 生徒と共に生きる教師であろうとする。
相手の心と通じ合う道は悲しみの共有である。生徒と一緒に悲しめたり心の痛みを分け合うことができる人でありたい。
(例) 遅刻して来た生徒に、「遅刻してだめだ。明日から遅れるな！」よりは、まず「どうした？」の声がけをする。
(例) 発熱をおしてマラソンを完走し、ゴールした生徒に、「無理なくてよかったのに」よりは、「具合悪かったのに、がんばったね」という声をかける。
(例) 「先生は俺たちのことを信じてくれない」(正しいことを言うけれど、気持ちを分かってくれない)と向かってくる生徒に、「信じてもらっている気がしないんだね。どんな所がそう思うのかな」と気持ちを汲みながら話し合ってみる。

③ 行動、行為の裏側にある気持ちをくみとる

<視点i> 何を言っているかだけでなく、何を言わんとしているのかということと言葉じりにこだわらず、教師が心を動かしながら見たり聴いたりする。

教師が豊かな人間性、感性を磨いておくことが大切であり、子供からも学ぶという姿勢を常に持っていたい。

(例) 「先生、今日忙しいですよー」という生徒の言葉に対して、「何か話したいことでもあるの」と生徒の気持ちをくみとって、返していく。

<視点ii> 書くことを大事にする。

絵画、日記、作文、班ノート等を書くことを大切に、文章力の無い生徒であっても行間や言わんとしていることを読みとる姿勢を持つ。

<視点iii> 声の調子、視線、座り方、服装、髪形、しぐさ(ジェスチャー)、顔色などの言葉だけでない表現を、教師が心を動かしながら観察しておく。

特に、聴くことは重要だが、視、聴、嗅、味、触すべての感覚で生徒のサインをキャッチできるように気をつける。おかしいと感じる感覚と、ちょっとした良い行動や、わずかな成長なども見逃さない感覚を養っていくように心掛ける。

(例) 「髪が短くなって、すっきりした感じだね」と変化に気づき声をかける。

(例) 「ぞうきんきれいにかけてくれて、気持ちいいよ。」と良い行動を見逃さない。

④ 教師の気持ちや感じたことを表現する

<視点i> 心で思っているだけでは相手に伝わらない。

感じている、分かっているということを表現、行動で伝える。

(例) 「顔色がよくて、元気そうで、安心したよ。」と笑顔で語りかける。

<視点ii> 物理的援助をできるところから実践していく。

変化(好転)は反省によってではなく、行動することでもたらされるものであるから、援助できるところから実行して行く。

(例) 早退した生徒に、あとで電話して心配している気持ちを伝える。

(例) 困っている生徒に「君のために何かしてやりたいけど、私にどんなことをして欲しい?」と問いかけてみる。

⑤ 多様な考えと柔軟性のある手立てを工夫する

ワンパターンな考え方、対応の繰り返しにならないよう、柔軟な思考の枠組みを工夫してみる。特にうまく行かないのなら、今までとどこか違ったことをやってみる。行動をかえれば、感じ方もかわり、変化が起きやすい。

(例) 授業中でもうさく騒ぎ回る生徒に、「学校に来る力、騒ぐエネルギーがある」ととらえ、何かのイベントに取り組みさせてみる。

(3) 教師が技法として身につけたいもの

① 傾聴・受容・共感

自分の価値観で評価したり、批判したりせず、あるがままを受け入れる
(例)相手の言葉に、「うん、うん」、「なるほど」、「そう思ったんだね」等で答える。

(例)「私のしたことは間違っていました。」に対して、「そうせざるをえなかったんだと思うよ。」と受容する。

受容することは肯定することとは違う。

(例)万引きしたという行為を否定はしても、盗みに至った気持ちや感情については理解し受け入れようとする。

② 繰り返し(エコー)

相手の言葉と気持ちを整理して、そのまま相手に返してやる。

(例)「おなかいたい」にたいして「おなかいたい」と返してやる。

③ 支持

教師の価値観や考えを入れて、肯定的な言葉や態度で返してやる。

(例)「シュートミスしてしまった」にたいして、「君のそういう悔しい気持ちや反省する姿勢が次の進歩になるぞ」と肯定的に励ます。

④ 明確化

相手がまだぼんやりとしか気づいてないところを、言葉にしてはっきり言ってやる。

(例)「先生は人に好かれる性格だからいいですね」にたいして、「あなたは、自分では人に好かれてないと思ってんのかな」と言葉にする。

⑤ 質問(リード)

相手の思いや感情を知り解決に向かう質問をする。好奇心で聞かない。

(例)一般的に「どうした？」の声がけや、「よかったら、そこをもうちょっと聞かせてくれ」とか「私に何かしてもらいたいことは？」等と「思っていること」「気持ち」を聞く。

⑥ 「わたしメッセージ」

「君は～しないで」でなく、「私は～と思っている」と自分の気持ちを表現する。

(例)「(君は)なぜそんなことをしたんだい？」でなく、「(わたしは)なぜそんなことをしたのか知りたいな」とこちらの気持ちを言う。

(4) 授業場面での在り方

① 生徒の思い、気持ちを大切に授業

知識が優先され、効率が重視される教師主導の授業から、生徒一人ひとりの個性が尊重され、生徒が主体となって進められる授業への転換が今こそ求められている。

めざす授業では生徒の感じていること、思っていることが大切にされねばならない。それぞれに異なるはずのわかる喜びや成就感、やる気といった生徒自身の気持ちこそ彼らの成長を支える源だからである。

(例)「跳び箱が跳べない」と困って、敬遠している生徒に、「なんとか跳ばせて、できた喜びを味わわせよう」と思う。

今までは、段階的な方法を工夫したり、場面設定や補助を考慮したりして、励ましてきた。

めざす授業では、その生徒の「跳べない」気持ち、「つらく思っている」思いを大切に受容、共感しながら、「やれそうだ」と言う気持ち、「跳ぼう」とする意欲、を持たせることを大切に援助していく。
(例)「数学がわからない」とやる気を無くしている生徒に、「わかる喜びを感じさせたい」と思う。

今までは、つまづいている箇所を確かめるとか、法則を見直させるとか、繰り返しドリルで定着させるなどに取り組んできた。

めざす授業では、「わからないつまらなさ」や「できなくて困っている」気持ちに思いをよせながら、「私でもできそうさ、やってみよう」という意欲を持てるような援助を心掛けていく。

② 対話のある授業

今まではとすると、教師の思いや予想ばかりを優先した一方通行の授業になりがちであった。生徒の思いを大切にするには、生徒に意見や意思を表現させ、それを教師が受け止め、評価し、さらに生徒に戻してやるようなことをしながら、対話のある授業をめざしてゆくことが必要である。

(例)生徒の反応を、まず教師が肯定的に受け入れることで、発表しやすい雰囲気をつくり、発言や表現をていねいに上げる。

(例)授業の内容についてのアンケートをとったり、ワークプリントに、感想や要望などを書き込ませ、その返事も返してやったりする。

(例)教師の態度や指導の仕方についての意見などをときどき聞いてみたり、教師に対する評価や通知表を書かせたりしてみる

(5) 構成的グループ・エンカウンターを活用して自己肯定感を高める。

① 学校で活用する意味と有効性

i 構成的グループ・エンカウンターとは、

エクササイズ(課題、演習)を体験する中で、心とこころの交流を深め、その思考、感情、行動を意識化することで、自己を深く見つめ、自分の在り方、生き方を振り返ることをねらいとした活動。

ii 活用する意味と有効性

構成的グループ・エンカウンターを、学級活動や日常の活動に、意図的、計画的に取り入れることで、自己理解、自己受容、他者理解、自己主張、信頼体験、感受性の促進等が深められる。このことで自己肯定感が高められ、人間関係でつまづいている生徒の人間関係を良くし、生徒相互の共感的な人間関係を育てることになる。

ii 留意点

- ・学級や学年づくり、学級活動やHR、教科や道徳の中で、領域や時間などの条件に合わせて活用する。
- ・生徒の発達段階（レディネス）、実態にあわせて、エクササイズを選定する。
- ・単なるゲームにならないように、エクササイズは、順序性、ねらい、おもしろさ（興味）、時間に配慮して選定する。
- ・特に、振り返り（シェアリング）を大切に、心に沸いてきた思いを意識させるようにする。
- ・とけこまない生徒への配慮や落ち込んだ生徒へのフォローにも配慮する。

② 活動展開のパターン

	ねらいと内容	留意点
i	導入（この時間にやることのねらいと内容の説明）	
ii	ウォーミングアップ（活動への抵抗を少なくし、心身ともリラックスした和やかな雰囲気をつくる。）	じゃんけん、握手、マッサージ等の様に、ゲーム的なものや身体を使うもの、楽しめるものが良い。 (約10分)
iii	インストラクション（エクササイズのねらいとやり方、ルールと注意点を説明する。さらにデモンストレーションや自己開示等で見本を示す。）	生徒の発達段階や実態にあったエクササイズを選定しやり方を工夫する。
iv	エクササイズの実施（主となる活動）	ねらいにそった援助や指導と観察 (約25分)
v	シェアリング（エクササイズでの感じたことを振り返り、他の人と分かち合う）	振り返り用紙に記入、教師のリード、グループでの話し合い等、生徒の実態に応じた方法を考える。 他の人の発表を否定したり、冷やかしたりせず受け入れられるように配慮する。
vi	まとめ（教師が感じたこと、気づいたことやねらいに対しての再確認をする。）	できるだけ肯定的に生徒に返してやる。 (約15分)

③ 授業実践 I

南陽市立漆山中学校 2年A組37名
平成10年9月29日（火）6校時 学級活動

i エクササイズ

『いいところ探し』

ii ねらい

他人から肯定的に見られた自分を受け入れ、今までの自分を確認し、新たな自分に気づいたりして、自己理解を深める。

iii 内容

- ・ウォーミングアップ 「じゃんけんサッカー」をやる。
- ・エクササイズ グループのメンバーの一人一人の『いいところを2つ探し』、一人1枚ずつの用紙に記入する。次に、全員いっせいに本人に渡す。書いてもらった自分の「いいところ」を見て、「自分もそう思う」点に◎、「新しく気づいた」点に☆をつける。

iv 生徒の感想

- ・「思ってもいなかったことを書いてもらってうれしかった。」
- ・「今までずっと一緒にのクラスにいたけど、男子とかが自分のことをどう思っているのかが分からなかったけど、この授業を通して分かったのでよかった。」
- ・「授業の内容もとてもおもしろかった。自分のいいところにも気づけたし、少してれくさかったけどいい学習になった。これからも違うグループでやって見たいなと思いました。」
- ・「みんなは自分の気づかない所を見ていてくれることが分かった。」
- ・「自分の内の気持ちと、外からの自分が、違うふうに見えてみたいだ。」

v 実践を終えて

- ・ねらいはおおむね達成された。自分を肯定的にとらえた生徒が多く見られた。
- ・生徒にとって初めての学習で、いい体験ができたと思っている生徒が多い。
- ・自分を肯定的にとらえられない生徒の姿が見えて来て、生徒理解にも役立った。

④ 授業実践 II

南陽市立漆山中学校 2年A組37名
平成10年10月12日（月）5校時 学級活動

i エクササイズ

『私は私が好きです。なぜならば・・・』

ii ねらい

自分の好きな面に目を向け自分を肯定的に感じられるようにする。

iii 内容

- ・ウォーミングアップ 「たのむよ！体験」（後倒）
- ・エクササイズ 「私は私が好きです。なぜならば・・・だからで

す。」と思いつくだけたくさん書いていく。

iv 生徒の感想

- ・「自分を好きだなんてふだんは思わないので、見つけるのが大変だったけど、よく考えて見ると7つも見つかった。」
- ・「今まで考えたことがなかったから、見つけるのが大変だった。他人のこととなるとたくさんあるけど、自分のはなかった。」

v 実践を終えて

- ・今まで意識しなかった『自分』を意識することはできたが、「自分のことを考えることは、初めてで難しかった」ようで、自分を肯定的に感じられるには至らない生徒が多かった。
- ・全体を通して緊張感、集中力が足りなかった。グループづくり、ウォーミングアップ、例示を工夫する必要がある。さらに、生徒の発達段階や実態に合わせたエクササイズを検討が必要である。

V 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 教師と生徒の人間関係を深められるような生徒への関わり方を知ることができた。特に、
 - ① 生徒の思いに共感したり、感情に焦点を当ててわかろうとする姿勢
 - ② 生徒からの声を聴く姿勢が大切であることがわかった。
- (2) 「構成的グループ・エンカウンター」を意図的、計画的に取り入れることによって、生徒の自己肯定感や生徒同士の人間関係を深めるのに役立つことがわかった。
- (3) 「教育とは子供をどう教えるかではなく、教師がどう生きるかだ」といわれるが、たくさんの文献、講演、講義、演習、実習などから、人間関係のもち方、生き方に関する示唆を得、体験することもできた。人間関係をよくするための技法や技術もおろそかにできないと感じた。
- (4) 現場を離れて、子供や父母のなまの声を聞くことができた。人の気持ちをもっともっと大切に、言葉の使い方もいいいにならなくてはいけないという思いを強くした。

2 今後の課題

- (1) 理屈を知ってもできるとは限らない。知識や考え方、理論として学んだだけでは自分のものとして身につかない。今後も数多くの研修や現場での実践で自分を磨いていくことが課題である。
- (2) 現場教師のやることは山ほどある。そのなかで教育相談的な関わり方が学校全体の中でどう生かされて行くか、生かして行けるかが大きな課題である。
- (3) 教師同士の関係も重要である。昨今の、教師が元気でない社会状況の中で、学校内外での役割関係、支えあえる人間関係づくり等も課題である。

病弱養護学校における一人一人のニーズに応じた指導の在り方に関する研究 —— 個別の指導計画の作成と実践を通して ——

山形県立山形養護学校
教諭 東谷 薫

目次

I 主題設定の理由とねらい	1
II 研究の仮説	1
III 研究の方法	1
IV 研究の内容	1
1 個別の指導計画の意義	1
(1) 個別の指導計画が求められる背景	
(2) 個別の指導計画を作成するメリット	
2 病弱養護学校における個別の指導計画を生かした取り組み	2
(1) 病弱養護学校における個別の指導計画の必要性	
(2) 個別の指導計画を生かした取り組み	
(3) 実践の概要	
(4) 考察	
V 研究のまとめ	9
1 研究の成果	
2 今後の課題	

主な参考文献・資料

障害のある児童・生徒のための個別指導計画Q&A	東京都教育庁	1997
個別教育計画の理念と実践 I E P 長期調査研究報告書	財団法人安田生命社会事業団	1995
病気の子どもへの理解と援助	山本昌邦	慶応通信 1988
障害児教育 授業の設計	阿部芳久	日本文化科学社 1997
発達に遅れがある子どもの日常生活指導 排泄指導編	飯田雅子	学習研究社 1998
元気になるインフォームド・コンセント	柳田邦男	中央法規 1997
『個別指導計画』を考える	水貞夫他	全障研出版部 1998
個別の指導計画の作成と活用	北海道立特殊教育センター	1998
研究紀要 第19号	札幌市教育研究所	1997
福島県養護教育センター研究紀要第13号	福島県養護教育センター	1999
肢体不自由教育 136	日本肢体不自由児協会	1998
実践障害児教育 1999 Vol 308	学習研究社	1999
教育と医学 1998 12	教育と医学の会	慶応義塾大学出版会 1998
発達の遅れと教育 NO 489	日本文化科学社	1998

I 主題設定の理由とねらい

近年、個に応じた指導への関心が高まり、保護者や本人の願いを大切にしながら、一人一人の実態に即した指導計画を立てることの大切さが指摘されており、全国の特殊学校や特殊学級で IEP (個別教育プログラム) の考え方を生かした取り組みが研究、実践されるようになってきている。

その中、病弱養護学校では、病気の種類や程度の多様化・重複化が進むとともに、様々な障害を併せもつ児童生徒が増えているという現状に加え、医療の進歩等に伴い入院期間が短期化したり、同じ病気で入退院を繰り返したりすることが多くなってきており、そのような児童生徒の実態把握の方法や指導目標の立て方及び学習内容の精選の仕方等については大きな課題となっている。

このようなことから、病弱養護学校において、一人一人の多様なニーズに応じたきめ細かな指導を行っていくためには個別の指導計画が必要であると考え、その意義や必要性を探るとともに、具体的な作成や活用する方法について研究したいと考え、本主題を設定した。

II 研究の仮説

児童生徒一人一人の実態を適切に把握するとともに、本人及び保護者の願いを取り入れた個別の指導計画を作成し、それを具体的な指導場面で活用し指導に生かしていけば、課題や目標及び具体的な支援方法が明確になるとともに、個々のニーズに合わせた指導が可能になり、それが、一人一人の成長や発達につながるのではないかと。

III 研究の方法

- 1 アメリカにおける IEP (個別教育プログラム) について資料や文献を通して知るとともに、日本における個別の指導計画との違いや、個別の指導計画が求められる背景や意義について、文献や研修会を通して研究する。
- 2 病弱養護学校における効果的な個別の指導計画作成の在り方を探るとともに、作成や活用する方法について文献や指導実践を通して考察する。
- 3 保護者や関係者との話し合いを通して児童理解を深めるとともに、実際に指導計画を作成し、個別または集団の授業の実践に生かす。

IV 研究の内容

1 個別の指導計画の意義

(1) 個別の指導計画が求められる背景

最近の特殊教育の動向で、「個別の指導計画」が求められるようになってきた背景として、次のようなことがあげられる。

①社会的な要請から

児童生徒の「勉強嫌い」「学校嫌い」や「学習意欲の低下」等の反省から、児童生徒一人一人がもっている個性や能力を最大限に発揮させるという視点に立ち、「個に応じた指導」を充実させていくことの大切さが指摘されるようになってきた。

②「生きる力」を育てるために

障害のある子ども一人一人を可能な限り社会自立や社会参加を実現させる観点に立ち、「生きる力」を育むためには、教育内容、方法、指導体制の工夫・改善に努めるとともに、日常の授業実践の質的な改善が必要と考えられる。この取り組みを支えるものの一つとして「個別の指導計画」があげられる。

③特殊教育の方向性の一つとして

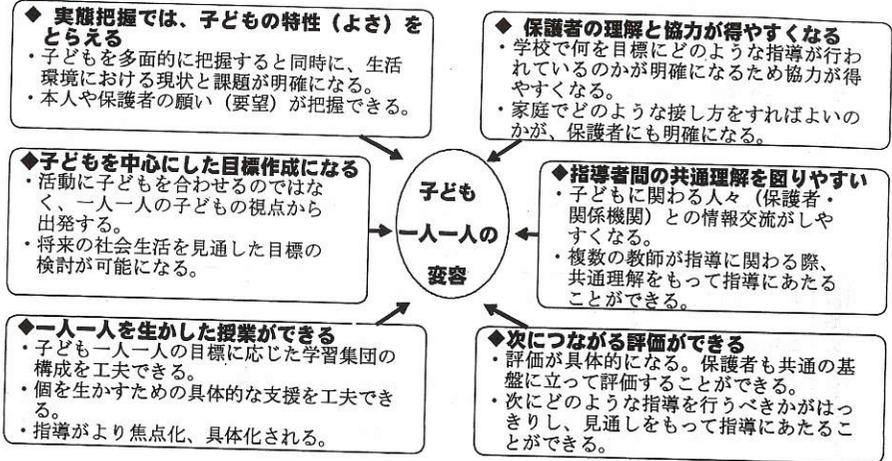
教育課程審議会答申(平10,7,29)では、盲・ろう・養護学校の教育課程の編成の中で、「養護・訓練(自立活動)の指導や重複障害者等の指導にあたっては『個別の指導計画』を作成して指導する必要がある」ことが示されている。新学習指導要領においても、このことを踏まえて同様の趣旨で示されることが予想される。

④保護者の意識の変化

近年の少子化の傾向と関連して、保護者の子どもの教育への関心がこれまで以上に高まり、教育内容、指導方法に対する学校への要求が多くなってきている。子どものライフスタイルも考慮し、保護者の理解と協力を得ながら教育を効果的に進めていくことが望まれている。

(2) 個別の指導計画を作成するメリット

個別の指導計画を作成することで変わること、メリットとしてあげられることを下記のとらえる。そして、これらの変化は、一人一人の子どもの変容につながるものと考えられる。



個別の指導計画の目指すもの

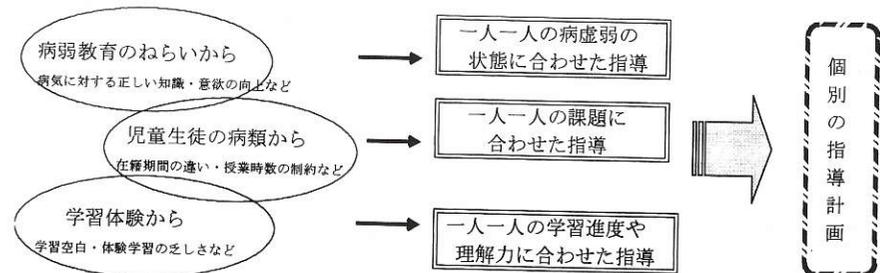
「個別の指導計画」は、一人一人の子どもの具体的な目標や教育内容、指導内容を明らかにした指導計画であり、「個が生きる授業」を作り、一人一人の子どもを変容することを目的としている。つまり、個別の指導計画は、個を生かし、個性や能力を最大限に伸ばす教育観に立ち、一人一人の子どもの社会参加・自立を図るための「生きる力」を育てることを目指すものといえる。

2 病弱養護学校における個別の指導計画を生かした取り組み

(1) 病弱養護学校における個別の指導計画の必要性

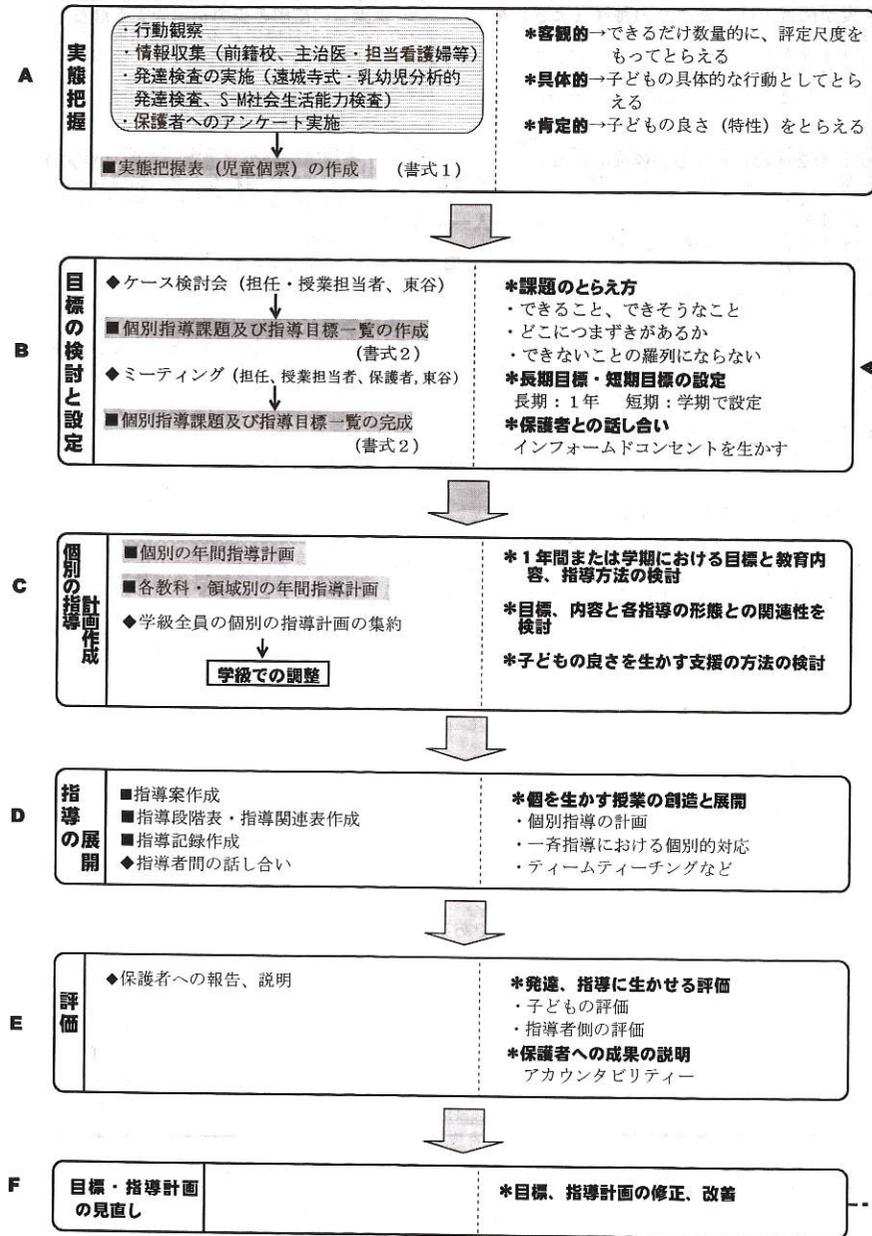
病弱養護学校では、先にも述べた実態から、児童生徒の病虚弱の状態、抱えている課題やニーズ、学習進度や理解力の状態などが一人一人異なるため、特に個に応じた指導の大切さが求められている。

そのためにも、個別の指導計画を作成し、一人一人の特性を生かし、学習の意欲を高めながら、きめの細かい指導をすることが必要であるといえる。



(2) 個別の指導計画を生かした取り組み

- ① ねらい
 - ・ 病弱養護学校における一人一人のニーズに応じた指導の在り方について、具体的な個別の指導計画の作成とそれに基づく授業の実践を通して検証する。
- ② 手順及び作成の視点



(3) 実践の概要

① 「実態把握表」及び「指導課題・目標一覧」の作成

病弱養護学校においては、在籍期間が短期傾向にあり、年度途中の転入が多いことから、個別の指導計画を作成する場合、転入学してきた児童・生徒一人一人の実態を早期に的確に知ることが必要になる。実態把握は、子どもについての障害の状態、発達段階、経験の程度、生育歴等の理解に努めるとともに、関係者や保護者などからの情報もできるだけ収集して、子どもの現在の障害や発達の状況等を総合的に把握することが大切といえる。つまり、実態把握の内容をすべて別個なものとしてとらえるのではなく、関連を図りながら、多面的に見ていくことが重要になってくる。

その際、子どもの生活様式を見通した実態把握という観点から、保護者にアンケートを実施するなどし、子どもを取りまく広い意味での生活環境（時間、空間、人間関係等）における子どもの実態や、保護者の願いや要望などが把握できるようにしたいと考えた。そして、これらの内容は、「実態把握表（児童個票）」（書式1）に記入しケース別の資料とした。

次に、（書式1）より浮かび上がった課題をもとに、学校の教育活動に生かすため、短期目標、長期目標、各教科・領域における指導目標及び内容、指導方法などができるだけわかりやすくコンパクトにまとめるものとして、「指導課題・目標一覧」（書式2）を作成した。これは、保護者を交えたミーティングの際の資料とし、保護者との話し合いの中で検討、修正しながら完成させていくようにした。

実態の把握から課題のとらえ方については、親と教師の間でズレが生じることも往々にしてあると思われるが、文章化して提示し、共に考えていくことで共通の認識に立つことができる。と考える。

（書式2） 個別指導課題及び指導目標一覧

氏名	性別	年齢	学年	所属	作成
〇〇〇〇	〇	10	小学部 2年	重複学級 1組	H10.10.15
各領域における本児の課題					
認知・理解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 興味・関心の幅を広げる。 ・ 日常生活や学習において、簡単な見通しをもつ。 				
生活・行動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 行動にこだわりのパターンがみられる。 ・ 排泄のサインの確立。 ・ 衣服の着脱。 				
運動・動作	<ul style="list-style-type: none"> ・ 手の動作。 ・ 粗大運動（マットを使った運動、ボールをけるなど）。 				
コミュニケーション・社会性	<ul style="list-style-type: none"> ・ サイン（身ぶり）の習得（ちょうだい、ありがとう、だめ等） ・ いろいろな先生、子どもとの関わりを増やす。 ・ 一人でも遊べるものを見つける。 				
長期目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 興味・関心の幅を広げる。 ・ サイン（身ぶり）を身につける。 ・ 簡単な衣服の着脱ができる。 ・ 運動機能（粗大運動と手指機能）の向上。 ・ 洋式トイレで、一人で排泄する。 				
短期目標	2学期	3学期	平成11年度		
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 簡単なあいさつや要求を身ぶりで表す。 ・ 言葉がけを受けてボタンのない服やズボンの着脱をする。 ・ 尿意を伝えてトイレに行く、排泄する。 ・ トイレットペーパーを押さえてもらいちぎる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 簡単なあいさつや要求を発声と身振りで表す。 ・ できるだけ一人で、ボタンのない服やズボンの着脱をする。 ・ トイレットペーパーをちぎって、丸める。 ・ トイレットペーパーを持ち替えて肛門にあて、拭こうとする。 			

（書式1） 実態把握表

学年	氏名	生年月日	転入日	平成10年度10月6日
小学部 2年	〇〇〇〇	〇〇/〇〇/〇〇	〇〇/〇〇/〇〇	7392月
保護者氏名 〇〇〇〇 前籍校 〇〇〇〇				
住所 山形市〇〇-〇〇 電話番号 〇〇-〇〇〇〇				
氏名 〇〇〇〇 (生後) 〇〇 性別 〇〇 年齢 〇〇 転入年月日 〇〇/〇〇/〇〇				
〔指導課題の記載等〕				
・ 前籍校 S-M社会生活能力検査（社会生活年齢1才10ヶ月、SQ2.4）				
・ 遠城寺式・乳幼児分析的発達検査				
身体運動 1:55 対人関係 2:15				
手の運動 1:55 発音 0:55				
基本的習慣 2:45 手指機能 1:55				
本人・保護者の願い				
〔健康面〕				
① 目がよく見えずに読書が苦手...				
② 歯が痛いので食べが苦手...				
③ 大げな行動が気になる...				
〔生活面〕				
① 歯磨きを嫌がる...				
② スローに寝ていく...				
③ 自分で着脱が苦手...				
〔学習面〕				
① 漢字が苦手...				
② 算数が苦手...				
③ 読書が苦手...				
〔余暇の過ごし方〕				
① 好きなゲーム...				
② 好きなテレビ番組...				
③ 好きな食べ物...				
〔その他〕				
① 小・小 小童希望				
② 家庭で生活しているが、通園希望あり				
③ 家庭で生活しているが、通園希望あり				
④ 家庭で生活しているが、通園希望あり				
⑤ 家庭で生活しているが、通園希望あり				
⑥ 家庭で生活しているが、通園希望あり				
⑦ 家庭で生活しているが、通園希望あり				
⑧ 家庭で生活しているが、通園希望あり				
⑨ 家庭で生活しているが、通園希望あり				
⑩ 家庭で生活しているが、通園希望あり				

② スタッフ会（ケース会、ミーティング）の実施

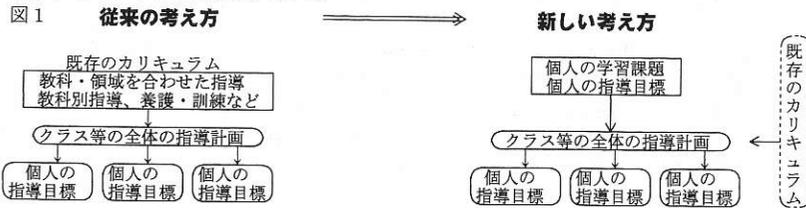
スタッフ会は、担任のみならず児童生徒に関係する教員等がチームを組んで、児童生徒の実態をどのように見ているのか、ニーズはどこにあるのか等を検討し、児童生徒の生活の基本を押さえた上で、それぞれ、自分の担当する各教科・領域等の指導計画を作成し、それが、日々の授業に生かされていくことに意義がある。と考える。そして、その中に、本人や保護者の願いを生かしていくことが、家庭との信頼関係に裏付けられた教育につながっていくものと思われる。

◆ **ケース会** (参加者：担任、授業担当者、東谷)

ケース会では、(書式1)をもとに、本児の現在抱えている課題を担任や授業担当者がそれぞれ出し合い、実態の関連づけを図るとともに、短期的、長期的な目標を立て、(書式2)に記入する。

課題については、本児の特性をとらえることを基本とし、本児がどの発達段階にあるのか、また、現在の発達段階でどんなこと(力)が必要なのかという観点でとらえるようにし、単にできないことやマイナス面だけを取り出して羅列するようなことのないようにする。

指導目標作成については、従来のカリキュラムに個人の指導目標を合わせていくのではなく、あくまでも個人の学習課題を出発点、最優先するという考えで、個人の指導目標にカリキュラムを合わせていくことになる。(図1)



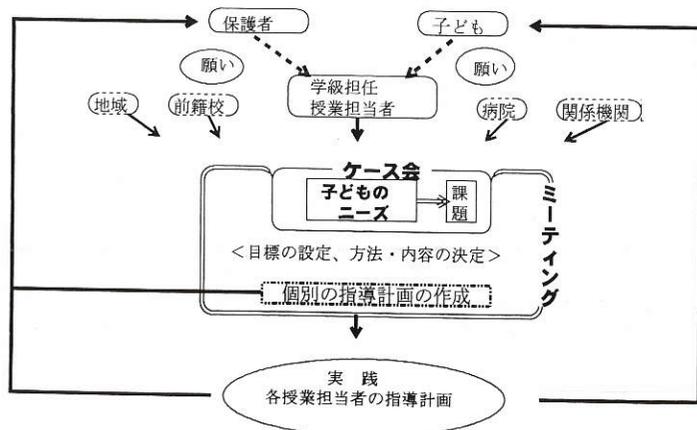
◆ **ミーティング** (参加者：担任、授業担当者、保護者(本児の母親)、東谷)

ケース会で記入した(書式2)をもとに、保護者を交えて、指導課題及び指導目標、指導内容等の検討、修正を行い、(書式2)を完成させる。ミーティングで話し合われたことは下記の通りである。

保護者から：家庭での様子、健康面(治療の経過、服薬の状況等)について
学校への要望、親の願い
学校から：学校生活や学習における本児の様子、学校での取り組み
諸検査等から考えられること
ケース会で話し合われたこと(本児の課題、短期・長期目標)

子どもや保護者の要望を生かす教育は、教育の主体性が損なわれるのではないかという危惧もあるが、ニーズに応じるということは、本人や保護者の要望にそのまま応じてすべて指導に取り入れなければならないということではないととらえる。「本人」や「保護者」のニーズを、まず理解した上で、学校教育として指導する方向性を明確に説明し、理解と協力を得るという方向性(インフォームドコンセント)で進めていくことが必要であると考える。

図2 ニーズを生かし授業の実践に至る過程



③指導の実際

ア 個別の指導計画を生かした排泄の指導

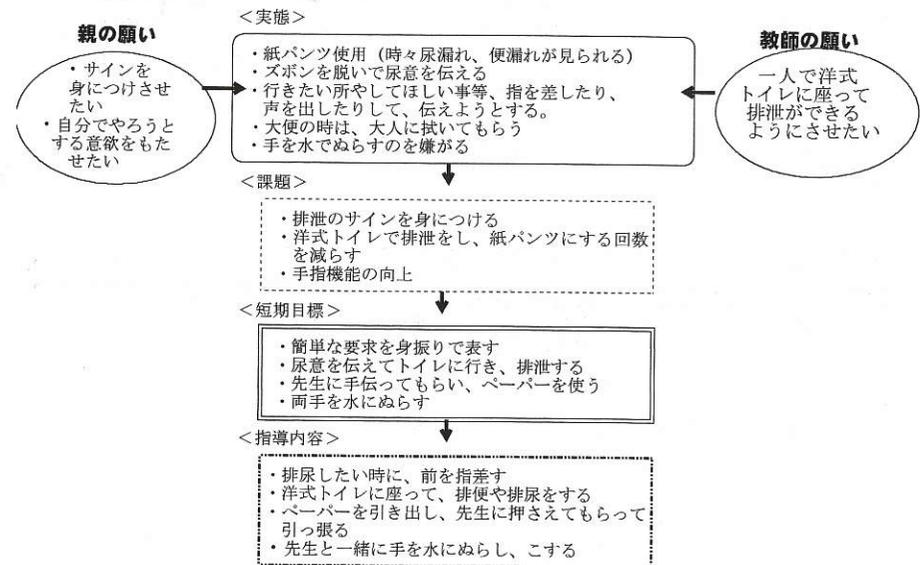
《対象児》 小学部重複学級2年 男児(A男)
《病名・障害名》重症ミオクロニーてんかん、知的発達障害
《諸検査の結果》

- ・新版 S-M 社会生活能力検査：社会生活年齢1歳10ヶ月、SQ 2.4
- ・遠城寺式・乳幼児分析的発達検査(年：月)

(運動)	移動運動	1:9~2:0	手の運動	1:4~1:6
(社会性)	基本的習慣	2:3~2:6	対人関係	2:0~2:3
(言語)	発語	0:5~0:6	言語理解	1:4~1:6

《指導内容と方法》

実態把握から指導内容決定までの流れは、以下の通りである。

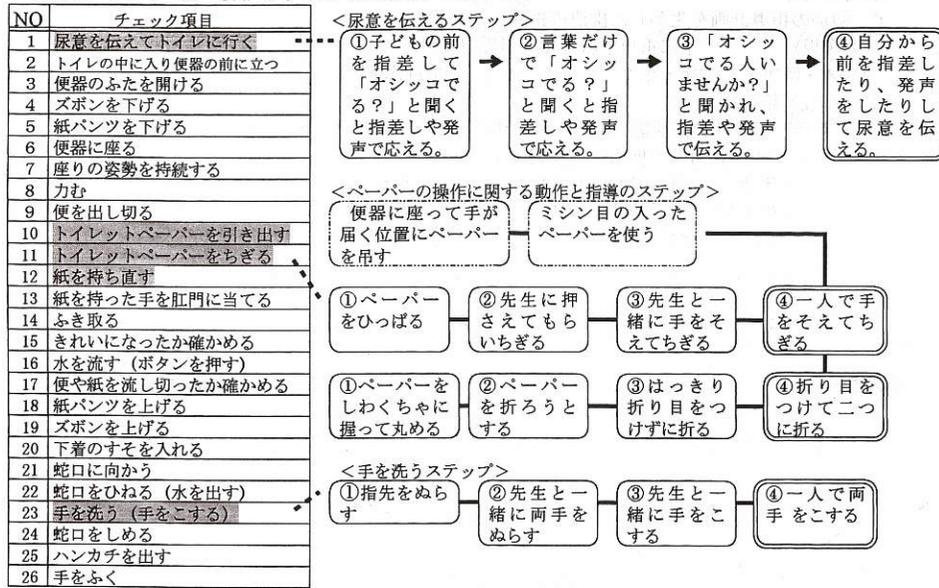


次に、上記の目標を達成するために、下記のような手順で洋式トイレで一人で排泄をするまでの指導プログラムを作成した。

- ①一連の行動を単位ごとに分析する。
目的の行動を獲得するまでの単位行動をより簡単な行動のステップへと設定する。
- ②指導ステップを設定する。
複雑な行動を形成する時は、初めの行動の単位ではなく、原則的に最終の単位から出発する。
- ③促進化(プロンプト)の方法を考える。
目的の行動に導くためのヒントと手がかりを、「声かけ」、「動作によるモデル提示」「手をとって実際に教える」こととした。
- ④フェーディングを行う。
目的の行動が確実に起きるようになるにつれて、プロンプトを段階的に除去する。

そして、指導プログラムのどの単位行動につまずきがあるのかをチェックし、スムーズに行えない単位行動については、ステップ化して指導にあたるようにした。

＜洋式トイレで一人で排泄をするまでの指導プログラム＞



＜指導経過表＞

子どもの様子	担任と話しあったこと・改善点等
11 /	・トイレトペーパーが、便器に座ったままで届かない位置にあるので、一端立たなければならぬ。 ・ペーパーは一人でちぎれないが、上を押さえてやると、引っ張ってちぎる。 ・ペーパーをたたんで持たせると、肛門にあてる仕事をする。
18 /	・手を洗う時、腕まくりを嫌がり、自分ですぐ下ろそうとする。洗うというよりも指先をぬらすだけで、この動作は見られない。
11 /	・トイレトペーパーをちぎった後、自分でクシャクシャに丸めた。
25 /	・手洗いで、右手をちよつとだけぬらした。 ・便器に座ったままで、トイレトペーパーを引き出すことができた。ミシン目が入っているの、少しの力でも破け、ちぎりやすくなった。
12 /	・トイレトペーパーをちぎって、クシャクシャにして持つ。その紙を、肛門に当てるが、指に力を入れて拭き取るのは難しい。
2 /	・指先だけだったが、抵抗なく両手を水にぬらした。
1 /	・病棟でも、一人でペーパーを引き出し、ちぎろうとする様子が見られるようになった。
18 /	・教師が手を洗うと「次は僕の番」と自分の顔を指差してから、一人で手を洗おうとした。
2 /	・一人でペーパーホルダーのふたに手を当てて、ペーパーを引っ張った。

イ 一斉指導における個別の対応

《対象クラス》小学部重複学級1組(在籍児童3名(2年A男、4年B女、4年C男))
《指導内容と方法》

毎日1校時目に行っている日常生活の指導で、個別の指導計画を生かした指導過程(表1)を組み、一斉指導の中で個別の対応が適切に行われるようにした。そのためには、個別の指導目標があらかじめ明確になっていることが前提となることから、一斉指導を行う内容については、指導内容段階表(表2)を作成し、それに基づき個別目標を設定した。そうすることで、指導にあたるスタッフの共通理解が図られ、個々の児童生徒の実態に応じた対応が可能になると考えた。また、評価については、「評価の観点」を決め、それに沿って行うようにした。

(表1) 指導段階表を生かした朝の会の指導過程

時間	主な学習活動	教師の働きかけと指導上の留意点等			評価
		T1 A男	T2 B女	T3 C男	
8:35	1 個別の課題に取り組み。	<p>・できるだけ本児の自主的な行動を引き出すようにするため、言葉がけは最小限に押さえる。 ・一人でできた、大きさに誉める。</p> <p>・一人でできない所は、手を取って一緒にやる。</p> <p>・一人でできない所は、部分的に援助する。</p> <p>・シールをはる場所(数字)は指を差して教える。</p> <p>・トイレに行く前に、できるだけ尿意をサインで表すようにさせる。</p>	<p>・次の行動を賞賛させるために、「次は〇〇しようね」などと言葉がけながら援助する。 ・一人でできない所は、手を取って一緒にやる。</p> <p>・話しかける時には、視線を合わせるようにし、本児の表情をよく観察する。</p> <p>・便器に座っているのは10分を限度とし、それ以上座っていても出ないときは中止して、教室に戻る。</p> <p>・着替えては、できるだけ本児の動きを引き出すように援助する。</p>	<p>・気分が乗らない時は、落ち着くまで待つが、タイミングを見て動きかけ、活動に誘う。</p> <p>・一人で行動できたら、大きさに誉める。</p> <p>・一人でできない所は、部分的に援助する。</p> <p>・定時に排便を促す。</p> <p>・パットではなく、便器の中に排便するように言葉がけをする。</p>	A B C
9:10	2 朝の会をする。 (1)朝の歌を歌う。 (2)朝のあいさつをする。 (3)健康観察をする。 (4)今日の予定を知る。	<p>個別目標</p> <p>①あいさつを発声や動作で表現する。 ②「元気ですか」と聞かれて、発声したり、両手を挙げたりして返事をする。 ③廊下で先生の話を聞く。</p>	<p>個別目標</p> <p>①先生の前に顔を向けて、歌や話を聞く。 ②名前を呼ばれて、視線を合わせる。 ③「おはよう」と言われ、表情を変えたり、声を出したりする。</p>	<p>個別目標</p> <p>①あいさつを言葉と動作の両方で表現する。 ②「元気ですか」と聞かれて、「げんきです」と答える。 ③聞かれたことに対し、自分の言葉で答える。</p>	
9:20	健康観察を保健室に搬送に行く	<p>・歌では、全員の名前を呼び、人と名前を一致させるようにする。 ・はっきり大きな声で返事させる。 ・わかりやすい言葉で、簡単に伝える。</p>	<p>・手を取ったり、視線を合わせたらしながら歌いかける。 ・顔の正面で視線を合わせてから、名前を呼ぶ。</p>	<p>・できるだけ座って参加できるようにする。 ・一回で答えられない時は、繰り返して聞き返す。 ・わかりやすい言葉で、簡単に伝える。</p>	

(表2) 朝の会における指導内容段階表(一部抜粋)

＜1＞朝の歌	
①音楽を聞いて、発声をしたり、表情を変えたりする。	
②音楽を聞いて、近づいてくる。	
③座って歌を聞く。	C男
④先生と手をつないだり、視線を合わせたりしながら聞く。	B女
⑤歌の中で呼ばれた人の方を向いたり、指を差したりしながら聞く。	
⑥部分的に声を出しながら聞く。	A男
⑦不明瞭でも、歌の一部を歌う。	
⑧不明瞭でも、歌のほとんどを歌う。	
⑨先生や友達に合わせて、一緒に歌う。	
＜2＞朝のあいさつ	
①先生の顔を見て、あいさつを聞く。	
②「おはよう」と言われたら、表情を変えたり、身体を動かしたりして答える。	B女
③「おはよう」と言われたら、おじぎをして答える。	
④「おはよう」と言われたら、発声で答える。	A男
⑤「おはよう」と言われたら、不明瞭でも「おはよう」と答える。	
⑥「おはよう」と言われたら、はっきりした発音で「おはよう」と答える。	C男
⑦自分から進んで「おはよう」とあいさつする。	

④ 評価及び保護者への報告

目標がどの程度達成されたかを学期単位（短期目標）で評価するとともに、指導内容や方法が妥当であったかを指導者間で話し合った。評価において大事なことは、毎回の評価を次の指導に生かし、指導内容や指導方法の見直しを図るとともに、必要に応じて柔軟に変えていくことと考える。

また、評価結果については、学期末に保護者会や個別面談などの機会を設けて、具体的に伝えるとともに、保護者からの評価も聞くように心がけた。そして、この評価結果は、そのまま次学期、次年度の計画作成の資料とした。

(4) 考察

- ① 個に応じた指導をするためには、児童生徒一人一人の実態をいろいろな角度から総合的に把握することが必要であるということがわかった。しかし、在籍期間が短期傾向にあり、年度途中の転出入が多い病弱養護学校の実態を踏まえると、必要なことをできるだけ短期間にとらえられるような工夫をする必要があるといえる。また、障害が重度化・重複化するほど、短期間では実態をとらえることが困難である場合が多いので、一度、実態としてとらえた後も、常に加除、修正を加えながら指導に生かしていくことが大切であると考えた。
- ② 実態把握表（児童個票）をもとに、児童の指導課題を絞り込むための話し合い（ケース会）をすることで、児童を多面的にとらえ、児童についての理解を深めることに役に立つことがわかった。また、指導関連表を作成し活用するなどし、発達段階を踏まえた指導内容を組み合わせることの必要性も感じた。
- ③ 目標案ができて上がった後に、保護者と確認する場（ミーティング）を設け、本人や保護者のニーズを組み入れた形で目標をたて、理解と協力を求めながら進めていく大切さを感じた。また、指導の経過及び結果についても、保護者とともに確認し、次の指導について検討していく姿勢も、今後一層必要とされることと考える。
- ④ ティームティーチングで指導を行う場合、指導者間で共通理解を図った上で指導に当たるために、指導段階表などを活用し、目標の確認や働きかけの方法などについて話し合う場を設けたことは、一斉指導において個の最適化を図る上で有効だった。
- ⑤ 一人一人の目標を短期目標、長期目標として具体的に設定したことで、一定期間における子どもの変化の様子が明確にとらえやすくなった。また、併せて、指導者側の指導の成果や課題についても、次の指導に生かす視点が明確になった。
これらの評価を踏まえ、目標の修正や教育内容、指導方法を改善していくことで、よりよい指導の充実を目指していくことにつながるものと考えた。

V 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 文献や資料、研究会を通して、個別の指導計画の意義や求められる背景についての理解を深めるとともに、個別の指導計画の課題やこれからの方向性について考えることができた。
- (2) 病弱養護学校の実態や抱えている課題を考察することで、病弱養護学校における個別の指導計画の在り方を明らかにすることができた。
- (3) 実際に、個別の指導計画を作成し、短期間だったが計画に基づいた実践を行うことができた。特に、新しい形で保護者と連携しながら、指導にあたることは、大きな収穫だった。
また、個別的な指導だけでなく、一斉指導においても、個別の指導計画を生かした授業を実践し、ティームティーチングにおける指導者間の連携の仕方や個に応じた指導の手立てについて研修を深めることができた。

2 今後の課題

- (1) 個人研究レベルではなく、学校組織としての取り組みと教育課程への位置づけを図る。
- (2) スタッフ会における病院や医療関係者などとの連携の在り方を検討する。
- (3) 一斉指導及びティームティーチングにおける、より効果的な個別の指導計画の生かし方について探る。
- (4) より継続して簡便に使える個別の指導計画の書式及び手順等を工夫する。

学習障害(LD)児等の指導における
通常学級担任への
支援の在り方に関する研究

天童市立長岡小学校
教諭 小田中 善勝

目次

I 主題設定の理由とねらい	1
II 研究の方法	1
III 研究の内容	1
1 学習障害(LD)児等とは何か	1
(1) 学習障害(LD)の概念	1
(2) 学習障害(LD)児の大まかな特徴	1
(3) 学習障害(LD)児の出現率と支援状況	1
2 事例研究	3
(1) 事例研究の目的と仮説	3
(2) 事例研究の実際	3
(3) 事例研究に関する考察	8
IV 研究のまとめ	9
1 研究の成果	9
2 今後の課題	9

主な参考文献・資料

落ち着きのない子どもたち—多動性症候群への理解と対応—	石崎 朝世	すずき出版	1997
新・WISC-R知能診断事例集	藤田和弘 上野一彦 前川久男 大六一志共編著	日本文化科学社	1995
特別研究報告書「教科学習に特異な困難を示す児童・生徒の類型化と指導法の研究」	国立特殊教育総合研究所		1995
注意欠陥・多動性障害(ADHD)のび太・ジャイアン症候群	司馬 理英子	主婦の友社	1997
子育て質問箱 —LD児—の療育	中川 克子	日本文化科学社	1998
友達ができにくい子どもたち 社会性の発達と援助法	石崎 朝世	すずき出版	1998
LDとは何か 基本的な理解のために	日本LD学会編 上野一彦 中根晃	日本文化科学社	1997
LDの見分け方 診断とアセスメント	日本LD学会編 森永良子 中根晃	日本文化科学社	1997
学習スタイルを生かす先生	辰野 千寿	図書文化	1994
勉強ができない子供でも必ず100点がとれる	松下 啓志	講談社	1998

I 主題設定の理由とねらい

本県では、県教育委員会から全県の小中学校にむけて「学習障害(LD)児等の理解と指導」という冊子が平成10年3月付けで届けられており、その実態や指導上の手だてが示された。

しかし、小学校の教育現場では、「学習障害(LD)児等」に対する関心度は「名前だけしか知らない」という先生も多く、障害への理解についても十分でないという現実がある。

「学習障害(LD)児等」に対する指導においては、その子のつまずきや発達に応じた指導法でなければ、児童にとって学習効果が上がらないばかりか、担任の先生にとってもストレスが増えることになってしまいかねない。通常学級の中に在籍している「学習障害(LD)児等」が、持てる能力を十分に伸ばし、クラスの友達と分け隔てなく生活するために、どのような指導を行ったらいいか、また、学級担任が学校内で孤立することなく的確な指導ができるようにするためには、特殊学級担任としてどのような支援ができるのかを探っていきたいと考え、本研究課題を設定した。

II 研究の方法

1 文献による理論研究

- (1) 学習障害(LD)児等の能力的、心理的、行動的な特性についての研究
- (2) 学習障害(LD)児等への先進的な指導の在り方についての研究
- (3) 学習障害(LD)児等への先進的な教育的支援体制についての研究

2 事例研究

通常学級に在籍する「学習障害(LD)児等」への特殊学級担任としての支援の在り方

III 研究の内容

1 学習障害(LD)児等とは何か

下記の定義によって示された「学習障害(LD)」児童と、それに類似した周辺児童を総称して、「学習障害(LD)児等」と呼んでいる。

(1) 学習障害(LD)の概念

学習障害とは、基本的には、全般的には知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する、推論するなどの特定の能力の習得と使用に著しい困難を示す、様々な障害を指すものである。

学習障害は、その背景として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推測されるが、その障害に起因する学習上の特異な困難は、主として学齢期に顕在化するが、学齢期を過ぎるまで明らかにならないこともある。

学習障害は、視覚障害、聴覚障害、精神薄弱、情緒障害などの状態や、家庭、学校、地域社会などの環境的な要因が直接の原因となるものではないが、そうした状態や要因とともに生じる可能性はある。また、行動の自己調整、対人関係などにおける問題が学習障害に伴う形で現れることもある。

〔文部省に設置された調査協力会議から出された中間報告より〕(平成7年3月)

(2) 学習障害(LD)児の大まかな特徴

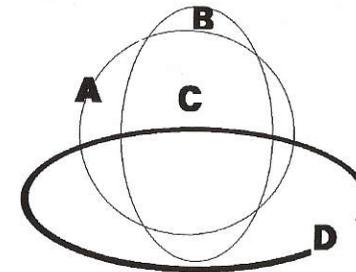
① 行動面の特徴

〔上野一彦・幸田悦子共編著：学習障害児の教育(日本文化科学社)による〕

- 1) ことばの発達にみられる遅れやかたより
- 2) 活動水準のかたより(多動や注意集中力の低さ)
- 3) 運動能力にみられる遅れ

- 4) 認知能力のかたより
 - 5) 情緒的な不安定さや衝動性
 - 6) 対人的な社会的能力の低さ
- ② 基本的な3タイプ

〔竹田 契一・里見 潔子・西岡 有香 共編著：図説 LD児の言語・コミュニケーション障害の理解と指導(日本文化科学社)による〕



- A: [言語性学習障害(LD)] 左脳を中心とした言語による学習に特に困難を示すもの。言葉や文章の意味理解に困難を示すのが特徴。
- B: [非言語性学習障害(LD)] 右脳を中心とする視覚や空間認知学習に困難を示す。「書字障害」や「読字障害」など。
- C: [混合性学習障害(LD)] 言語性、非言語性の問題をあわせもつ場合を言う。
- D: [注意・記憶障害] 学習障害(LD)によく伴う障害。

— [図 I] — ※ [図 I] は小田中の解釈によるもの。

(3) 学習障害(LD)児の出現率と支援状況

① 日本の現状

日本では、「学習障害(LD)児」という名称では出現率の報告はされていない。しかしその報告に近いものとして、「特別研究報告書～教科学習に特異な困難を示す児童・生徒の類型化と指導法の研究」(国立特殊教育総合研究所：平成7年7月)の中に「教科学習に特異な困難を示す児童」という表現で、下記のように報告されている。

算数と国語で2学年以上遅れのある児童		2年生 3.47%		4年生 7.41%		6年生 9.08%		
算数だけ2学年以上遅れのある児童	2年生	0.29%	算数と国語の両方で2学年以上遅れのある児童	2年生	1.27%	国語だけ2学年以上遅れのある児童	2年生	1.90%
	4年生	0.91%		4年生	3.78%		4年生	2.71%
	6年生	1.55%		6年生	4.92%		6年生	2.60%

これらの「教科学習に特異な困難を示す児童」は、「授業以外での担任に依る個別指導」や「言語障害学級や情緒障害学級への通級」そして「担任以外の全校的な支援体制による援助」等の「特別な教育的支援」を受けている。しかし、この様な援助を受けられている児童は、その中の約25%である。他の児童に対する支援状況の報告は無い。

② 山形県の現状

県内の学習障害(LD)を疑われる児童の実態

〔山形県教育センター 金子 弘教論：「県内のLDを疑われる児童の実態調査」(平成8年度)による〕

〔調査 I〕について：

文部省から出された「学習障害児等の理解に向けて」のリーフレットに記載されている7つのチェック項目による該当児

担任が学習につまずきを感じている児童数とその割合

	男子	女子	合計
抽出児童数(人)	1,845	1,824	3,669
該当児童数(人)	91	52	143
割合(%)	4.93	2.85	3.90

〔調査Ⅲ〕について：

「PRS」とは、学習障害(LD)児診断のための分類抽出テストである。調査Ⅰの該当児を元に更に担任がチェックした該当児

「PRS」によるLDを疑われる児童数とその割合

	男子	女子	合計
抽出児童数(人)	1,845	1,824	3,669
該当児童数(人)	74	28	102
割合(%)	4.01	1.54	2.78

この様な児童に対する支援状況としては、そのほとんどが学級担任による授業中の机間指導、そして休み時間や放課後での個別指導であった。また、少数ではあるが特殊学級や通級教室への通級、そして担外の先生による個別指導も随時行われている。

2 事例研究

(1) 事例研究の目的と仮説

① 目的

学校内の「学習障害(LD)児」等、学習困難な児童が、その子の存在感を脅かされることなく、個性や能力にあった適切な指導が受けられるために、通常学級の担任は具体的にどのように指導していったらいいか。また、それに対して「特殊学級」の担任はどのような支援をしていったらいいか、その方法を研究する。

② 仮説

教育相談に特殊学級の担任が加わり、特殊教育の観点に基づいた児童理解や検討をし、方向性を示すことによって、今までの教育相談では理解や指導が難しかった問題をあきらかにできるのではないだろうか。そして、より適切な児童への対応ができるようになるのではないだろうか。

(2) 事例研究の実際

事例研究として特殊学級をもつT市のN小学校を選んだ。新興住宅地にあり、15学級、児童数約500名の中規模校である。この小学校の教育相談に特殊学級担任として加わり、学習障害(LD)児に対応するためのプロジェクトチームをつくり、校内の様々な児童の問題にあたってみることにした。

① 実態調査

1) 通常学級の担任全員を対象に、次のようなねらいでアンケートを行う

- A 通常学級の担任が「学習面と生活面において気にかかる児童」の様子を知る。
- B 通常学級の先生が「学習面と生活面において気にかかる児童」を指導する上で、感じていることを知る。
- C 「学習障害(LD)児教育」に対する学級担任の意識を知る。

2) アンケートの結果と分析

集められたアンケートをまとめ、次のように分析した。

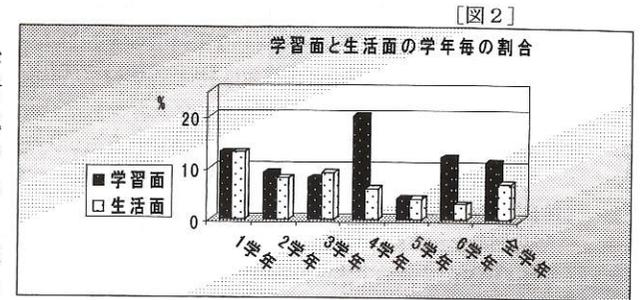
- A 通常学級の担任が「学習面と生活面において気にかかる児童」の様子

a. 人数状況

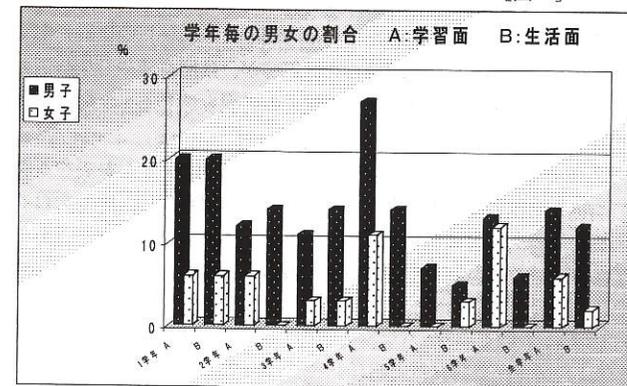
学習面で「気になる児童」と、生活面で「気になる児童」の人数をグラフにすると右図のようになる。

この図から、生活面で「気になる児童」の人数が、学年が増す毎に減って

いっているのがわかる。これは学習障害(LD)児や多動性の児童は年齢を経る毎に落ち着いていくと言う「一般論」に一致する。



〔図3〕



また、左図〔図3〕からは、全学年・全項目にわたって、男子が多いことがわかる。この傾向も学習障害(LD)児等の一般的傾向と同じである。

b. 学習面で「気になる児童」の様子

- ・ 学習上でつまづいていることは、基本的な、「読む」「聞く」「話す」「書く」「計算する」という学習活動であるが、高学年になってもつまづいている児童がいるところに、問題の重さがうかがわれた。
- ・ 全学年にわたって問題になっていたのが、「一斉の指示が通らない」問題であった。
- ・ 低学年では、特に「離席」の問題が多い。
- ・ 中学年では、「集中力が持続しない」「作業が遅い」という問題があげられていた。
- ・ 高学年になると、「宿題忘れが多い」「作業が遅い」「全般的に学習について来れない」という問題があげられていた。

c. 生活面で「気になる児童」の様子

- ・ 特に高学年になると、「不登校」「話を聞こうとしない」「チック」など、さまざまな問題行動になって現れている。これは学習困難によるストレスからくるのではないかと思われた。
- ・ 低学年・中学年では授業を抜け出したり、席を立てて歩くという児童もいた。
- ・ どの学年からも出されていたのが、感情的になりやすく、友達とのトラブルが多いということであった。

- ・ 基本的な集団生活能力や社会性の不足も全学年にわたって多い様子だった。
 - ・ 基本的な生活習慣が身につけていない児童も学年を問わず多いようであった。
- B 通常学級の先生が「学習面と生活面において気にかかる児童」を指導する上で、感じていること
- ・ 全体的に「自分が指導する」という前提で考えていた先生方が多いように感じた。
 - ・ 「もっと手を掛けて個別に指導したいが時間的に難しいので、個別指導をする時間の確保を願いたい」という声が多かった。
 - ・ 「専門的な知識が不足しているのもっと知りたい」と思っている先生が数名いた。
 - ・ 「言語学級」や特殊学級への通級、T. T. (ティームティーチング)、担外の先生による指導等、特別な体制をとって欲しいという要望も数名あった。

C 学習障害(LD)児教育に対する、学級担任の意識

「学習障害(LD)児教育の指導の充実が必要か」という問いかけに対しての回答。

- a. 「必要である」と思っている先生方は約7割であった。

その「理由」としては、現在の普通の授業だけでは時間的にも、技術的にも対応できないという経験的なものが多い。また、「学習障害(LD)児等が、集団生活や学校生活の中で気持ちが萎縮してしまうのであれば、それを支える援助の必要を感じる」という児童の心理を配慮したものもあった。

- b. 残りの3割ほどの先生方は「充実はいらない」という考えではなく、わざわざ新たに「学習障害(LD)児」という概念を持ち込むことは、能力による児童の切り離しが行われることになるのではないかという懸念を表していた。取りたてて区分けをしなくても、「一人一人の子に適し、その子が必要とするもので苦痛を感じないような指導」をしていれば、子供達は伸びるという考えであった。

3) 教育相談担当や教務主任からの聞き取り

アンケートをもとに、「支援が必要な児童と担任」について教育相談担当と教務主任と話を進めていき、その中から、授業に入れずに困っている児童(1年:Y児)の支援を最初に考えてみることにした。

② 実際の支援の取り組み

1) 対象児童について

<Y児(小学校1年、男子):通常学級在籍>

主訴

- ・ 一斉指導の中で、ほとんどつきっきりでないと学習が成立しない。
- ・ 自分一人の力では自分の席について学習することができない。
- ・ 全校行事に参加することができない。

※ Y児は、二学期の後半から毎日、3校時目に特殊学級に通級して学習するようになっていた。

2) 実態把握

A 観察

特殊学級や通常学級での、Y児の学習の様子や遊びの様子、そしてその他の校内生活の様子を観察した。

a. 学習の様子

<通常学級での様子>

- ・ 担任の先生の話をもっと聞くことはなく、しょっちゅう私に話しかけてくる。時々耳に入ってくる担任の話に反応し、その都度担任にも話しかける。
- ・ 絵日記の授業では、一人で出来る内容はなく、ほとんど手をかかさなくてはならなかった。
- ・ 話の内容に脈絡がなく、ころころとよく変わるのが特徴的であった。

<特殊学級での様子>

- ・ 特殊学級に通級するようになって、1週間くらいの授業の様子である。
- ・ 特殊学級の担任に馴染み、時々注意を促されながらも課題に取り組んでいた。
- ・ 字を書くことや絵を描くことは苦手らしく数分間位しか取り組めないが、最後に誉めてもらうことが大変嬉しらしく、それを励みに積極的に先生に聞きに行く等、意欲が伺われた。

- ・ 担任がつきっきりでなくとも15分から30分位の課題に取り組んでいた。通常の学級と違い、担任が常に目の前にいて、いつでもY児の質問に答えられる状態が良かったと思われた。

- ・ 特殊学級担任の話では、話しことは多いが、表現力が足りず、語彙の少なさが目立つということであった。

b. 「遊び」や「その他の活動」の様子

- ・ 授業が終わって遊び時間になっても、自分から友達のところに行くことはなかった。私か、担任の所に行って話しかけている。話に飽きると、特殊学級のおもちゃ置き場に行って、時間がくるまで一人でおもちゃで遊ぶ。担任の話では、このような一人遊びがほとんどなのだとしたことであった。

- ・ 自分中心の遊びなので、同年代の子供同士だけで遊ぶのは難しいと思われた。
- ・ 通常学級での当番活動は嫌いで、やらなければいけないのはわかっているが、いろいろな都合をつけてそれをさげようとする賢さを感じる。
- ・ 通常学級の周りの友達がいろいろ手を貸してくれると、きちんとお礼を言える。しかし、注意や忠告に対しては、汚くのものという幼さが目立つ。
- ・ ちょっとしたこと、言葉を返し、口げんかになることが何度かあった。特に、Y児と似たような反応を示す児童に対しては顕著であった。

B 検査

WISC-R知能検査とK-ABC検査(情報処理能力を調べる心理検査)を行った。Y児の力が十分発揮できるように、検査は本児の集中力を見計らいながら、何回かに分けて行った。

a. 検査結果の分析

- ・ いくつかの検査項目間で大きな数値差があったが、知的な遅れは見あたらなかった。
- ・ 不安傾向が高く、注意が移りやすい。周囲のちょっとした刺激にすぐに反応してしまうために、集中力に欠け、落ち着きのない行動をとる傾向がある。
- ・ 「視覚-運動」の協応能力が低いので、体育全般と文字や数字の習得、絵を描くことが苦手である。
- ・ 「情報を言語的に処理する力」や「情報を順序だてて処理する能力」が低いので、「聞

いて覚えていく学習活動」や、「声だけで行われる教示」では十分に理解できないということが考えられる。また、本質的な課題を見出せず、些細なものにとられる傾向がある。

- ・ 系列的・分析的・計画的な活動を行うよりもヴィジュアルで感覚的、統合的な学習や活動が得意であろうと思われる。

3) プロジェクトチームへの提案

Y児への対応として、以下の様な方向性をプロジェクトチームに提案し、了解して頂いた。

a. 児童に対する基本的な指導方針

「うまく使えない能力を訓練して使えるようにするよりは、うまく使える能力を使って学習させた方が効果的である」という基本的な指導方針で取り組む。

b. 指導内容

- ・ 視覚的な能力を生かした文字の習得
- ・ 実生活に密着した音声言語の習得
- ・ 社会性の向上

c. 対応として考えられること

＜通常学級の担任ができること＞

- ・ みんなと一緒に何かをさせる時は、特別に本人の注意を惹きつけてから始める。
- ・ 本児に理解できるレベルの課題や説明を与える。
- ・ 活動の内容や時間的な流れを予め提示し、見通しと「めあて」を持たせる。
- ・ 「課題解決型学習」を出来るだけ多くする。あるいは、Y児にそのような課題を与える。
- ・ 自信をつけさせる。

＜特殊学級の担任ができること＞

- ・ 社会性を育てる学習を行う。
- ・ 「言葉と実物の一致」の学習をする。特に、友達の顔を覚えることを目的とした「同じもの探し」遊びをする。
- ・ 絵本の読み聞かせを行う。
- ・ 出来るだけ「数」を多く用いて学習する。

＜保護者ができること＞

- ・ 出来るだけ「ゆっくり」と話しかけること。「目に見えるように」話すこと。実際に「見せ」たり、「やってみせ」たりすること。
- ・ 「絵本」の読み聞かせを、もう一度始める。Y児が好きそうな「本」の中で、「字」だけでなく、それを印象付ける「字以外のもの」が描かれている本を読んであげる。
- ・ 生活習慣を身につける。
～「わかりやすい目標」と、「簡単な見通し」を立て、「今何をするか？」と「いつまで（何時まで・何分まで）するか？」の、2つだけ決めさせてから始める。
～新しい習慣は「出来そうなこと」から「一つずつ」つけていく。
～「出来ないこと」を気にさせないようにするために、他に出来ることをたくさん誉めること。（しかし、わざとらしくなく誉めることが大切）

4) 実際の指導の取り組み

＜保護者との話し合い＞

Y児の保護者と学級担任と私で「三者会談」を行い、検査の結果の報告と今後の指導につ

いて話し、これから保護者がY児にどのようなことに気をつけて接していったらいいかということについても話した。

保護者は検査の結果を聞いたことで、今までのY児の状態が理解できたと喜んでた。また、Y児に適した関わり方を聞いて希望がわいたと言っていた。

＜特殊学級での取り組み＞

特殊学級において、特殊学級の児童全員と一緒にY児に対して「社会性を育てる学習」の授業を行った。

社会性を育てる学習にはさまざまな指導方法が開発されているが、この度試みたのは、(社)発達協会 王子クリニック院長：石崎 朝世氏の提唱するものである。「他人の行動の意味や社会の中での状況や出来事を、自分に関連させて理解する能力を高める」という目的で、6つの段階と13の項目から構成されている。今回、特殊学級で行った社会性を育てる学習は、この最初の段階である。まずはY児の現状がどの段階であるのか、またこの訓練が他の児童と一緒に出来る可能性はあるのかを知る目的で行った。

5) 指導に関する考察

プロジェクトチームに取り組みの結果を報告し、今回の指導の振り返りと今後の指導についての検討を行った。

A 現在の通級指導を今後も継続すること

- ・ Y児は特殊学級に通級するようになった頃から、行動に落ち着きが見られるようになり、通常学級の中で一緒に学習を受けることができる、次のような兆しが見えてきた。
～ 授業中に抜け出すようなことがなくなった。
～ 学習意欲が出てきて、自分の得意な漢字の学習の時は担任の机のところ自分の机を持っていき、教えてくれるように願うようになった。
～ 掃除当番や給食当番など、今までやらなかった当番活動をするようになった。
～ 友達の忠告を聞くようになった。
- ・ 通常学級では社会性を育てるために必要な集団生活のモデルがあり、これを大切にしたい。
- ・ 通級の時間については、1日1時間という通級時間の割合は、特殊学級の児童にとって負担にならず、Y児にとっても通常学級に対する帰属感が励みになるのでちょうど良い。

B 特殊学級で「社会性を育てる学習」を継続的に行うこと

- ・ Y児が社会性を育てる学習に楽しく取り組んでくれたので、これからも訓練を継続して行える可能性が高い。
- ・ 特殊学級の他の児童も一緒になって参加できる可能性がある。
- ・ 気をつけなければいけないこととして、Y児と同じ様な特徴を持つ児童と一緒に社会性を育てる学習を行うと、お互いになじり合い逆効果になるので、そのような児童とは一緒に行わないこと。
- ・ また、「伝言」や「自己紹介」等、ことばを使う課題が困難だったので、今後は課題をもう少し簡単なものにかえて行う必要がある。

C 来年度のY児の校内の指導体制についての申し送り事項

- ・ たとえ来年度に担任や校内の担当が変わることがあっても、現在のような観点で1日に1時間、特殊学級に通級するという指導体制を続けるという申し送り事項を確認した。

(3) 事例研究に関する考察

- ・ 今回の研究で、一番時間を費やしたことは、検査に対する解釈であった。Y児の問題行動は、どのような能力的な問題から起こっているのか、その原因を知るところに研究の大半を使った。もっと検査結果を解釈するための知識がしっかりしていれば、校内のもっと多くの児童について対応できたものと悔やまれてならない。
- ・ Y児に対する取り組みに関して言えば、Y児が通常学級で落ち着いて学習することができるようになり、良い成果を得ることができた。他の事例に対しても、Y児と同じように取り組んでいけば、多くの問題が良い方向に向かうのではないかと感じたところである。
- ・ 最後に記しておきたいのは、通常学級の担任の姿勢である。

Y児の良い変化は、確かに通級指導による無理のない指導の効果もあったと思われるが、通常学級の担任がこれまでに行ってきた指導に負うところも非常に大きいと思われた。担任の先生は、Y児の話をよく聞き、その思いを受けとめ、常にY児の存在を認めていた。更にY児に対してだけでなく、学級全員の児童に対しても「君のことを大切に思っている」「友達になりたいのだ」ということを常に言って聞かせてきた。この「存在を受け入れて丁寧に見る」姿勢の上に、私が提案した「能力の分析と指導法」が生きたのではないかと痛感する。逆に言えば、いくら良い「能力の分析と指導法」を提示しても、担任にこのような姿勢がなければ決してY児は変わらなかったのではないかと。これはまさしく「特殊教育の基本的な姿勢」であり大切にしている「視点」である。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- ・ 「教育相談に特殊学級の担任が加わり、特殊教育の観点に基づいた児童理解をし、方向性を示すことによって、今までの教育相談では難しかった問題をあきらかにでき、より適切な児童への対応ができるようになるのではないかと」という仮説は、ほぼ間違いないものだという確信を持つことができた。「学習障害(LD)児」かどうかということを一に考えるのではなく、学習に困難を示している児童に対して、このような支援体制で臨めば、その中に存在するかもしれない学習障害(LD)児等に対しても、効果のある指導ができる。これが一番の成果である。
- ・ 先進的な「充実した教育相談」の体制を組んで当たっている学校が、日本の中央にはなく、身近な所にあったことを大きな誇りに思う。

2 今後の課題

- ・ 県内では、特殊教育の担任が学校にいない場合が大半である。そこで今後は、他の学校でも、同地区の特殊学級担任に協力してもらえるようにネットワークをはることも大切になってくると思われる。
- ・ 同じように校内のネットワークの充実も必要である。特殊学級の担任と通常学級の担任のネットワークが、「特殊教育と通常教育との間」で悩んでいる児童を救うものと思える。それは当然、通常学級の担任が一人で悩むことがないようにするためのものでもあると思う。「教育相談機能」が十全に機能するためにも必要な条件であると思われる。
- ・ 特殊学級担任の自己研修の必要性を感じている。検査は児童の実態の理解のために大切なものだが、その中でもその検査を解釈する力と、それを裏付けるための観察力が特に重要であることを感じた。今後は、すぐに相談に応じられるようにこれらの技能とそれにふさわしい指導法を磨くことを基本的な課題として自らに課していきたいと思っている。

障害のある児童生徒における 意思交流の具体的な支援に関する研究

舟形町立 舟形中学校
教諭 義高 亙

=====**目次**=====

I	主題設定の理由とねらい	1
II	研究の方法	1
III	研究の内容	
1	計画	
A	児童生徒の補助具による表現の支援	1
B	児童生徒との意思交流を深めていく方法	2
C	周囲や取り巻く社会が児童生徒をより理解できるための支援	2
2	計画の実践	
A	児童生徒の補助具による表現の支援	
①	眼球の動きを赤外線センサーで読み取り、感情の表現を支援する補助具	2
②	不明瞭な音声言語をコンピュータで変換し、意思交流を支援する補助具	2
③	パソコンのタッチパネルを利用し情報交流を支援する補助具	3
B	児童生徒との意思交流を深めていく方法	
①	ピクチャーブロックによる意思交流の支援	3
②	ペープサートによる意思交流の支援	4
C	周囲や取り巻く社会が児童生徒をより理解できるための支援	4
3	実践資料の分析	
A	児童生徒の補助具による表現の支援	
①	眼球の動きを赤外線センサーで読み取り、感情の表現を支援する補助具	4
②	不明瞭な音声言語をコンピュータで変換し、意思交流を支援する補助具	4
③	パソコンのタッチパネルを利用し情報交流を支援する補助具	5
B	児童生徒との意思交流を深めていく方法	5
C	周囲や取り巻く社会が児童生徒をより理解できるための支援	
①	施設入所の過程	6
②	施設での活動内容	6
③	施設の問題点	6
④	施設作業所で育成できること	6
4	分析結果から計画改良した再提示	
①	分析結果からの視点の変更	7
②	分析の再評価(フェースチャートの利用)	7
③	障害者の意思交流のあり方の再提示	8
IV	研究のまとめ	9
V	おわりに	9

=====**主な文献資料**=====

NIVR研究報告書	障害者職業総合センター1998
マサチューセッツ工科大学メディア研究所	http://www.media.mit.edu/ 1998
朝日新聞データベースAERA	http://www.asahi.co.jp/acra/ 1998
日立製作所アセ推研究室	http://future.hitachi.co.jp/back/vol5/14.html 1998
統計グラフ	総務庁統計局統計基準部 全国統計協会連合会1996
リトミック指導	芸術教育研究所 聡明書房1997

I 主題設定の理由とねらい

特殊教育における目標の一つには、児童生徒の将来の社会参加・自立があげられると考える。そのためには、自分の環境を取り囲む人々とのコミュニケーションが重要となってくるであろう。障害がある児童生徒の中には、他人に自分の意志を満足に伝達できる表出言語を持たないこともある。その場合誤解を受けたり、周囲に理解されることなく自分の殻に閉じこもり、社会的にも孤立してしまうこともある。社会自立に向かうためにはよりよいコミュニケーションを大切にしなければならない。そのためには、障害がある児童生徒に補助具を考案して、より良い意思交流ができるよう支援すること、表現したいという意欲を持たせること、さらに児童生徒への周囲の理解を補助していくことを探っていくことを考えた。このことから本研究主題を設定し支援のあり方を探求していきたい。

II 研究の方法

基本的な研究の流れ

プラン（計画）⇒ドゥー（計画実践）⇒チェック（実践の分析）⇒アフタープラン（分析結果から改良した再提示）に従い研究の方策を組み立てる。

・第一段階 計画について

教育的な効果があり、文献による仮想体験や実際の現場での実践で試行し分析する価値があるものの概要計画（初発計画）と実行計画を立案する。

・第二段階 計画実践について

実際の仮説検証のため立てた計画を実践する。同時に実践においての評価を実践者の主観的な感想のみで判断することを避け、方策や機器の有効性を客観的に判断していく実践記録の収集を考慮し、場面、条件による測定数値を積み重ねていく。

・第三段階 実践の分析について

第二段階の実践での詳細な数値を含む資料を構成し、その数値や状況結果等を項目ごとと条件ごとに分類し、計画の有効性をデータ上からも分析して考察する。

・第四段階 分析後の再提示について

第三段階で分析した結果の有効性を確認、または初発計画段階の欠落誤差を修正し、有効性のあるデータを選別活用して、概要計画を再提示する。

III 研究の内容

1 計画

本主題とした障害のある児童生徒における意思交流の具体的な支援に関する研究の仮説として、「障害のある児童生徒の意思交流や周囲の理解に有効な支援をしていけば、児童生徒の社会自立に近づくであろう。」という仮説を構築し、実際に有効な児童生徒の意思交流の支援について探る。その初発段階の実践計画として大きく次の三つの項目に絞った。

A 児童生徒の補助具による表現の支援

表出言語が不十分な生徒のために発声や手の動き、眼球の動きでコンピューターの疑似言語が表出できるようなソフトをプログラミングし、支援のあり方を探求する。また指差しができる児童生徒のためにタッチパネルを利用したパソコン用のソフトを自作し、生徒について理解不十分な第三者とも理解しあえる意思交流支援のあり方を探る。



B 児童生徒との意思交流を深めていく方法

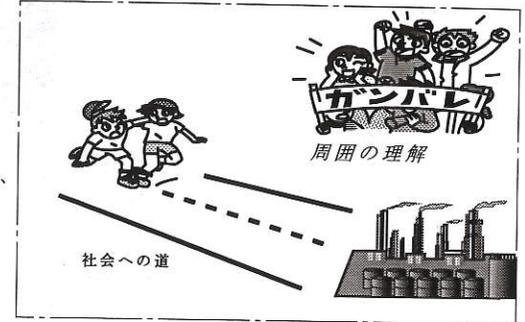
ピクチャーブロックやペーパーサートをを用い、言語の表現が不十分な場合など、それを媒体にして表現の支援をにしていくことを探っていく。



C 周囲や取り巻く社会が児童生徒をより理解できるための支援

障害がある児童生徒の社会自立には意思交流の支援とともに一般社会をも含めた、周囲の理解が不可欠である。

そこで将来自立活動の拠点となることが予想される授産施設厚生施設障害者対象の小規模作業所を訪問し、障害者が入所していく経路や問題点障害者がより理解されて自立していくために何が必要であるか、施設等を訪問しながら、施設指導員の方々の口頭アンケート等をまとめて実態把握をしていき、障害者理解を深める方策を探っていく。



2 計画実践

A 児童生徒の補助具による表現の支援

① 眼球の動きを赤外線センサーで読み取り、感情の表現を支援する補助具

眼鏡に赤外線センサーをつけたものをコンピュータで感知し、感情の変化を判別してコンピュータの疑似音声に変換する。現段階の研究ではセンサー機材が顔の動きや眼球運動を正確に感知せず、障害者に使用するまでにいたらず、研究者や健常者に試用した実験結果を挙げる段階である。比較のため日立製作所㈱、NEC、富士通㈱等が研究開発したシステムも同時に研究し、より良い障害者への活用を検討した。



赤外線センサー sw980-39 ↑

② 不明瞭な音声言語をコンピュータで変換し、意思交流を支援する補助具

生徒の不明瞭な音声言語をコンピュータに感知させ疑似言語として表し、市販の音声判別ソフトに独自のソフトを組み合わせることで音声を変換させる機器にする。ワイヤレス通信を使い自由な行動が可能となる。(例「あおー」⇒「おはようございます」)



音声認識の場面 ↑

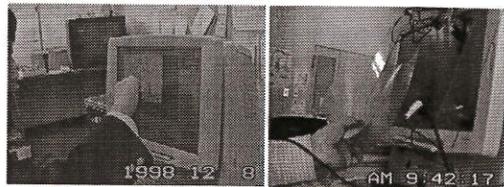
今回実践対象となる生徒は17歳の中度精神遅滞の知的障害を持つ生徒である。研究者と生徒とは数年にわたる長い期間接触を持ってきた生徒である。

はじめは「おはよう」「こんにちは」等の言葉を変換させてみた。慣れてきた段階で多様な音声を変換させた。補助具を何も使わないときの会話、絵カードを使っている会話、音声変換をしたときの会話の3場面に分けて考え、それぞれ5分間やり取りを録音テープに記録した。そして総発語数、その中の1語文数、2語文数を記録し、グラフ資料を作成した。

全ての音声を変換するわけでないので使う場面が限定されるが、使用可能な範囲で教育現場や家庭において試用した。この場合には特定の音を標準音に変換させることから、補助具を使用する生徒について深い理解がないとソフトの正確な調整ができない等の問題点があった。補助具の変換率が悪いにもかかわらず、対象生徒は実に楽しそうにマイクに向かって発語し、かえってくる変換語を楽しんでいた。中でも限られた音声変換で用を足す「こんにちは」等の挨拶などが有効であった。

③ パソコンのタッチパネルを利用し情報交流を支援する補助具

タッチパネルを使い絵や写真などにふれることで疑似音声を表出したり、学習の補助や数を数える、挨拶をするなどの疑似体験を行う。当初持ち運びが容易に可能なタッチパネルが無く、教育現場で実践するのが困難であったが、タッチパネルパソコンを自費購入して試用にこぎつけた。今回の実践対象の生徒は軽度の精神遅滞があり特殊教育を受けている13歳の生徒である。タッチパネルでどのような場面でどのようなインターフェイスで試用していくのがより効果があるか、実践の中で資料を収集し検証していく。



生徒のタッチパネル操作↑ タッチパネル製作↑

本実践は意思交流のための情報交流も視野に入れ、意思表示の画面とともにインターネットの天気への接続画面と、舟形町の公式ホームページへ接続するための画面を製作し活動資料を記録した。その項目は接続ボタンを文字中心、絵中心、自分がボタンのデザインを作ったもの（自作の絵）の3項目に分け、入力インターフェイスも指によるタッチパネル使用（指圧のタッチ入力）、ペンによるタッチパネル入力（筆圧タッチ入力）、通常のマウス操作、音声入力の4項目について活動したものを初め2分間、次の2分間の計4分間の操作数を記録した。

活動しながらの記録は困難なため教室後部でビデオをまわしっぱなしにし後で記録を取り直す形で資料にした。1日で記録できず、インターフェイス画面を作りながら行ったため、断続的に何日にもわたり、条件の異なる時の活動の記録になってしまった。しかし大まかな補助具を使用した傾向はとらえられたように思われる。

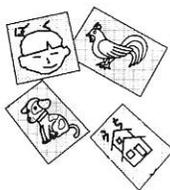
数日間を置きながらの活動になったが、生徒はパソコン操作を楽しんでいた。

B 児童生徒との意思交流を深めていく支援

人間が意思交流していく最も多い手段は、文字による意思交換と音声言語（声）によるものである。しかし精神遅滞を伴う場合については、文字や声で意思を伝えあうことに限界があることが少なくない。この場合には言葉に準ずるものとして、もっと記号的な要素をのぞいた絵が考えられる。本項目の対象生徒はタッチパネルの補助具を使って活動実践をした同じ生徒とし、ともに活動した。この項目でも補助具を使用しない場合、ピクチャーブロックを使用した場合、ペープサートを使用した場合の初め2分間、次の2分間計4分間で会話をビデオに取り後で記録した。この場合も発語数だけでなく、その中の文節文の種類、検査者から見た主観的な5段階評価（標準を3とした）も加えた。

① ピクチャーブロックによる意思交流の支援

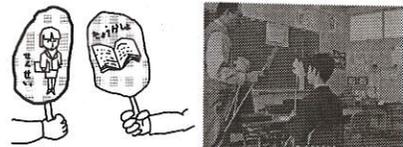
絵を机上などで組み合わせることで理解の補助にして意思交流をしていく。知的障害等で名称や動作語など言葉が限定される場合に「何が」の間に絵を示して意思表示するときなど有効である。今回対象として活動した生徒は知的障害が軽度で音声言語もある程度持ち合わせているため、音声言語の補助として活用した。絵を使用してより深い交流の支援をする方法はかなり有効であった。しかし絵の切れ端を机上におくのは場所と体勢が限られる。もっと自由に絵を使える方法を検討してペープサートも活用した。



ピクチャーブロック↑

② ペープサートによる意思交流の支援

ピクチャーブロックを検討しているうちに持って自由に使用できるペープサートの使用に行き着いた。ペープサートで場所の絵や写真、自分や周りの人の絵人形をつくり知的障害がある生徒と意思交流した。知的障害がある場合、話す言語が限定されるため、話している言語と意思が完全に一致しないときも多い。「先生が**へ教科書を持っていった。」という意思などは先生と教科書のピクチャーブロックを動かすことにより、自由に意思表示できたし、通常の状態では伝達しにくいことも伝えあうことができた。「**が**へいった。」などの動作や状況を表す場合が、より有効である。しかし基本的に障害者と向き合う相手がこの用具を積極的に使おうとしない限り、二者間の補助具にはならないという大きな欠点を持つ。一般社会人に障害者自ら意思を表出する際の検証も必要である。

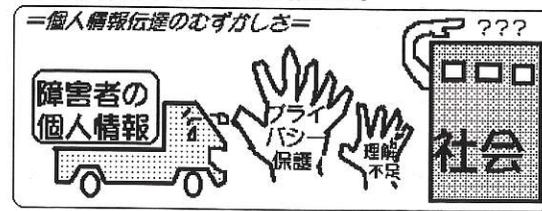


ペープサート↑ ペープサート活動の様子↑

C 周囲や取り巻く社会が児童生徒をより理解できるための支援

障害がある生徒が社会と接触していく中で、大きなハンデキャップになっていくのが周囲の理解である。知的障害を伴わない場合には障害者側からの適切な信号を送れる場合もあるが、知的障害を伴う場合には自ら自分のことを適切に周囲にアピールしていくことが困難な場合も多い。福祉関係の役所等においても連絡伝達は文書で行われ、文字で障害者の状態を理解してもらおう場合が多い。しかし文章等の正確な理解は困難であり、理解が必要な場合は実際に面接せねばならない場合が多い。障害がある生徒の将来の受け口を考えて該当市役所の福祉課、福祉法人の授産施設、厚生施設、小規模作業所を訪問し、活動現場を見学するとともに、その場で指導育成に当たる職員の方々に施設の問題点や社会に出て行くまで学校教育の場で支援できるものについて口頭アンケート等で集計してきた。今研究では知的障害または情緒障害を中心にした施設を訪問した。かつて担任した生徒たちが養護学校高等部3年生だったこともあり、社会に出る生徒の保護者から意見も聞けた。障害者データベースを作成し、情報を手軽に引き出し、雇用を考えている企業や生活をサポートする周囲の人が利用できるようにすることも考案した。

施設での作業（背箱づくり）↓



3 実践資料の分析

A 補助具を使用した支援

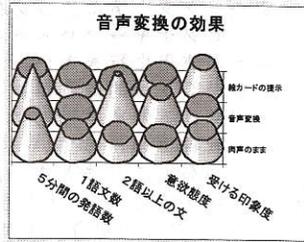
① 眼球の動きを赤外線センサーで読み取り、感情の表現を支援する補助具

研究の段階で眼球の動きを感知するシステムを研究した。しかし眼球の動きを感知する機材が古く、微妙な眼球運動を読み取れず、資料が取れなかった。アイマウス等の新しい機材やセンサーがあれば実用が可能であると思われる。同じような目的で日立製作所(株)のアセ推研究室でピップエレキバンのような磁気石を貼り付けて障害者の感情や意思を読む「伝の心」システムを完成し販売している。比較すると現時点では、この方式のほうが正確で実用的であると考えられる。

② 不明瞭な音声言語をコンピュータで変換し、意思交流を支援する補助具

肉声のままの数値と音声変換の数値を見比べてみると、グラフからわかるように音声変換の方の5分間の発語数が若干であるが増加し、意欲の向上につながっている。

ることがわかる。言葉の内容にしても1語文の数が減り、2語文の数が増加しているのがわかる。検査者の5段階の印象も良好であったことが見える。しかしこれは限られた状況の中で自分の得意な語を発するという限定があり、実用的に使用していけば変換率の悪さから意欲の低下を招く危険性も高いと予想される。確実に実用上の利用効果がある事を証明できなかったが、意欲を高めるために挨拶などの限られた活動時間に使用するという利用方法は、効果があるのではないかと考えられる。

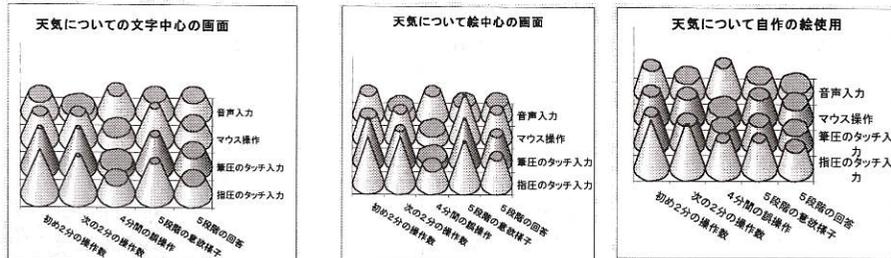


③ パソコンのタッチパネルを利用し情報交流を支援する補助具

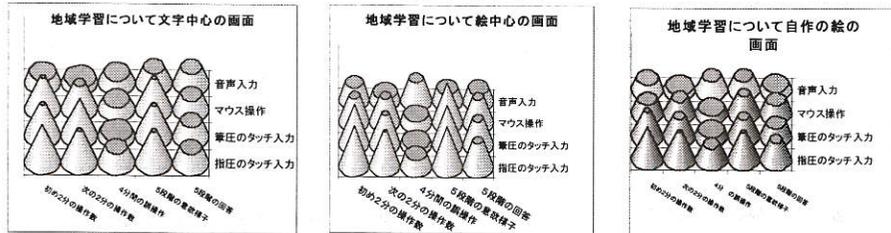
タッチパネルの利用は、補助具の中では一番実用的だったように思われる。実際の教育の場で多用な使用が可能だったので、条件を変えて活動を行い、ビデオに収録した。事後にビデオを見て資料に取り直した。軽度の精神遅滞で情緒障害を含まない生徒の活動の場合であった。文字中心の画面より、絵を中心とした画面にタッチさせて活動させた方が効果が高かったことがわかる。さらに絵でも自分が手を加えたもの（自作の絵使用）はより関心が高かった様子も判別できる。

天気についてはインターネットYahooの今日の山形の天気アクセスできるように画面を作って活動させた。活動の合間に「今日は晴れかな?」「雨はいつだったかな?」などの質問をして、検査者の5段階評価を行った。

入力別観点で見ると、おおむね自分の指によるタッチ入力（指圧のタッチ入力）の数値が大きくなっていった。ペンでタッチ操作（筆圧のタッチ入力）の場合やマウス操作より有効だったようである。この場合の音声入力はコンピュータの誤認識、誤作動が多く、マウス操作にも劣る数値が多かった。



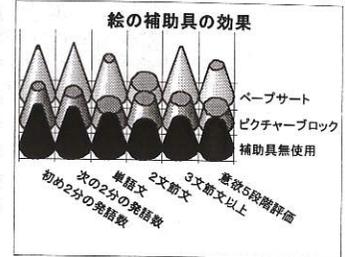
地域学習については舟形町のホームページにアクセスする画面をつくり活動させた。天気のホームページより多様なため、関心が高かったようで、若干活動が増えているようである。天気についての学習と総じて指先のタッチを使う方が数値が大きくなっており、指先でタッチする形で操作したり、表現したりすることが効果的なことが数値の上からも実証された。



B 児童生徒との意思交流を深めていく支援

表に見られるように絵の補助具無使用のときより、ペープサートやピクチャーブ

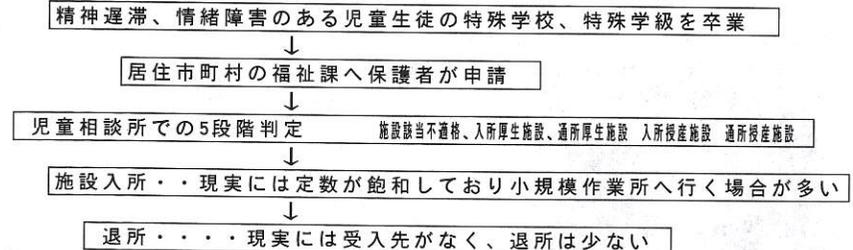
ロックを使用した時が数値が高く、使用効果が出ているのがよくわかる。ペープサートとピクチャーブロックの効果を比較していくとピクチャーブロックでは2文節以下が多くなっていて、ペープサートだと3文節以上が多くなっているのが目につく。ピクチャーブロックだと絵を動かして表現するのが面倒になったりするような。複雑な動きなどを表現する場合にはペープサートのほうが表現しやすいと考えられる。学校内では用具の使用については教師がおり、心配ないが、学校以外で使用を考えた場合の利用方法は検討を要する。ペープサート等の使用効果は見られたと判断できる。しかし生徒との意思交流の相手がみんなペープサートを理解し、使用するということは難しいように思われる。



C 周囲や取り巻く社会が児童生徒をより理解できるための支援

障害を持つ児童生徒を育成するにあたっての目標のひとつは「社会自立」であると考え。では障害を持つ児童生徒が社会にでるときの環境はどのようなものであろうか。精神遅滞の障害のある児童生徒の一般的な就労先は少なく、通過施設としての福祉法人の授産施設、厚生施設、または親の会などが主体となって運営する小規模作業所であることが多い。通過施設とはいえ社会の受け入れ先が少ない以上、事実上施設が社会の受け入れ先として想定されるのが自然であろう。ではその社会の受け入れ先である施設や作業所で自立していくには、特殊教育ではどのようなことが必要となっていくであろう。以下は今年度私的な時間等で訪問、見学した福祉法人の厚生施設、授産施設の資料である。

① 施設入所の過程



② 施設での活動内容(平成10年に訪問した施設、作業所の資料)

棺桶の制作、骨箱制作、葬儀の布団制作、廃油による石鹸作り、照明器具の包装ビデオデッキの包装、名刺制作、タイプ代行、板パズル制作、段ボール解体封筒制作、封筒印刷、製鉄製品の塗装、その他

③ 施設の問題点(施設職員への口頭アンケートより)

- ・財源等の不足から職員、入所生の増員が望めない・仕事の発注業者の減少。
- ・入所生の作業の集中力が不足している・自力での通所が困難な通所生が多い。

④ 施設作業所で育成できること、育成が困難なこと(施設職員への口頭アンケートより)

育成できること ・作業での集中力、忍耐力、場をわかまえること、善悪の判断、集団で作業をする	育成が困難なこと ・他の人に愛される人間性を育てる、障害者が住みやすい社会を作る、障害者の面倒を見る親の代わりになること、周囲の人と交流すること
---	--

以上の現状を参考にして障害者のデータベースCDを作り、情報伝達することを試みたが、家族構成、障害、生活の様子の動画(ビデオ情報)等の情報伝達は関係者のかなりの協力や理解が必要で、個人ごとの情報の選別については医学的、公的な証明も必要になってくる。情報公開の責任問題も付随してくる。またプライバシーの保護などの観点からも、情報を希望者に公開するという情報伝達は見送った。

情報伝達は必要であると考えますが、障害がある場合、社会に情報を伝達することでの差別や劣等感という危険性もはらんでくる。

訪問した
施設の活動⇒
(授産施設
小規模作業所)



印刷作業



段ボール作り



袋縫い作業

4 分析結果から計画改良した再提示 (アフタープランニング)

① 分析結果からの視点の変更

これまでの資料を分析してきて、検査者として補助具を利用した支援の仕方、違和感を覚えた。それはビデオを見返して結果を資料にしていくと検査中よりも、検査の合間のほうが生き生きと活動しているようだからである。疑問に感じてもうひとつの資料を構成した。これは活動量の項目を検査中と検査前後に分けたものである。明らかに検査中の活動が落ちている。これはどのような違いがあるか考えてみた。

検査中の活動量	5.6/min	
検査以外の時間の活動量	6.4/min	

なぜこのような違いが出てきたか、ひとつには検査中は公正を期すために感情を込めず、あえて笑顔を作らずに行ったことも考えられる。さらにビデオを見て発見したことは、検査中は検査者の位置を生徒とパソコンの後ろにしていたのに対して、検査意外では主に画面をこえて対面して話しながら操作していたのである。ちらちら顔を見ながら話をしながらの操作であるにもかかわらず、結果は表1のとおりである。今までの感覚上、知的障害がある場合でも情緒障害を伴わない場合には言葉以上に相手を理解し、意思交流しているような感覚があった。この場合も言葉以上に相手の表情や感情を読み取っていたように思われる。その意思交流の出入り口は、このことから表情や雰囲気ではないかと思われる。いままら資料で証明の必要はないかもしれないが、対面したときの場合と対面しない場合を数値にして表2にしてみた。

タッチパネル操作中の生徒と教師↑

生徒と教師が対面しない時活動量	5.4/min	
生徒と教師が対面した時の活動量	6.7/min	

人は知的障害があっても相手の表情からかなりの情報を得ている場合があることが理解できた。

いままら意思交流の補助具や方法を検証してきたが、資料を分析してきて人間の基本的な意思交流の原点を見落としていた内容に気がついた。人の表情、かもし出される雰囲気は重要視しなければならないことなのである。そこで再計画を次項で提示する。

② 分析の再評価

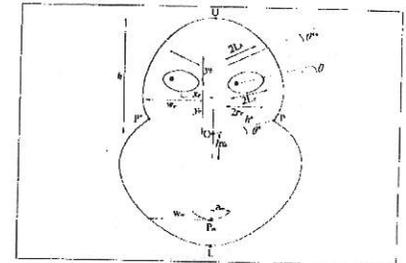
人間が表情を感じるということを大事にしたフェイスチャートを利用して上記の内容を再評価していく。



データ別に3次元グラフにするのではなく、人間が表情から総合的な評価情報を読み取れることを生かして、数値を顔の形で表現するフェイスチャートを取り入れて数値資料を再評価してみる。この方法はチャーノフのフェイス法と呼び、スタンフォード大学により確立された。複数個のデータで変数を構成し、データの相対比較で顔の形を決定する。

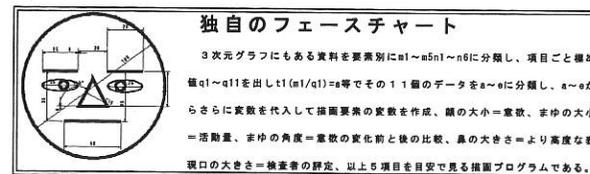
総務庁統計局統計基準部発行「統計グラフ」の作り方より⇒

図 5.20 変数と顔の特性との関連



○ 前出のグラフを変換したチャートグラフ

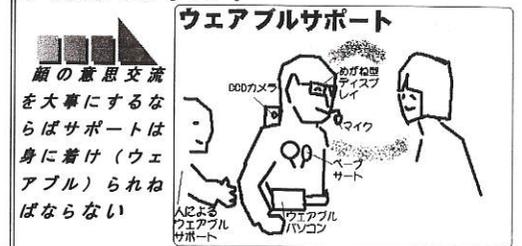
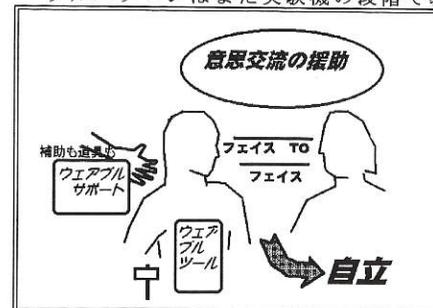
独自のフェイスチャートプログラムを作成し、顔をコンピュータで描画した。特に良くわかるタッチパネルの利用の効果と、ペープサートを使用した効果を資料としてあげてみる。人の表情を感じる感覚からグラフを読み、補助具と意思交流方法の効果が見て取れる。前出の3次元グラフより全体的な有効性が確認しやすい。しかし音声変換など場合によって効果の有無が分かれてしまって、判別がつきにくいものもあった。詳細を知りたい場合は3次元グラフを併用する必要もある。



③ 障害者の意思交流の支援のあり方の再提示

顔の表情を大事にし、顔と顔で語れる「フェイス TO フェイス」を基本とし、サポートは人も補助具も顔と顔で語れる「フェイス TO フェイス」を妨げない形で行われるウェアブルサポートを行い。初発計画の要素にこれを加えていく。

以下の図や写真の資料は計画実践の分析から視点の変更を加えて改良した形のものである。対面式タッチパネルに使用した自作ソフトと補助パネル等は、生徒に活用した後に第8回自作学習ソフトウェアコンクールに作品として提出した。自作のウェアブルパソコンはまだ実験機の段階で教育センター内での試用である。まだデータを取る段階ではないが、先行研究後の発展形提案としてあげておきたい。



支援の発展

ウェアブルツール
利用の可能性

タッチパネル
利用の発展形

対面して生徒がタッチパネル、教師が
ハンドマウスで談笑しながら操作を行う実例



県教育センター内でのウェアラブルツール（ウェアブルパソコン）の実験例



本研究の音声変換で効果のあったものをウェアブルに組み込んで使用



手許操作で擬似音声を出したり、障害物に対してカメラで判別して警告音声を出す



危険と思われる映像や音声をパソコンが判別して自動的に携帯電話が家庭などへ発信

上記のシステムの一部はマサチューセッツ工科大学メディアラボ研究室で実験されたもの、IBMが1999年末に販売を予定しているもので、1998年11月幕張メッセで開かれたウェアブルコーナーの作品を、手持ちの自作機器で機擬似的に再現したものである。今のところ障害者用に考案されたものはほとんどないので、独自のアレンジをしたものである。多様な利用の可能性を提示していきたい。

IV 研究のまとめ

本研究において意思交流の具体的な支援を研究していった結果、意思交流の方法としてはペープサート等利用が有効なことがデータ上からも実証できた。補助具については眼球運動を判別する補助具など実用に耐えないものも出たが、音声変換は場合によって有効であり、指差しを利用したタッチパネルは高い活用が見えてきた。今後パソコンなどの機材が発達していけば、さらに可能性が広がる。生徒が主体であることを大事にしていけば、人のサポートを含めてウェアブル（身に着ける形）で今後の活用を検討していく必要があるであろう。商業的に利益の低い障害を補足する機器は、高額で技術が遅れている。教育や福祉の分野の先行研究に携わるものは、障害のある人の機器の可能性、有効性を追求立証する研究を行い、企業の開発まで影響を与えていき、先端機器を日常で利用ができるよう働きかけることが望ましく考える。

本来であれば計画にあった「周囲の社会の理解」についても関連させていく必要があった。しかし情報伝達の必要性和、障害者の情報をむやみに出さない「プライバシーの保護」の両立に迷い、周囲の社会に対し、障害者個人情報のデータベースを作り情報伝達するに至れなかった。個人情報伝達の困難さを実感した。

V おわりに

本研究は補助具として最新のコンピュータや周辺機器を利用する必要があった。1年前の機器は先行研究に値しないため、よい研究の機会と判断し、借財して高額の機器を多数購入または自作した。この分野の研究は技術的、経済的にも企業や公の補助がないと限界があるよう感じられた。しかし特殊教育研究部の皆様をはじめ、県教育センターの皆様温かい指導に恵まれた。所員の一人のように受容され諸々の活動に加えてもらい、所属を超えてフェースチャートの資料を取り寄せていただいたり、施設訪問の仲介をしていただくなど日常の御指導に加え、格別の御配慮をここに感謝し、お礼の言葉としたい。